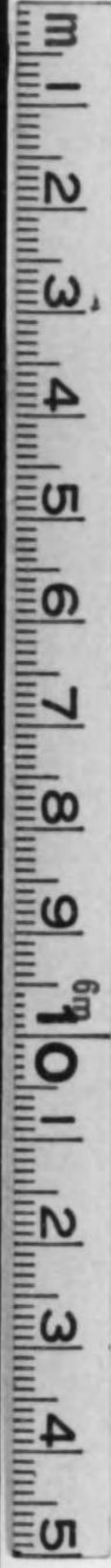


R180. 3-067㉿



1200500766305



始





圖書課長

事務官

內務省
R 8.24
正本

#1 #5-8

(國)宗 教
(書) 一
永 久 保 存

(國)歷 史
(書) 一
永 久 保 存



咸以香水於如來前
 而作是言我今以此竹
 園奉上如來及比丘
 僧唯願哀愍為我納
 受作此言已即便捨
 水忝持世尊嘿然受
 之說偈呪願
 若人能布施 斷除於慳貪
 若人能忍辱 永離於嗔恚
 若人能造善 則遠於愚癡
 能具此三行 速登於菩提
 若有貧窮乏 瓦財可布施
 見他脩施時 而生隨喜心
 隨喜之福甚 與諸等
 余時婆羅門大臣及
 餘人民見王奉施如
 來僧伽藍皆悉踊躍
 生隨喜心余時頗比
 婆羅王施僧伽藍已
 心大歡喜頭面禮足

5-8



佛書解說大辭典



大東出版社藏版

本書編纂要解

一、本書は佛教に關する刊行物を東西兩洋に亘り、その大は一切經に收むる數千の經論より、その小は市井に埋もるゝ一論一文の小冊子に至るまで、これを擧ぐるは勿論、遠く散逸してその影を止めざるもの、或は貴重なる寫本の類に至るまで一切の典籍を收め盡し、これに現代最新の配列法（書名の首字を所謂五十音順音引假名遣に配列）により一々に内容解説を施し、且つその所在を明示したものである。

一、本書は邦語漢語佛教典籍（昭和七年十月卅一日刊行の分迄）の全部六萬五千五百餘を收む。即ち各種藏經より約八千、佛教全書、佛教大系等一般佛教叢書並に各宗關係の全書全集類約七千、各大學圖書館（京大、龍大、谷大、京專、高野山、正大、駒大、立正、東洋等）並に宮内省圖書寮、内閣文庫、帝國圖書館其他一般圖書館所藏のもの約十萬、東域傳燈目錄、諸宗章疏錄、八家請來目錄、眞宗教典志、扶桑禪林書目、其他諸目錄より約二萬の古逸註疏書目、出三藏記、歷代三寶紀等より僞經、抄經、闕本、失譯經の書目約一萬五千を涉獵し、以上全部の書目カード中の同一書を整理して六萬五千五百餘部の佛教典籍を採録した。

一、本書は以上六萬五千五百餘部の典籍を便宜上五類に分類した。即ち「第一類、藏經」「第二類、全書」「第三類、單行本の古寫本、古刊本」「第四類、現在の單行本」「第五類、古逸書類」の五類であつて、其内容解説にあつては、六萬有餘全部に亘り詳細なる解説をなすことは到底紙數上よりも許されぬ事であり、且つ其の必要を認めぬ點もあるので、大體詳細解説するものとせざるものとに分ち、前記五類中の第一、二類即ち藏經、全書類を主とし、これに他の類本にして重要と認むるもの限り出来る丈内容そのものについて詳細な

る解説を施した。

- 一、本書の内容解説の形體はその要點を次の十項目とした。即ち、①題名、書名、具名略名異名併記。②巻數。③存、缺。④著者又は譯者、生存年代又は譯出年代。⑤内容解説。⑥末書(注釋書參考書)。⑦寫刊の年月。⑧現所藏者、圖書館書庫名。⑨發行所名、の十項目である。この十項中前記第一、二類は⑧⑨を省略し、第三類は特に④の圖書館の函號を詳記し、披覽者に備へ、第四類は⑩の發行所名を記して入手に便益あらしめ、第五類は⑦の注釋書參考書に力を入れて研究に有利ならしめた。この方針に依れるを以て藏經の經律論、各宗の宗典類は悉く詳細なる解説が⑥に於いて執筆され、且つその解説に責任をもつべく夫々執筆者の署名を附記した。

一、本書の解説に於ける十項目の内容について一定の方針を示せば左の通りである。

- ①、題名にはすべて具名、略名、異名をつけた。且つ日本語、支那音の讀方、梵語名、西藏語名、巴利語名を附記した。日・支・梵・藏・巴とあるがそれである。而して日本語の讀方はすべて羅馬字法を採用し、一字一字の間に接尾符(一)を附し、全體としては音便讀法を用ひ、促音其他の用法は便宜上大藏經南條目錄補正索引(昭和五年刊)に従つた。支那音はすべて現在の北京官話の正しい發音に依り、支那音を羅馬字に移す場合學者によつて相異なる點ありと雖も、本書は最も普通に廣く行はれてゐるトーマス・ウキード氏の式に従つた。大正一切經刊行會版の昭和法寶總目錄では佛蘭西語法を用ひたが、本書は右により英語法に依つて羅馬字化した。梵藏兩語名の記入は主として西藏甘肅爾勘同目錄(大谷大學圖書館昭和六年刊)により、巴利語名の記入は漢巴四部四阿含互照錄(赤沼目錄一昭和四年刊)に従ふことにした。
- ②、卷數は其典籍の卷數を記したが、丁卷の異なる場合あるものは一々これを附記した。
- ③、存缺に就ては、存は現在行はれてゐる藏經の種類別所收卷數、全書類は其所載卷數を記した。而して各種藏經及び目錄

には左の如く略符號を使用した。茲に出てくる數字番號は本書の「佛教典籍總論」並に「昭和法寶總目錄」と連絡をとり研究に資することにした。

大正——大正新修大藏經。縮——縮刷大藏經。卍——卍字藏經。卍續——續藏經。北——北宋版。南——南宋版。元——元版。明北——明北藏。清——清藏。麗——高麗版。天——天海版。指——指要錄。法——法寶標目。至——至元法寶勸同總錄。明南——明南藏。之——南條目錄。出三藏記——出三藏記集。三寶紀——歷代三寶紀。法經錄——衆經目錄(法經等撰)。仁壽錄——衆經目錄(彦深撰)。靜泰錄——衆經目錄(靜泰撰)。內典錄——大唐內典錄。譯經圖紀——古今譯經圖紀。武周錄——大周刊定衆經目錄。開元錄——開元釋教錄。貞元錄——貞元新定釋教目錄。佛全——大日本佛教全書。真全——真宗全書。真大——真宗大系。日藏——日本大藏經。

- ①、著者又は譯者は其人の生存年代を出来る丈精査して各種の史傳、目錄、年鑑、年表、系譜等により現存せるあらゆる參考資料を涉獵して正確を期した。但し傳記は人名辭書に譲るべき性質のものであるから特にこれを省略した。年代はすべて西曆を用ひ、年號は其の人物の生死國により、其國の年號をとり、一國に生れ他國に死したものは何れかの一國の年號を用ひた。年代中一線を用ひ、「年代—年代」なるは生死年を、「年代—」は生年、「—年代」は寂年のみ明らかなるもの、又兩者不明にて生存中の或る時期明白なるものは「—年代—」として記入した。年時帝世等すべて明らかならざるも、略々其時代を推定し得らるゝものは其推定年代に「？」の符號を用ひた。傳傳並に資料中生年を明記せざるも寂年享壽の判明してゐるものはその逆算により概ねこれを記入した。生死年代に諸説あるものは其中の一を採用若しくは一説として別出したものがある。

- ⑤、著作年代は著作若しくは譯出の年號を記入した。

- ⑥、内容解説は前述の如く主として第一・二類につき冗長繁文を避けて、名義・大綱・分科・判釋・傳通の範圍に於て詳記した。原典翻譯に關する歴史的説明譯出者の傳記等はこれを省略した。略名、異名を有するものは大藏經、全書類に標題とされ

【シ】

第十二條、第十學問篇は第十三條、第十四條、第十一解城篇は第十五條、第十二釋勝篇は第十七條、第十三釋施篇は第十六條、第十八條、第十四釋見篇は第二十四條、第十五釋宜篇は第二十六條、第十六優劣篇は第十七條、第十七先知篇から第二十會名篇まで、三教聖人に關する部分を増益してゐるは西晉以後問題となつた論題を取り入れてゐるもので、技に本論の特色がある。

①寫本(京大、一・二四七・大別、藏・二四七・七)(内題) (久保田景遠)

折解惑 ①(日)Shaku-ge-waku. 二卷 ②存 ③瀧谷塔師講、岩部茂蘭記

④城山山藏版(立大、A.O.五・一四四)刊本(谷大、餘大・二〇四五)(立大、A.O.五・一四三)

折邪顯正 ①(日)Shaku-ja-ken-sha. 一卷 ②存 ③日相撰 ④寫本(京大、日大未・五七一・一五七)大正一五寫(立大、D.O.一三三)

折中記 ①(日)Shaku-ho-ki. 一卷 ②存 ③通支 ④寫本(龍大)

折刀經 ①(日)Shaku-to-kyō. (支)Shu-to-ching. ①一卷 ②是偽經 ③參考)武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

折佛經 ①(日)Shaku-buk-kyō. (支)She-to-ching. ①一卷 ②缺 ③失譯

④(參考)出三藏記第三、法苑珠林第三、七華錄第五、靜泰錄第五、開元錄第一、第一五、貞元錄第二、第二五

折辨無得道論 ①(日)Shaku-ben-hu-toku-do-ron. ①一卷 ②存 ③日觀述 ④無得道論を破したるもの

(立大、A.一五・一五)

杓木編 ①(日)Shaku-moku-ben. 千丈屋和尚語錄 ②三卷 ③存 ④實嚴千丈語、素謙良校共編 ⑤刊本(駒大)

赤鳴鳥經 ①(日)Shaku-shi-a-kyō. (支)Chih-tsu-wu-ching. ①一卷 ②失譯 ③(參考)出三藏記第四

赤鳴鳥論 ①(日)Shaku-shi-a-ron. ①一卷 ②存 ③赤鳴鳥經の抄出 ④(參考)仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

赤肉團大道和尚語錄 ①(日)Shaku-niku-dan-dai-do-ō-shō-go-roku. 大道和尚語錄 ②二卷 ③存 ④以大道了寧等編 ⑤(參考)釋教目錄

普爲鹿王經 ①(日)Shaku-toku-u-ni-ō-shō. (支)Hsi-wei-hwang-ching. ①一卷 ②出題經第九卷の抄出 ③(參考)法苑珠林第五、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

昔有二人相愛教經 ①(日)Shaku-ni-ni-ō-shō. (支)Hsi-er-er-shi-hsiang-ai-chiao-ching. ①一卷 ②失譯 ③出題經第六卷の抄出 ④(參考)出三藏記第四、法苑珠林第五、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

昔圓開否記 ①(日)Shaku-en-ai-hi-ki. ①一卷 ②存 ③日從撰 ④寫本

(立大、D.O.一八八)

祈壽樹復生經 ①(日)Shaku-doku-jū-shū-jū-shō. (支)Ch'e-tu-shu-fu-sheng-ching. 祈壽樹復生經 ①一卷 ②失譯 ③出題經第三卷の抄出 ④(參考)出三藏記第四、法苑珠林第五、仁壽錄第三、靜泰錄第三、歷代三寶記第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

析婆塞集 ①(日)Shaku-ba-soku-shū. ①一卷 ②存 ③寫本(立大、D.O.三二四)

迷門義悟記 ①(日)Shaku-mon-gi-ō-shi. 迷門義悟記 ①一卷 ②開仁(延暦一三一)貞觀六、A.D.791-86)撰 ③(參考)本朝台祖撰述密部書目、山家祖撰述密部書目集卷上

迷門絕待觀心決 ①(日)Shaku-mon-zet-tai-kwan-shin-ketsu. 法華迷門觀心絕待妙釋 ①一卷 ②存 ③大日本佛教全書第二四 ④開仁(延暦一三一)貞觀六、A.D.791-86)撰 ⑤(參考)山家祖撰述密部書目集卷上

摺華鈔 ①(日)Shaku-ke-shō. (支)Chih-hua-ch'ao. 孟蘭盆經摺華鈔 ②二卷 ③缺 ④宋智圓(太平興國元一咸興元、A.D.976-1023)撰

⑤諸宗宗鏡錄第二に曰く「釋主華蘭盆疏」云々(參考)新編諸宗教義錄第一

神如上人讓狀寫 ①(日)Shaku-nyō-shō. 神如上人讓狀寫 ①一卷 ②存 ③康應元寫 ④(龍大、別號)

積骨經 ①(日)Shaku-kōsu-kyō. (支)Chi-ku-king. ①一卷 ②失譯 ③釋阿含經七處三藏經の抄出 ④(參考)出三藏記第四、法苑珠林第四、三寶記第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、内典錄第一、開元錄第一六、貞元錄第二六

積勸四念處經 ①(日)Shaku-gō-shi-nen-jo-kyō. (支)Chi-ch'in-ān-nien-ch'u-ching. ①一卷 ②(參考)靜泰錄第四

積柴燈笈渡護法之表白並祝章 ①(日)Shaku-sai-to-kyō-to-go-hō-no-hyō-byaku-narabini-twai-bunna. ①一卷 ②存 ③日本大藏經修驗道京疏第一

積塵編 ①(日)Shaku-jin-ben. ①一卷 ②存 ③寫本(首、あ・二・左・九)

積翠軒語錄 ①(日)Shaku-sai-ken-go-roku. ①一卷 ②存 ③龍水口、松久萬門編 ④明治二八刊 ⑤(帝國、一一・一六八)

積善寺本堂建立奉加帳 ①(日)Shaku-zen-jū-hon-dō-kon-ryō-hō-ga-chō. ①存 ③土佐國香類從第一五九

積木燒燃經 ①(日)Shaku-moku-shō-nen-kyō. (支)Chi-mi-shiao-jian-ching. ①一卷 ②失譯 ③(參考)出三藏記第四

錫杖聞書抄 ①(日)Shaku-jo-kihi-raki-shō. ①一卷 ②存 ③撰者記 ④康正元(A.D.1455) ⑤(正教館)

錫杖經 ①(日)Shaku-jo-kyō. (支)Hsi-chang-ching. ①一卷 ②失譯 ③(參考)法苑珠林第三、武周錄第一

錫杖經出型鈔 ①(日)Shaku-jo-kyō

【シ】

一shuk-kei-shō. ②二卷 ③存 ④大雲(文化一四一)明治九、A.D.1817-1876)述

⑤(參考)大日本佛教全書續刊決定書目

錫杖鈔 ①(日)Shaku-jo-shō. 九條錫杖鈔 ①一卷 ②存 ③日本大藏經方等部章疏第六 ④亮法(元和八一延寶八、A.D.1622-1680)述 ⑤九條錫杖鈔の下を見よ

⑥刊本(首、あ・二・中・二)正大、一四二・六九

錫杖大事 ①(日)Shaku-jo-dai-ji. ①一帖 ②存 ③天文一五寫 ④(寶善提院)

錫杖博士付 ①(日)Shaku-jo-haku-shi-tsuke. ①一帖 ②存 ③徳川時代寫

④(寶龜院)

錫杖鉢等口決 ①(日)Shaku-jo-ha-shū-ō-ku-ketsu. ①一帖 ②存 ③寶龜四寫 ④(龍大、寄、一・六四)

錫類法禮 ①(日)Shaku-ri-hō-dan. (支)Hsi-lei-fa-t'an. ②十卷 ③存 ④清代理道公輯 ⑤寫本(京大、藏・二四・二七)明版(内題)

獬狗齋王經 ①(日)Shaku-ka-gechi-ō-kyō. (支)Shu-kou-nich-wang-ching. 獬狗齋 ①一卷 ②缺 ③後漢代失譯 ④(參考)出三藏記第四、三寶記第四、内典錄第一、開元錄第一、第一五、貞元錄第二、第二五

釋一塵行法拔萃 ①(日)Shaku-ichin-jō-hō-bas-sui. ①一卷 ②存 ③自性上人記 ④(寶善提院)

釋一座法 ①(日)Shaku-ichu-hō. ①七卷 ②存 ③百性上人記(觀流敷) ④

徳川時代寫 ⑤(寶龜院)

釋一切經玄義 ①(日)Shaku-issai-kyō-gen-ge. (支)Shih-t'ch'ieh-ching-tan-an-ti. ①一卷 ②隋智顛(中大通三一開皇一、A.D.531-597)説 ③(參考)傳教大師將來台州錄、諸宗宗鏡錄第一

釋要婆提舍清立標目 ①(日)Shaku-yō-ha-dai-sha-shō-ryō-hyō-moku. ①一卷 ②存 ③寫本(京大)

釋雲照 ①(日)Shaku-un-shō. ②三卷 ③存 ④草葉全宜著 ⑤大正三刊 ⑥(龍大、一・五五)京大(谷大)

釋雲照 ①(日)Shaku-un-shō. ②一卷 ③存 ④吉田敏雄著 ⑤明治三五刊 ⑥(帝國、八五・一六四)

釋王寺事蹟 ①(日)Shaku-ō-ji-iseki. (支)Shih-wang-shih-shih-chi. ①一卷 ②存 ③(參考)朝鮮佛教總書刊行豫定書目

釋王寺本末寺法 ①(日)Shaku-ō-ji-hon-matsu-ji-hō. (支)Shih-wang-sai-pen-mo-shō. ①一卷 ②存 ③金岩河記 ④大正元刊 ⑤(谷大、餘大、三六・五二)

釋王宗錄 ①(日)Shaku-ō-shō-roku. (支)Shih-wang-tang-lu. 前齊沙門釋王宗錄、王宗錄 ②二卷 ③缺 ④釋王宗編 ⑤南齊武帝世(A.D.483-493)

⑥具きには前齊沙門釋王宗錄と云ひ、又略して單に王宗錄とも云はれて、南齊武帝の時、沙門釋王宗の撰述に係るものである。出三藏記卷第五に「佛所制名數經五卷、右一部齊武帝時、比丘釋王宗所撰、抄集家

經有似數林、俱稱佛制、懼亂名實、故注子錄」とあるから、彼には佛所制名數經五卷なる著述があつたことを知り得ると同時に、其の下註の最後に「注子錄」と云ふのは正しく本錄を指して云つてをるものである。故に歴代三寶記卷第十一に「佛所制名數經五卷、宋智圓撰、右二部合七卷、武帝世、釋王宗抄集衆經中時又撰大小乘目錄、並見三藏記」と云ひ、大唐内典錄、開元錄乃至貞元錄等、爾後の諸經録は何れも皆、これと殆ど同一の説明をなしてゐる。

⑦(參考)出三藏記第五、三寶記第一一、第一五、内典錄第一〇、開元錄第一〇、貞元錄第一八。

釋迦 ①(日)Shaka. ②二卷 ③存 ④大日本佛教全書第四五覺釋鈔之内

⑤水澄(元久二一弘安五、A.D.1205-1282)撰

釋迦 ①(日)Shaka. ①一卷 ②存 ③高山林次郎(一明治三五、A.D.1902)著 ④刊本(谷大、外洋、一四〇)

釋迦 ①(日)Shaka. ①一卷 ②存 ③大屋徳城著 ④明治四二刊 ⑤(高、一・二二)(龍大、二九六・一)(谷大、餘大、三〇・九)

釋迦一代記 ①(日)Shaka-tai-ki. ①一卷 ②存 ③實說釋迦一代記 ④(谷大、餘大、江部鴨村著 ⑤大正二刊 ⑥(谷大、餘大、

Ch'i-ku-ching. ①一卷 ②失譯 ③釋阿含經七處三藏經の抄出 ④(參考)出三藏記第四、法苑珠林第四、三寶記第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、内典錄第一、開元錄第一六、貞元錄第二六

積勸四念處經 ①(日)Shaku-gō-shi-nen-jo-kyō. (支)Chi-ch'in-ān-nien-ch'u-ching. ①一卷 ②(參考)靜泰錄第四

積柴燈笈渡護法之表白並祝章 ①(日)Shaku-sai-to-kyō-to-go-hō-no-hyō-byaku-narabini-twai-bunna. ①一卷 ②存 ③日本大藏經修驗道京疏第一

積塵編 ①(日)Shaku-jin-ben. ①一卷 ②存 ③寫本(首、あ・二・左・九)

積翠軒語錄 ①(日)Shaku-sai-ken-go-roku. ①一卷 ②存 ③龍水口、松久萬門編 ④明治二八刊 ⑤(帝國、一一・一六八)

積善寺本堂建立奉加帳 ①(日)Shaku-zen-jū-hon-dō-kon-ryō-hō-ga-chō. ①存 ③土佐國香類從第一五九

積木燒燃經 ①(日)Shaku-moku-shō-nen-kyō. (支)Chi-mi-shiao-jian-ching. ①一卷 ②失譯 ③(參考)出三藏記第四

錫杖聞書抄 ①(日)Shaku-jo-kihi-raki-shō. ①一卷 ②存 ③撰者記 ④康正元(A.D.1455) ⑤(正教館)

錫杖經 ①(日)Shaku-jo-kyō. (支)Hsi-chang-ching. ①一卷 ②失譯 ③(參考)法苑珠林第三、武周錄第一

錫杖經出型鈔 ①(日)Shaku-jo-kyō

錫、猴、釋

名所行録◎(名庫書)書影所現◎ 月年の刊寫◎(書考)書影所現◎ 書末◎ 説解存内◎ 代年作漢◎ 書著◎ 缺存◎ 數巻◎(名書)名題◎ 號地字數

名所行録◎(名庫書)書影所現◎ 月年の刊寫◎(書考)書影所現◎ 書末◎ 説解存内◎ 代年作漢◎ 書著◎ 缺存◎ 數巻◎(名書)名題◎ 號地字數

【シ】

僧應供。十大明王。變法諸天。師子傳法。建摩西來。

①正保五刊 ②(龍大、二九六一・八、研佛) (京大、藏・一九三・三) (谷大、餘大・一八九)

釋迦如來行蹟 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-gyo-seki-ju (支) Shih-chia-ju-tai-hsing-chi-sung. ②二卷 ③存、記續二・三・四

①無寄撰 ②元天曆元(A. D. 1328) ③本書は元の文宗(A. D. 1328-1331)の世天曆元年、始興山・天台の學僧たる雲默浮庵の無寄に依つて、釋尊八十年の生涯一誕生、成婚、出家、成道、說法、涅槃一の行蹟を詳録したるもの。其の資料として一は高麗諸國撰天合四教儀の文に依り、他は諸經論中の傳記に關する部分を拾ひ集めて頌文を作り、總じて七百七十六句となし、文中解し難い所、説明を要する所には、それぞれ註釋を施して、讀者の便宜に供してある。釋尊傳研究の一材料となるべきものである。本書の首めに、大元至順元年(A. D. 1330)、正順大夫密直司左副代官判務工寺進賢提學如製 教李叔珙述の序文を載せてある。(成田昌信)

釋迦如來賢劫記 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-ken-gi-ki (支) Shih-chia-ju-tai-hsien-chieh-ki. ②一帖 ③(參考) 慈覺大師在唐送進錄

釋迦如來御一生記 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-gotai-sho-ki. ②三卷 ③存

釋迦如來降生禮讚文 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-jo-tai-ritsu (支) Shih-chia-ju-tai-ritsu (京大、國文)

ka-nyo-rai-gotai-sho-rai-sam-mon. (支) Shih-chia-ju-tai-chiang-sheng-hi-tsan-wen. 釋迦降生禮讚文 ②一卷 ③存、記續二・三・四 ④宋仁岳(淳化三—治平元 A. D. 992-1064)撰

①釋迦如來涅槃禮讚文と姉妹の作で其の序文にある様に「此頃吾が宗(天台宗)の事を好む者が四月八日に佛像を浴して後其の讚頌を陳べる偈文を請はれ、それを偈紙之式の始終に之を行ふといふので、釋迦の本生譚や因果經を研究し十讚、五悔法を著はした。」といふ。蓋し灌佛會の式典は宋以前から行はれてゐたであらうが降生禮讚となつてまとまつたのは仁岳を以て最初と見てよいと思ふ。十讚とは一心頂禮然燈佛所受能仁記明時身釋迦文佛。一心頂禮兜率天上示一生、補處時身(前同以下略)一心頂禮迦維衛國陀摩耶懷妊時身。一心頂禮無憂樹下誕生妃右脇時身。一心頂禮東宮受職現納妃厭欲時身。一心頂禮四門遊觀無常樂道時身。一心頂禮春宮手夜輪國城出胎時身。一心頂禮伽耶山內修六年苦行時身。一心頂禮照連河畔受難陀施食時身。一心頂禮金剛座上降天度成道時身。各讚の次に七百八句の偈文を連ねて其終りに故我一心歸命頂禮と結んぶ。五悔は懺悔、勸請、隨喜、回向、發願、で各悔の最後に至心歸命三寶で終つてゐる。

①刊本(京大、藏・一八八・四) (谷大、餘大・二二三) (京大、藏・一九三・三) (支) Sha-ka-nyo-rai-jo-tai-ritsu (支) Shih-chia-ju-tai-ritsu (京大、國文)

ch'ang-tao-chi. ①一卷 ③存、記續二・三・四 ④釋迦如來成道記註之内、五部合刻之内 ⑤唐代王勃撰

①釋尊の八相成道に就いて簡明に叙述し、入滅後の遺法と弘通に及び最後に「物初生、季世獲奉眞理、雖錄續而以叙金言、在、飄零而不逢玉相」と述べて像末に生れた自分が金口に直接しなかつた悲哀をひそませてゐる。明の萬曆六年明徳の加へた序に「物は六歳にして文を善くし、未だ冠せざるに職を受く、學は内外に通じ、才は古今を貫く、後世理を語るの風なく、大士佛を感ずるの念あり、著す所の成道記は二千餘言なりと雖も要にして略せず、誠にして漏さず、誠に玉潤金精、星明かにして日輝けるものなり」といつてゐる。又我實曆五年に妙瑞の序に「今王勃弱冠にして時の人路賓王等と與に並せて四傑と稱す。高閑の記有つてより以來千有餘載、和漢の才人其の文學を知りて未だ彼の大雄を信ずることは如くなるを聞かず。唐書の傳に勝王開の記、釋迦像の記、維摩像の碑、並に盛んに世に行はるといふ。此の成道記の如きは釋迦語(附註)を略せるに近し、然るに斯れ物が才にして何ぞ語の遺漏を嘆はんや。曾て一大義教を周覽せるの餘蘊此記を出せるものなり。物にして此記あるは冠履高陽に龍書科斗あるが如し、人何んぞ之を知らざるや。恨の甚し哉」といふやうに物の文才と共に其流傳は日本に及んでゐる。

①實曆五刊(正大、一〇三・四・一〇) (龍大、二九六一・九) (普、な・六・右・三二) (京大、藏・二四九・一・四一) (安永三刊(高、大、寄・一・二)) 明治二二刊(胸、大、帝、國、一・五・五) 寫本(京大、藏・一九三・五) (唐本(帝、國、一・六・三・二八)) (鎌田良賢)

釋迦如來成道記註 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-jo-tai-ritsu (支) Shih-chia-ju-tai-ritsu (京大、藏・一九三・五) (唐本(帝、國、一・六・三・二八)) (鎌田良賢)

①王勃の釋迦如來成道記に註を加へて上下二卷として著はしたもので、本行經、婆沙論、涅槃經、因果經、華嚴經、俱舍論、等の三藏を引いて逐字的に極めて明瞭に解説したものである。この成道記註は王勃の記と一稿に印行されてゐる。

①寛文六刊(京大、藏・一九三・六) (實曆五刊(正大、一〇三・四・一〇) (安永四刊(谷、大、餘大・三〇二)) (鎌田良賢)

釋迦如來栴檀瑞像記 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-sen-dan-zui-zai-ki. ②一卷 ③存

①刊本(谷大、餘大・二六七) (龍大、二九二・五) (正大、一〇五・八一七)

釋迦如來栴檀瑞像三國傳來記 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-sen-dan-zui-zai-ki. ②一卷 ③存

①刊本(正大、一〇五・二六)

釋迦如來誕生會 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-tan-jue. ②一卷 ③存

①近松門左衛門(永應二—享保九 A. D. 1653-1724)著 ②明治二四刊 ③(正大、一〇三・四・一五)

釋迦如來誕生曼荼羅略解

名所行目 (名書) 書影所現 月年の刊載 (書考) 書影所現 書考 説解内容 代年作著 著者 献存 献書 (名書) 名題 號字

【シ】

①(日) Sha-ka-nyo-rai-tan-jo-man-da-ra-ryaku-ge. ②一卷 ③存 ④功譽述

釋迦如來傳 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-den. ②一卷 ③存、佛敎文庫第一七

釋迦如來涅槃禮讚文 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-ne-han-rai-sam-mon. (支) Shih-chia-ju-tai-nieh-p'an-hi-tsan-wen. ②一卷 ③存、大正四六・九六三 No. 1947 縮刷一〇七三〇・八七三三二・三・一、明北 1513 縮刷 1582 縮刷、明南 1498 實、Nf. 1530

①宋仁岳(淳化三—治平元 A. D. 992-1064)撰

①初めに自序あり、述作の由来を述ぶ。曰く釋尊涅槃日に際し、佛徒たるもの法要をこゝめ、佛徳を禮讚すべきである。こゝめとは既に古く僧祇律等にもすゝめる所である。支那では昔孤山中庸子に涅槃八禮讚があるが、吳と蜀との音韻の相違あり、江浙地方ではあまり行はれてゐぬ。されば今遊式の天台智者大師遺教禮讚の式に准じてこの禮讚文を作つたと云ふのである。禮讚の偈頌は十四章あり各章八句よりなる。初十章は讚佛、次の一章は讚法、後の五章は讚僧である。

①(京大、藏・一八八・四) (谷大、餘大・二二三) (龍大、別置) (京本善藏)

釋迦如來法 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-ho. ②存

①足利時代寫(實善院)寫本(實善院)

釋迦年代考 ①(日) Sha-ka-nen-dai-ko. ②一卷 ③存

ka-nyo-rai-gotai-sho-rai-sam-mon. (支) Shih-chia-ju-tai-chiang-sheng-hi-tsan-wen. 釋迦降生禮讚文 ②一卷 ③存、記續二・三・四 ④宋仁岳(淳化三—治平元 A. D. 992-1064)撰

①釋迦如來涅槃禮讚文と姉妹の作で其の序文にある様に「此頃吾が宗(天台宗)の事を好む者が四月八日に佛像を浴して後其の讚頌を陳べる偈文を請はれ、それを偈紙之式の始終に之を行ふといふので、釋迦の本生譚や因果經を研究し十讚、五悔法を著はした。」といふ。蓋し灌佛會の式典は宋以前から行はれてゐたであらうが降生禮讚となつてまとまつたのは仁岳を以て最初と見てよいと思ふ。十讚とは一心頂禮然燈佛所受能仁記明時身釋迦文佛。一心頂禮兜率天上示一生、補處時身(前同以下略)一心頂禮迦維衛國陀摩耶懷妊時身。一心頂禮無憂樹下誕生妃右脇時身。一心頂禮東宮受職現納妃厭欲時身。一心頂禮四門遊觀無常樂道時身。一心頂禮春宮手夜輪國城出胎時身。一心頂禮伽耶山內修六年苦行時身。一心頂禮照連河畔受難陀施食時身。一心頂禮金剛座上降天度成道時身。各讚の次に七百八句の偈文を連ねて其終りに故我一心歸命頂禮と結んぶ。五悔は懺悔、勸請、隨喜、回向、發願、で各悔の最後に至心歸命三寶で終つてゐる。

①刊本(京大、藏・一八八・四) (谷大、餘大・二二三) (京大、國文)

ch'ang-tao-chi. ①一卷 ③存、記續二・三・四 ④釋迦如來成道記註之内、五部合刻之内 ⑤唐代王勃撰

①釋尊の八相成道に就いて簡明に叙述し、入滅後の遺法と弘通に及び最後に「物初生、季世獲奉眞理、雖錄續而以叙金言、在、飄零而不逢玉相」と述べて像末に生れた自分が金口に直接しなかつた悲哀をひそませてゐる。明の萬曆六年明徳の加へた序に「物は六歳にして文を善くし、未だ冠せざるに職を受く、學は内外に通じ、才は古今を貫く、後世理を語るの風なく、大士佛を感ずるの念あり、著す所の成道記は二千餘言なりと雖も要にして略せず、誠にして漏さず、誠に玉潤金精、星明かにして日輝けるものなり」といつてゐる。又我實曆五年に妙瑞の序に「今王勃弱冠にして時の人路賓王等と與に並せて四傑と稱す。高閑の記有つてより以來千有餘載、和漢の才人其の文學を知りて未だ彼の大雄を信ずることは如くなるを聞かず。唐書の傳に勝王開の記、釋迦像の記、維摩像の碑、並に盛んに世に行はるといふ。此の成道記の如きは釋迦語(附註)を略せるに近し、然るに斯れ物が才にして何ぞ語の遺漏を嘆はんや。曾て一大義教を周覽せるの餘蘊此記を出せるものなり。物にして此記あるは冠履高陽に龍書科斗あるが如し、人何んぞ之を知らざるや。恨の甚し哉」といふやうに物の文才と共に其流傳は日本に及んでゐる。

①實曆五刊(正大、一〇三・四・一〇) (龍大、二九六一・九) (普、な・六・右・三二) (京大、藏・二四九・一・四一) (安永三刊(高、大、寄・一・二)) 明治二二刊(胸、大、帝、國、一・五・五) 寫本(京大、藏・一九三・五) (唐本(帝、國、一・六・三・二八)) (鎌田良賢)

釋迦如來成道記註 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-jo-tai-ritsu (支) Shih-chia-ju-tai-ritsu (京大、藏・一九三・五) (唐本(帝、國、一・六・三・二八)) (鎌田良賢)

①王勃の釋迦如來成道記に註を加へて上下二卷として著はしたもので、本行經、婆沙論、涅槃經、因果經、華嚴經、俱舍論、等の三藏を引いて逐字的に極めて明瞭に解説したものである。この成道記註は王勃の記と一稿に印行されてゐる。

①寛文六刊(京大、藏・一九三・六) (實曆五刊(正大、一〇三・四・一〇) (安永四刊(谷、大、餘大・三〇二)) (鎌田良賢)

釋迦如來栴檀瑞像記 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-sen-dan-zui-zai-ki. ②一卷 ③存

①刊本(谷大、餘大・二六七) (龍大、二九二・五) (正大、一〇五・八一七)

釋迦如來栴檀瑞像三國傳來記 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-sen-dan-zui-zai-ki. ②一卷 ③存

①刊本(正大、一〇五・二六)

釋迦如來誕生會 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-tan-jue. ②一卷 ③存

①近松門左衛門(永應二—享保九 A. D. 1653-1724)著 ②明治二四刊 ③(正大、一〇三・四・一五)

釋迦如來誕生曼荼羅略解

ka-nyo-rai-gotai-sho-rai-sam-mon. (支) Shih-chia-ju-tai-chiang-sheng-hi-tsan-wen. 釋迦降生禮讚文 ②一卷 ③存、記續二・三・四 ④宋仁岳(淳化三—治平元 A. D. 992-1064)撰

①釋迦如來涅槃禮讚文と姉妹の作で其の序文にある様に「此頃吾が宗(天台宗)の事を好む者が四月八日に佛像を浴して後其の讚頌を陳べる偈文を請はれ、それを偈紙之式の始終に之を行ふといふので、釋迦の本生譚や因果經を研究し十讚、五悔法を著はした。」といふ。蓋し灌佛會の式典は宋以前から行はれてゐたであらうが降生禮讚となつてまとまつたのは仁岳を以て最初と見てよいと思ふ。十讚とは一心頂禮然燈佛所受能仁記明時身釋迦文佛。一心頂禮兜率天上示一生、補處時身(前同以下略)一心頂禮迦維衛國陀摩耶懷妊時身。一心頂禮無憂樹下誕生妃右脇時身。一心頂禮東宮受職現納妃厭欲時身。一心頂禮四門遊觀無常樂道時身。一心頂禮春宮手夜輪國城出胎時身。一心頂禮伽耶山內修六年苦行時身。一心頂禮照連河畔受難陀施食時身。一心頂禮金剛座上降天度成道時身。各讚の次に七百八句の偈文を連ねて其終りに故我一心歸命頂禮と結んぶ。五悔は懺悔、勸請、隨喜、回向、發願、で各悔の最後に至心歸命三寶で終つてゐる。

①刊本(京大、藏・一八八・四) (谷大、餘大・二二三) (京大、國文)

ch'ang-tao-chi. ①一卷 ③存、記續二・三・四 ④釋迦如來成道記註之内、五部合刻之内 ⑤唐代王勃撰

①釋尊の八相成道に就いて簡明に叙述し、入滅後の遺法と弘通に及び最後に「物初生、季世獲奉眞理、雖錄續而以叙金言、在、飄零而不逢玉相」と述べて像末に生れた自分が金口に直接しなかつた悲哀をひそませてゐる。明の萬曆六年明徳の加へた序に「物は六歳にして文を善くし、未だ冠せざるに職を受く、學は内外に通じ、才は古今を貫く、後世理を語るの風なく、大士佛を感ずるの念あり、著す所の成道記は二千餘言なりと雖も要にして略せず、誠にして漏さず、誠に玉潤金精、星明かにして日輝けるものなり」といつてゐる。又我實曆五年に妙瑞の序に「今王勃弱冠にして時の人路賓王等と與に並せて四傑と稱す。高閑の記有つてより以來千有餘載、和漢の才人其の文學を知りて未だ彼の大雄を信ずることは如くなるを聞かず。唐書の傳に勝王開の記、釋迦像の記、維摩像の碑、並に盛んに世に行はるといふ。此の成道記の如きは釋迦語(附註)を略せるに近し、然るに斯れ物が才にして何ぞ語の遺漏を嘆はんや。曾て一大義教を周覽せるの餘蘊此記を出せるものなり。物にして此記あるは冠履高陽に龍書科斗あるが如し、人何んぞ之を知らざるや。恨の甚し哉」といふやうに物の文才と共に其流傳は日本に及んでゐる。

①實曆五刊(正大、一〇三・四・一〇) (龍大、二九六一・九) (普、な・六・右・三二) (京大、藏・二四九・一・四一) (安永三刊(高、大、寄・一・二)) 明治二二刊(胸、大、帝、國、一・五・五) 寫本(京大、藏・一九三・五) (唐本(帝、國、一・六・三・二八)) (鎌田良賢)

釋迦如來成道記註 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-jo-tai-ritsu (支) Shih-chia-ju-tai-ritsu (京大、藏・一九三・五) (唐本(帝、國、一・六・三・二八)) (鎌田良賢)

①王勃の釋迦如來成道記に註を加へて上下二卷として著はしたもので、本行經、婆沙論、涅槃經、因果經、華嚴經、俱舍論、等の三藏を引いて逐字的に極めて明瞭に解説したものである。この成道記註は王勃の記と一稿に印行されてゐる。

①寛文六刊(京大、藏・一九三・六) (實曆五刊(正大、一〇三・四・一〇) (安永四刊(谷、大、餘大・三〇二)) (鎌田良賢)

釋迦如來栴檀瑞像記 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-sen-dan-zui-zai-ki. ②一卷 ③存

①刊本(谷大、餘大・二六七) (龍大、二九二・五) (正大、一〇五・八一七)

釋迦如來栴檀瑞像三國傳來記 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-sen-dan-zui-zai-ki. ②一卷 ③存

①刊本(正大、一〇五・二六)

釋迦如來誕生會 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-tan-jue. ②一卷 ③存

①近松門左衛門(永應二—享保九 A. D. 1653-1724)著 ②明治二四刊 ③(正大、一〇三・四・一五)

釋迦如來誕生曼荼羅略解

ka-nyo-rai-gotai-sho-rai-sam-mon. (支) Shih-chia-ju-tai-chiang-sheng-hi-tsan-wen. 釋迦降生禮讚文 ②一卷 ③存、記續二・三・四 ④宋仁岳(淳化三—治平元 A. D. 992-1064)撰

①釋迦如來涅槃禮讚文と姉妹の作で其の序文にある様に「此頃吾が宗(天台宗)の事を好む者が四月八日に佛像を浴して後其の讚頌を陳べる偈文を請はれ、それを偈紙之式の始終に之を行ふといふので、釋迦の本生譚や因果經を研究し十讚、五悔法を著はした。」といふ。蓋し灌佛會の式典は宋以前から行はれてゐたであらうが降生禮讚となつてまとまつたのは仁岳を以て最初と見てよいと思ふ。十讚とは一心頂禮然燈佛所受能仁記明時身釋迦文佛。一心頂禮兜率天上示一生、補處時身(前同以下略)一心頂禮迦維衛國陀摩耶懷妊時身。一心頂禮無憂樹下誕生妃右脇時身。一心頂禮東宮受職現納妃厭欲時身。一心頂禮四門遊觀無常樂道時身。一心頂禮春宮手夜輪國城出胎時身。一心頂禮伽耶山內修六年苦行時身。一心頂禮照連河畔受難陀施食時身。一心頂禮金剛座上降天度成道時身。各讚の次に七百八句の偈文を連ねて其終りに故我一心歸命頂禮と結んぶ。五悔は懺悔、勸請、隨喜、回向、發願、で各悔の最後に至心歸命三寶で終つてゐる。

①刊本(京大、藏・一八八・四) (谷大、餘大・二二三) (京大、國文)

ch'ang-tao-chi. ①一卷 ③存、記續二・三・四 ④釋迦如來成道記註之内、五部合刻之内 ⑤唐代王勃撰

①釋尊の八相成道に就いて簡明に叙述し、入滅後の遺法と弘通に及び最後に「物初生、季世獲奉眞理、雖錄續而以叙金言、在、飄零而不逢玉相」と述べて像末に生れた自分が金口に直接しなかつた悲哀をひそませてゐる。明の萬曆六年明徳の加へた序に「物は六歳にして文を善くし、未だ冠せざるに職を受く、學は内外に通じ、才は古今を貫く、後世理を語るの風なく、大士佛を感ずるの念あり、著す所の成道記は二千餘言なりと雖も要にして略せず、誠にして漏さず、誠に玉潤金精、星明かにして日輝けるものなり」といつてゐる。又我實曆五年に妙瑞の序に「今王勃弱冠にして時の人路賓王等と與に並せて四傑と稱す。高閑の記有つてより以來千有餘載、和漢の才人其の文學を知りて未だ彼の大雄を信ずることは如くなるを聞かず。唐書の傳に勝王開の記、釋迦像の記、維摩像の碑、並に盛んに世に行はるといふ。此の成道記の如きは釋迦語(附註)を略せるに近し、然るに斯れ物が才にして何ぞ語の遺漏を嘆はんや。曾て一大義教を周覽せるの餘蘊此記を出せるものなり。物にして此記あるは冠履高陽に龍書科斗あるが如し、人何んぞ之を知らざるや。恨の甚し哉」といふやうに物の文才と共に其流傳は日本に及んでゐる。

①實曆五刊(正大、一〇三・四・一〇) (龍大、二九六一・九) (普、な・六・右・三二) (京大、藏・二四九・一・四一) (安永三刊(高、大、寄・一・二)) 明治二二刊(胸、大、帝、國、一・五・五) 寫本(京大、藏・一九三・五) (唐本(帝、國、一・六・三・二八)) (鎌田良賢)

釋迦如來成道記註 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-jo-tai-ritsu (支) Shih-chia-ju-tai-ritsu (京大、藏・一九三・五) (唐本(帝、國、一・六・三・二八)) (鎌田良賢)

①王勃の釋迦如來成道記に註を加へて上下二卷として著はしたもので、本行經、婆沙論、涅槃經、因果經、華嚴經、俱舍論、等の三藏を引いて逐字的に極めて明瞭に解説したものである。この成道記註は王勃の記と一稿に印行されてゐる。

①寛文六刊(京大、藏・一九三・六) (實曆五刊(正大、一〇三・四・一〇) (安永四刊(谷、大、餘大・三〇二)) (鎌田良賢)

釋迦如來栴檀瑞像記 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-sen-dan-zui-zai-ki. ②一卷 ③存

①刊本(谷大、餘大・二六七) (龍大、二九二・五) (正大、一〇五・八一七)

釋迦如來栴檀瑞像三國傳來記 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-sen-dan-zui-zai-ki. ②一卷 ③存

①刊本(正大、一〇五・二六)

釋迦如來誕生會 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-tan-jue. ②一卷 ③存

①近松門左衛門(永應二—享保九 A. D. 1653-1724)著 ②明治二四刊 ③(正大、一〇三・四・一五)

釋迦如來誕生曼荼羅略解

ka-nyo-rai-gotai-sho-rai-sam-mon. (支) Shih-chia-ju-tai-chiang-sheng-hi-tsan-wen. 釋迦降生禮讚文 ②一卷 ③存、記續二・三・四 ④宋仁岳(淳化三—治平元 A. D. 992-1064)撰

①釋迦如來涅槃禮讚文と姉妹の作で其の序文にある様に「此頃吾が宗(天台宗)の事を好む者が四月八日に佛像を浴して後其の讚頌を陳べる偈文を請はれ、それを偈紙之式の始終に之を行ふといふので、釋迦の本生譚や因果經を研究し十讚、五悔法を著はした。」といふ。蓋し灌佛會の式典は宋以前から行はれてゐたであらうが降生禮讚となつてまとまつたのは仁岳を以て最初と見てよいと思ふ。十讚とは一心頂禮然燈佛所受能仁記明時身釋迦文佛。一心頂禮兜率天上示一生、補處時身(前同以下略)一心頂禮迦維衛國陀摩耶懷妊時身。一心頂禮無憂樹下誕生妃右脇時身。一心頂禮東宮受職現納妃厭欲時身。一心頂禮四門遊觀無常樂道時身。一心頂禮春宮手夜輪國城出胎時身。一心頂禮伽耶山內修六年苦行時身。一心頂禮照連河畔受難陀施食時身。一心頂禮金剛座上降天度成道時身。各讚の次に七百八句の偈文を連ねて其終りに故我一心歸命頂禮と結んぶ。五悔は懺悔、勸請、隨喜、回向、發願、で各悔の最後に至心歸命三寶で終つてゐる。

①刊本(京大、藏・一八八・四) (谷大、餘大・二二三) (京大、國文)

ch'ang-tao-chi. ①一卷 ③存、記續二・三・四 ④釋迦如來成道記註之内、五部合刻之内 ⑤唐代王勃撰

①釋尊の八相成道に就いて簡明に叙述し、入滅後の遺法と弘通に及び最後に「物初生、季世獲奉眞理、雖錄續而以叙金言、在、飄零而不逢玉相」と述べて像末に生れた自分が金口に直接しなかつた悲哀をひそませてゐる。明の萬曆六年明徳の加へた序に「物は六歳にして文を善くし、未だ冠せざるに職を受く、學は内外に通じ、才は古今を貫く、後世理を語るの風なく、大士佛を感ずるの念あり、著す所の成道記は二千餘言なりと雖も要にして略せず、誠にして漏さず、誠に玉潤金精、星明かにして日輝けるものなり」といつてゐる。又我實曆五年に妙瑞の序に「今王勃弱冠にして時の人路賓王等と與に並せて四傑と稱す。高閑の記有つてより以來千有餘載、和漢の才人其の文學を知りて未だ彼の大雄を信ずることは如くなるを聞かず。唐書の傳に勝王開の記、釋迦像の記、維摩像の碑、並に盛んに世に行はるといふ。此の成道記の如きは釋迦語(附註)を略せるに近し、然るに斯れ物が才にして何ぞ語の遺漏を嘆はんや。曾て一大義教を周覽せるの餘蘊此記を出せるものなり。物にして此記あるは冠履高陽に龍書科斗あるが如し、人何んぞ之を知らざるや。恨の甚し哉」といふやうに物の文才と共に其流傳は日本に及んでゐる。

①實曆五刊(正大、一〇三・四・一〇) (龍大、二九六一・九) (普、な・六・右・三二) (京大、藏・二四九・一・四一) (安永三刊(高、大、寄・一・二)) 明治二二刊(胸、大、帝、國、一・五・五) 寫本(京大、藏・一九三・五) (唐本(帝、國、一・六・三・二八)) (鎌田良賢)

釋迦如來成道記註 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-jo-tai-ritsu (支) Shih-chia-ju-tai-ritsu (京大、藏・一九三・五) (唐本(帝、國、一・六・三・二八)) (鎌田良賢)

①王勃の釋迦如來成道記に註を加へて上下二卷として著はしたもので、本行經、婆沙論、涅槃經、因果經、華嚴經、俱舍論、等の三藏を引いて逐字的に極めて明瞭に解説したものである。この成道記註は王勃の記と一稿に印行されてゐる。

①寛文六刊(京大、藏・一九三・六) (實曆五刊(正大、一〇三・四・一〇) (安永四刊(谷、大、餘大・三〇二)) (鎌田良賢)

釋迦如來栴檀瑞像記 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-sen-dan-zui-zai-ki. ②一卷 ③存

①刊本(谷大、餘大・二六七) (龍大、二九二・五) (正大、一〇五・八一七)

釋迦如來栴檀瑞像三國傳來記 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-sen-dan-zui-zai-ki. ②一卷 ③存

①刊本(正大、一〇五・二六)

釋迦如來誕生會 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-tan-jue. ②一卷 ③存

①近松門左衛門(永應二—享保九 A. D. 1653-1724)著 ②明治二四刊 ③(正大、一〇三・四・一五)

釋迦如來誕生曼荼羅略解

ka-nyo-rai-gotai-sho-rai-sam-mon. (支) Shih-chia-ju-tai-chiang-sheng-hi-tsan-wen. 釋迦降生禮讚文 ②一卷 ③存、記續二・三・四 ④宋仁岳(淳化三—治平元 A. D. 992-1064)撰

①釋迦如來涅槃禮讚文と姉妹の作で其の序文にある様に「此頃吾が宗(天台宗)の事を好む者が四月八日に佛像を浴して後其の讚頌を陳べる偈文を請はれ、それを偈紙之式の始終に之を行ふといふので、釋迦の本生譚や因果經を研究し十讚、五悔法を著はした。」といふ。蓋し灌佛會の式典は宋以前から行はれてゐたであらうが降生禮讚となつてまとまつたのは仁岳を以て最初と見てよいと思ふ。十讚とは一心頂禮然燈佛所受能仁記明時身釋迦文佛。一心頂禮兜率天上示一生、補處時身(前同以下略)一心頂禮迦維衛國陀摩耶懷妊時身。一心頂禮無憂樹下誕生妃右脇時身。一心頂禮東宮受職現納妃厭欲時身。一心頂禮四門遊觀無常樂道時身。一心頂禮春宮手夜輪國城出胎時身。一心頂禮伽耶山內修六年苦行時身。一心頂禮照連河畔受難陀施食時身。一心頂禮金剛座上降天度成道時身。各讚の次に七百八句の偈文を連ねて其終りに故我一心歸命頂禮と結んぶ。五悔は懺悔、勸請、隨喜、回向、發願、で各悔の最後に至心歸命三寶で終つてゐる。

①刊本(京大、藏・一八八・四) (谷大、餘大・二二三) (京大、國文)

ch'ang-tao-chi. ①一卷 ③存、記續二・三・四 ④釋迦如來成道記註之内、五部合刻之内 ⑤唐代王勃撰

①釋尊の八相成道に就いて簡明に叙述し、入滅後の遺法と弘通に及び最後に「物初生、季世獲奉眞理、雖錄續而以叙金言、在、飄零而不逢玉相」と述べて像末に生れた自分が金口に直接しなかつた悲哀をひそませてゐる。明の萬曆六年明徳の加へた序に「物は六歳にして文を善くし、未だ冠せざるに職を受く、學は内外に通じ、才は古今を貫く、後世理を語るの風なく、大士佛を感ずるの念あり、著す所の成道記は二千餘言なりと雖も要にして略せず、誠にして漏さず、誠に玉潤金精、星明かにして日輝けるものなり」といつてゐる。又我實曆五年に妙瑞の序に「今王勃弱冠にして時の人路賓王等と與に並せて四傑と稱す。高閑の記有つてより以來千有餘載、和漢の才人其の文學を知りて未だ彼の大雄を信ずることは如くなるを聞かず。唐書の傳に勝王開の記、釋迦像の記、維摩像の碑、並に盛んに世に行はるといふ。此の成道記の如きは釋迦語(附註)を略せるに近し、然るに斯れ物が才にして何ぞ語の遺漏を嘆はんや。曾て一大義教を周覽せるの餘蘊此記を出せるものなり。物にして此記あるは冠履高陽に龍書科斗あるが如し、人何んぞ之を知らざるや。恨の甚し哉」といふやうに物の文才と共に其流傳は日本に及んでゐる。

①實曆五刊(正大、一〇三・四・一〇) (龍大、二九六一・九) (普、な・六・右・三二) (京大、藏・二四九・一・四一) (安永三刊(高、大、寄・一・二)) 明治二二刊(胸、大、帝、國、一・五・五) 寫本(京大、藏・一九三・五) (唐本(帝、國、一・六・三・二八)) (鎌田良賢)

釋迦如來成道記註 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-jo-tai-ritsu (支) Shih-chia-ju-tai-ritsu (京大、藏・一九三・五) (唐本(帝、國、一・六・三・二八)) (鎌田良賢)

①王勃の釋迦如來成道記に註を加へて上下二卷として著はしたもので、本行經、婆沙論、涅槃經、因果經、華嚴經、俱舍論、等の三藏を引いて逐字的に極めて明瞭に解説したものである。この成道記註は王勃の記と一稿に印行されてゐる。

①寛文六刊(京大、藏・一九三・六) (實曆五刊(正大、一〇三・四・一〇) (安永四刊(谷、大、餘大・三〇二)) (鎌田良賢)

釋迦如來栴檀瑞像記 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-sen-dan-zui-zai-ki. ②一卷 ③存

①刊本(谷大、餘大・二六七) (龍大、二九二・五) (正大、一〇五・八一七)

釋迦如來栴檀瑞像三國傳來記 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-sen-dan-zui-zai-ki. ②一卷 ③存

①刊本(正大、一〇五・二六)

釋迦如來誕生會 ①(日) Sha-ka-nyo-rai-tan-jue. ②一卷 ③存

①近松門左衛門(永應二—享保九 A. D. 1653-1724)著 ②明治二四刊 ③(正大、一〇三・四・一五)

釋迦如來誕生曼荼羅略解

ka-nyo-rai-gotai-sho-rai-sam-mon. (支) Shih-chia-ju-tai-chiang-sheng-hi-tsan-wen. 釋迦降生禮讚文 ②一卷 ③存、記續二・三・四 ④宋仁岳(淳化三—治平元 A. D. 992-1064)撰

①釋迦如來涅槃禮讚文と姉妹の作で其の序文にある様に「此頃吾が宗(天台宗)の事を好む者が四月八日に佛像を浴して後其の讚頌を陳べる偈文を請はれ、それを偈紙之式の始終に之を行ふといふので、釋迦の本生譚や因果經を研究し十讚、五悔法を著はした。」といふ。蓋し灌佛會の式典は宋以前から行はれてゐたであらうが降生禮讚となつてまとまつたのは仁岳を以て最初と見てよいと思ふ。十讚とは一心頂禮然燈佛所受能仁記明時身釋迦文佛。一心頂禮兜率天上示一生、補處時身(前同以下略)一心頂禮迦維衛國陀摩耶懷妊時身。一心頂禮無憂樹下誕生妃右脇時身。一心頂禮東宮受職現納妃厭欲時身。一心頂禮四門遊觀無常樂道時身。一心頂禮春宮手夜輪國城出胎時身。一心頂禮伽耶山內修六年苦行時身。一心頂禮照連河畔受難陀施食時身。一心頂禮金剛座上降天度成道時身。各讚の次に七百八句の偈文を連ねて其終りに故我一心歸命頂禮と結んぶ。五悔は懺悔、勸請、隨喜、回向、發願、で各悔の最後に至心歸命三寶で終つてゐる。

①刊本(京大、藏・一八八・四) (谷大、餘大・二二三) (京大、國文)

ch'ang-tao-chi. ①一卷 ③存、記續二・三・四 ④釋迦如來成道記註之内、五部合刻之内 ⑤唐代王勃撰

①釋尊の八相成道に就いて簡明に叙述し、入滅後の遺法と弘通に及び最後に「物初生、季世獲奉眞理、雖錄續而以叙金言、在、飄零而不逢玉相」と述べて像末に生れた自分が金口に直接しなかつた悲哀をひそませてゐる。明の萬曆六年明徳の加へた序に「物は六歳にして文を善くし、未だ冠せざるに職を受く、學は内外に通じ、才は古今を貫く、後世理を語るの風なく、大士佛を感ずるの念あり、著す所の成道記は二千餘言なりと雖も要にして略せず、誠にして漏さず、誠に玉潤金精、星明かにして日輝けるものなり」といつてゐる。又我實曆五年に妙瑞の序に「今王勃弱冠にして時の人路賓王等と與に並せて四傑と稱す。高

の三本は十巻としてある。出三蔵記集巻十
二に載むる序及び目録に照せば、五巻本が
その原形であつたことは疑はない。但し歴
代三寶記巻十一及び大唐内典録巻四には四
巻となつてゐる。道宣の釋迦氏譜の序には
釋迦語一帙十巻とあり、内典録巻四にも、
更に十巻本あり、余親しく之れを讀むと注
してゐるから、當時既に十巻本が存在して
ゐたことは明かである。開元錄巻六にもこ
の書を録して十巻とし、而もその下に注し
て齊代の撰に別に五巻本があり、此れと廣
略異ると述べてゐる。高麗本と他の三本と
を對照すれば、高麗本では第四の釋迦降生
釋迦成佛傳語が簡略であるが、三本ではこ
の條を著しく増益し、その記述は卷一から
卷五に亘つてをり、從つて所引の經典にも
彼此廣略異同がある。各々開元錄に注する
異本を傳へたものといふよう。謂ふに一部
三十四條の中、専ら釋尊自身を記するもの
は、獨りこの條であつて、一部を中心とも
いふべき重要な一條であるから、五巻の原
本撰述後幾時もなく、後人の手につて増益
されたものであらう。尙原本には第十の釋
迦從弟迦維迦出家歸記以下の四條が附けてあ
るが、三本にはこれがついてゐて、補ふこ
とが出来ぬ。

① 寫文二刊 (京大、一〇三三・一〇三七)
(京大、一・二二・七) (帝國、一八九・一五
八) (京大) (大正) (帝國) (名知應廟)

釋迦諸要略 ① (支) Sha-ka-fa-yo-
ryaku. ② 三卷 ③ 存 ④ 土屋正道著
明治三三刊 ⑤ 高次、寄・一・二二〇、頁・一・

二・左・二二〇 (龍大、研佛) (谷大、餘大、三三
二) (正大、一〇三四・三三二) (帝國、七・三三
八)

釋迦佛儀軌 ① (日) Sha-ka-butsu-
gi-ritsu. (支) Shih-chia-fo-i-kuai. 釋迦文尼
佛金剛一乘修行儀軌法品、金剛一乘修業儀
軌、釋迦儀軌 ② 一卷 ③ 存、大正一九
八六・九〇三、縮録一、記續一・三〇一
釋迦文尼佛金剛一乘修行儀軌法品の下を見
よ ④ 寫本(寶善提院)

釋迦佛讚 ① (日) Sha-ka-butsu-
ka. (支) Shih-chia-fo-tsan. ② 一卷 ③ 存、
大正一九・九七・九二 ④ 清代進明齋藏書
丹達爾吉譯

釋尊の智光赫として、法界莊を照すこ
とや、千輻輪の妙相殊に降魔成道の事なぞ
を讚歎したもので、五字一句若しくは七字
一句の偈文から成るものであるが、五字一
句の四句の偈は四偈であつて、その他は悉
く七字一句の偈文である。(神林隆淨)

釋迦佛傳圖記 ① (日) Sha-ka-butsu-
den-zu-ki. ② 一卷 ③ 存、佛門衣服正儀
編輯部 ④ 風澤傳傳(承應三)元文三・A.D.
1651-1733) ⑤ 刊本(谷大、餘大、一六四
〇) 享保一七刊(龍大、二〇七四・五)

釋迦方志 ① (支) Sha-ka-ho-shi.
(支) Shih-chia-fang-chih. ② 二卷或三卷
③ 存、大正五・一九四八・No. 2088、縮録一、
三二七・三、北1061條、南1067條、元1063
條、明北1463條、歷1055條、天1049條、指
1011條、法1038條、至1538條、明南1460
條、Nj. 1470 ④ 道宣(開皇一六)乾封二
想、Nj. 1470 ⑤ 道宣(開皇一六)乾封二

A. D. 596—672) ⑤ 唐水微元 (A. D. 650)
⑥ 佛敎弘傳の西域印度の方土を記述したも
の。通常は二卷であるが明本は三卷となつ
てゐる。卷頭に序ありて、昔隨代東都上林園
翻經館沙門彦琮著西域傳一部十篇廣布風俗
略於佛事得在洽聞失於信本余以爲八相顯道
三乘陶化四儀所設莫不返機二般故被皆宗慧
解今聖運靈相難於華音神光瑞影氣貫於宇
內義須昌明形動發心靈泉貞觀譯經嘗蒙位
席移出西記具如別詳但以紙墨易案閱難盡
佛之遺緒釋門共歸故撮綱略爲一卷附諸後
學」と本書述の目的を述べ、本文は八篇に
分たれて、封疆篇第一、では佛土について
説く。此の娑婆世界は鐵輪山を以て周ら
れ、山の外は無量の空、山の下は金水風の順
に重つて、その外は無量の虚空であるとい
ふ「智度論」を引いて一佛所王土の廣大なる
を説明し、統攝篇第二、では鐵輪山内所攝
の國土萬億にして國土毎に須彌山あるを説
き、次いで大千世界、大千世界、三千大千世
界について述ぶ。中邊篇第三、では西域印
度の地理を説く。各國間の里程など極めて
詳しく述べてゐる。遺跡篇第四、では漢よ
り唐にかけて印度へ往くものは種々の道に
よつたが概して東、中、北の三道であるとい
ふの道道の國々の有様を玄奘の「西域記」に
よつて要を抜録してゐる。吐蕃道に關して
特に詳しくは李儀表、王玄策等がこの道
により入竺したのでこれ等の使臣が歸りて
の報告によつたものと思はれる。本篇は八
篇中最も長く詳細を極めて上巻の後半と下
巻の前半を占めてゐる。遊履篇第五には

名所行記 (名庫書) 高麗所現 月年の刊記 (書考參書刊註) 書五 説解存内 代年作著 書書 佚存 敎書 (名書) 名題 號地字號

二八) 谷大、餘洋、四五〇 (京大、佛敎 D.
二・六) (京大、一・二二・三五・二二二・
四六)

釋迦牟尼傳 ① (日) Sha-ka-mu-ni-
den. ② 一卷 ③ 存、曹洞禪講義第一〇卷
之内 ④ 松田湛堂著 ⑤ 大正六刊 ⑥ (駒
大)

釋迦牟尼傳研究 ① (日) Sha-ka-
mu-ni-den-ken-kyū. ② 一卷 ③ 存 ④ 宗
敎哲學研究會編 ⑤ 大正元刊 ⑥ (龍大、二
九六・一・五)

釋迦牟尼とその敎義 ① (日) Sha-
ka-mu-ni-to-so-no-kyō-gi. ② 一卷 ③ 存
④ 長井眞著 ⑤ 大正九刊 ⑥ (谷大、
餘洋、五〇三) (龍大、二九六・一・四) (立大、
B 11・二八) (高次、寄・一・二二)

釋迦牟尼と女性 ① (日) Sha-ka-
mu-ni-to-jo-sei. ② 一卷 ③ 存 ④ 宮崎眞
著 ⑤ 明治三九刊 ⑥ (立大、B 11・九二)

釋迦牟尼如來持念次第 ① (日) Sha-
ka-mu-ni-nyō-rai-ji-nen-shi-dai. 釋
迦牟尼持念次第 ② 一帖 ③ 存 ④ 文相二
寫 ⑤ (寶善院)

釋迦牟尼如來法滅盡之記 ① (日) Sha-ka-
mu-ni-nyō-rai-nyō-rai-zō-hō-ki. ② 一帖
③ 存 ④ (支) Shih-shia-mou-ni-ji-
tai-shiang-fa-mieh-chin-chih-ki. 釋迦
牟尼如來法滅盡因緣 ⑤ 一卷 ⑥ 存、大
正五・一九九六・No. 2090、燧燈遺書第一
唐法成(大中一〇・A. D. 856) 撰

⑥ 本書はフランスのメリオ氏によりて燧燈
石窟より將來せられし寫本中に存せしもの

にして、西藏の丹珠爾の中に存する子園圖
圖記(Li-yai hung-bstan-pa)を西藏の譯經
家として著名なる法成が漢譯せしものであ
る。卷首には釋迦牟尼如來法滅盡之記と
題し、卷尾には釋迦牟尼如來法滅盡因緣
一卷と記してゐる。内容は子園圖第七代の
思左耶訶多王の時代、一羅漢が豫言せし形
式にて、子園圖佛敎の興廢を述ししもので
ある。子園圖及びその國の佛敎、更に古代
西域地方の研究の上にも貴重な資料たる
は云ふまでもなく、殊に困難な西藏原本の
研究の上にも重要な參考書である。寺本
餘雅氏に西藏原文の邦譯あり、(子園圖史所
敎) ロッタナ氏(Rochain, The Life of
the Buddha) の英譯も存す。(塚本善隆)

釋迦牟尼如來拔除苦惱現大神
變飛空大鉢法 ① (日) Sha-ka-mu-
ni-nyō-rai-butsu-fo-ka-no-gu-da-da-ji-mi-
pen-tai-ka-dai-hatu-hō. (支) Shih-chia-
mu-ni-fo-tai-pa-ku-k'u-nyō-hsien-tai-
shien-pien-fei-kung-da-po-fa. 飛空大鉢
法、大威德秘密飛空鉢法印 ② 一卷 ③ 存、
正續二・九・四、秘密儀軌第一〇 ④ 唐般若
傳 ⑤ 建中二・元和五(A. D. 781—810)
⑥ 釋尊が雪山頂に居られた時に、五百の比
丘と八萬の菩薩・天龍・八部の無量の大家
も俱に此の處に集つて居つた。その時に食
ふに食物なく、大家は飢渴に苦しみ、疲勞を
感じ始めた。その時に世尊は大慈三昧に入
り、光明の中から大鉢を湧出せられた。そ
の大鉢は空に乘じて去り、行方知れずと成

り、大家は一同嘆驚して居つたが、間もな
く大鉢が還り來り飯食が大鉢に滿盛されて
あり、大家は此の食を得て、飢渴の苦を免
れた。而して、その飯食の餘殘を地獄・餓
鬼・畜生の三惡趣の衆生が食して、皆飽滿を
得たと言はれてゐる。又曾て釋尊が宿世に
大仙で在られた時、雪山の巖中に住し、久
しく衣食を斷つて居られた。その時に迦樓
羅(Garuda)王が、大仙の鉢を持って天上並
に人間界に行つて、衣食を滿盛して歸り
來り、巖中の大仙並びに一萬人の弟子に供
養した事が有つたと記してゐる。尙鉢の印
と眞言とが明してゐる。

⑥ 享保一二寫(谷大、餘大、三七六九) 寫本
(京大、藏・三〇四・一七、藏・一六・二二)

釋迦牟尼佛 ① (日) Sha-ka-mu-ni-
butsu. ② 一卷 ③ 存 ④ 梅原善山著
明治二七刊 ⑤ (谷大、餘洋、一〇三) (龍大、
二九六・一・一六) (帝國、二二・一・三三)

釋迦牟尼佛金剛一乘修業儀軌
法品 ① (日) Sha-ka-mu-ni-butsu-
kon-gō-ichō-ji-shū-gyō-hō-ku-hō-hon. ②
存、國譯密敎經部第四

釋迦牟尼佛成道在菩提樹降魔
讚 ① (日) Sha-ka-mu-ni-butsu-jo-dō-
zai-bo-dai-ji-gō-ma-san. (支) Shih-chia-
mu-ni-fo-chō-tō-ku-tsu-pa-ti-shu-ha-
siang-mō-tsan. 釋迦成道降魔讚、釋迦牟
尼佛成道菩提樹降魔讚 ② 一卷 ③ 存、
大正一九・九七・No. 941、縮録一五、記續一・
二・五 ④ 寫本(寶善院)

前漢の博望候張騫より唐の玄奘に至る前後
十六回の西域遊記を記録して居り、通局篇
第六、には古來佛敎の瑞蹟を述べ、時住篇
第七、では成住壞空の四劫及び正覺末に就
いて説いて居る。本書は正千餘千末萬説に
従ふ。最後に敎相篇第八、に於て支那歷代
帝王の三寶興隆に關する事歴を記録してゐ
る。卷末に「往參譯經旁觀別傳文廣難尋故
略舉其要并潤其色同成其類」とあり述作當
時の様子を知らることが出来る。(三好麻雄)

釋迦法 ① (日) Sha-ka-hō. ② 一卷
③ 存、平安、鎌倉、足利時代、德治二・文
明二寫(寶善提院) 延寶七寫(京大、藏・二四
シ・一六)

釋迦法等諸次第 ① (日) Sha-ka-hō-
tō-shū-hō-dai. ② 七帖 ③ 存 ④ 應安七
寫 ⑤ (寶善提院)

釋迦牟尼小傳 ① (日) Sha-ka-mu-ni-
den-shō-den. ② 一卷 ③ 存 ④ 井上哲次郎
編譯部共著 ⑤ 大正五刊 ⑥ (正大、一〇三
四・二五)

釋迦牟尼傳 ① (日) Sha-ka-mu-ni-
den. ② 一卷 ③ 存 ④ 井上哲次郎著
明治三五刊 ⑤ (京大、一・二二・八) (帝
國、八六・二五九) (正大、一〇三四・五) (谷
大、餘洋、九〇) (高次、寄・一・二二) (立大、B
一六・五)

釋迦牟尼傳 ① (日) Sha-ka-mu-ni-
den. ② 一卷 ③ 存 ④ 常盤大定著 ⑤ 明
治四一刊 ⑥ (立大、B 一六・七、B 一六・一
〇、B 一六・一三) (高次、寄・一・二二) (龍
大、二九六・一・二二) (正大、一〇三四・二七、

釋迦牟尼佛成道菩提樹下降魔
讚 ① (日) Sha-ka-mu-ni-butsu-jo-dō-
bo-dai-ji-gō-gō-ma-san. (支) Shih-chia-
mu-ni-fo-chō-tō-ku-tsu-pa-ti-shu-ha-
siang-mō-tsan. 釋迦牟尼佛成道在菩提樹
降魔讚、釋迦成道降魔讚 ② 一卷 ③ 存、
大正一九・五七・No. 941、縮録一五、記續
一・二・五 ④ 寫本(寶善院)

釋迦文實錄 ① (日) Sha-ka-mu-ni-
jū-toku. ② 一册 ③ 存 ④ 寫本(寶善院、
五・右・三〇・三四)

釋迦文尼佛金剛一乘修行儀軌
法品 ① (日) Sha-ka-mu-ni-butsu-
kon-gō-ichō-ji-shū-gyō-hō-ku-hō-hon.
(支) Shih-chia-wen-ni-fon-chin-kang-i-
chō-gō-ichō-ji-shū-gyō-hō-ku-hō-hon. 釋迦文
佛法、釋迦儀軌金剛一乘修業儀軌 ② 一卷
③ 存、大正一九・八六・No. 936、縮録一、記續
一・三・一 ④ 唐善無畏(貞觀一一)開元二
三(A. D. 637—725) 撰

⑥ この法品は善無畏三藏が、胎藏法の敎旨
に依り、釋迦法を記述されたものである。
(一) 先づ修行者は發菩提心す可きを説し、
(二) 師表の相傳の必要を説く。(三) 報佛の相
を現し、金剛秘密敎を説示す。(四) 如來
是因位に於て三密門を修して、執金剛を證
す。(五) 色界頂第四靜慮に於て、等正覺を
成じ。(六) 金剛大因陀羅壇に於て法輪を轉
ず(七) 法輪の中に三十七の聖者あり。(八) 釋
迦曼荼羅。(九) 檀香等の六種供養。(一〇) 禮
に普・心・身の三種あり。(一一) 懺悔除障。
(一二) 如來鉢の印言。(一三) 如來甘露の印言。

名所行記 (名庫書) 高麗所現 月年の刊記 (書考參書刊註) 書五 説解存内 代年作著 書書 佚存 敎書 (名書) 名題 號地字號

(一)如来佛杖の印言。(二)大法師の印言。(三)根本思慮通那化身の印言。(四)梵書等が明されてある。この中で曼荼羅に關しては、胎藏の如しと言ひ、供養儀式に關しては、華嚴等の如しと記して、詳説を略してある所に依り、本法が實修實行を目的として作られたことが解る。(神林隆淨)

釋迦文佛 ①(日) Sha-ka-mo-ma-hua-san. 華嚴學上より見たる釋迦文佛 ②1巻 ③存 ④各卷聖著 ⑤明治四三刊 (京大、一・二六・九七)

釋迦文佛舍利攷 ①(日) Sha-ka-mo-ma-hua-san-shi-ri-ko. (支) Shih-chia-wen-fo-shi-ri-ko. ①1冊 ②存 ③青王寺編 ④支那刊本(谷大、四四三六)

釋迦文佛二千九百五十年聖誕記念大會々務概略 ①(日) Sha-ka-mo-ma-hua-san-ni-sen-ku-hyaku-go-ju-nen-shi-tan-ki-nen-dai-ku-wai-ku-wai-mu-gai-ryaku. (支) Shih-chia-wen-fo-eh-eh-eh-eh-eh-pai-wu-shih-nien-sheng-tan-chi-ni-eh-ta-hui-hui-wu-kai-hiao. ①1巻 ②存 ③民國年刊 ④龍大、研佛(谷大)

釋迦文佛法 ①(日) Sha-ka-mo-ma-hua-san-ho. (支) Shih-chia-wen-fo-fa. 釋迦文尼佛金剛一乘修行儀軌法品、金剛一乘修業儀軌、釋迦儀軌 ②1巻 ③存、大正一九・八六No. 933、縮録一、七三・一・一 ④唐書無畏(貞觀一一一開元三三) A. D. 637-735 撰

釋迦文放鉢經 ①(日) Sha-ka-mo-ho-hatsu-kyo. (支) Shih-chia-wen-fang-po-ching. ①1巻 ②缺 ③失譯 ④(參)考) 出三藏記第四、武周錄第十二、開元錄第五、貞元錄第八、第二五

釋迦論 ①(日) Sha-ka-ton. ①1巻 ②存 ③高橋五郎著 ④明治三九刊 ⑤(谷大、二九六・一七) ⑥(京大、一〇三・二〇) ⑦(谷大、外洋・九八〇) ⑧(京大、一・二〇・一) ⑨(帝國、三一九・一五九)

釋經 ①(日) Shaku-gak-kyo. (支) Shih-tshao-ching. ①1巻 ②缺 ③失譯 ④(參)考) 出三藏記第四、武周錄第十二、開元錄第五、貞元錄第八、第二五

釋學鈔 ①(日) Shaku-gaku-sho. ①1巻 ②存 ③淨土真宗教典第三

釋經古略續集 ①(日) Shaku-kan-kei-ko-ryaku-zoku-shu. (支) Shih-chien-chi-ku-hao-hai-dhi. 續經古略 ②3巻 ③存、大正四九・九〇三 No. 2038、記續二二・六・二 ④(支) 明崇禎一一(A. D. 1638)

⑥本書は略名を續經古略と云ふが如く、曼岸の釋氏精古略を繼承して元世祖至元四年より筆を起し明嘉宗天啓七年に至る三百六十四年間の法苑事績を輯編し、僧四百三十餘人を列傳して、佛祖源流法門の軌則並に遺蹟を編年叙述したものである。即ち明崇禎十一年大開刻輪之を編輯し、蓮華居士較持して以て世に行はるに至りし所である。其の内容項目を明せば下の如し。〔卷第一〕(一)元(一)世祖。(二)成宗。(三)武宗。(四)仁宗。(五)英宗。(六)泰宗。(七)明宗。(八)文宗。(九)寧宗。(十)順宗。〔卷第二〕(一)

明。(一)太祖。〔卷第三〕(二)建文帝。(三)成祖。(四)仁宗。(五)宣宗。(六)英宗。(七)景泰帝。(八)憲帝。(九)孝宗。(十)武宗。(十一)世宗。(十二)穆宗。(十三)神宗。(十四)光宗。(十五)熹宗。

⑦(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑧(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑨(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑩(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑪(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑫(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑬(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑭(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑮(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑯(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑰(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑱(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑲(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑳(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉑(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉒(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉓(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉔(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉕(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉖(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉗(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉘(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉙(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉚(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉛(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉜(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉝(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉞(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉟(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊱(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊲(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊳(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊴(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊵(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊶(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊷(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊸(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊹(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊺(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊻(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊼(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊽(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊾(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊿(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九)

註釋教三字經 ①1巻 ②存 ③清代敏修註 ④(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑤(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑥(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑦(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑧(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑨(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑩(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑪(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑫(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑬(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑭(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑮(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑯(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑰(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑱(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑲(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑳(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉑(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉒(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉓(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉔(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉕(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉖(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉗(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉘(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉙(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉚(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉛(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉜(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉝(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉞(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉟(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊱(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊲(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊳(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊴(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊵(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊶(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊷(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊸(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊹(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊺(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊻(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊼(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊽(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊾(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊿(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九)

①本目錄は諸宗諸師の述作書の目錄にして三巻より成り、第一第二の兩巻には六波羅蜜寺惠範撰集の眞言宗諸師製作目錄を收め、第三巻には圓超の五宗錄に多量の筆を加へて之を收む。第一第二の兩巻に收めらるる眞言宗諸師製作目錄中には、龍猛、龍智、金剛智、不空、善無畏、一行、慧果、弘法等の付法の八祖を始めとして、弘法大師の上足眞雅、實慧等より聖賢、益信、覺慶等、小野、高野、東寺、廣澤、根嶺等諸流の祖師等五十四人の著述を人別に列擧せしものにして、就中、弘法大師に關しては、大日經釋二帖、法華十密第一巻、乃至約章夷進四卷等の章疏、論述、儀軌等二百一十一部の書名を掲ぐ。而して、本録の内容は諸順の諸宗章疏の序文中に「然則、惠範撰集宜跋語、範師一時見聞之草葉、未下二龍削、多其批語、亦宜矣」と指摘して居る如く、一時の見聞の草葉に過ぎないもので、可成りの杜撰の點を含んで居る。例へば、古來問題視せらるる釋摩訶衍論十卷を龍猛の著として何等の疑ひを挿まず、又弘法大師の著中に於ても玉造小町子形表記一卷、或は龍氣記十卷の如き、當然疑似部として取扱ふべきもの迄これを一樣に糾録せる如きその一例である。第三巻は前述の如く、圓超の五宗錄に少しく加筆を施せるものにして、即ち華嚴宗に於ては圓超の勸進錄中に重要な地位を占むる法藏、元曉の二人に就て個人目錄を作り、天台宗章疏に於ては玄日の勸進錄中の南岳、天台等の述作を整理して個人著作目錄を製して附加して居る。

然し、本録に依て附加せられた個人著作目錄は頗る杜撰のものであつて、勸進錄中に既に存せるものを脱し、或は自意を以て新に挿入し、或は書名に通せざるが爲に過去に陥れる如き誤りが隨處に犯されて居る。例へば、圓超錄中の賢首大師法藏の名著、華嚴五教章三巻が華嚴教分記の名稱を用ひ存するが爲に、賢首個人目錄中より逸脱せしめしが如き、又淨影寺慧遠の著述中、華嚴又は因明の部に編入すべきものを、三論宗章疏に編入して氣付かざるが如きがそれである。尤も、圓超錄そのものにも誤記があつて、教分記三巻を杜撰の著なりと斷定し(夾註)華嚴章疏を百八十二部七百八十四巻と記し居れども、實数は百八十七部七百九十二巻(卷数を記せざる數部の卷数を控除せり)となつて居る點に徴すると、原本となりし圓超錄の寫誤脱逸に及びた點間違ひも尠くないであらう。要するに本録は諸宗章疏の著書諸順が「世有釋三教錄、者兩卷、洞、雜、圓超五宗錄、暨惠範撰集製作錄、以爲一部、重出繁多、牀上架、牀、寫誤非一」と云へる如く、五宗錄と六波羅蜜寺惠範の製作錄とを合して作つたものであつて、未だ推敲を経ない未定稿のものたるを免れない。

本目錄の製作に關しては、著作人、年代等を記載せざるが故に俄に判定し難く、且、惠範の出世年代も不明なるが故に正確なることを云ひ難きも、六波羅蜜寺が眞言宗となつたのは天文十七年(A. D. 1548)以後のことであるから、成立の最上限をこの時代

以後に求むべく、又本書は寛文七年(A. D. 1667)に出版されて居る事實に依つてその成立最下限時を爰に定むることが出来る。

⑦(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑧(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑨(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑩(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑪(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑫(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑬(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑭(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑮(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑯(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑰(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑱(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑲(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑳(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉑(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉒(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉓(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉔(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉕(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉖(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉗(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉘(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉙(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉚(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉛(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉜(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉝(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉞(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉟(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊱(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊲(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊳(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊴(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊵(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊶(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊷(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊸(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊹(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊺(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊻(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊼(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊽(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊾(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊿(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九)

治二四A. D. 1814-1891) 述 ①明治元刊 ②(龍大、二八一四・一五、研究) ③(正大、一〇九一・四一、八七)

釋教正譯辨駁 ①(日) Shaku-kyo-shu-myō-ben-haku. ②存 ③南條神興(文化一一一) ④(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑤(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑥(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑦(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑧(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑨(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑩(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑪(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑫(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑬(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑭(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑮(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑯(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑰(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑱(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑲(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ⑳(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉑(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉒(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉓(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉔(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉕(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉖(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉗(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉘(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉙(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉚(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉛(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉜(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉝(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉞(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㉟(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊱(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊲(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊳(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊴(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊵(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊶(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊷(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊸(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊹(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊺(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊻(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊼(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊽(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊾(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九) ㊿(支) 宣文三刊(帝國、八二一・三九)

【シ】

釋せられた、其後我國に傳來流布され、寛保元年に刊行された。撰者靈樞は彼の跋文に「法日教法東興、後漢以來、迄今幾于二千載」と云へる所より察するに、清の初期の人ならん歟。

寛保元年刊 ①佛事一、二、八、八 ②貝葉書院 (千葉良導)

釋氏要義問答 ①(日)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

釋十如是義 ①(日)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

【シ】

釋せられた、其後我國に傳來流布され、寛保元年に刊行された。撰者靈樞は彼の跋文に「法日教法東興、後漢以來、迄今幾于二千載」と云へる所より察するに、清の初期の人ならん歟。

寛保元年刊 ①佛事一、二、八、八 ②貝葉書院 (千葉良導)

釋氏要義問答 ①(日)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

釋十如是義 ①(日)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

存 ①(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ②(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi ③(支)Shaku-ju-ni-ze-shi-gi

【シ】

釋せられた、其後我國に傳來流布され、寛保元年に刊行された。撰者靈樞は彼の跋文に「法日教法東興、後漢以來、迄今幾于二千載」と云へる所より察するに、清の初期の人ならん歟。

寛保元年刊 ①佛事一、二、八、八 ②貝葉書院 (千葉良導)

釋氏要義問答 ①(日)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

存 ①(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ②(支)Shaku-shi-yō-ka-shō ③(支)Shaku-shi-yō-ka-shō

【シ】

凡夫往生明增長信心七章。一、諸佛證誠。二、佛具諸願。三、愛知定生。四、不顯色界。五、戒感長壽。六、中悔往生。七、不動此淨土(以上二卷)。第六會經與說破他部解亦十二卷。一、遺勝除取。二、像末念佛。三、反顧三階。四、開通不同。五、止住百歲。六、十輪滅罪。七、念佛五勝(以上三卷)。八、諸法往生。九、當根佛法。十、專修二修。十一、念佛昇沈。十二、念佛除魔。第七兜率西方相對列優劣亦二章。一、二處校量。二、二處同異。第八明得生者業起不起亦七章。一、淨土調生。二、緣生有無。三、諸惡不起。四、俱生惡起。五、生者不退。六、淨穢樂異。七、超聖無苦(以上四卷)。第九雜明往生行業種々義亦三十三章。一、空有阻礙。二、唯勤西方。三、喜捨受命終。四、念佛長短。五、退位欣淨。六、化女有無。七、不雜結使。八、對待持終。九、淨土速證。十、多動念佛。十一、諸要不起。十二、五道不定業。十三、四業攝不。十四、三業攝不。十五、三十勝益。十六、行門非一。十七、護位求淨。十八、二乘不生。十九、永絕惡趣(以上五卷)。二十、一切衆生不生。二十一、清泰國土。二十二、五通超勝。二十三、分段變易。二十四、極樂無苦。二十五、極樂度苦。二十六、八識三受。二十七、身無戶龜。二十八、去此不遠。二十九、是心作佛。三十、佛頂見不。三十一、得見諸佛。三十二、生諸佛前。三十三、即見佛心。第十科簡九品位行亦二十三。一、九品生位。二、六信不退。三、中下來不。四、減罪多少。五、聞經稱

釋

佛。六、具足十念。七、念佛七勝。八、無上功德。九、一念即生(以上六卷)。十、個勤斷疑。十一、念佛多義。十二、事理念佛。十三、業成不生。十四、臨終念佛。十五、火蓮不同。十六、下々金蓮。十七、極樂時幼。十八、華舍所因。十九、淨土滅罪。二十、念十念。二十一、指力益能。二十二、舊業更生。二十三、善惡互滅。第十一科簡念佛三昧行相亦十三。一、念佛證道。二、修道次第。三、凡聖皆學。四、通念三身。五、定處見異。六、下風得定。七、定見難思。八、定境實實。九、知實三昧。十、三昧得益。十一、定覺淺深。十二、信勝損益。十三、開室念佛。第十二科簡投地自撲悔罪最後に心眼見佛を明せり。

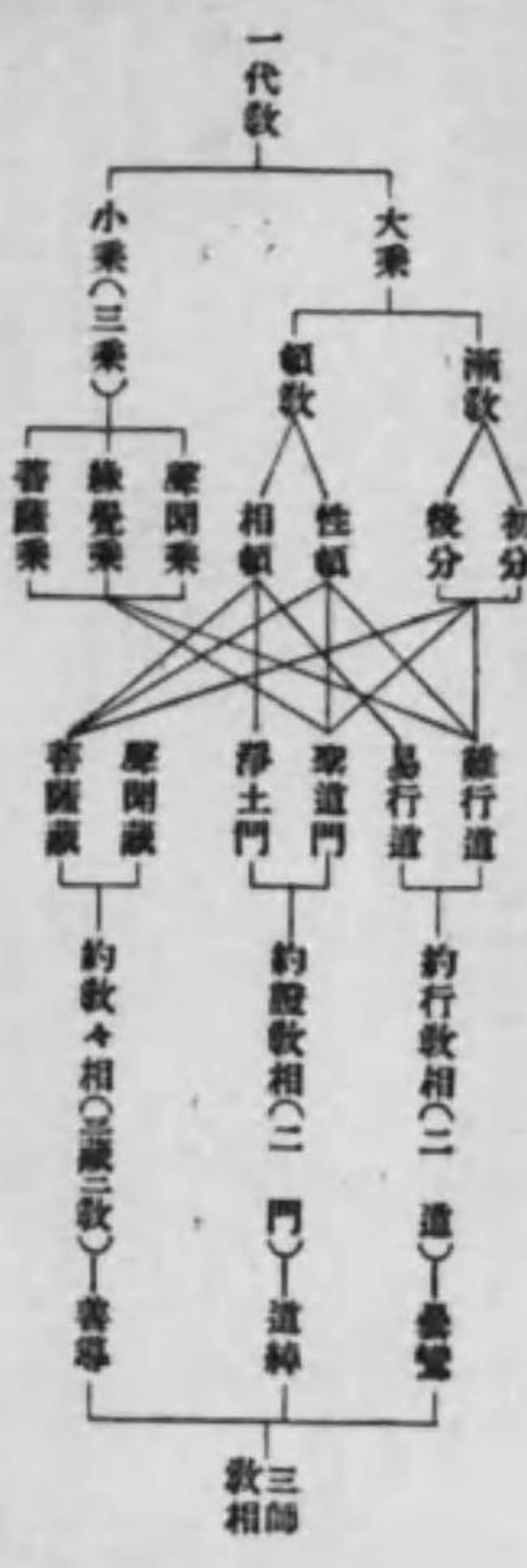
釋淨土群疑論口義 ①(日)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ②(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ③(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ④(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ⑤(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ⑥(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ⑦(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ⑧(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ⑨(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ⑩(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ⑪(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ⑫(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ⑬(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ⑭(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ⑮(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ⑯(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ⑰(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ⑱(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ⑲(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ⑳(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㉑(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㉒(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㉓(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㉔(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㉕(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㉖(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㉗(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㉘(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㉙(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㉚(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㉛(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㉜(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㉝(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㉞(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㉟(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㊱(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㊲(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㊳(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㊴(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㊵(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㊶(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㊷(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㊸(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㊹(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㊺(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㊻(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㊼(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㊽(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㊾(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi ㊿(支)Shaku-ju-do-gun-gi-kō-gi

釋淨土群疑論探要記 ①(日)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ②(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ③(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ④(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ⑤(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ⑥(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ⑦(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ⑧(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ⑨(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ⑩(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ⑪(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ⑫(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ⑬(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ⑭(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ⑮(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ⑯(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ⑰(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ⑱(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ⑲(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ⑳(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㉑(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㉒(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㉓(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㉔(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㉕(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㉖(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㉗(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㉘(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㉙(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㉚(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㉛(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㉜(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㉝(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㉞(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㉟(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㊱(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㊲(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㊳(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㊴(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㊵(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㊶(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㊷(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㊸(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㊹(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㊺(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㊻(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㊼(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㊽(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㊾(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki ㊿(支)Shaku-ju-do-gun-gi-ron-tan-yō-ki

一七

あつた。此に於て問師は此等の鋭鋒論議を
 破折して淨土の宗義を振興し宗徒を覺醒
 する爲め數多の著作を公にして淨土一宗の
 地位を闡明にした。而してその代表的著作
 が本書にして、自著の淨土二藏二教略頌一
 巻を詳釋し、弟子聖聰に授與せるものであ
 る。

先づ本頌の題號に淨土二藏二教略頌とあ
 るに對して本書に淨土二藏義と命題する
 由來を會通し、更に本書所立の教相(二藏
 二教)は菩提流支の獻齋聖財立宗論に基調
 せる旨を明し、宗祖の建法語を借來して



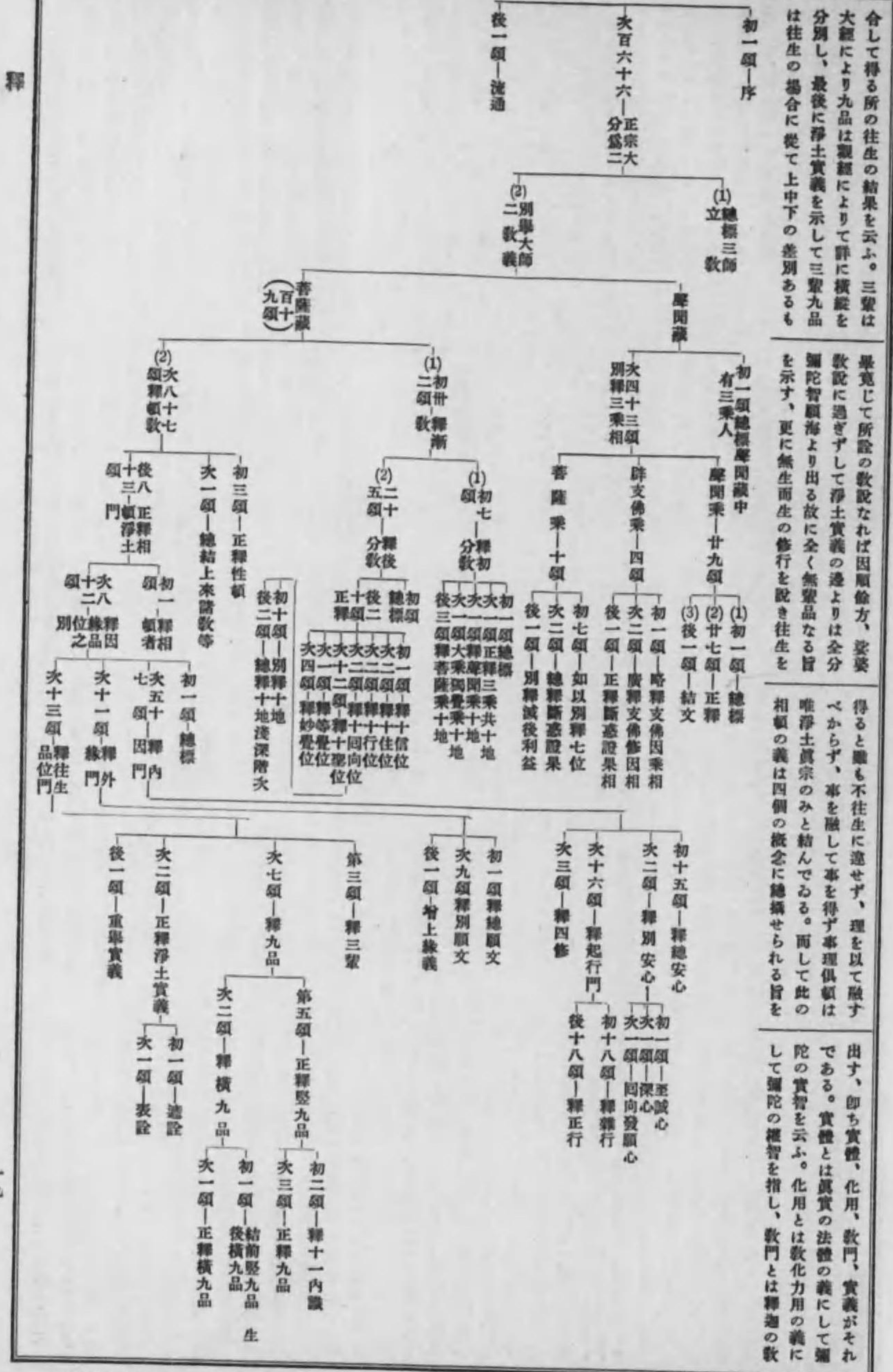
相傳の義に背違せざる旨を立證してゐる。
 即ち本宗の教相は宗祖以來専ら淨土二門、
 難易二門を採用したるに本書には三師教相
 と標題し個依善導の立脚地にあるを以て、
 善導の釋義の教相たるべきことを提唱し、
 二藏の義を舉示して二道二門に對照せしめ
 てゐる。即ち頌に「難行易行は二道、淨土
 淨土は二門、難行善導は二藏、一代教門此
 攝盡」と云ふのがそれで、本書には此の釋
 下に依教分宗、依宗別義の義を舉釋し以て
 三師教相の一代を攝盡する消息を詳にして
 ゐる。今圖示すれば

今本書一部の分科大綱を見るに第一巻よ
 り第十巻に亘つて聖道門を説明してゐる。
 (別表参照)即ち一代聖教を小乘大乘の二に
 分科し小乘種に聲聞、緣覺、菩薩の行位因
 果、斷惑證理の次第を説き、大乘種の中に
 漸教、頓教の二教を分科して大乘の斷惑證
 理入聖得果を明してゐる。大體問師は本書
 中に小乘種を三乘義として標示し、頌に「聲
 聞藏中有三乘、聲聞緣覺及菩薩。如是因果
 難後。三人同入一解脱」と云ふ旨を述べ
 一括して聲聞藏と名付け第一巻より第六巻

に亘つて詳細に解釋してゐる。次に大乘中
 の漸教に初分と後分を分別し、前者を大乘
 通教に配し、後者を大乘別教に當てゐる。
 中に於て初分教義は頌に「初分教中有十
 地、開則亦爲三十地、獨覺菩薩及佛地是
 名三乘共十地」云々と第七巻に問答料簡
 して、初分教の名義、行相の解釋を出して
 ゐる。又聲聞藏の菩薩と利他の行に於て先
 後の別ある旨を論述し攝根并に利他行に勝
 劣のあることを明してゐる。後分教義は本
 書第七巻に亘つて説述され頌の「後分大

乗純善、六位六十有一地、信相發趣及長
 養、金剛十聖並妙覺」がこれにして漸教中
 の甚深、地上の菩薩の觀見する佛身を報身
 と判じ、斷惑證理に關しては俗語恒沙の法
 門を説ずる故に機類萬行、斷證萬別なれば
 天台の別教に配當する旨を問答料簡してゐ
 る。次に頓教中に性相、相頌を分別し性相
 は實大乘たる聖賢、天台、眞言、禪を指舉
 し相頌は所謂淨土門にして正しく本書の主
 眼とする所であると述べてゐる。中に於て
 性相教義は第八巻より第十巻に亘つて論
 述し、頌に「頓教之中亦有二、性相再頓理
 事別、性相立位信後分、三寶十地假名立
 據、實而不立位、不修不行證眞如、眞如
 有二空色是三世一念無差別、教主即是
 受用身、具足多身無邊身、攝盡廣中華藏
 界、具足多身無邊身」云々と云ひ、初めの
 一頌は性相立位の相を示し、次の一頌は性
 相不立位を示し、後の一頌は教主の相を示
 し獻齋聖財論を引用して性相兩相を排斥し
 五法、三性、八關、二無我等の法相を排斥
 して善導の釋義文を引證し以て性相教も末
 攝には難行難證にして有教無人なる旨を指
 摘し前の聲聞藏、初分後分の大乗と共に一
 括して此土入聖自力難行道と開捨し、唯淨
 土一門のみ請宗願過、最上至極の一乘法な
 るを高調してゐる。更に問答を設けて天
 台、眞言、禪等の妄計を破破し淨土の宗
 義を顯彰してゐる。次に相頌教とは性相教
 の一乘を機情の一乘と云ふに對し相頌の一
 乘を佛意の一乘なりとし、正しく淨土門に
 該當し、本書第一巻より終り第三十巻に亘

つて釋明してゐる。先づ頌に「相頌即易行
 道。往生無生淨土門。他力勝術佛意教即相
 不退頓中頓」の文を引舉し此の四句に相頌
 述して九義を轉成してゐる。即ち(1)相頌
 なるが故に易行道なり、(2)易行道なる故に
 往生を得るなり、(3)往生を得れば速に無生
 を得る、(4)無生は即ち淨土門なり、(5)淨土
 門は即ち他力の勝術なり、(6)所謂他力な
 り佛意の教なり、(7)佛意の教なるが故に即
 相不退なり、(8)即相不退なるを頓中頓と名
 付く、(9)頓中頓の故に即ち相頌なり、云々
 と相頌の義を釋盡してゐる。問師は本書
 に於て八十三頌を作て相頌の義理を釋す
 りして相頌に説く科目すこぶる多きも總
 括して三門を出でないと云ふ、即ち内因、
 外緣、品位の三である。而して此の三門の
 中に數多の義理を明し本書第十一より終巻
 に渡つて釋明してゐる。(1)内因は頌義第十
 一より第二十一に亘つて行者の修すべき安
 心、起行、作業の法門を擧げてゐる。分別
 に總別の二を分別し起行に正轉二行を安
 し、難行に世或願の三願、正行に五正行と
 五念門と一行三昧を配釋して變轉導遊の義
 を引釋してゐる。作業に悲敬修等の四修を
 擧げて大小乘論部解釋等の文を釋明してゐ
 る。(2)外緣とは頌義第二十一より第二十七
 に渡るもので總別二種の佛願力を擧げ、總
 願は四弘誓願、三念願力を出し、別願は四
 十八願にして攝法身、攝淨土、攝衆生の三
 に分別し五種増上緣の義を釋述してゐる。
 (3)品位とは頌義第二十七より第三十に渡る
 もので三聖九品を指し内因、外緣の因緣和



合して得る所の往生の結果を云ふ。三聖は
 大經により九品は觀經によりて詳に横經を
 分別し、最後に淨土實義を示して三聖九品
 は往生の場合に従て上中下の差別あるも

畢竟して所説の教説なれば因縁餘方、安養
 教説に過ぎずして淨土實義の邊よりは全分
 彌陀智願海より出る故に全く無量品なる旨
 を示す、更に無生而生の修行を説き往生を

得ると雖も不往生に違せず、理を以て融す
 べからず、事を融して事を得ず事理俱備は
 唯淨土眞宗のみと結んでゐる。而して此の
 相頌の義は四個の概念に總攝せられる旨を

出す、即ち實體、化用、教門、實義がそれ
 である。實體とは眞實の法體の義にして彌
 陀の實智を云ふ。化用とは教化力用の義に
 して彌陀の權智を指し、教門とは釋迦の教

名所行發◎(名庫書)實體所現◎ 月年の刊寫◎(書考參書釋註)書本◎ 説解存内◎ 代年作漢◎ 書書◎ 録存◎ 教書◎(名書)名題◎ 號略字教

名所行發◎(名庫書)實體所現◎ 月年の刊寫◎(書考參書釋註)書本◎ 説解存内◎ 代年作漢◎ 書書◎ 録存◎ 教書◎(名書)名題◎ 號略字教

説を云ひ、實義とは眞實の道理の義にして一如の理をいふ。此の四義の證據は大原説相に明示してある所より推察すると同師の原義に依ると云ふべきである。斯く考案するに同師の相續一乘を高調する所の思想は奉提の往生を樂求したに對して無生を示したるを見ても生に即して無生、所謂即相不退、理事縱橫、頓中頓の佛智の一事に在る事を見出し得るのである。是同師當時の教界を風靡したる聖道の頓に對して、淨土の頓を高唱するに相頓を以てし、且つその相も單なる性相對列による相にあらずして、全く他力難思による即相無相、格外別風の相なる所由を明示して當時の教外別傳を誇りし禪風を一蹴して佛智一乘の深旨を高明して以て本宗の真義を開明發揮したるものなり。

要之本書は宗祖以來の高判の上に二藏二教の教相を主として組織的に一代聖教を判釋して一宗の要義を概括分明ならしめ、以て宗義の完備を期したものと云ふべきである。徳川時代において各檀林に於て宗乘の科として課し盛んに研究講説せられたものである。以て本書の價值を知ることが出来る。略頌と本書との内容關係を圖示すれば前圖(一九頁)の如し。

(二)卷、淨全十二聖門、教相十八通(二)卷、淨全十二聖門、頌義見聞(十)卷、諸崇、淨土略名目圖集法(六)卷、南信、二藏義引文私考(三)卷、知開、頌義(二十)卷、或百卷、雲臥、頌義照應底本(四十八)卷、雲臥、頌義顯文大書(八)卷、二藏頌義見聞(三十八)卷、雲臥、二藏義綱要(十)卷、玄信、二藏義批判(四)卷、二藏義序(一)卷、虎角、奉送鈔(五)卷、淨全十)妙瑞、二藏義引文釋考、雲臥

釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義卷首拔抽 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇

釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇

釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇

本書はスタイン氏蒐集の燻煌出土古寫本で、大英博物館の所蔵にかゝる。此の書は鳩摩羅什(A.D. 344-413)門下四哲の隨一、僧肇(A.D. 384-445)が、師羅什の譯した維摩詰所說經三卷に關する註釋書、註維摩詰經十卷の序文で、出三藏記集第八(大正五五・五八頁上)に別出されてゐるものだが、これを中唐代宗の太曆二年(寫本に大曆二年とあるは誤寫手)A.D. 767春正月に、崇福寺沙門體清が註解したものである。

本書殘卷一の内容は釋淨土序略分四以下の第二段、別して教與分を附する内、本迹不思議の部分、序文でいへば半分以上以下で、然るに圖解と答應應不同、非本無以垂迹、非迹無以顯本、本迹顯迹而不思議一也の所より初まつて「世將來君子與世同聞」の終末まで釋してゐる。尙餘記に全體が如何様子に釋せられたかを推知することが出来る上、のみならず、羅什、僧肇研究の一資料となすものである。

二一建中川A. D. 711-783) 唐廣德二 (A. D. 764) 釋義起序 (B) Shaku-sen-en-gi-jo. (支) Shih-ch'ien-yuan-ch'i-hsu. 一巻、存、法華玄義釋義(大正三三・八一五No. 1717) 支、普門子(普觀三一頁元A. D. 709-792) 支、傳教大師將來越州錄

釋義起序 (B) Shaku-sen-en-gi-jo. (支) Shih-ch'ien-yuan-ch'i-hsu. 一巻、存、法華玄義釋義(大正三三・八一五No. 1717) 支、普門子(普觀三一頁元A. D. 709-792) 支、傳教大師將來越州錄

釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇

釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇

釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇

釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇

釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇

釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇

釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇

釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇

釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇

釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇
釋淨土二藏義見聞 (B) Shaku-jō-do-ni-shō-gi-jin-mon-shi-ko. 二卷、二六八四、四九〇

羅漢起教。十、結會釋波羅蜜歸題。要するに本書は天台大師前半生教を知らんとする者の必讀書の一。本書には小止觀の文と同一なる文がある。然らば小止觀は大師の親撰なりや否や。章安が修治したものでなからうか等の問題が起る。更に可考。

釋宗演全集 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋宗演禪師講話 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

釋尊御遺形傳來史 ①(日)Shaku-gō-zen-shū. ①一巻 ②存 ③宗演(一六五八 A. D. 1919) ④昭和四刊

1. 宋齊錄、道學錄 ①一卷 ②缺 ③道

④略して單に宋齊錄又は道學錄とも云はれて居る。道學は北齊の人であつて、それ以上今の所知り得ない。歴代三寶紀卷第十五には「釋道學宋齊錄一卷」と云ひ、大唐内典錄、開元錄乃至貞元錄等、爾後の諸經錄は何れも皆これと全く同一の記載をなして居る。此等現存諸經錄の記載に徴して本錄の内容を推測するに、齊西域三藏僧伽跋流羅等、齊代翻譯三藏所出の諸經論等の目錄のやうである。

⑤(參考) 三寶紀卷第一〇、内典錄第一〇、開元錄第一、貞元錄第一八 (林屋友次郎)

釋道學錄 ①(日) Shaku-dō-kyō-to-ku. (支) Shih-tao-ping-ta. 後齊沙門釋道學錄 ①一卷 ②缺 ③道學(永明六)天保一〇 A. D. 488—539)撰 ④東魏代(A. D. 534—560)

⑤具には後齊沙門釋道學と云ひ、齊郡西曹山寺釋道學の撰述したものである。歴代三寶紀卷第十五に「釋道學錄一卷」と云ふるもの即ち本錄であつて、爾後の大唐内典錄、開元錄乃至貞元錄等の諸錄にも、皆同じくこの録名を擧げて居るけれども、その詳細は詳しては今の所全く不明である。道學姓は齊、平恩の人であつて、維摩、涅槃、地論乃至華嚴等に通じ、戒律を善くし又常に譯定を業となしたと傳へられて居る。齊文宣王の天保十年(A. D. 559)三月、七十有二歳を以て卒した。

⑥(參考) 三寶紀卷第一五、内典錄第一〇、開元錄第一〇、貞元錄第一八 (林屋友次郎)

釋難真宗僧儀 ①(日) Shaku-nan-shin-shū-ō-gi. ②一卷 ③存、真宗全書第五九 ④難真正徳五—真政元 A. D. 1215—1289)撰 ⑤寶曆一三(A. D. 1783)十月 ⑥本書は眞宗大谷派の第五世講師、理綱院慧琳が、眞宗の肉食妻帯の宗風に對する他宗よりの困難について、これが會通辯釋を試みんが爲に、一人の來客との問答に託して辯述せられたものであつて、その跋に託して書するところに依れば、會て眞宗の眞眼が「初嚴經」を江戸に講じた時、大谷に眞宗の僧侶を難じたに對して、本願寺派の學匠空雲が「初嚴經講疏」及び「葛藤別紙」の二書、並に大谷派の講師圓澄の「帶妻食肉義」にひいて、著者慧琳師が之に研鑽を加つて撰すところなりとす。今本書の内容を摘要すれば、まづ肉食の宗風については「初嚴經釋要鈔」涅槃會疏」等に三種の淨肉と十種の不淨肉とを説いて居る。宗祖觀聖人の意に在りては、肉を食すといふてもその意は三淨肉に在るのである。また妻帯の宗風については、既に「大集經釋要鈔」大慈經心地理經釋要鈔」華嚴經釋要鈔」等に末世の比丘の妻帯の事を説いて居る。殊に日本に於ては、東大寺明一、元興寺慈實、澄童、聖覺が妻帯せし事實が六坊執行、現今に於ても八幡佛法寺正、清水六坊執行、祇園、丸山、六角、池坊、總州正中寺の僧衆

等皆妻室を置つて居る。蓋しこれ「叔世時運の然らしむるところ」であるといひ、「眞宗に於て妻肉を許して居るも、嗜欲口腹に足る。又何ぞ邪徑に走らうか。されば穢惡の群生が僧尼の威儀を毀るのは、末代の旨諒を知らぬに基くものであつて、眞宗の宗風を誇らんとせば、宜しく三時の旨諒を研核せよ」と結んで居る。

⑦寫本(哲、え、五、右、一、二) (岡崎正謙) 釋難扶宗記 ①(日) Shaku-nan-fu-shū-ki. (支) Shih-nan-fu-tsung-ki. ②一卷 ③存、四明仁岳異說叢書(正徳一・九五・四)之内 ④宋知禮(建隆元—天聖六 A. D. 960—1028)述 ⑤寫本(龍大、二六五・六) 釋二十五三昧 ①(日) Shaku-ni-ji-go-san-mai. ②一卷 ③隋智顛(中大通三—開皇一〇 A. D. 531—597)述 ④唐智顛(中大通三—開皇一〇 A. D. 531—597)述 ⑤傳教大師將來台州錄に曰く「八四教義並法華支義部」云々。

釋般若六字三句論 ①(日) Shaku-han-gya-roku-ji-san-ku-ron. (支) Shih-p'an-fo-lu-tak-san-ku-tsun. ②一卷 ③唐菩提流志(大建四—開元一五 A. D. 637—727)撰 ④(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

釋普門品重頌 ①(日) Shaku-pu-mon-bon-ja-jo. (支) Shih-p'u-men-p'in-chung-sung. ②一卷 ③存、記續一・五五・二 ④宋道忞(乾徳元—明道元 A. D. 963—1032)撰 ⑤元錄一四刊(龍大、二四一三・三六)明治三四寫(正大、一一四三・五三)

釋菩提心義 ①(日) Shaku-bo-dai-shin-gi. ②存、興教大師全集之内 ③覺徳(養保二—康治一〇 A. D. 1095—1143)撰 ④菩提心二—康治一〇 A. D. 1095—1143)撰 ⑤寫本(龍大、二六五・六) 釋辨圓錄 ①(日) Shaku-hen-yū-ro-ku. ②一卷 ③存、智明(元文三—文化一〇 A. D. 1738—1813)撰 ④寛政一一刊(高代、寄、一・三八)哲、こ、八・中、六)明治一七刊(帝國、一四一・一六八)

釋菩提心義 ①(日) Shaku-bo-dai-shin-gi. ②存、興教大師全集之内 ③覺徳(養保二—康治一〇 A. D. 1095—1143)撰 ④菩提心二—康治一〇 A. D. 1095—1143)撰 ⑤寫本(龍大、二六五・六) 釋辨圓錄 ①(日) Shaku-hen-yū-ro-ku. ②一卷 ③存、智明(元文三—文化一〇 A. D. 1738—1813)撰 ④寛政一一刊(高代、寄、一・三八)哲、こ、八・中、六)明治一七刊(帝國、一四一・一六八)

釋法忍傳 ①(日) Shaku-ho-nin-den. (支) Shih-fa-jen-chen. ②一卷 ③覺徳(保元三—天福元 A. D. 1158—1233)撰 ④(參考) 淨土依憑經論章疏目錄 釋摩訶衍論 ①(日) Shaku-ma-ka-en-ron. (支) Shih-mo-ho-yan-lun. ②十卷 ③存、大正三三・五九一 No. 1668

釋摩訶衍論 ①(日) Shaku-ma-ka-en-ron. (支) Shih-mo-ho-yan-lun. ②十卷 ③存、大正三三・五九一 No. 1668

釋摩訶衍論 ①(日) Shaku-ma-ka-en-ron. (支) Shih-mo-ho-yan-lun. ②十卷 ③存、大正三三・五九一 No. 1668

釋摩訶衍論 ①(日) Shaku-ma-ka-en-ron. (支) Shih-mo-ho-yan-lun. ②十卷 ③存、大正三三・五九一 No. 1668

釋摩訶衍論 ①(日) Shaku-ma-ka-en-ron. (支) Shih-mo-ho-yan-lun. ②十卷 ③存、大正三三・五九一 No. 1668

續論九、正續一・二、原 1423 漢 ①龍樹造、姚秦代後提摩多譯

②高麗の義天錄に、大乘起信論の本釋をおよそ三十部ほどある最初に當論があるとはり、こはいふまでもなく起信論の註釋である。但し起信論の立義分に對して三十三種の法門を開立し、これを修行種因海と性徳圓滿海とに大別してその淺深を對辨するが如き、一見せば華嚴の因果二分論と同巧異曲視されぬではないが、全體を熟讀するならばその然らざるゆゑんがわかる。なぜならば、第十卷に華嚴の教主たる盧遮那佛をば、性徳圓滿海たる不二摩訶衍の佛果にのぞめてはるかに及ばざる旨を決列してあるからである。また總持果分の境地には、もとよりそれに相應しうる言説も名字も心識もあるのであるから、これを常に不可説といひ不可念といふは、それは未だ第一義の説でない論するなどの論出色の點にして、眞言密教の思想と一致する。これその弘法大師がその清濁なる全著作中、いたるところこの論によつて眞言教義を發揮するゆゑである。

もしそれ作者の問題に至つては、それも光仁天皇の寶龜十年に、大安寺の戒明により始めて請來されし最初から批判區々である。その大體は東寺賢實の寶冊鈔第八にある「釋論眞傳事」によつて知りえらるゝも、もとより問題がこれであつたのではなく、かの起信論眞傳の問題と相対つてなほ深刻に進めなければならぬ性質に屬し、今こゝでこれを論ずる餘白を有しない。しか

し大觀するに作者如何の如きは第二義的問題にして、むしろ義味内容の如何を究むることがはるかに大切でなければならぬ。この論は偽作たるのみならず義味内容もまた虚淺なりと。しかし肝心の義味内容がかく虚淺なるならば、何で不世出の哲人たる弘法大師の理想を満足せしめやうか、これは思はざるの甚だしきものといふべきである。

③(參考) 淨土依憑經論章疏目錄、淨土眞宗教典第一、東城傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第三 ④古寫本(各六、餘甲・六六)建長八刊(正大、一一九三・一〇四—一〇五)哲、ま・七・中、三六、ま・七・左、一) (京大、藏、一六レ・六) 釋摩訶衍論 ①(日) Shaku-ma-ka-en-ron. 國譯釋摩訶衍論 ②十卷 ③存、國譯密教論釋第二 ④林田光輝譯 釋摩訶衍論應教鈔 ①(日) Shaku-ma-ka-en-ron-ō-kyō-shū. 釋論應教鈔 ②一卷 ③存、大正六九・五八四 No. 2268 ④道範(元暦元—建長四 A. D. 1181—1252)撰 ⑤建長四、年七五(寂)述

⑥本書は嘉祿二年正月の比、禪定二品大王道助の教命により、釋摩訶衍論一部の要義を問答通釋す。その立場は高野山華王院覺海の口説と、京都東山神林寺通暹の指授とを得て抄したるものにして、釋論一部に亘る顯密の二意を述べ、本書現在は一の本末合本一冊を傳ふるのみにして、已下を傳えず。或は上中下三卷本であつたものと傳

へらる。若し然らば中下を佚して、上卷存するのみ。一論大綱の事。(論に五分あり、これ五部の法門なりとなす。第一は因緣分にして實教に於いては五部の中の佛部、第二の立義分は蓮花部、第三の解釋分は金剛部、第四の修行分は寶部、第五の勸修分は羯磨部であるとして、當然の密論なるを表はさうとしてゐる。題名の事。初二頌の事。今造此の論等之事。論別事(中略)三大義之事、何故不二摩訶衍法無因緣耶之事。菩薩二乘一切眾生亦如是事。今論不二與花嚴圓々性海同異之事。配當外門法之事等。三十條の問題を設けて論述す。

⑦文永二寫(寶壽院)嘉永二、三寫、明治二二刊(高代、寄、一・三九) 釋摩訶衍論開解鈔 ①(日) Shaku-ma-ka-en-ron-kai-geshū. 釋論開解鈔 ②三十六卷 ③存、日本大藏經眞言教論章疏卷上 ④祖瑜(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1226—1304)撰 ⑤馬鳴菩薩の大乗起信論を解釋した釋摩訶衍論十卷は東密教學上に於ては極めて重要な論疏である。而して是に就ては撰者等に於て古來種々の議論があるが今は之を略す。本書釋摩訶衍論開解鈔は祖瑜僧正が、會て根來寺鎮守講師たりしとき本論の要義を講述したもので、則ち本論の文を擧げ之に對して詳細なる解釋を試みられてゐる。

⑥承應二刊 ⑦各六、餘大、五〇五(龍大、二四三三・五、研佛) (岡田契昌) 釋摩訶衍論勸注 ①(日) Shaku-ma-ka-en-ron-kan-cha. 釋論勸注 ②二十四卷 ③存、大正六九・六〇三 No. 2290

④祖瑜述 ⑤元應二(A. D. 1280) ⑥釋摩訶衍論一部を通釋した書である。祖瑜の開解鈔と宥快の鈔とに對比すべき名著である。論の序文の釋一卷、本文の釋二十三卷あつて、本文の釋一卷には初に眞言別學事、大意事、眞傳眞論事、今論眞言別學事、本論眞言別學事、法門建立事、三十三與二十七尊、配屬事、兩部配屬事、題額事、造主事、序正流通事等の要目を掲げて説明を施し、次に正しく本文を釋して一々を解説を施してゐる。本文釋中にもしばしば要目を掲げて閱讀に便ならしめてゐる。本書は正和五年から元應二年八月まで首尾四ヶ年を費して、東寺西院又は高野山一心院谷金光院で撰述したもので、東寺傳法會二季談義にこれを講じたことが奥書に記してある。

⑦(參考) 釋教諸師製作目錄第二、諸宗章疏錄第三 ⑧明曆四刊(龍大、二四三五・一四)曆應二果實寫(觀智院藏) 南北朝時代寫(東善提院藏) 釋摩訶衍論記 ①(日) Shaku-ma-ka-en-ron-ki. (支) Shih-mo-ho-yan-lun-ki. 釋論記 ②一卷 ③存、正續一・七二・四 唐代聖法鈔

④聖法は法敏と同じく傳記不明であり、從つて二師の前後も知りたがいが、但し弘法大師の平城天皇灌頂文によれば、大師はたしかにこれによつて釋を設けられし跡が見られるから、或ひは法敏よりや、前にし

名所行發◎(名庫書)表題所現◎ 月年の刊寫◎(書考)書體註◎書末◎ 説解存内◎ 代年作著◎ 表書◎ 缺存◎ 數卷◎(名書)名題◎ 號字

て、けだし釋論最古の註釋ならむかとも思はれる。しかるに註釋といつても實は音義體の短篇であり、そして通常とはよほど異なる論所用の梵語に適當の譯を付し、漢譯經典中に未かつて發見し能はざる異經論を多く證し、かつ馬鳴の起信論製時を佛滅後一百年と定むるが如き珍説とす、兎に角も、大いなる疑問に値する書なりといふべきであるが、しかるにかの釋論三師たる法悟・志福・普觀はこの書によるところ極めて多い。宥快の釋論決擇六に云く、凡於此論末師中、則以三聖法、爲本、故鈔論(志福なり)一釋上下釋文多依三聖法、……如三聖法師、則信傳等中無不載之、又非三聖法師等、何人師事迷不明。

①(参考) 東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第三①刊本(京大・藏・四三・二二) 德川時代寫(寶藏院)

釋摩訶衍論記 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-ki (天) Shih-mo-ho-yen-tan-chi、釋論記、普觀記 ②六卷 ③存、記帳一・十三、一 ④宋代普觀述

①無際大師普觀もまた法悟・志福と同じく華嚴宗に屬せし人と見えて、同宗義に基づいて一部を通釋せしものである。師は分科が巧妙で文の段落を分つことは、釋論末註のなかで恐らく師の右にいづるものもこれなかるべしと思はれるのみならず、釋論の理想法門たる不二摩訶衍を考察することが、やゝもすれば弘法大師の深遠なる所見と往々に一致する點がある。祖慶の立義分私記によれば、この書は業上僧正の弟子般若房

了心の請來なりと。私に聞くと了心は入宋し普觀に面謁してこれを授かつた。

①(参考) 諸宗章疏錄第三 ①正保三刊(龍大・二四三五・九)刊本(龍大・二四・三五・六)(正大・一九三・一一一・一一二)(各六、餘大・四七)(京大) (森田龍徳)

釋摩訶衍論開書 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-ki-ki-gaki ②一卷 ③存 ④大道(一喜永三 A. D. 1830)述 ⑤萬延二寫 ⑥(正大・一九二・一七二)

釋摩訶衍論愚案鈔 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-gu-an-sho、國譯釋摩訶衍論愚案鈔 ②一卷 ③存、國譯密教論第卅二 ④採本質略譯

釋摩訶衍論愚案鈔 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-gu-an-sho、釋論愚案鈔 ②七卷或十卷 ③存 ④印刷(永享七—永正一六 A. D. 1435—1519)述

①釋論に關する東密古義の論集集、論義條目は第一卷、門大乘、釋開藏外立三獨覺、兼等九十七條であるが、釋論第十勸勞向勝不退門の論義は釋論安樂鈔と題して別出して居る。宥快、長覺の決擇を比較考量し、實錄二門の異なるところを釋した故に極めて重要とする所である。

①承應三刊(龍大・二四三五—一五)承應三

及延寶三刊(高次、寄・一・三九)刊本(京大)

釋摩訶衍論愚案 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-gu-an-sho、釋論愚案 ②二十二卷 ③存 ④編錄(喜保二—喜元二 A. D. 1226—1304)述

釋摩訶衍論科 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-ka、(支) Shih-mo-ho-yen-tan-ko ②二卷(缺上卷) ③存、記帳一・九五、四 ④宋代普觀治定

①論の第一より第三の終りに了たる三卷の分科、即ち上巻はすでに逸本となり、論第四最初の不見義段以下、乃至第十の終りに了たる七卷の分科がこの下巻であり、今この科圖を同師の記第四以下と對校するに、今々符合する。この書は本朝請來後、第九十四代後二條天皇の乾元々年(正安五年なり、鎌倉時代、A. D. 1302)に廣賢が開板せしものである。

①寫本(京大・藏・二四三・二二)(森田龍徳)

釋摩訶衍論科註 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-ka-chu、釋論科註 ②二十卷 ③存 ④覺照(寛永二〇—享保一〇 A. D. 1643—1725)述 ⑤釋摩訶衍論の註釋書にして上欄に分科を加す。

釋摩訶衍論啓蒙 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-kei-mo、釋論啓蒙 ④四十一卷或三十五卷 ⑤存 ⑥運教(慶長一九—元禄六 A. D. 1614—1693)述

①本書は條數名目等釋憲の釋摩訶衍論百條第三重に同じ。同項(參照)たゞし難答相反する條項と初學者のため及び章疏を外に持たない者のために具文をも併記して居る。

①延寶七刊(龍大・二四三五・一六)

釋摩訶衍論決疑鈔 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-keitsu-gi-sho、釋摩訶衍論決疑破難會釋鈔、釋論決疑鈔、釋論破難會釋鈔、釋論破難會釋鈔 ②一卷 ③存、大正六九・五七〇 No. 2286 ④清遠(萬壽二—永久三 A. D. 1025—1115)述

釋摩訶衍論決疑破難會釋鈔 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-keitsu-gi-sha-nan-e-shaku-sho、釋摩訶衍論決疑鈔、釋論決疑鈔、釋論破難會釋鈔、釋論破難會釋鈔 ②一卷 ③存、大正六九・五七〇 No. 2286 ④清遠(萬壽二—永久三 A. D. 1025—1115)述

①釋摩訶衍論の作者を龍徳とすることによつて、最澄の守護國界章、安然の悉曇藏、三船眞人の文等に偽作説を唱道するに對して、此れ等諸説を破釋し、弘法大師空海の意に則つて龍徳の眞作たることを論定せる書である。

①(参考) 釋教諸師製作目錄二 ①南北朝時代寫(觀智院) 古寫本(高山寺)萬治三寫(高次、寄・一・三九) (小田慈舟)

釋摩訶衍論決擇集 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-kec-chaku-shu、釋論決擇集 ②二十卷新版十七卷 ③存、日本大藏經眞言密教論章疏卷下 ④宥快(貞和元—應永三三 A. D. 1345—1416) 快全(一應永三三 A. D. 1424)等述

①眞言宗學研鑽上、論部を代表する重典釋摩訶衍論十卷の中より、重要な問題百餘ヶ條を撰し、各々の條に皆問答を設けて、釋

論の眞精神を闡顯した書である。然してその論述は主として、龍水頃高山山門派の大學匠宥快法印の口説にかゝり、問々快全師の説を加ふ。何れにしても、高山山門派學派の釋論研究上古來特に珍重する所である。

中には一般佛教學上特に起信論に稱道する「眞如」は、釋論に於ては顯教のものとなるか、密教のものとなるかといふ、問題を決定する爲めに「眞如顯密の問題」を掲げ、根本無明は佛果に到達せずば斷滅することが出来なしか否かとすふことの爲めに、「根本無明佛果斷」の問題を出し、又根本無明の體は斷滅し得べきものなりや否やに就いて「根本無明自體斷」を論じ、又佛敎の修行法としての止と觀は學密の徒も雙修すべきや否やに就いて「止觀雙修」を提稱するなど、甚だ興味多き問題が多い。

①慶安元刊(龍大、研佛)安永六刊(谷大、餘大・二二五〇) (大山公淳)

釋摩訶衍論顯秘鈔 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-ken-mi-sho、釋論顯秘鈔 ②十八卷 ③存 ④清遠(萬壽二—永久三 A. D. 1025—1115) ⑤釋摩訶衍論の註書、釋論末註中最古のものに屬す。⑥(参考) 眞言宗全書刊行豫定目錄

釋摩訶衍論顯秘 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-ken-dan、②一卷 ③存 ④寫本(正大・一九三・一七五)慶安元刊(高次、寄・一・三九)哲、ま・七、右一(京大)喜永二刊(正大・一九三・一四)

釋摩訶衍論玄談 ①(日)Shaku-ma-

ka-en-ron-ken-dan、②一卷 ③存 ④寫本(正大・一九三・一七五)慶安元刊(高次、寄・一・三九)哲、ま・七、右一(京大)喜永二刊(正大・一九三・一四)

釋摩訶衍論玄談 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-ken-dan、②一卷 ③存 ④寫本(正大・一九三・一七五)慶安元刊(高次、寄・一・三九)哲、ま・七、右一(京大)喜永二刊(正大・一九三・一四)

釋摩訶衍論玄談 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-ken-dan、②一卷 ③存 ④寫本(正大・一九三・一七五)慶安元刊(高次、寄・一・三九)哲、ま・七、右一(京大)喜永二刊(正大・一九三・一四)

釋摩訶衍論玄談 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-ken-dan、②一卷 ③存 ④寫本(正大・一九三・一七五)慶安元刊(高次、寄・一・三九)哲、ま・七、右一(京大)喜永二刊(正大・一九三・一四)

ka-en-ron-ken-dan、②一卷 ③存 ④寫本(正大・一九三・一七五)慶安元刊(高次、寄・一・三九)哲、ま・七、右一(京大)喜永二刊(正大・一九三・一四)

釋摩訶衍論玄談 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-ken-dan、②一卷 ③存 ④寫本(正大・一九三・一七五)慶安元刊(高次、寄・一・三九)哲、ま・七、右一(京大)喜永二刊(正大・一九三・一四)

釋摩訶衍論玄談 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-ken-dan、②一卷 ③存 ④寫本(正大・一九三・一七五)慶安元刊(高次、寄・一・三九)哲、ま・七、右一(京大)喜永二刊(正大・一九三・一四)

釋摩訶衍論玄談 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-ken-dan、②一卷 ③存 ④寫本(正大・一九三・一七五)慶安元刊(高次、寄・一・三九)哲、ま・七、右一(京大)喜永二刊(正大・一九三・一四)

ka-en-ron-ken-dan、②一卷 ③存 ④寫本(正大・一九三・一七五)慶安元刊(高次、寄・一・三九)哲、ま・七、右一(京大)喜永二刊(正大・一九三・一四)

釋摩訶衍論玄談 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-ken-dan、②一卷 ③存 ④寫本(正大・一九三・一七五)慶安元刊(高次、寄・一・三九)哲、ま・七、右一(京大)喜永二刊(正大・一九三・一四)

釋摩訶衍論玄談 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-ken-dan、②一卷 ③存 ④寫本(正大・一九三・一七五)慶安元刊(高次、寄・一・三九)哲、ま・七、右一(京大)喜永二刊(正大・一九三・一四)

釋摩訶衍論玄談 ①(日)Shaku-ma-ka-en-ron-ken-dan、②一卷 ③存 ④寫本(正大・一九三・一七五)慶安元刊(高次、寄・一・三九)哲、ま・七、右一(京大)喜永二刊(正大・一九三・一四)

所に論文を引用してゐる。大師は釋論を熟讀するに際し、その要義を摘記して本書を作り、備忘の用としたものである。上巻には論一、下巻に通に下巻には論第二第三の兩巻につきて執筆してゐる。

●(参考) 諸宗章疏第三、釋教諸師製作目録一、諸師製作目録

●元祿七刊(智山覺眼開板) ①(正大、一四三)・二六三(高天、寄・一三九)(京專)

●(小田慈舟)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

●(京專)

【シ】

②二卷 ③存、大正六・五六一 No. 2384、弘法大師全集第三、日本大藏經實密教論章疏上 ④空海(實龜五一承和二 A. D. 774—835)述 ⑤釋摩訶衍論指事の下を見よ。⑥(參考) 章疏錄 ⑦元祿七刊(賀山豐圓開版) ⑧(正大、一四三二、一三六三) ⑨(高木、寄・一・三九) ⑩(高木) ⑪(高木)

釋論指事 ①(日) Shaku-ron-shi-ji. 釋摩訶衍論指事 ②一卷 ③存、大正六・五六四 No. 2385 ④愛媛(高保二一康治二 A. D. 1095—1143) 述 ⑤釋摩訶衍論指事 ⑥下を見よ。⑦(參考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄

釋論指事 ①(日) Shaku-ron-shi-ji. 國譯釋論指事 ②一卷 ③存、國譯密教論釋部第二 ④國譯密教刊行會編

釋論指事抄 ①(日) Shaku-ron-shi-ji-shō. ②三卷 ③珍瑞(一寶曆五 A. D. 1751—1763) 述 ④(參考) 章疏錄

釋論指南抄 ①(日) Shaku-ron-shi-nan-shō. 釋摩訶衍論指南抄鈔物、釋論指南抄鈔物 ②十卷 ③存 ④印版(永享七—永正一六 A. D. 1435—1519) 述 ⑤諸宗章疏錄第三、章疏錄 ⑥刊本(高木、一三九) ⑦(京專) 萬治元刊(高木、寄・一・三九) ⑧(龍大、二四三・一八) ⑨(龍大、二四三・一八)

釋論指南鈔物 ①(日) Shaku-ron-shi-nan-shō-tsuri-mono. 釋摩訶衍論指南鈔鈔物、釋論指南抄 ②十卷 ③存 ④印版(永享七—永正一六 A. D. 1435—1519) 述 ⑤萬治元刊(高木、寄・一・三九) ⑥(龍大、二四三・一八) ⑦刊本(高木、寄・一・三九) ⑧(京專)

釋論自鈔 ①(日) Shaku-ron-ji-shō. 釋摩訶衍論自鈔 ②五卷 ③存 ④珍瑞述 ⑤寶曆三—四(A. D. 1753—1754) ⑥釋摩訶衍論自鈔の下を見よ。⑦(參考) 章疏錄 ⑧寫本(持明院)

釋論十二鈔 ①(日) Shaku-ron-ji-ni-shō. ②三冊 ③存 ④日輪寺良和口 ⑤刊本(高木、寄・一・三九) ⑥(足利時代寫(寶龜院))

釋論十二鈔私記 ①(日) Shaku-ron-ji-ni-shō-shi-ki. ②十卷 ③存 ④長覺(曆應三—應永三 A. D. 1340—1416) 記 ⑤良和の釋論十二鈔に據りて記述された釋論に関する、東密古義流密門の百五ヶ條に互る論集である。⑥(參考) 章疏錄 ⑦(京專) 正六、一三三、一三〇(高木、寄・一・三九) ⑧(高木、寄・一・三九) ⑨(高木、寄・一・三九) ⑩(高木、寄・一・三九) ⑪(高木、寄・一・三九) ⑫(高木、寄・一・三九) ⑬(高木、寄・一・三九) ⑭(高木、寄・一・三九) ⑮(高木、寄・一・三九) ⑯(高木、寄・一・三九) ⑰(高木、寄・一・三九) ⑱(高木、寄・一・三九) ⑲(高木、寄・一・三九) ⑳(高木、寄・一・三九) ㉑(高木、寄・一・三九) ㉒(高木、寄・一・三九) ㉓(高木、寄・一・三九) ㉔(高木、寄・一・三九) ㉕(高木、寄・一・三九) ㉖(高木、寄・一・三九) ㉗(高木、寄・一・三九) ㉘(高木、寄・一・三九) ㉙(高木、寄・一・三九) ㉚(高木、寄・一・三九) ㉛(高木、寄・一・三九) ㉜(高木、寄・一・三九) ㉝(高木、寄・一・三九) ㉞(高木、寄・一・三九) ㉟(高木、寄・一・三九) ㊱(高木、寄・一・三九) ㊲(高木、寄・一・三九) ㊳(高木、寄・一・三九) ㊴(高木、寄・一・三九) ㊵(高木、寄・一・三九) ㊶(高木、寄・一・三九) ㊷(高木、寄・一・三九) ㊸(高木、寄・一・三九) ㊹(高木、寄・一・三九) ㊺(高木、寄・一・三九) ㊻(高木、寄・一・三九) ㊼(高木、寄・一・三九) ㊽(高木、寄・一・三九) ㊾(高木、寄・一・三九) ㊿(高木、寄・一・三九)

釋論初問答鈔 ①(日) Shaku-ron-sho-shin-mon-dō-shō. ②二十卷 ③存 ④印版(永享七—永正一六 A. D. 1435—1519) 述 ⑤(參考) 章疏錄 ⑥寫本(無量光院)

釋論疏 ①(日) Shaku-ron-shō. (支) Shih-tun-su. 次第屬當釋本論文題補三卷別行疏、釋摩訶衍論疏 ②六卷 ③存 ④唐代法敏述 ⑤釋摩訶衍論疏の下を見よ。⑥(參考) 章疏錄 ⑦(高木、寄・一・三九) ⑧(高木、寄・一・三九) ⑨(高木、寄・一・三九) ⑩(高木、寄・一・三九) ⑪(高木、寄・一・三九) ⑫(高木、寄・一・三九) ⑬(高木、寄・一・三九) ⑭(高木、寄・一・三九) ⑮(高木、寄・一・三九) ⑯(高木、寄・一・三九) ⑰(高木、寄・一・三九) ⑱(高木、寄・一・三九) ⑲(高木、寄・一・三九) ⑳(高木、寄・一・三九) ㉑(高木、寄・一・三九) ㉒(高木、寄・一・三九) ㉓(高木、寄・一・三九) ㉔(高木、寄・一・三九) ㉕(高木、寄・一・三九) ㉖(高木、寄・一・三九) ㉗(高木、寄・一・三九) ㉘(高木、寄・一・三九) ㉙(高木、寄・一・三九) ㉚(高木、寄・一・三九) ㉛(高木、寄・一・三九) ㉜(高木、寄・一・三九) ㉝(高木、寄・一・三九) ㉞(高木、寄・一・三九) ㉟(高木、寄・一・三九) ㊱(高木、寄・一・三九) ㊲(高木、寄・一・三九) ㊳(高木、寄・一・三九) ㊴(高木、寄・一・三九) ㊵(高木、寄・一・三九) ㊶(高木、寄・一・三九) ㊷(高木、寄・一・三九) ㊸(高木、寄・一・三九) ㊹(高木、寄・一・三九) ㊺(高木、寄・一・三九) ㊻(高木、寄・一・三九) ㊼(高木、寄・一・三九) ㊽(高木、寄・一・三九) ㊾(高木、寄・一・三九) ㊿(高木、寄・一・三九)

釋論諸鈔類聚 ①(日) Shaku-ron-shō-shū. 釋摩訶衍論諸鈔類聚 ②二冊 ③存 ④釋論打集開書、釋論序開書等を集めたもの。⑤刊本(高木、一・三九)

釋論助解 ①(日) Shaku-ron-jo-ge. 釋摩訶衍論助解 ②一卷 ③存 ④亮貞述 ⑤寶永二(A. D. 1705) ⑥(參考) 章疏錄 ⑦刊本(高木、寄・一・三九) ⑧(高木、寄・一・三九) ⑨(高木、寄・一・三九) ⑩(高木、寄・一・三九) ⑪(高木、寄・一・三九) ⑫(高木、寄・一・三九) ⑬(高木、寄・一・三九) ⑭(高木、寄・一・三九) ⑮(高木、寄・一・三九) ⑯(高木、寄・一・三九) ⑰(高木、寄・一・三九) ⑱(高木、寄・一・三九) ⑲(高木、寄・一・三九) ⑳(高木、寄・一・三九) ㉑(高木、寄・一・三九) ㉒(高木、寄・一・三九) ㉓(高木、寄・一・三九) ㉔(高木、寄・一・三九) ㉕(高木、寄・一・三九) ㉖(高木、寄・一・三九) ㉗(高木、寄・一・三九) ㉘(高木、寄・一・三九) ㉙(高木、寄・一・三九) ㉚(高木、寄・一・三九) ㉛(高木、寄・一・三九) ㉜(高木、寄・一・三九) ㉝(高木、寄・一・三九) ㉞(高木、寄・一・三九) ㉟(高木、寄・一・三九) ㊱(高木、寄・一・三九) ㊲(高木、寄・一・三九) ㊳(高木、寄・一・三九) ㊴(高木、寄・一・三九) ㊵(高木、寄・一・三九) ㊶(高木、寄・一・三九) ㊷(高木、寄・一・三九) ㊸(高木、寄・一・三九) ㊹(高木、寄・一・三九) ㊺(高木、寄・一・三九) ㊻(高木、寄・一・三九) ㊼(高木、寄・一・三九) ㊽(高木、寄・一・三九) ㊾(高木、寄・一・三九) ㊿(高木、寄・一・三九)

釋論序抄 ①(日) Shaku-ron-jo-shō. 釋摩訶衍論序抄 ②一卷 ③存、日本大藏經實密教論章疏卷上 ④(珍瑞) 嘉祿二—三元 A. D. 1226—1304) 述 ⑤釋摩訶衍論序抄の下を見よ。⑥(參考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄 ⑦(明曆四刊) ⑧(高木、寄・一・三九) ⑨(高木、寄・一・三九) ⑩(高木、寄・一・三九) ⑪(高木、寄・一・三九) ⑫(高木、寄・一・三九) ⑬(高木、寄・一・三九) ⑭(高木、寄・一・三九) ⑮(高木、寄・一・三九) ⑯(高木、寄・一・三九) ⑰(高木、寄・一・三九) ⑱(高木、寄・一・三九) ⑲(高木、寄・一・三九) ⑳(高木、寄・一・三九) ㉑(高木、寄・一・三九) ㉒(高木、寄・一・三九) ㉓(高木、寄・一・三九) ㉔(高木、寄・一・三九) ㉕(高木、寄・一・三九) ㉖(高木、寄・一・三九) ㉗(高木、寄・一・三九) ㉘(高木、寄・一・三九) ㉙(高木、寄・一・三九) ㉚(高木、寄・一・三九) ㉛(高木、寄・一・三九) ㉜(高木、寄・一・三九) ㉝(高木、寄・一・三九) ㉞(高木、寄・一・三九) ㉟(高木、寄・一・三九) ㊱(高木、寄・一・三九) ㊲(高木、寄・一・三九) ㊳(高木、寄・一・三九) ㊴(高木、寄・一・三九) ㊵(高木、寄・一・三九) ㊶(高木、寄・一・三九) ㊷(高木、寄・一・三九) ㊸(高木、寄・一・三九) ㊹(高木、寄・一・三九) ㊺(高木、寄・一・三九) ㊻(高木、寄・一・三九) ㊼(高木、寄・一・三九) ㊽(高木、寄・一・三九) ㊾(高木、寄・一・三九) ㊿(高木、寄・一・三九)

釋論序抄 ①(日) Shaku-ron-jo-shō. ②一卷 ③存、日本大藏經實密教論章疏卷上 ④(珍瑞) 嘉祿二—三元 A. D. 1226—1304) 述 ⑤釋摩訶衍論序抄の下を見よ。⑥(參考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄 ⑦(明曆四刊) ⑧(高木、寄・一・三九) ⑨(高木、寄・一・三九) ⑩(高木、寄・一・三九) ⑪(高木、寄・一・三九) ⑫(高木、寄・一・三九) ⑬(高木、寄・一・三九) ⑭(高木、寄・一・三九) ⑮(高木、寄・一・三九) ⑯(高木、寄・一・三九) ⑰(高木、寄・一・三九) ⑱(高木、寄・一・三九) ⑲(高木、寄・一・三九) ⑳(高木、寄・一・三九) ㉑(高木、寄・一・三九) ㉒(高木、寄・一・三九) ㉓(高木、寄・一・三九) ㉔(高木、寄・一・三九) ㉕(高木、寄・一・三九) ㉖(高木、寄・一・三九) ㉗(高木、寄・一・三九) ㉘(高木、寄・一・三九) ㉙(高木、寄・一・三九) ㉚(高木、寄・一・三九) ㉛(高木、寄・一・三九) ㉜(高木、寄・一・三九) ㉝(高木、寄・一・三九) ㉞(高木、寄・一・三九) ㉟(高木、寄・一・三九) ㊱(高木、寄・一・三九) ㊲(高木、寄・一・三九) ㊳(高木、寄・一・三九) ㊴(高木、寄・一・三九) ㊵(高木、寄・一・三九) ㊶(高木、寄・一・三九) ㊷(高木、寄・一・三九) ㊸(高木、寄・一・三九) ㊹(高木、寄・一・三九) ㊺(高木、寄・一・三九) ㊻(高木、寄・一・三九) ㊼(高木、寄・一・三九) ㊽(高木、寄・一・三九) ㊾(高木、寄・一・三九) ㊿(高木、寄・一・三九)

釋論序註 ①(日) Shaku-ron-jo-chū. 釋摩訶衍論序註 ②二卷 ③存 ④亮法(元和八—延寶八 A. D. 1022—1090) 述 ⑤(足利時代寫(寶龜院))

釋論三卷講案 ①(日) Shaku-ron-san-kyō. 釋摩訶衍論三卷講案 ②一卷 ③存 ④寫本(高木、寄・一・三九)

釋論第三重 ①(日) Shaku-ron-dai-san-ju. 釋摩訶衍論第三重 ②十卷 ③存 ④聖康(德治二—明德三 A. D. 1307—1392) 述 ⑤釋摩訶衍論第三重の下を見よ。⑥(足利時代及德川時代寫(寶龜院)) 嘉吉二寫(寶龜院) 寛永一〇刊(正大、一四四・三五・一)

釋論第三重談義 ①(日) Shaku-ron-dai-san-ju-dan-gi. 釋摩訶衍論第三重談義、釋論談義 ②二卷 ③存 ④運敬(慶長一九一元祿六 A. D. 1614—1693) 述 ⑤延寶九(A. D. 1681)

釋論第三重讀曲 ①(日) Shaku-ron-dai-san-ju-yomi-kuse. ②一卷 ③存 ④釋摩訶衍論第三重の主要なる讀曲を記すもの。⑤(高木、寄・一・三九) ⑥(高木、寄・一・三九) ⑦(高木、寄・一・三九) ⑧(高木、寄・一・三九) ⑨(高木、寄・一・三九) ⑩(高木、寄・一・三九) ⑪(高木、寄・一・三九) ⑫(高木、寄・一・三九) ⑬(高木、寄・一・三九) ⑭(高木、寄・一・三九) ⑮(高木、寄・一・三九) ⑯(高木、寄・一・三九) ⑰(高木、寄・一・三九) ⑱(高木、寄・一・三九) ⑲(高木、寄・一・三九) ⑳(高木、寄・一・三九) ㉑(高木、寄・一・三九) ㉒(高木、寄・一・三九) ㉓(高木、寄・一・三九) ㉔(高木、寄・一・三九) ㉕(高木、寄・一・三九) ㉖(高木、寄・一・三九) ㉗(高木、寄・一・三九) ㉘(高木、寄・一・三九) ㉙(高木、寄・一・三九) ㉚(高木、寄・一・三九) ㉛(高木、寄・一・三九) ㉜(高木、寄・一・三九) ㉝(高木、寄・一・三九) ㉞(高木、寄・一・三九) ㉟(高木、寄・一・三九) ㊱(高木、寄・一・三九) ㊲(高木、寄・一・三九) ㊳(高木、寄・一・三九) ㊴(高木、寄・一・三九) ㊵(高木、寄・一・三九) ㊶(高木、寄・一・三九) ㊷(高木、寄・一・三九) ㊸(高木、寄・一・三九) ㊹(高木、寄・一・三九) ㊺(高木、寄・一・三九) ㊻(高木、寄・一・三九) ㊼(高木、寄・一・三九) ㊽(高木、寄・一・三九) ㊾(高木、寄・一・三九) ㊿(高木、寄・一・三九)

釋論第三師記 ①(日) Shaku-ron-dai-san-ji-shi-ki. ②一帖 ③存 ④貞和五寫(寶龜院)

釋論第七聽書 ①(日) Shaku-ron-dai-shichi-ki-kyō. ②三卷 ③存 ④水六及應永一三寫(寶龜院)

釋論第七鈔 ①(日) Shaku-ron-dai-shichi-shō. 釋論第七鈔初日寶口 ②一卷 ③存 ④文正元寫(寶龜院)

釋論第十卷聽鈔 ①(日) Shaku-ron-dai-ju-kyō. ②一帖 ③存 ④文安二及文明二寫(寶龜院)

釋論第二勸注抄 ①(日) Shaku-ron-dai-ni-kan-chū-shō. ②一卷 ③存 ④足利時代寫(寶善院)

釋論第二卷問題 ①(日) Shaku-ron-dai-ni-kan-mon-dai. ②一冊 ③存

【シ】

阿衍論記、釋論記 ①一卷 ②存、七七一・七二四 ③唐代聖法鈔 ④釋摩訶衍論記 ⑤下を見よ。⑥平安朝末期寫(寶善院) 文化八寫(高木、寄・一・三九) 刊本(高木、寄・一・三九) ⑦(正大、一四〇・一) ⑧(京專)

釋論定俊抄 ①(日) Shaku-ron-jo-shū. 釋摩訶衍論定俊抄、開書 ②十卷 ③存 ④定俊快深述 ⑤水和五(A. D. 1379) ⑥(參考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄

釋論本(首、ま、七、中、一六)(京專) 明曆三刊(龍大、二四三・一九)

釋論眞偽之事 ①(日) Shaku-ron-shū-gi-no-koto. ②一卷 ③(參考) 章疏錄

釋論專釋鈔 ①(日) Shaku-ron-shū-shō. ②六卷 ③存 ④亮典(慶長一一—水應元 A. D. 1607—1632) 述 ⑤(參考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄

釋論專釋鈔 ①(日) Shaku-ron-shū-shō. ②六卷 ③存 ④亮典(慶長一一—水應元 A. D. 1607—1632) 述 ⑤(參考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄

釋論禪門決鈔 ①(日) Shaku-ron-zen-mon-kes-shō. ②一卷 ③存 ④賴瑞(嘉祿一一—嘉元二 A. D. 1236—1304) ⑤諸宗章疏錄第三に曰く『按、一作問答鈔三十卷、未如河正、其々。』(參考) 章疏錄

釋論續疑問鈔 ①(日) Shaku-ron-zoku-gi-mon-shō. ②一卷 ③存 ④章疏錄に曰く『詳道師云、通明院にあり。但破債買私記』云々。

釋論續決擇集 ①(日) Shaku-ron-zoku-kec-chaku-shū. ②十卷 ③存 ④宿快(貞和元—應永二 A. D. 1345—1416) 口 ⑤刊本(高木、寄・一・三九)

釋論續々決擇集 ①(日) Shaku-ron-zoku-zoku-kec-chaku-shū. ②三卷 ③存 ④宿快(貞和元—應永二 A. D. 1345—1416) 口 ⑤寫本(高木、寄・一・三九)

釋論打集開書 ①(日) Shaku-ron-da-shū-kiki-gaki. 釋摩訶衍論打集開書 ②一卷 ③存 ④宿快(貞和元—應永二 A. D. 1345—1416) 口 ⑤德川時代寫(寶龜院) 明治一三寫(高木、寄・一・三九)

釋論大事 ①(日) Shaku-ron-dai-ji. ②二紙一葉 ③存 ④釋摩訶衍論に就き、歸印明を傳ふる大事を記す。⑤德川時代寫(寶龜院)

釋論第一卷下巻補闕鈔 ①(日) Shaku-ron-dai-ichi-mon-dai. ②一卷 ③存 ④足利時代寫(寶龜院)

釋論第一相集開書 ①(日) Shaku-ron-dai-ichi-mon-dai. ②一卷 ③存 ④足利時代寫(寶龜院)

釋論第一問題 ①(日) Shaku-ron-dai-ichi-mon-dai. ②一卷 ③存 ④快雅(永享五 A. D. 1433) ⑤(京專)

釋論第九十問書 ①(日) Shaku-ron-dai-ju-ju-mon-shō. ②一帖 ③存 ④延徳二寫(寶善院)

釋論第五愚見鈔 ①(日) Shaku-ron-dai-ju-gu-ken-shō. ②四帖 ③存 ④足利時代寫(寶龜院)

釋論第五科文 ①(日) Shaku-ron-dai-go-ka-mon. ③存 ④快雅

釋論第五私鈔 ①(日) Shaku-ron-dai-go-shi-shō. ②六帖 ③存 ④足利時代寫(寶龜院)

釋論第五鈔 ①(日) Shaku-ron-dai-go-shō. ③存 ④三卷(卷不詳)

釋論第五問題 ①(日) Shaku-ron-dai-go-mon-dai. ②四帖 ③存 ④明範口 ⑤釋摩訶衍論問題 ⑥下を見よ。⑦(大永四寫(寶善院))

釋論第三問書略說段初後 ①(日) Shaku-ron-dai-san-mon-shō-ryō-setsu-dan-shū. ②一卷 ③存 ④寫本(寶善院)

釋論第三卷講案 ①(日) Shaku-ron-dai-san-kyō. ②一卷 ③存 ④寫本(高木、寄・一・三九)

釋論第三重 ①(日) Shaku-ron-dai-san-ju. ③存 ④聖康(德治二—明德三 A. D. 1307—1392) 述 ⑤釋摩訶衍論第三重の下を見よ。⑥(足利時代及德川時代寫(寶龜院)) 嘉吉二寫(寶龜院) 寛永一〇刊(正大、一四四・三五・一)

釋論第三重談義 ①(日) Shaku-ron-dai-san-ju-dan-gi. ③存 ④運敬(慶長一九一元祿六 A. D. 1614—1693) 述 ⑤延寶九(A. D. 1681)

釋論第三重讀曲 ①(日) Shaku-ron-dai-san-ju-yomi-kuse. ③存 ④釋摩訶衍論第三重の主要なる讀曲を記すもの。⑤(高木、寄・一・三九) ⑥(高木、寄・一・三九) ⑦(高木、寄・一・三九) ⑧(高木、寄・一・三九) ⑨(高木、寄・一・三九) ⑩(高木、寄・一・三九) ⑪(高木、寄・一・三九) ⑫(高木、寄・一・三九) ⑬(高木、寄・一・三九) ⑭(高木、寄・一・三九) ⑮(高木、寄・一・三九) ⑯(高木、寄・一・三九) ⑰(高木、寄・一・三九) ⑱(高木、寄・一・三九) ⑲(高木、寄・一・三九) ⑳(高木、寄・一・三九) ㉑(高木、寄・一・三九) ㉒(高木、寄・一・三九) ㉓(高木、寄・一・三九) ㉔(高木、寄・一・三九) ㉕(高木、寄・一・三九) ㉖(高木、寄・一・三九) ㉗(高木、寄・一・三九) ㉘(高木、寄・一・三九) ㉙(高木、寄・一・三九) ㉚(高木、寄・一・三九) ㉛(高木、寄・一・三九) ㉜(高木、寄・一・三九) ㉝(高木、寄・一・三九) ㉞(高木、寄・一・三九) ㉟(高木、寄・一・三九) ㊱(高木、寄・一・三九) ㊲(高木、寄・一・三九) ㊳(高木、寄・一・三九) ㊴(高木、寄・一・三九) ㊵(高木、寄・一・三九) ㊶(高木、寄・一・三九) ㊷(高木、寄・一・三九) ㊸(高木、寄・一・三九) ㊹(高木、寄・一・三九) ㊺(高木、寄・一・三九) ㊻(高木、寄・一・三九) ㊼(高木、寄・一・三九) ㊽(高木、寄・一・三九) ㊾(高木、寄・一・三九) ㊿(高木、寄・一・三九)

釋論第三師記 ①(日) Shaku-ron-dai-san-ji-shi-ki. ③存 ④貞和五寫(寶龜院)

釋論第七聽書 ①(日) Shaku-ron-dai-shichi-ki-kyō. ③存 ④水六及應永一三寫(寶龜院)

釋論第七鈔 ①(日) Shaku-ron-dai-shichi-shō. ③存 ④文正元寫(寶龜院)

釋論第十卷聽鈔 ①(日) Shaku-ron-dai-ju-kyō. ③存 ④文安二及文明二寫(寶龜院)

釋論第二勸注抄 ①(日) Shaku-ron-dai-ni-kan-chū-shō. ③存 ④足利時代寫(寶善院)

釋論第二卷問題 ①(日) Shaku-ron-dai-ni-kan-mon-dai. ③存

【シ】

時、超脱師之暇。時々染、論又成一号。命曰「各書集」。即ち本書は各書集(その項を見よ)刊行の後、元禄五年再び門人の求めによりて公刊したもので、佛典並に世俗の典籍に現はれた諸種の事項六二三項目に就て、一々これを考證解説を試みたるものである。

①元禄二、五刊 ②(高、大、寄、一、二四) (龍大、二〇一、一五一—一七) (高神覺身)

寂潭俊龍禪師語錄 ①(日) Jaku-shun-shun-shun-ryū-jō-kyō ②一巻

存 ③(後龍語) ④(寫本) (駒大)

寂調音所問經 ①(日) Jaku-chō-on-shō-mon-gyō (支) Chi-tiao-yin-so-wen-ching. (藏) Hphags-pa kua-rdsoh dā-don-dam-pahi bden-pa brtan-pa shen-bya-ba theg-pa chen-pohi mdo. 寂調音經。如來所說清淨調伏經 ②一巻 ③存。大正三三、一〇八一 No. 1493。縮列二、一三〇二。北533作。南556作。元556作。明北1084定。清1084定。麗547念。天549作。指504念。法531念。至1196儀。明南1340從。南1089 ④宋代法海譯

寂調音天子に對する文殊の説法で、大乘戒の要義を説き、菩薩と聲聞との思尼の相異を説く。内容は殆ど全く異本の清淨思尼方廣經と同一で、唯文首が少しく伸びてゐるのみである。又西晉竺法護譯の文殊師利淨律經も異本の一つである。譯者を法海とするは諸錄の一致する所であるが、歴代三寶記第十が始興錄、法上錄によりて斯く定めたのを元録第五已下が承用したのである。

武周錄には達磨多羅經に出るといふ。但し出三藏記集第四の新集撰失譯經錄に之を編入して失譯とする。歴代三寶記、法經錄に大乘思尼錄に入れてより、古來大乘律として取扱はれてゐる。(大野法道)

寂調音所問經 ①(日) Jaku-chō-on-shō-mon-gyō (支) Chi-tiao-yin-so-wen-ching. 如來所說清淨調伏經 ②一巻 ③失譯 ④(參考) 出三藏記第四、三寶記第四、內典錄第一、武周錄第一

寂然法師集 ①(日) Jaku-nen-hō-shū-shū ②一巻 ③存。群書類從第一〇

寂然(藤原親實) ①本書は寂然の歌、春十九首、夏十四首、秋二十首、冬十五首、戀十首、雜六十一首を収めたもの。その雜のうちには無常、十戒、經意等を詠んだものが多い。寂然は丹後守爲忠の子で、性最も和歌を好み、夙く刺愛して寂然と號し、爲業の寂念と俱に大原山に隱遁して居た。(中谷在禪)

寂禪師行實 ①(日) Jaku-zen-shū-shū ②一巻 ③存 ④(參考) 群書類從

寂蓮華雜冊初編 ①(日) Jaku-ren-ge-zasshū-shū-shū ②一巻 ③存

寂蓮法師集 ①(日) Jaku-ren-hō-shū-shū ②一巻 ③存。群書類從第一〇

寂蓮法師(藤原定長) ①(建仁) A. D. 1203。寂蓮法師の和歌(二百九十五首と群書類從には記すが、實は二百八十五首である)

を集めたもので、集中釋教に属するものは割に少い。寂蓮は後海の子定長、叔父俊成に養はれて居たが、定家の生るゝ及び出家して寂蓮といふた。顯昭と友であつた。顯昭は文學に秀でて居たが、和歌は寂蓮が勝れて居た。顯昭或時いふ、和歌はやさしいものだ、寂蓮のやうな無學者でもあの通り作れると、寂蓮これをきいて、和歌はむづかしいものだ、顯昭ほどの學者でもうまく作れないと、顯昭これを聞いて黙したと云ふ逸事が傳へられてゐる。(中谷在禪)

雀王經 ①(日) Jaku-ō-gyō (支) Chi-wang-king ②一巻 ③失譯 ④六度集經第五卷の抄出 ⑤(參考) 出三藏記第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

着語典 ①(日) Jaku-go-ten-kei ②一巻 ③存 ④高木謙徳 ⑤(參考) 群書類從

手印圖 ①(日) Shu-in-zu ②一巻 ③存 ④足利時代寫(實德院)徳川時代寫(寶善院)刊本(大藏)二四〇二九(龍大、二六六五、六八一九)貞享元刊(龍大、研佛)

手鏡鈔 ①(日) Shu-kyō-shō ②三巻 ③存 ④靜通(水元元一貞應) A. D. 1165 1233記 ⑤貞應二 (A. D. 1233) ⑥刊本 (高、大、一、四八)

手鏡鈔 ①(日) Shu-kyō-shō ②三巻 ③存 ④道範(元元一建長四) A. D. 1134 1232記 ⑤建長四、年七五五記 ⑥享保八刊 ⑦(高、大、寄、一、四八)(谷、大、餘、大、七)

而も種子の新重本有説に於て、本有説に據り新説を破してゐるのである。(水野弘元)

手跡講式 ①(日) Shu-kei-kō-shiki ②一巻 ③(藤原) ④(治元) 元亨元 A. D. 1240 1321撰 ⑤(參考) 諸宗章疏錄第二

手草 ①(日) Shu-kyō ②取草 ③存、日本大藏經天台宗密教章疏第三 ④安然(承和八—延喜年間) A. D. 841—901

①本書は大日經眞言救世者如何等の問ひを第一とし、以下大日經の各種の問題に就いて四百四十三番の問答を重ね、自心成佛の教義を述べ、終りに至つて五時列に就いて一段の説があるけれども詳説してゐない。下巻の卷首に日本大藏經編者は「此の巻の全文は教時間答卷三の中に在り、故に今は單に首尾の文を摘録するのみ」と記してゐる。又上巻の卷尾に無動寺本は「大略此の書は件の問答三卷の内の上二巻歟。共に論なし。一巻は教時義と同じつて書せざ」と記す。これ等に依りて知り得るが如く、本書は恐らく教時間答(教時義)を記すために五大院安然が手控(へ)のために草案した斷簡であらう。本文は通讀するに和奥を帯びた漢文體であることが著者に就いて少しく疑ふのであるが、安然が忽々の間に心覺(に)記したとすれば、我國の漢文は平安初期でも既に亂れてゐたと云ふ一實例であると思ふ。

本書を大分するに、初めに教主義。三密義。加持身義。毘盧種子。劫。字輪。大手水作法 ①(日) Shu-sui-shō-shō ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶善院) ⑥手簡集 ①(日) Shu-kan-shū ②一巻 ③存、慈雲尊者全集第一五輯 ④佐川武凡集 ⑤慈雲尊者飲光に寄せられたる手簡を集めたもので、集者佐川武凡は飲光の妹伊與女の子である。その目次、一、御母君の御手簡。二、開明門院の御手簡。三、慈證門院の御手簡。四、刑部卿の御手簡。五、郡山城主御深甲斐守保光侯の御手簡。六、片桐主膳正貞顯侯の御手簡。已上。⑥(寫本) (大阪法樂寺) (吉祥眞地)

手杖論 ①(日) Shu-jō-ron. (支) Shou-chang-lun. ②一巻 ③存。大正三三、五〇五 No. 1637。縮身、記1111、11、646。南660。元553。明北1219。清1219。麗641。天546。指608。法631。至1364。明南1393。南1216。釋迦釋尊、唐義淨(貞觀九—先天二) A. D. 635—713。譯

智灌頂地。淨心地。自證三菩提。悉地。學處品義。菩提心義。十緣生句義。菩提心義略抄の五門。以上。要するに本書は大日經住心品の疏によりて眞言教義を問答に依りて顯揚せんと試みた斷簡である。⑤(參考) 本朝合祖撰述諸書目。延壽寺密乘略目録。山家祖傳撰述諸書目集卷上 ⑥安政六寫上巻(谷、大、餘、大、三五五八) ⑦(田島徳普) ⑧存 ⑨延海述 ⑩寫本 ⑪(谷、大、餘、小、七二) ⑫存 ⑬中和讚 ①(日) Shu-chō-wakan. ②一巻 ③存 ④寫本(谷、大、宗、大、二五四六) ⑤手長者經 ①(日) Shu-chō-jō-gyō. (支) Shou-chang-jō-ching. (日) A. D. 234. Hattaka. ②存。中阿含經第九(大正一、四二二 No. 26, 40—41) ③主觀的信念の客觀的妥當性 ①(日) Shu-kwan-teki-shin-nen-no-kyōku-kan-teki-da-to-sei. ②一巻 ③存 ④(鳥島敏著) ⑤昭和四刊 ⑥金澤香草會 ⑦主君耳入此法門免與同罪事 ①(日) Shu-kun-eru-mi-ni-ni-kono-hō-mon-o-iru-ebi-gyō-do-zai-o-ma-na-karu-ra-koto. ②一巻 ③存、日蓮聖人御遺文之内、日蓮聖人全集第一三 ④日蓮(貞應元—弘安五) A. D. 1222—1283。記 ⑤(文永一) (A. D. 1274) ⑥日蓮が身延より其の篤信者四條金吾に與へた書。四條金吾が其の主江馬直江守に對

名所行録(名庫書)書影所現 ① 月年の刊寫 ② (書考參書釋註)書末 ③ 説解有内 ④ 代年作書 ⑤ 著書 ⑥ 缺存 ⑦ 數卷 ⑧ (名書)名題 ⑨ 號略字數

【シ】

書手杖論は最後の印度佛敎を知るに必要なものである。從來本書は殆んど手が付けられてゐないと思はれる。大正藏經で僅か二頁程の短いものであるが極めて難解である。本書の體裁は三つの偏頗を骨子として、各偏頗の後に論に曰くとして長行説がある。最初の偏は序文とも言ふべく、本書を撰する因縁理由を述べてゐる。以下の長行では諸佛が出世して無數の有情を救済せしむるが、有情は靈空の如くに終際なく無邊である。然らば有情はいかなる状態にあるか。一説者(異論者)は新生有情ありとし、他説者(命業軍)は舊有情及び新有情ありとしてゐる。有情が若し新生すとすればそれは或る因によるべく、然らば最初の有情はいかなる因によるか、無因生の過失になるであらうとて新生論を破してゐる。次に第二偏があり、佛の出世は遣ひ難く、佛敎を信ずることも亦難く、從つて輪廻への生因は得易く、解説は遣ひ難きを述べ、長行でも同様の説明をなしてゐる。これは若し新生有情を許せば有情は上説の如く輪廻者が多く解脱者が少い故に無限に増大する理であるが、これは不可能であるとの次の偏に至る伏線である。

第三偏に於ては、器世間は一定して破壊することもあるも増すことはないのに、有情が新生して無限に増加すとすれば遂には世間を逼迫して窮屈となるであらうとの意味を述べ、有情新生論者を攻撃してゐる。以下の長行でも同様のことを説き、更に進ん

で新生論の破斥をなしてゐる。即ち有情が新生すとすれば、それは餘の業力を藉りて生ずるのであり、それは重生か不重生かの何れかでなければならぬ。若し重習によつて生ずるとせば、淨染の二法が生因となるべきであり、一有情の生因となる爲にはこの二法は同生同滅でなければならぬ。然るに實際に於ては淨染二法の同生同滅はあり得ない。又生因としての重習は無數刹那に起るべく、從つて無數の生因となり、一有情の因から多有情の果が生ずることとなり、甲の努力によつて乙が努力なしにその報を受くるといふ不都合を來すであらう。次に若し重習に依らずして生ずるとすれば多種の功能は自ら起るといふことになる。聖道を修せずして涅槃を得るであらう。從つて施戒修の三福業事、思業思作業の二業、善不善無記の三業等は不用となるであらう。新生論の主張の結果として以上の諸の過失があるとすれば、正しい説は如何。これには有情の本有説である。有情は無始以來本有して、その自己の相續に於て、食等を重じて種々の界趣への輪廻を取り、又聞重習によつて出世間の無漏種子を顯現し、煩惱、所知の二障を斷じて解脱の涅槃境に至るのである。即ち有情の新生といふことはなく、自相續中に古來の種子を護し、その重習によつて有情の増進や退失が起るのである。而して有情及び諸法は過去の諸法から來つた異熟であり異熟論に外ならぬとして、阿毘達磨や瑜伽論を援引してゐる。要するに本論の立場は瑜伽唯識系統であり、

【シ】

し、法華經に想をなす者を供養するときは
 誘法障獄の罪を犯すことになると諷められた
 を賞し、この法門を主君の耳に入れたらだけ
 で與同罪を免れたと諭し、更に今後萬事油
 断なく用心せよと諷めたものである。
 ① 佛内啓蒙第二七、御書鈔第一七、佛内扶
 老第一〇等 (馬田行啓)

主師親御書 ① (日) Shu-shi-shin-go-sho. 釋尊三德 ② 一巻 ③ 存、日蓮聖人御遺文之内、日蓮聖人全集第七 ④ 日蓮(貞應元一弘安五A.D. 1222-1282) ⑤ 建長七(A.D. 1255)

⑥ 日蓮が建宗直後の建長七年鎌倉より其父母に送った書と傳ふ。娑婆世界の我等には釋尊こそ主師親の三德を具した有縁の佛で、阿彌陀佛には此の三法が具はつて居らなからして、釋尊の三德を評述し、斯かる三德具足有縁の釋尊を輕んじ、釋尊出世の本懐たる法華經を信じないが罪報が重く、然るに法華經の提婆品には法華經獨特の惡人女人畜生等の成佛が許されてゐるから、法華經を信ずる女人は成佛ができてと勸信した書である。

⑦ 佛外書考卷下、佛外考文第四(馬田行啓)

主師親御書 ① (日) Shu-shi-shin-go-sho. 釋尊三德 (天) Chu-feng-pi-ch'an-shih-pu-tu. 歸元寺主師親御書 ② 一巻 ③ 存 ④ 清代行里等編 ⑤ 光緒三〇刊 ⑥ (劇大)

主師神感應記 ① (日) Shu-ya-jin-kan-shiki. ② 一巻 ③ 存 ④ 雙宿(一寛延三A.D. 1760)記 ⑤ 寫本(谷大、宗大、一

三六六)

守供養事 ① (日) Shu-ka-jo-no-ko-sa. ② 六帖 ③ 存 ④ 徳川時代寫 ⑤ 寶龜院

守護經 ① (日) Shu-go-kyo. (支) Shou-hu-ching. 守護國界主陀羅尼經、守護國界經、守護國界守經 ② 十巻 ③ 存、大正一九・五二五No. 997 ④ 縮四七、正一五・一〇、明北973、清1410、天1442、法1078、至797、明南1045、三十帖策子第八、大藏經要義第二、Nj. 978 ⑤ 唐般若(建中二一和元五後A.D. 781-810) ⑥ 本尼室利(貞元九一和元A.D. 793-806) ⑦ 共譯 ⑧ 南北朝時代寫 ⑨ (寶善提院)

守護經釋 ① (日) Shu-go-kyo-shaku. 守護國界經釋、守護國界主陀羅尼經釋 ② 一巻 ③ 存、弘法大師全集第一二教相部 ④ 聖海(寶龜五承和二A.D. 774-835) ⑤ (參考) 請宗宗義錄第三

守護經釋愚草 ① (日) Shu-go-kyo-shaku-ko. 守護國界主陀羅尼經釋愚草 ② 一巻 ③ 存 ④ 韻藻(嘉祿二一萬元二A.D. 1226-1304) ⑤ (參考) 請宗宗義錄第三 ⑥ 寫本(正大、一六二・一〇六)

守護經鈔 ① (日) Shu-go-kyo-sho. ② 一帖 ③ 存 ④ 平安末期寫 ⑤ (高、大、寄、一・三三)

守護經法 ① (日) Shu-go-kyo-ho. ② 一巻 ③ 存、大日本佛教全書第四六卷釋鈔之内 ④ 覺禪(康治二建曆二後A.D. 1143-1212)撰 ⑤ 延慶三寫(寶龜院)足利時代寫(寶善提院)

守護國家論 ① (日) Shu-go-koku-ron. 國家論、守護論 ② 一巻 ③ 存、高祖遺文第五巻、日蓮聖人御遺文(二二〇一二七)日蓮聖人全集第七、淨土宗全書第八之内 ④ 日蓮(貞應元一弘安五A.D. 1222-1282)記 ⑤ 正元元(A.D. 1259)異説あり

⑥ 題號の意は法華の正法を以て國家を守護するの義である。大科七段あり、一に如來の經教に於て權實二教を定むるを明し、二に正像末に就いて佛法の興廢あるを明し、三に選擇集の誘法の緣起を明し、四に誘法の者を對治すべき説文を出すを明し、五に善智識に眞實の法には値ひ難きを明し、六に法華涅槃に依る者の用心を明し、七に問に隨つて答ふるを明す。第一は序分、第二より第四に至るは正宗分、後は流通分とも見るべきものである。一章の大綱は、權實二教を別ち、特に法然の選擇集を以て正法法華を誘ふ邪法と定め、邪法、誘法の者を對治せざれば、國家に三災七難起りて國家安穩ならざるを論じ、兼て華嚴、三論、法相をも斥つてゐる。故に或は、この書を以て文應元年北條時頼(建白せる立正安國論の草案とするものもある。

⑦ 佛内啓蒙第二一、同扶老第七、同拾遺第七、御書註第一一、御書鈔第一〇 ⑧ 日蓮聖人眞蹟身延山寶藏にありしも明治二二年焼失

守護國家論 ① (日) Shu-go-koku-ron. 調譯本守護國家論 ② 一巻 ③ 存 ④ 日蓮(貞應元一弘安五A.D. 1222-1282)述、善教次郎譯 ⑤ 明治三二刊 ⑥ (帝國、

八三・三三)

守護國家論見聞 ① (日) Shu-go-koku-ron-kenmon. ② 一巻 ③ 存 ④ 日辰撰 ⑤ 寫本(立大、D・〇・二四六)

守護國界經 ① (日) Shu-go-koku-kai-kyo. (支) Shou-hu-kuo-chieh-ching. 守護國界主陀羅尼經、守護國界經、守護國界守經 ② 十巻 ③ 存、大正一九・五二五No. 997 ④ 縮四七、正一五・一〇、明北973、清1410、天1442、法1078、至797、明南1045、三十帖策子第八、大藏經要義第二、Nj. 978 ⑤ 唐般若(建中二一和元五後A.D. 781-810) ⑥ 本尼室利(貞元九一和元A.D. 793-806) ⑦ 共譯 ⑧ 寫本文刊 ⑨ (高、大、寄、一・三三)

守護國界經釋 ① (日) Shu-go-koku-kai-kyo-shaku. 守護國界經釋、守護國界主陀羅尼經釋 ② 一巻 ③ 存、弘法大師全集第一二教相部 ④ 聖海(寶龜五承和二A.D. 774-835) ⑤ (參考) 請宗宗義錄第三

⑥ 守護國界主陀羅尼經の註釋書である。初に大意を述べ、次に所被の機、能詮の教體、所詮の宗趣、經の題目、處會、隨文解釋の六門に分つて釋してゐる。但し隨文解釋は僅に經卷一の末尾まで、卷二以下の九卷に及んでゐない。

作者につき眞偽兩説がある。覺禪の御作目録、心覺の大師御作目録、正覺房の大師照金剛御作目録等に弘法大師聖海の作として名を列ね、韻藻は墨草三巻を撰して本書の要義を釋し、何れも大師の眞蹟と見てゐるが、大疏指南鈔一、續決十等には偽作

名所行録◎ (名庫書) 書影所現◎ 月年の刊載◎ (書考) 書影所現◎ 書主◎ 説解者内◎ 代年作著◎ 書者◎ 保存◎ 數巻◎ (名書) 名題◎ 號數字

【シ】

説を採用し、智山の運做能化は開卷編を作
 して本書並に雜問答の取捨を指摘し、大師
 の眞蹟に非ざることを力説してゐる。弘法
 大師全集に眞偽未決部に採録せるも此等先
 徳の眞説あるがためである。

⑦ (注釋) 墨草三巻(韻藻) (參考) 高山
 寺法鼓臺部教目録 大師御作目録(政院)
 ⑧ 貞享五(義開開版)刊 ⑨ (京專)(高、大、寄、
 一・三三)

守護國界經胎心抄 ① (日) Shu-go-koku-kai-kyo-tai-shin-sho. ② 一帖 ③ 存
 ④ 弘安九寫 ⑤ (寶善提院)

守護國界經念誦次第 ① (日) Shu-go-koku-kai-kyo-nen-jou-shi-tai. 守護經
 念誦次第、守護國界經法 ② 一巻 ③ 存、
 弘法大師全集第一三事相部 ④ 聖海(寶龜
 五承和二A.D. 774-835)撰

⑤ 一承和二A.D. 774-835)撰

⑥ 守護經法の修法次第である。次第は大體
 別行立に準じてゐる。作者につき、弘法大
 師聖海説と石山内供津祐説とあり弘法大師
 全集等も眞偽未決部に収めてゐる。

⑦ 足利時代寫(寶龜院)古寫本(石山寺)寫本
 (高、大、寄、一・六六)

守護國界經法 ① (日) Shu-go-koku-kai-kyo-ho. ② 一巻 ③ 存 ④ 寫本(谷大、
 餘洋、八二)

守護國界主經 ① (日) Shu-go-koku-kai-shu-kyo. (支) Shou-hu-kuo-chieh-chu-shing. 守護國界主陀羅尼經、守護國界經、
 守護經 ② 十巻 ③ 存、大正一九・五二五
 No. 997 ④ 縮四七、正一五・一〇、明北973
 ⑤ 清1410、天1442、法1078

津、至797之、明南1045此、三十帖策子第
 八、大藏經要義第二、Nj. 978 ⑤ 唐般若
 (建中二一和元五後A.D. 781-810) ⑥ 本尼
 室利(貞元九一和元A.D. 793-806) ⑦ 共
 譯

守護國界主陀羅尼經 ① (日) Shu-go-koku-kai-shu-da-ra-ni-kyo. (支) Shou-hu-kuo-chieh-chu-to-ra-ni-ching. 守護
 國界主經、守護經、守護國界經 ② 十巻 ③ 存、
 大正一九・五二五No. 997 ④ 縮四七、正
 一五・一〇、明北973、清1410、天1442、
 法1078、至797之、明南1045止、
 三十帖策子第八、Nj. 978 ⑤ 唐般若(建中
 二一和元五後A.D. 781-810) ⑥ 本尼室利(貞
 元九一和元A.D. 793-806) ⑦ 共譯

⑧ 本經は一般に雜部密教に屬するものと見
 られて居るがその思想内容から考ふるに、
 寧ろ、兩部大經の先驅を爲して居るもの
 とも見做し得ると思はれる點がある程であ
 る。

〔第一巻〕 序品第一、陀羅尼品第二の一。
 〔第二巻〕 陀羅尼品第二の二。
 〔第三巻〕 陀羅尼品第二の三、大悲胎藏
 出生品第三。
 〔第四巻〕 入如來大悲不思議品第四。
 〔第五巻〕 入如來不思議甚深事業品第
 五の1。
 〔第六巻〕 入如來不思議甚深事業品第
 五の2。
 〔第七巻〕 入如來不思議甚深事業品第
 五の3、菩薩瓔珞莊嚴品第六の一。
 〔第八巻〕 菩薩瓔珞莊嚴品第六の二、大

光普照莊嚴品第七、般若根本事業莊嚴品第
 八。

〔第九巻〕 陀羅尼功德執儀品第九。
 〔第十巻〕 阿闍世王受記品第十、如來彌
 累品第十一。

序品第一には、伽耶(Gaya)城を去る遠
 くなき菩提樹下に大比丘衆七千人、普賢、
 文殊、觀音、彌勒等の諸菩薩、四天王、釋提
 桓因等の諸天の中で、世尊が金剛座に坐し
 て居られた時に、文殊菩薩が、妙伽他で先
 づ世尊の徳を讚したことが記してある。陀羅
 尼品第二の一に示してあるものは、(1)世
 尊が普賢願業生心行三昧に入りて、種々の
 身相を現せらる、而も無信の者は、それ等の
 神變の相を見ない。(2)世尊は頂上肉髻の
 中から大光明を放つて、上は阿迦尼吒(Akani-
 nishtha)天から、下は阿鼻(Avyā)地獄に
 至るまでの諸世界を照し玉ふ。(3)世尊が
 その後に或る無名の三昧に入られた時に、
 會中から一切法自在王菩薩が、起立して大
 光明を放つに至る因縁を質問した。この時
 に世尊は四つの理由を擧げて居られる。そ
 の中の第四の理由に摩伽陀國主阿闍世(Aś-
 vattha)王は、此の三昧を示すが爲めで
 あると言つてゐる。今の無名の三昧は第九
 巻の陀羅尼功德執儀品第九に説かれてある
 平等三昧であることは勿論である。且つ阿
 闍世王の事は同王の受記品第十と思ひ合せ
 て見る時に、その意味が明かとなる。(4)
 次に一切法自在王菩薩が一切智を得る方法
 に就ての問を發した時に、世尊は菩提心を
 因と爲し、大悲を根本となし、方便を究

竟と爲す意を述べられた。此の因、根、究竟
 の三は、大日經住心品の三句と全同であ
 る。(5)又心と菩提と虚空との三が一體で
 ある旨を明してある所も、住心品と同じで
 ある。(6)又心は内にあらず、外にあらず
 中間にもあらずと云つてあるがこれも住
 心品の説と同じである。陀羅尼品第二の二
 に於いて、(1)迦樓羅(Garuda)觀が明し
 である。自身が迦樓羅となり、次で五大觀
 を作し、その次に行者が毘盧遮那如來の三
 昧に入ることが明されてある。(2)唵・吽・
 惹・護・娑の陀羅尼を觀察し、月輪の中に唵
 字ありとし、字は變じて思慮遮那となると
 觀ず、乃至北方の月輪の中に安字あり、字は
 變じて不空成就如來となると觀ず。(3)五
 種の三昧、(4)八陀羅尼門の中の第三の無
 邊流洩陀羅尼門までがこの品に於て説かれ
 である。陀羅尼品第二の三に於て、第四の
 海印陀羅尼門から、第八の諸佛護持莊嚴陀
 羅尼門まで明し、大悲胎藏出生品第三に於
 て、大悲爲根の説明があるから、陀羅尼品
 全部は主として、菩提爲因の一句の網説と
 見做す可きである。この品に於て、菩薩は
 大悲心に住して、三十二種不共の事業を建
 立す可きことが説かれてある。菩薩には無
 量の事業がある。衆生は無邊であり、生衆
 の煩惱も亦無量であるから、無邊の解脱門
 があると云つてゐる。入如來大悲不思議品
 第四に於て、菩提の血相不可得なること、
 並に空・無相・無願の三解脱門を明し、又過
 去久遠の昔に、菩提會多如來が、大悲行を
 修したことを記してある。入如來不思議甚

名所行録◎ (名庫書) 書影所現◎ 月年の刊載◎ (書考) 書影所現◎ 書主◎ 説解者内◎ 代年作著◎ 書者◎ 保存◎ 數巻◎ (名書) 名題◎ 號數字

〔シ〕

炬神擊、諸鬼神等も、佛の神呪を聞き、皆悉く降伏すること猶ほ大風の火焔を吹散して、遺餘なからしむるが如くであるとして、四天王の神呪よりも、守護大千大明王神呪の威徳の廣大なることが、上巻に於て明してある。中巻に於ては、(1) 義又衆 (Yakṣas) (2) 羅刹女 (Rakṣasas) (3) 炬神擊 (Kumbhāvṛṇa) 以上三類に属する種々の形相を挙げ、其等が日夜に人間世界を遊行して、人類を悩害して居るが、守護大千大陀羅尼の加持に依つて、悉く降伏し得ることを明し、(4) 妙高山王等の諸山の名を挙げ、此等の諸山には諸天來つて遊戯し、五通仙の依止し、苦行を行つる所であると爲し、(5) 阿修羅 (Asuras) 王等、無熱惱池龍王等、迦樓羅 (Garuda) 王、十六大藥叉將、藥叉女、大羅刹女等は各々に異形を現し、戰具を持して、十方に馳走し、人畜の生命を害し、彼等の至る處は、地皆搖動し、園林枯死し、草木乾枯し、一切の山岳悉く皆摧毀するも、此の守護大千の神呪の威徳力に依つて、諸鬼神は自ら縛せられ、畏害は止息するに至る。(6) 毘沙門天王の阿摩迦 (Aśvattha) 城の模倣を明し、且つ其の眷屬である六萬四千の藥叉衆が、惡行を爲して毘沙門天王に謁請せらるること。(7) 持國天王は、その眷屬である六萬四千の彦達、羅刹衆が、東方にあつて、世間の一切衆生を悩亂して居るが、我今此等を請罰せんと言つて、天王自らの神呪を説く。(8) 增長天王は南方六萬四千の炬神擊衆や、尾那夜迦 (Vīṣṇavāka) 等が常に世間

に於て、毒害の心を起し、衆生を悩亂して居ると爲して、之を禁止せんが爲めに、同天王自らの神呪を説く。(9) 廣目天王は、その眷屬である六萬四千の大龍王衆が西方に於て大雲を興し、大勇猛を現じて、大龍間を爲し、世間に於て衆生を悩亂すと爲して、之を禁止する爲に、自己の神呪を説き。(10) 大梵天王等も同様の意味で神呪を説いたことが明してある。(11) 最後に佛陀は四天王並に大梵天王等を隨つて、毘耶離大城に至り、守護大千陀羅尼を講じて有ゆる危難を救ふたことが記されてある。卷下に於ては、守護大千陀羅尼を誦するに當り、先づ曼荼羅を建立し、结界を行つて、月の一日から十五日に至るまでに、此の法を修す可きこと、並に護摩法までも明してあるから、明に密教的の修法となつて居る。殊に注意すべきは、大日如來、阿闍梨、寶生、無量壽佛など列記し、又修法に當ては五辛を食することを深く禁じてある。

本經は佛母大孔雀明王經、尸多林經、大毘沙門陀羅尼經、大威神呪經などと同類にして、眞言密教の側からは、謂ゆる雜部密教に属するものと見做されて居る。然るに孔雀明王經や、隨求陀羅尼經などよりも、遙に純密教の色彩が濃厚に成つて居ることは、見出し難い事實である。この經には梵本も、藏譯も現存してある。(神林隆淨)

守護妙法論 (日) Shū-ryō-hōron, 1901. 1卷。①日現述 ②安政六刊 (谷大、餘大・三二五七)

守根經 (日) Shū-ken-kyō, 現代意

譯守根經 ①存、現代意譯佛敎聖典叢書第 四冊一阿含經抄 ②赤沼智壽譯

守正護國章 (日) Shū-shō-go-kan = 守正護國章 1卷。①存、日蓮宗宗學全書第 五不受不施論門部並に萬代勸修錄第一一 附錄 ②日譯(寛永三一元祿一) A. D. 1635 - 1693) 述 ③寛文六 (A. D. 1666)

①文祿の頃、日典によつて提唱せられたる 不受不施論は、寛文五年の寺領朱印は敬田 供養なれば、手形書書を提出せざる諸寺の 寺領を沒收すべしとの幕命によつて日蓮門 下に大動搖を生じた。この書は野呂權林の 化主日講が、敢然手形提出を拒み、寺領朱印 は敬田供養の義を成さず、但これ一般政道 の仁恩なるを論じ、進んで佛道の第一義門 より幕命の非法を論述したるものである。

日講は、この書の提出により遂に同年日向 佐土原に流刑された。この書先づ舉げて 講法の施を受くべからざる理由を論じて、 次に理論の段文を出し、別して寺領につい て、これ龍施の人の心によつて三寶恭敬の 敬田ともなり、また一般の仁恩ともなる、 幕府信仰なきが故に敬田の義を成さずと雖 も、幕府強ひて敬田といはば、誘者の施な るが故に受くべからず、況んや悲田供養の 新形義を成して、これを受くるの徒の如きは、 宗義の正法に契はずと論じて悲田新受の 義を破し、進んで、飲水行路盡く國王の 布施なりと強ふるに到つては、出家には全 く國王の仁恩なきの義となりて甚だその當 を得ざるものなり。佛法によれば、國王は これ共衆の所感にして必しも國王の左右す

るところにあらず、出家は戒行を持ち善惡を教へ衆生を教化す。これ國恩に報ゆる所 以なり。何ぞ仁恩に浴するの義無らんや等 と論じて、幕命の非法、出家の制法を論じ、 不受不施の正義を守るものこれ國恩報謝の 所以なると主張せるものである。

④寛文六寫 (正大一八四・六五) (望月歌厚)

守仁定禪師語錄 (日) Shū-nin-ji-go-roku, (支) Shō-jō-tang-ch'an-shih-yū-tsu, 2卷。①存、清一、了真等編 ②寫本(京大、藏・一七、一七二)

守倫科註普門品圖通記 (日) Shū-rin-ka-chū-hon-mōn-hōn-tō-ki, 5卷。①存、眞賢(一正徳三) A. D. 1713) 記 ②刊本(龍大、二四一三三・三八)

朱切紙 (日) Shū-kiri-kami, 10通。①存、傳燈辨要卷上 ②問仰記

朱子行漢錄 (支) Shū-shih-ko-kan-roku, (支) Chu-shih-hsiang-han-lu, 1卷。①缺 ②魏朱士行(一廿五五 A. D. 200) 撰

①本錄は詳しくは魏時沙門朱士行漢錄と云ひ、又略して單に朱士行漢錄とも云ふ。隋の費長房の歴代三寶記に始めて引用せられたものであつて、從つて道安錄にも僧祐錄にも未だその引用は無かつた。道宣の大唐内典錄卷第十には「魏時沙門朱士行漢錄一巻、右依檢、元是瀘川沙門、於洛陽講道行經、因著其錄」と説明され、智昇、圓照又略と同一の説明をなして居る。即ち、彼が洛陽

〔シ〕

に於て道行經を講じつゝあつた際、既譯の聖典を知る爲に作つて置いた經錄であること云はれて居る。その撰述の年代は明らかでないが、彼が般若經の原本を採る爲に西域に赴いたのは曹魏の甘露五年 (A. D. 260) であつたから、その前数年の間に製作されたものと考へなければならぬ。本錄は前述の如く、三寶記以前の佛祐錄に引用されて居らない爲にその存在を否定せんとする學者も存するが、歴代三寶記は本錄其ものに關してはその卷第十五に「朱士行漢錄一巻(魏時)」と記載せる外、本文中に朱士行漢錄又は朱士行錄として隨處にこれを引用して居る。

その内容は今日現存して居らないものである爲に、勿論正確なことは云ひ得なから、歴代三寶記に引用されて居るものに基いてそれを推して「四十二章經一巻、十地斷結經四巻、五十校計經二巻、七處三觀經二巻、安般守意經二巻、陰持入經一巻、人本欲生經一巻、普法義經一巻、漏分布經一巻、八正道經一巻、五陰論經一巻、流攝經一巻、是法非法經一巻、本相傍致經一巻、内藏經一巻、右十三部凡十六卷安息國太子清字世高譯、首楞嚴經二巻、他真陀羅經二巻、阿闍佛國經二巻、寶積經一巻、梵般泥沮經一巻、右五分凡八卷月氏國沙門支婁迦讖譯、道行經一巻、右一部凡一卷天竺沙門佛朔譯、成具光明經一巻、右一部凡一卷西域沙門支婁譯、同地獄事經一巻、右一部凡一卷外國沙門廣互譯、古維摩經二巻、右一部凡二卷臨淮清信士嚴佛調譯、合

計二十四部三十四卷」の如きものであつたやうである。猶、法琳の破邪論に從へば、秦代に於ける釋利房等の傳經説の如きも、本錄中に記載されて居つたと云はれて居る。

①(參考) 三寶記第一五、内典錄第一〇、開元錄第一〇、貞元錄第一八、破邪論

朱子辨釋子記 (日) Shū-shi-ben-shaku-shi-ki, (支) Chu-shih-pien-shih-ki, 1卷。①存、楊齊筆錄第一 (帝國、一九五・一〇七)

朱子辨釋說 (日) Shū-shi-ben-shaku-shi-sekku, (支) Chu-shih-pien-shih-shih-shuo, 1卷。①存、楊齊筆錄第一 (帝國、一九五・一〇七)

朱業辨正 (日) Shū-geh-ben-shū, 1卷。①存、眞智述 ②寫本(龍大)

朱利樂特經 (日) Shū-ri-gaku-kyō = 朱利樂特經 1卷。①存、現代意譯根本佛敎第五卷一阿含抄 ②泉芳瑔譯

取意鈔 (日) Shū-i-shō, 1卷。①存、吳義集真宗大系本第一 ②存、覺(正應三) 應安六 A. D. 1290-1293) 作 ③取意抄出の一部(攝取不捨の釋)が抄したるもの。(參考) 淨土眞宗聖敎目錄

取意鈔出 (日) Shū-i-shō-shutsu, 1卷。①存、假名釋敎(惠空等寫八十八部)之内 ②惠空(正保元一享保六 A. D. 1441-1421) とあるより、誰人か、斯く題せるもの、如

く、取意鈔出の四字は、取意鈔に出づといふ意か、或は鈔は抄の誤で取意抄出といふ意か、しかし、取意鈔といふ書名怪しく、そういふ書があるかどうか明らかでない。又、本書は坊間流布の淨土文類集そのもので取意抄出でもなく、この四字解しがたし、或は別に淨土文類集なるものがあつて、それを取意抄出したといふ意か、疑はしう。因に、存登の淨土眞要鈔は淨土文類集(其項參照)を改作したものであるが、果して其の書であるかどうか發研究を要すべく、又、之れに三四の異本あり。(安井廣成)

取因假設論 (日) Shū-in-ke-seston-ton, (支) Chu-yin-cha-sha-tan, 1卷。①存、大正三・一八八五 No. 1623 縮本二、三二二・三、北7643 南667 元649 明北1221 清1221 開643 命、天643 命、指607 命、法633 命、至1361 甲、明南1390 華、乙、1298 陳那善造、唐廣淨(貞觀九) 先天12 A. D. 635-713) 譯 ②義淨が南海寄歸傳の中に陳那の八支を擧げ、其の中に取因假設論を數へて居るが恐らくこの取因假設論と同一であらう。取因假設は因を取つて假設するといふ意味、假設は施設と同じで、方便假立の意味、因とは總業と相續と分位差別とを指し、之れを事ともいうのであらう。世間一般の事柄は此の三を基として假説して居るに過ぎなから、その假説の上の一性と異性と非有とを執すべきでないことを總論の趣意とし、以下全體を十三頌と其の釋とによつて

論述したもの、其の間に攝大乘論の一頌と恐らく法句經の一頌とを引用して居る。假説の意味を根本的に考ふる時は識の假現といふに歸するものであるから、此の論の根本は著者の唯識説に存するのである。(宇井伯壽)

取灌頂關伽水作法 (日) Shū-kwan-kei-ka-shui-sa-hō, 7帖。①存、足利一徳川時代寫 (寶龜院)

取血氣神咒 (日) Shū-kei-ki-jin-shū, (支) Chu-ssieh-ch'i-shen-chou, 取血氣神呪經 1卷。①缺 ②後漢代失譯 (參考) 三寶記第四、内典錄第一、開元錄第一四、貞元錄第二、第二四

取水作法 (日) Shū-sui-sa-hō, 1卷。①存、大日本佛敎全書第三五阿婆鞞抄之内 ②永澄(元久二) 弘安五 A. D. 1205-1282) 撰

取草釋 (日) Shū-sō-shaku, 手草 2卷。①存、日本大藏經天台宗書敎章疏第三 ②安然(承和八) 延喜年間 A. D. 841-901) 述 (參考) 本朝台觀撰述密部書目、山家祖徳撰述密部書目

首山省念禪師語錄 (日) Shū-san-shō-nen-zen-ji-go-roku, (支) Shō-shan-hsiang-nien-zen-ji-an-shih-yū-tsu, 1卷。①存、宋首山省念(天成元) 淳化四 A. D. 925-993) 語 ②風穴延昭禪師の法嗣にして南岳下八世汝州首山の省念禪師三會の語錄を蒐めたものである。省念は唐天成元年萊州の狄氏に生れ、南禪寺に得度し、常に法華經を誦し、

【シ】

月冬至日高野の序、同七年八月朔且劉道開の編輯始末、同八年五月徐元文の序、同十年(A. D. 1672)八月雲南道御史熊焯の序を付して流通せしめたものである。内題に説通と題するのは、會解等の諸疏を通過して講述するの義に依つたものである。

首楞嚴經觀心定解

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-kwan-shin-jō-ge. (支) Shou-teng-yen-ching-kuan-shin-ting-chieh. 十卷。②存。③記。④一。⑤三。⑥四。⑦一。⑧清聖(一)康熙三〇(A. D. 1691)。

本書は、天台の全影響が、天台大師の止觀に準據し、總別に約し、觀心を論じ、交光眞鑑の正脉は佛部の説に滿ち佛意を發揮するものであると爲し、經營十年にして本書並に觀心定解大綱、觀心定解科各一巻、合十二巻を完成したものである。即ち百十餘家の註疏の中、特に眞鑑の正脉に於ける論議を天台止觀の立場より判別し、千秋不決の案を定めたこと云ふのである。論述の組織大綱は、大綱及び科に示されて居る。清康熙十九年春日丹波山今釋の序、同年五月長水社謙の序、並びに同二十年(A. D. 1681)九月自序を讀して流通せしめたものである。

首楞嚴經觀心定解科

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-kwan-shin-jō-ge-kwa. (支) Shou-teng-yen-ching-kuan-shin-ting-chieh-kwa. ①一巻。②存。③記。④一。⑤三。⑥四。⑦一。⑧清聖(一)康熙三〇(A. D. 1691)。

本書は觀心定解の科段を定めて圖示したものである。

著者は前に集解を撰んで本經を釋したが、所説簡に過ぎて意に充たざる所より、更に加筆増補せしもの本著なること自筆の序跋に依つて明白である。従つて集解所録を基本として註を加へし爲記述混雜明瞭か讀み易き點もあるが、所謂題宋天台山外派の融將として豊富の學識を傾けて居り、且釋中孤山の各釋鈔、眞際の刪補疏、長水の義疏、惟慈の支贊等自他諸宗の學者の説を引援して、是れを取捨して居り、其の間に既に亡逸不傳の説も引用され居る點より見て可なり必要の文獻であると思ふ。

首楞嚴經要節

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-geki-seisaku. (支) Shou-teng-yen-ching-ichi-chieh. ①一巻。②存。③記。④一。⑤三。⑥四。⑦一。⑧明代大願述。

本書は明の大願が、首楞嚴經に就て最要の妙處を擧げて其の淵義を顯揚したもので、首楞嚴經十巻の中の第一巻第二巻のみにて終つて居る。即ち第一巻に於ては「於時世尊頂放百寶無畏光明」より「阿難復得聞是首楞嚴大衆」に至る間の十五條を採録し、第二巻に於ては「阿難即從座起禮佛合掌長跪白佛」より「阿難汝猶未明一切浮塵諸幻化相當處出生隨處滅盡幻妄稱相」に至る間の十六條を擧げて、其の奥義を釋したものである。

(大久保堅瑞)

ものである。其の大綱は、本經を先づ序正宗流通の三分に別ち、序分を別二門として以下を詳細に圖示し、第二の正宗分を(一)正觀無明心以明修證。(二)約別能招報心以明修證の二門に別ち、(一)を正明修證、結顯經名の二項目として以下を詳細に(二)を示現行能招報、詳發得能招報の二項目として以下を詳細に、第三流通分を結勸流通、結益流通の二つに別けて以下を詳細にして其の大綱を窺はしめて居る。

首楞嚴經觀心定解大綱

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-kwan-shin-jō-ge-tai-ka. (支) Shou-teng-yen-ching-kuan-shin-ting-chieh-tai-ka. ①一巻。②存。③記。④一。⑤三。⑥四。⑦一。⑧清聖(一)康熙三〇(A. D. 1691)。

本書は、觀心定解の大綱を説いたもので、大綱を略して四章と爲し、一に總別を判じ、二に境觀を定め、三に題目を釋し、四に凡例十條を掲げたものである。即ち第一は「聖指前七卷正觀無明心以明修證後三卷約別能招報心以明修證爲總則耳」と説明し、第二は「此經約依現前一念識陰心王爲所觀境。以即空假中爲觀觀」と云ひ、第三は「釋題目爲二。初釋經題。二釋譯人」とし、第四は凡例十條にして本書大綱の要點、科註の説明等を記したものである。

首楞嚴經要聞記

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-kwan-shin-jō-ge-wan-ki. (支) Shou-teng-yen-ching-geki-seisaku-wan-ki. ①一巻。②存。③記。④一。⑤三。⑥四。⑦一。⑧清聖(一)康熙三〇(A. D. 1691)。

北臺慈山の德清律師が、龍門に於て諸三昧中の王三昧たる首楞嚴三昧定を説く本經に依つて印證し、後、東海半山に枯坐三星霜、一夕本經を閲して忽然大悟し、懸鏡一巻を著したものである。德清律師は紫柏大師達觀眞可禪師と共に明末に化を揚げ、時人に敬信せられ、神宗帝、太后の歸依を受け、天啓三年(A. D. 1623)十月壽七十八歳にて中興せし曹溪に寂した。密淨教誨を兼ね修め、念佛公案を力説した宗匠である。即ち明萬曆十四年冬、四十一歳の時、東海邪羅延窟(半山)即ち山東省青州登萊の觀音庵の古跡に於て自序し、同十九年元旦(A. D. 1591)獅子林居士虞淳熙、本書に序して行はしめたものである。續藏本に依つて其の大綱を見るに、一經の大綱は大開修證之門、曲示歸家之路を出でずと爲し、鏡によりて形を照すが如く、學人をして一心三觀の旨を以て、事に即して安心し、頓に如來藏性を融會せしめんとしたものである。即ち序正宗流通の三分の大綱は通義に揭ぐるを

首楞嚴經顯義鈔記

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-ken-an-shi-ki. (支) Shou-teng-yen-ching-hsuan-ying-shi-ki. ①一巻。②存。③記。④一。⑤三。⑥四。⑦一。⑧清聖(一)康熙三〇(A. D. 1691)。

以て、此處に略し、正宗分に二門を分つ中、第一大開修證之門に四章あり、三觀の體相用名これなりとして明し、第二曲示迷悟差別を明して居る。其の所説は、明末に於ける屈指の宗匠に房はしく、本經に於ける造詣の深きを見る事が出来る。

首楞嚴經懸鏡

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-ken-kyō. (支) Shou-teng-yen-ching-hsuan-king. ①一巻。②存。③記。④一。⑤三。⑥四。⑦一。⑧清聖(一)康熙三〇(A. D. 1691)。

本書は、明の觀衡が、首楞嚴經の詳名たる「大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經」の字義を詳釋し、首楞嚴經十巻の爲に幻術を以て辨弄せられ將に戒體を破毀せんとせし時、佛威神力に依つて佛所に歸來し、佛を頂禮悲泣して、三昧定の教を啓請せし、根ヲ無始來、一向多聞、未嘗全道力、殷勤啓請、十方如來、得成菩提、妙奢摩他、三摩禪那、最初方便とある九句三十六字に盡くと力説したものである。

首楞嚴經玄義

①(日) Shu-ryō-gon-gyō-ken-gi. (支) Shou-teng-yen-ching-hsuan-i. ①二巻。②存。③記。④一。⑤三。⑥四。⑦一。⑧清聖(一)康熙三〇(A. D. 1691)。

首楞嚴經の四支なる意義といふこと。同經の經文解釋に先ち、經の内容を名と體と宗を用と教相との五方面より概括的に

(大久保堅瑞)

【シ】

破し不空如來藏を顯はせるものとなす。第二大段楞嚴の行法また二節に分つ。即ち經の四卷の阿難及大衆疑悉銷除以下佛に對して行門を乞へ、佛之を示すに生滅心を以て修因となし佛業不生滅を求むべからずと説きて初心を同覺し、次で第五卷に阿難の我等未だ圓通の本根に達せずとの求めに應じ、二十五圓通を説きてその修證を顯示し、第六卷に登伽果を進め衆生發心する迄(三〇四一三一八)を正行となし、次で同卷末に阿難が滅後の弟子諸魔を遠ざけ道心を失はざる方法を問ふより以下を助行とし、更に之を二分して初分は魔業を離るゝ爲に淨戒を持つべきを教へ、(三一八一三三〇)第七卷の初めよりは宿習を除くが爲に神咒を誦せしむるものとなす。(三二〇一三二三)第三大段楞嚴の行法を明す一段を略明顯示釋疑の三節に分ち、經七卷佛告阿難より二轉依説までは、理は名相を絶するも事に眞妄を分つこと略述せるものとし、(三二一三二四)次に廣示の章を二分し、阿難汝今以下是衆生十二種類までは、眞に迷へ二顯例を起すに約し十二類生を成ずることを説き、(三二四一三五)經八卷初め阿難如是衆生以下汝等率持三十七位に入を斷じ三漸次を修するに約し五十七位に入ることを明すとなす。(三二五一一三二八)次の經文説是語已より九卷の即魔王説までは阿難の問に對する釋疑なりとなす。(三二八一一三三六)經九卷の即時如來已下を總て流通分となし、其の中初より十卷末の不慧三界までは、禪を修して現する所の魔事を辨じて

破し不空如來藏を顯はせるものとなす。第二大段楞嚴の行法また二節に分つ。即ち經の四卷の阿難及大衆疑悉銷除以下佛に對して行門を乞へ、佛之を示すに生滅心を以て修因となし佛業不生滅を求むべからずと説きて初心を同覺し、次で第五卷に阿難の我等未だ圓通の本根に達せずとの求めに應じ、二十五圓通を説きてその修證を顯示し、第六卷に登伽果を進め衆生發心する迄(三〇四一三一八)を正行となし、次で同卷末に阿難が滅後の弟子諸魔を遠ざけ道心を失はざる方法を問ふより以下を助行とし、更に之を二分して初分は魔業を離るゝ爲に淨戒を持つべきを教へ、(三一八一三三〇)第七卷の初めよりは宿習を除くが爲に神咒を誦せしむるものとなす。(三二〇一三二三)第三大段楞嚴の行法を明す一段を略明顯示釋疑の三節に分ち、經七卷佛告阿難より二轉依説までは、理は名相を絶するも事に眞妄を分つこと略述せるものとし、(三二一三二四)次に廣示の章を二分し、阿難汝今以下是衆生十二種類までは、眞に迷へ二顯例を起すに約し十二類生を成ずることを説き、(三二四一三五)經八卷初め阿難如是衆生以下汝等率持三十七位に入を斷じ三漸次を修するに約し五十七位に入ることを明すとなす。(三二五一一三二八)次の經文説是語已より九卷の即魔王説までは阿難の問に對する釋疑なりとなす。(三二八一一三三六)經九卷の即時如來已下を總て流通分となし、其の中初より十卷末の不慧三界までは、禪を修して現する所の魔事を辨じて

【シ】

佛頂性は一切衆生本具にして體用平等なる故に、現前の三障に即して三徳を點示すべしと説き、以上心佛衆生三法無差別の性が大佛頂性に於て、此の理性迷悟に増減せず一性一切性なりと結ぶ。次に如來密因修證了義の八字を釋するに又分釋と合釋とを分つ。其中分釋に於ては、修徳の究竟得性の極果を如來、性具三諦の理に達して自ら妙修を行ずるは密因、圓修圓證は修證、圓證の教行理は了義なりとなし。合釋に於ては更に顯説と密因との兩釋を下し、妙覺の果徳にして吾人の性具たる大佛頂の理を以て妙密因となし、一切の修證了義に非るなきことを示すは顯説釋、大佛頂咒を密因となすが故に一切の修證了義に非るなしと見るを密因釋となす。次に諸菩薩萬行首楞嚴の八字を釋するに又分釋合釋あり。分釋中菩薩とは十方三世權實の諸菩薩、萬行とは一切の正助二行、首楞嚴は體相分別正定と譯し、此の三昧を得れば諸三昧の行相淺深を知て能く此れを攝伏するものなきを意味すと説き、十種の畢竟堅固を評説す。次で合釋には此の八字は圓の一切の菩薩大佛頂の理に依て一心に萬行を具し事々畢竟堅固を得るを意味すと説く。以上分句釋を終り、次で經題の大途を辨ずるに、先づ體(上の三字)用(中の八字)用(後の八字)の三に約し、次に性修人法因果に約し、要する所の性徳に達する因行修證を表示せしもの十九字の別題なりとし、最後に經の一字に就て字訓釋をなし、更に六塵經體を明し、一々法中能く大佛頂理を見れば總て此の經

ならざるなしと説きて釋名の章を終る。第二顯體の章は、一、體を顯すべきを示し、二、體の義を釋し、三、正しく體を出し、四、證を引き、五、異名を會し、六、偽濫を簡び、七、入體の門を明し、八、徧く衆經の體となし、九、徧く諸行の體となし、十、徧く一切法の體となすの十門に依て、此の經は如來藏性妙眞如性を體となすことを説く。第三明宗の章は、一、宗體を簡び、二、正しく宗を明し、三、諸教同異、四、因果を結成すの四門を開き、不生不滅の因果を宗要となし、任運に楞嚴妙定を攝得するを説く。第四論用の章は、一、宗用を簡び、二、菩薩兩說俱に衆生をして請受を離れ、請説を得しむるを經の力用となすと説き、第五數相の章は、初に天台の通別の五時並に化儀化法の八教を略述し、次に此の經は別の五時中方等の時に屬し、鈍にして仍漸なる機に對して妄を破し眞を顯せる頓教なりとなし、尙亦放光說咒の邊よりは秘密部に收まるべきもの、古來中印度那爛陀大道場經と題し、灌頂部に錄出別行せるは此の謂なりと結んだ。

續宋天台には智圓仁岳等多くの學者顯ふて此の經を研究し、其の支疏を遺したから智旭は恐らく此を參照したものと思ふが此等古説に追従せず自家の識見に終始せし所にその偉大さが感ばれる。多少冗漫の斥はあるが台學系の楞嚴觀を見るに相當重要なものと思ふ。(中里貞隆)

首楞嚴經玄義 ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gen-gi. (支)Shou-leng-yea-ching-han-ri. ②四卷 ③存、記讀一・110・1

①明傳燈(萬曆頃 A. D. 1573-1619)述 ②天台の妙華法師百松眞和尚の法嗣である無盡傳燈が、首楞嚴經の支義を述べた註釋である。即ち本經を釋した大綱は、支義五重あり。一、釋名。二、辨體。三、明宗。四、論用。五、教相の五重の支義を明すと爲し、此の五重を大分して總釋別釋とし、總釋を分つて生起と簡別と等と詳述して居る。明萬曆二十五年(A. D. 1597)三月西溪の九沙樓室に於て、首楞嚴經義疏の著者である法眷の戒山傳如が楞嚴玄義を撰して流通せしめたもので、本書卷四には、彼等の本師たる妙華法師百松眞和尚の撰述せし楞嚴百問を収めて居る。(大久保保瑠)

文、隨科贊釋。與六卷本大同云云。

⑦(參考) 新編諸宗教藏總錄第一

首楞嚴經玄贊 ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gen-san-ka. (支)Shou-leng-yea-ching-han-tsan-ka. ②三卷 ③非濁述 ④(參考) 新編諸宗教藏總錄第一

首楞嚴經綱要 ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gen-yō. ②存、日本宗教大講座之内

③山上曹源著 ④東京東方書院

首楞嚴經講義 ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-ko-gi. (支)Shou-leng-yea-ching-kiang-ki. ②十卷 ③存、記讀一・八九・五〇・一 ④明乘普(一天啓二 A. D. 1622)述 ⑤寫本(京大藏一四・117)

首楞嚴經講義 ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-ko-gi. ②存、通俗佛教科全書第一、三 ③原坦山(文政二一明治二五 A. D. 1819-1892)著

首楞嚴經講錄 ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-ko-foku. (支)Shou-leng-yea-ching-kiang-ki. ②首楞嚴經講義 ③十卷 ④存、記讀一・八九・五〇・一 ⑤明乘普(一天啓二 A. D. 1622)述

⑥湖北當陽縣龍門寺路公の法嗣紫雲山業時が、明熹宗帝天啓元年(大石山房)に開坐し、孫芝房、張鴻所、程空如、沈奕陽等の爲に講經したが、新安の原一居士汪益源は、首楞嚴經は諸經を買申し、此の講録は諸家の疏釋を買申すものとして、先に壽梓せし楞伽講録と同様、上梓すやと言ひ、自ら校訂し、天啓二年十二月佛成道日(A. D.

名所行目◎(名庫書)書藏所現◎ 月年の刊行◎ (書考)書藏所現◎ 書考◎ 代年作者◎ 著書◎ 録存◎ 教書◎ (名書)名題◎ 號略字號

【シ】

1692)業時の自序、並に同年冬汪益源の序を附して梓行したものである。業時は、自序に述ぶるが如く、續磨寒暑、殷煉昕夕、瀝血厥心して精進し、楞伽楞嚴に於て得る處深く、遂に講録を著したものである。(大久保保瑠)

首楞嚴經合論 ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gat-kei. (支)Shou-leng-yea-ching-ho-kei. ②十卷 ③存、記讀一・111・三

④江南太湖西山に在つて天如惟則の楞嚴會解に私淑して楞嚴經を參究して居た通潤が、江南常州府無錫縣華藏寺雪浪法師の楞嚴講經の法筵に侍してより頗る得る所あり、諸家の註疏を撰要し、自得の所見を合せ註して遺志に傳へて居たが、交光眞鑑の楞嚴正脈を見るに及び、自己の所見と合せざるもの十の三四にして大半は私記するを知り、諸檀越と相謀り、平生の私記にして諸佛の性相と一轍に合するものを集め十巻一帙を成し、明天啓元年(A. D. 1622)自序を撰し、同年十月浮渡居士吳用先の撰に成る序文、楞伽楞嚴合論小引を附して欽調流通せしめたものである。通潤は江南蘇州の人、字は一雨、二楞庵と號した。即ち楞伽楞嚴二經の研究に努め二經の合論を著した人である。

⑤寛文六刊 ⑥(各)大・五七一(龍大)二四一七・三(京大)藏・一四三・一四(首)・八・右・一七 (大久保保瑠)

首楞嚴經合論 ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gat-kei. (支)Shou-leng-yea-ching-ho-kei. ②十卷 ③存、記讀一・111・三

④江南太湖西山に在つて天如惟則の楞嚴會解に私淑して楞嚴經を參究して居た通潤が、江南常州府無錫縣華藏寺雪浪法師の楞嚴講經の法筵に侍してより頗る得る所あり、諸家の註疏を撰要し、自得の所見を合せ註して遺志に傳へて居たが、交光眞鑑の楞嚴正脈を見るに及び、自己の所見と合せざるもの十の三四にして大半は私記するを知り、諸檀越と相謀り、平生の私記にして諸佛の性相と一轍に合するものを集め十巻一帙を成し、明天啓元年(A. D. 1622)自序を撰し、同年十月浮渡居士吳用先の撰に成る序文、楞伽楞嚴合論小引を附して欽調流通せしめたものである。通潤は江南蘇州の人、字は一雨、二楞庵と號した。即ち楞伽楞嚴二經の研究に努め二經の合論を著した人である。

⑤寛文六刊 ⑥(各)大・五七一(龍大)二四一七・三(京大)藏・一四三・一四(首)・八・右・一七 (大久保保瑠)

首楞嚴經合論 ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gat-kei. (支)Shou-leng-yea-ching-ho-kei. ②十卷 ③存、記讀一・111・三

④江南太湖西山に在つて天如惟則の楞嚴會解に私淑して楞嚴經を參究して居た通潤が、江南常州府無錫縣華藏寺雪浪法師の楞嚴講經の法筵に侍してより頗る得る所あり、諸家の註疏を撰要し、自得の所見を合せ註して遺志に傳へて居たが、交光眞鑑の楞嚴正脈を見るに及び、自己の所見と合せざるもの十の三四にして大半は私記するを知り、諸檀越と相謀り、平生の私記にして諸佛の性相と一轍に合するものを集め十巻一帙を成し、明天啓元年(A. D. 1622)自序を撰し、同年十月浮渡居士吳用先の撰に成る序文、楞伽楞嚴合論小引を附して欽調流通せしめたものである。通潤は江南蘇州の人、字は一雨、二楞庵と號した。即ち楞伽楞嚴二經の研究に努め二經の合論を著した人である。

⑤寛文六刊 ⑥(各)大・五七一(龍大)二四一七・三(京大)藏・一四三・一四(首)・八・右・一七 (大久保保瑠)

首楞嚴經合論 ①(日)Shu-ryō-gon-kyō-gat-kei. (支)Shou-leng-yea-ching-ho-kei. ②十卷 ③存、記讀一・111・三

④江南太湖西山に在つて天如惟則の楞嚴會解に私淑して楞嚴經を參究して居た通潤が、江南常州府無錫縣華藏寺雪浪法師の楞嚴講經の法筵に侍してより頗る得る所あり、諸家の註疏を撰要し、自得の所見を合せ註して遺志に傳へて居たが、交光眞鑑の楞嚴正脈を見るに及び、自己の所見と合せざるもの十の三四にして大半は私記するを知り、諸檀越と相謀り、平生の私記にして諸佛の性相と一轍に合するものを集め十巻一帙を成し、明天啓元年(A. D. 1622)自序を撰し、同年十月浮渡居士吳用先の撰に成る序文、楞伽楞嚴合論小引を附して欽調流通せしめたものである。通潤は江南蘇州の人、字は一雨、二楞庵と號した。即ち楞伽楞嚴二經の研究に努め二經の合論を著した人である。

⑤寛文六刊 ⑥(各)大・五七一(龍大)二四一七・三(京大)藏・一四三・一四(首)・八・右・一七 (大久保保瑠)

名所行目◎(名庫書)書藏所現◎ 月年の刊行◎ (書考)書藏所現◎ 書考◎ 代年作者◎ 著書◎ 録存◎ 教書◎ (名書)名題◎ 號略字號

二年より乾隆十一年に至つて註釋せし法華指掌を刊行せんとして果さず、同十六年和碩親王の命によつて香界寺に住し、同十七年始雲より來問せし空元等のために交光眞鑑の楞嚴正脉を講じたが宗意に合せざるものあるを以て、始めて新疏の撰述を志し、三歳にして草稿成り、同二十八年山鹿(三山鹿)に在りて門人興宗、懷仁の爲に講經重訂し、興宗、圓旺、際清、懷仁、圓鏡等の校字と諸衆の助縁とにより、清乾隆四十一年(A. D. 1776)刻工竣成し、同年僧自委日に自序し、凡例を附して流通せしめたもので、前後二十餘年を費したものである。編次の次第は彌陀疏鈔の科式に遵じたもので、指掌と題したのは案を捨てて要に従ひ、掌を指す如く其の圓支の深義を了知せしめんとしたものである。

後、清光緒二十八年(A. D. 1902)四月八日通明寺了凡眞超、備釋の善男信女の助縁を得捐資録梓の跋を撰して流通せしめた。

首楞嚴經指掌疏題示

①(日) Shu-ryō-gon-kyō-shi-shō-shō-ken-jī. (支) Shou-leng-yan-ching-chih-chen-ken-jī-an-shih. ②存. 記載一・四・二①
③清通理(一乾隆四一 A. D. 1776)撰
④本書は、自著の指掌疏下より一義門を題示したもので、本經を第一開示者摩訶成修、第二開示三摩成修、第三開示那由成修、第四開示楞嚴成修の四分と爲し、信解修證の此の四分を釋し、次に本經を釋するに就き、一教起因緣、三藏業分攝、三能

被教義、四所被機宜、五體性淺深、六宗趣通別、七說時前後、八傳譯註釋、九總釋名題、十別解文義の十門を啓いて通釋すべしと爲し、第八門の傳譯註釋までを説明して居る。注釋家は唐宋元明清に渉る總括六十八家を掲げ、小見意聞なるを以て單に其の開見に係るものを示すと述べて居る。教者釋經の題がよく現れて居る。(大久保堅瑞)

首楞嚴經指掌疏事義

①(日) Shu-ryō-gon-kyō-shi-shō-shō-jī. (支) Shou-leng-yan-ching-chih-chang-shih-jī. ②存. 記載一・四・五
③清代空元述
④本書は、達天通理に參じた空元が明萬曆十六年和碩親王の命により香界寺住持となつた通理に、翌十七年始雲より來問參同し、同二十三年正月通理の命によつて編成し、通理の撰述せし指掌疏を翻補し、其の事義を釋するため詳辭を搜り、再び章編を易く、教義を費して本書を成したもので、指掌疏に見ゆる主要なる語句の事義を釋したものである。(大久保堅瑞)

首楞嚴經指掌疏事義

①(日) Shu-ryō-gon-kyō-shi-shō-shō-ken-jī. (支) Shou-leng-yan-ching-chih-ken-jī-an-shih. ②存. 記載一・四・二①
③清通理(一乾隆四一 A. D. 1776)撰
④本書は、自著の指掌疏下より一義門を題示したもので、本經を第一開示者摩訶成修、第二開示三摩成修、第三開示那由成修、第四開示楞嚴成修の四分と爲し、信解修證の此の四分を釋し、次に本經を釋するに就き、一教起因緣、三藏業分攝、三能

大綱を了會せしむる爲に總論を撰した、續藏所收本には、兩星の制法門人澄陽今釋が本書を閱し、樂說今辯が校訂し、今釋は序、今辯は別首楞嚴直指撮起を撰し、奥西の命たる大中丞傳弘烈(字仲暉、號竹君)が捐資流通する旨を述べて居る。卷首に首楞嚴直指總論、各卷末に音釋を附して居る。本書の疏釋に就ては、別項の直指科文に於て其の大綱を科圖されて居る。(大久保堅瑞)

首楞嚴經直指科文

①(日) Shu-ryō-gon-kyō-shi-shō-shō-ken-jī. (支) Shou-leng-yan-ching-chih-ken-jī-an-shih. ②存. 記載一・三・四
③本書は丹霞山天然所呈の撰述せし首楞嚴直指を科圖したものである。全經の大科を序正宗流通の三分として序分の下を諸經通例、本經撮起に分けて以下詳釋し、正宗分の下を直示圓悟(初卷至四卷末、依悟圓修(五卷至六卷後)、廣垂修範(六卷後起至八卷中)、別業果精別慶外(八卷中起至十卷後)の四分に別けて以下詳釋し、流通分(十卷末)は本經流通、諸經流通に別けて居る。(大久保堅瑞)

首楞嚴經直指

①(日) Shu-ryō-gon-kyō-shi-shō-shō-jī. (支) Shou-leng-yan-ching-chih-shō-jī. ②存. 記載一・三・一①
③明新星撰
④本書は、洞宗三十四世丹霞山の天然所呈が三月にして釋した首楞嚴經の疏で、直指圓月の義に採りて題名したもので、一經の

自用に備ふると共に學者をして簡約平易なる叙述の中に、本經の旨趣を了知せしめんとしたもので、師子林惟謙の撰に成る勸持叙、萬曆二十九年二月朔日李純仁の別楞嚴直指句義通說二經題辭、並に同二十九年(A. D. 1603)五月自序を付し上梓したものである。時に八十二歳。尙は本書上梓に際しては、太子太保尙書李戴の印可、淮安の知府劉大文、揚州の知府楊河の校閱、淮南の陳南金の校定を得たものである。(大久保堅瑞)

首楞嚴經釋要鈔

①(日) Shu-ryō-gon-kyō-shi-shō-shō-yō. (支) Shou-leng-yan-ching-chih-shō-yō. ②存. 記載一・一・一①
③宋代懷遠述
④本書は、洞宗三十四世丹霞山の天然所呈が三月にして釋した首楞嚴經の疏で、直指圓月の義に採りて題名したもので、一經の

首楞嚴經集解

①(日) Shu-ryō-gon-kyō-shi-shō-shō-jū. (支) Shou-leng-yan-ching-chih-shō-jū. ②存. 記載一・一・一①
③宋代宗印述
④首楞嚴經の題辭解釋。天台智頤の垂範に準じ、名體宗用教相の五重玄義を以て經の綱領を釋ししものである。第一釋名の章は此の經の具題二十字を取り、先づ大佛頂の三字を以て、釋迦佛頂光中に説かれたる

神呪の昇降、秘呪の名なりとし。其の下は總て顯了の名なれども、その中如來密因修證了義の八字は果人の修證に約して所契の法を示し。次の諸菩薩萬行首楞嚴の八字は因人の萬行に約して能契の法を示せるもの、因人果人の人と、秘呪顯了能契所契の法と人法合稱の立題なりと定む。第二の顯體の章は此の經の體性を諸佛所證の妙體たる常住真心なりと定め、第三明宗の章は、諸法の元寂に達して唯心性を觀する圓通妙定、即ち首楞嚴定を以て經の宗要と斷ず。此の二章は全く孤山智圓の説を承用す。第四論用、是亦孤山の説を承け、人法二執の妄を去り、二空の眞に歸る反妄歸眞を以て經の力用とすと説き。第五列教相の章は、孤山仁岳長水眞際等の諸義を徴して、結局法華の後涅槃の前に説かれたる一乘圓頓の教、即ち上妙の醍醐を教相とすと判じ。長水孤山興典に依て其の義を證し。以て經の説時に關する二三の疑を釋し。更に此の經の説時を方等の時となす神智の説、般若の時となす瓊海の説を批評して五重玄釋を終り。最後に柏庭の支覽の方等部攝屬説に對し、是れ畢竟通の五時の文通義通の説に對通なりとの私議を附記して筆を結ぶ。著者宗印は北峯教義の著者として、日本俊祐の師範として記すべく南宋中期の天台學者であるが、本書は諸先輩特に孤山智圓の説を翻補して簡短に經の五章を略述したのみで、別に特異の點も見えない。只斷片的ながら現時亡逸不傳の諸先輩の説を引援して居る所から、此の經研究の參考となり得る

首楞嚴經指掌疏題示

①(日) Shu-ryō-gon-kyō-shi-shō-shō-ken-jī. (支) Shou-leng-yan-ching-chih-ken-jī-an-shih. ②存. 記載一・四・二①
③清通理(一乾隆四一 A. D. 1776)撰
④本書は、自著の指掌疏下より一義門を題示したもので、本經を第一開示者摩訶成修、第二開示三摩成修、第三開示那由成修、第四開示楞嚴成修の四分と爲し、信解修證の此の四分を釋し、次に本經を釋するに就き、一教起因緣、三藏業分攝、三能

被教義、四所被機宜、五體性淺深、六宗趣通別、七說時前後、八傳譯註釋、九總釋名題、十別解文義の十門を啓いて通釋すべしと爲し、第八門の傳譯註釋までを説明して居る。注釋家は唐宋元明清に渉る總括六十八家を掲げ、小見意聞なるを以て單に其の開見に係るものを示すと述べて居る。教者釋經の題がよく現れて居る。(大久保堅瑞)

首楞嚴經指掌疏事義

①(日) Shu-ryō-gon-kyō-shi-shō-shō-jī. (支) Shou-leng-yan-ching-chih-chang-shih-jī. ②存. 記載一・四・五
③清代空元述
④本書は、達天通理に參じた空元が明萬曆十六年和碩親王の命により香界寺住持となつた通理に、翌十七年始雲より來問參同し、同二十三年正月通理の命によつて編成し、通理の撰述せし指掌疏を翻補し、其の事義を釋するため詳辭を搜り、再び章編を易く、教義を費して本書を成したもので、指掌疏に見ゆる主要なる語句の事義を釋したものである。(大久保堅瑞)

首楞嚴經指掌疏事義

①(日) Shu-ryō-gon-kyō-shi-shō-shō-ken-jī. (支) Shou-leng-yan-ching-chih-ken-jī-an-shih. ②存. 記載一・四・二①
③清通理(一乾隆四一 A. D. 1776)撰
④本書は、自著の指掌疏下より一義門を題示したもので、本經を第一開示者摩訶成修、第二開示三摩成修、第三開示那由成修、第四開示楞嚴成修の四分と爲し、信解修證の此の四分を釋し、次に本經を釋するに就き、一教起因緣、三藏業分攝、三能

自用に備ふると共に學者をして簡約平易なる叙述の中に、本經の旨趣を了知せしめんとしたもので、師子林惟謙の撰に成る勸持叙、萬曆二十九年二月朔日李純仁の別楞嚴直指句義通說二經題辭、並に同二十九年(A. D. 1603)五月自序を付し上梓したものである。時に八十二歳。尙は本書上梓に際しては、太子太保尙書李戴の印可、淮安の知府劉大文、揚州の知府楊河の校閱、淮南の陳南金の校定を得たものである。(大久保堅瑞)

首楞嚴經釋要鈔

①(日) Shu-ryō-gon-kyō-shi-shō-shō-yō. (支) Shou-leng-yan-ching-chih-shō-yō. ②存. 記載一・一・一①
③宋代懷遠述
④本書は、洞宗三十四世丹霞山の天然所呈が三月にして釋した首楞嚴經の疏で、直指圓月の義に採りて題名したもので、一經の

首楞嚴經直指

①(日) Shu-ryō-gon-kyō-shi-shō-shō-jī. (支) Shou-leng-yan-ching-chih-shō-jī. ②存. 記載一・三・一①
③明新星撰
④本書は、洞宗三十四世丹霞山の天然所呈が三月にして釋した首楞嚴經の疏で、直指圓月の義に採りて題名したもので、一經の

大綱を了會せしむる爲に總論を撰した、續藏所收本には、兩星の制法門人澄陽今釋が本書を閱し、樂說今辯が校訂し、今釋は序、今辯は別首楞嚴直指撮起を撰し、奥西の命たる大中丞傳弘烈(字仲暉、號竹君)が捐資流通する旨を述べて居る。卷首に首楞嚴直指總論、各卷末に音釋を附して居る。本書の疏釋に就ては、別項の直指科文に於て其の大綱を科圖されて居る。(大久保堅瑞)

首楞嚴經直指科文

①(日) Shu-ryō-gon-kyō-shi-shō-shō-ken-jī. (支) Shou-leng-yan-ching-chih-ken-jī-an-shih. ②存. 記載一・三・四
③本書は丹霞山天然所呈の撰述せし首楞嚴直指を科圖したものである。全經の大科を序正宗流通の三分として序分の下を諸經通例、本經撮起に分けて以下詳釋し、正宗分の下を直示圓悟(初卷至四卷末、依悟圓修(五卷至六卷後)、廣垂修範(六卷後起至八卷中)、別業果精別慶外(八卷中起至十卷後)の四分に別けて以下詳釋し、流通分(十卷末)は本經流通、諸經流通に別けて居る。(大久保堅瑞)

首楞嚴經集解

①(日) Shu-ryō-gon-kyō-shi-shō-shō-jū. (支) Shou-leng-yan-ching-chih-shō-jū. ②存. 記載一・一・一①
③宋代宗印述
④首楞嚴經の題辭解釋。天台智頤の垂範に準じ、名體宗用教相の五重玄義を以て經の綱領を釋ししものである。第一釋名の章は此の經の具題二十字を取り、先づ大佛頂の三字を以て、釋迦佛頂光中に説かれたる

【シ】

と題して唐の神龍元年五月、廣州の制止道場に於て譯出せし中天竺沙門密多羅帝、譯語せし烏長國沙門彌伽羅、筆授せし丞相房融の名を掲げ、古本に證譯として羅浮沙門懷迪の名を掲ぐるも、今本に掲げざるは不當であるから、後人本經を上刻する際は、參詳校正の功ある此の證譯者の名を掲ぐ可きであると述べ、次に科經と題して本經の組織たる序、正宗、流通の三分は温陵の長水子端の定むる所と略ぼ同じく、而して正宗分の中を五科と爲すなど、本經科段の事に言及し、各卷の要目十數項づつを掲げて釋義したものである。(大久保堅瑞)

首楞嚴經文句 〇(日) Shu-ryō-gon-kyō-mon-ku. (支) Shou-leng-yeu-ching-uen-ku. 十卷 〇存、記讀一・一〇・三二四 〇明智旭(萬曆二十一年永曆九年A.D. 1599-1655)述、道助參訂

大佛頂首楞嚴經の經文句題といふ意味。標題の經の隨文解釋である。初に一經十卷を三分して、經首より一卷歸來佛所(記讀一・一〇・三二四)までを序分とし、其の下十卷の未不覺三界(三・二六四・三七八)までを正宗分とし、其の下經終るまでを流通分となす。初の序分中如是我聞より、而爲上首(三・二二四)までを通序と

し、其の下波斯匿王會の日阿難行乞して魔女摩登伽の咒術に陷る、文殊佛勅により往て惡咒を銷し、阿難魔女を縛へて佛所に歸來す(三・二二六)までを別序となす。第二の正宗分を更に六段に分つ。一阿難佛を見て得道最初の方便を問ふより下經第四卷の前半尙留觀聽(三・二二七・四・二八七)までは、博地の凡夫をして圓頓の解を開かしむる爲に、如來藏妙真如性即ち圓の三諦を顯示せるものにして、其の中三卷の終り迄は(三・二七七)正しく三諦の理性を説き、第四の半卷(四・二七八-二八七)は廣く餘疑を斷ぜしものとす。二第四卷阿難華屋に入るを請ふより第七卷の諸菩薩摩訶薩を誓ふ(二八八-三三四)迄は、前の圓解に次で圓行を起さしむる爲に、不生滅の理性は本修因妙の三觀を門となすことを説き、正助兩行中正行妙觀を主説すとなし、其の中六卷の時衆得益を叙する(二八八-三三二)迄は當體の爲に圓通の本根を示し、其の下は末世の爲に道場の方法を示せるものとす。三七卷の阿難地位を問ふより八卷の名爲邪觀に至る(三三四-三四六)迄は前の圓行に依て惑を伏斷し、成ぜらるゝ圓教三徳の位を明し、四八卷の文殊經名を問へ、佛五名を以て答ふる八行の經文は、經名を結んで圓の體用を顯はし、五、八卷説是語已以下九卷の即魔王説(三四七-三六〇)迄は、戒戒の惡法を借りて問端となし、廣く七趣の差別を説き、出世の妙成なければ出世の妙慧なきことを顯し、六九卷の即時如來以下十卷の不覺三界に至る(三六〇-三七八)迄

首楞嚴經文句講錄 〇(日) Shu-ryō-gon-kyō-mon-ku-kyō-ryō. 〇六卷 〇存、光謙堂(承應元一元文四年A.D. 1633-1739)述、〇享保一八刊、〇龍大、二四一七・三九(各六、餘大、四八二)

佛以下を正宗分とし、要解に正宗分を五分して一見道分、二修道分、三證果分、四結經分、五助道分とし、次に流通分に終ると説明し、本書に於ての取扱ひを述べて居る。要するに略疏を本とし、此れを補足するに諸疏を折衷して本書を成したものである。龍大は大雄院の常僧會地開闢で、連山交易、海門元曠、德嚴乘存と住持次第して居る。

は、無間比丘を借り來りて佛に五陰魔境を明し、中道の妙慧なくんば中道の妙戒を失ふこと顯はすとす。第三流通分は經十卷末十七行程の文にして、此の中に佛は諸經持咒者の生善滅惡の功力を述べて是が流通を勸め、會座の人得益歡喜して座を退く。著者は此經に對し自作の跋文に、全大藏經中會歸する所は梵網佛頂二經に出でずと斷ぜし程の信仰を持ち、且つ釋經の態度も、敢て古人を矯めて異を立てず、亦敢て古人に殉じて強て同じうせずと宣せし如く全く独自の識見に依り、一經の所説、阿難は圓頓止觀を問へ、如來は圓頓止觀を答ふ、終始更に異趣なしとの見地に立ち、一境三諦の解、一心三觀の行、圓の三徳の階位等全然天台の教綱を以て巧に是を開説し、所謂文字を離れずして解説を説き、敢て別傳以上、教内に佛祖の眞傳あることを高擧せしものが本書である。宋元明清の四朝を通じて幾多の釋家中、天台學系に屬する最も早利明徹氣魄に富めるもの、隨一と思ふ。(中里貞徳)

〇刊本(龍大) 〇一巻 〇存 〇山上曹源著
首楞嚴經要解 〇(日) Shu-ryō-gon-kyō-yō-ge. (支) Shou-leng-yeu-ching-yao-chieh. 〇二十卷 〇存、記讀一・一七・四一五 〇宋戒環(一宣和二A.D. 1120?)述
 〇本書は大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經を科判し經文を疏釋したものである。本經の註釋書は古來多種あるが、いづれも我が意を得ないとの見識で、戒環は新に科判を立て疏釋を施したものである。舊疏に満足しない點の第一は舊疏は本經を法華涅槃の後に説いたとすからである。戒環は本經を般若法華の中で説いた實大乘終極の教であると主張する。元來本經は吾國では寶龜十年(A.D. 720)大安寺で、大佛頂經は偽經なりとの説起り、楚地廢除せんとした。時にこの議に戒明が著述しなかつた爲めに奈良朝時代に英經の災ひから免れた(延曆僧錄・日本高僧傳要文抄三)といふ因縁のある經。平安朝に至つて密教流布の時代となつては本經と系統を一にする經軌が傳り、五佛頂、大佛頂等の稱法となつて盛行した。又禪宗でも本經に如來藏の説があるから、支那の宋代では廣く用ひた。要するに本經の説時論は聖典成立史論である。戒環は天台の五時判によつて本經を般若法華中説と認定し、五時判に矛盾する他師の説に反對したのである。次は要解と題した爲めに自説を簡直に述べ、引證及び他破等の論陣を略し、ただ科判を經文の先きに附

【シ】

し、次に經文を漏さず各科段毎に掲げ、次に經文を註釋してある。戒環の傳は新編高僧傳四集卷三に出づ。出生及び入寂の年月も壽も欠く。本書の序文に「南宋建炎元年」とあり。跋文に「南宋建炎己酉(三年A.D. 1139)」とあり。この序跋は戒環後本書を印刷するに就つての記であるから、戒環の没年を宣和頃と推定したのである。可考。

首楞嚴經禮讚 〇(日) Shu-ryō-gon-kyō-rai-ji. (支) Shou-leng-yeu-ching-ri-sung-i. 〇一巻 〇宋仁岳(淳化三一年平元A.D. 992-1064)述、〇(參考)新編諸宗教藏總錄第一

建昌府壽昌の無明慧禪師の法嗣である青原下三十五世福州鼓山眞寂元賢禪師が教學に得る所なく圓山に大藏經を閲し、楞嚴經を得て、諸疏の未だ述べざる所を發明し、關鍵を得たりと爲して、明天啓四年(A.D. 1624)翼解二卷を著したが、明崇禎九年泉州開元寺に演法し、二雲曾公分靈泉南公等の政務の餘暇參問せるに對し、請に應じて、先に撰述せし翼解を廣解し、衆説を撮要し、以て一家言を立て、略疏三卷を撰し、福州鼓山に歸りて三卷を繼ぎ、苾芻の

首楞嚴經略疏 〇(日) Shu-ryō-gon-kyō-ryaku-sho. (支) Shou-leng-yeu-ching-ryo-sho. 〇十卷 〇存、記讀一・一三・一〇一 〇明元賢(萬曆六一年順治一四年A.D. 1578-1657)著

眞寂に居して更に四卷を加へ、本書十卷を完成したものである。明崇禎十一年正月燈節の後に侍御李曾風、本書を一覽して嘆賞し、遂に上梓し、明崇禎十一年(A.D. 1638)八月中秋眞寂繼燈堂に於て略疏縁起を自序して流通せしめたもので、元賢六十歳の著作である。(大久保堅瑞)

眞寂に居して更に四卷を加へ、本書十卷を完成したものである。明崇禎十一年正月燈節の後に侍御李曾風、本書を一覽して嘆賞し、遂に上梓し、明崇禎十一年(A.D. 1638)八月中秋眞寂繼燈堂に於て略疏縁起を自序して流通せしめたもので、元賢六十歳の著作である。(大久保堅瑞)

首楞嚴經略疏折衷 〇(日) Shu-ryō-gon-kyō-ryaku-sho-setsu-chū. (支) Shou-leng-yeu-ching-ryo-sho-setsu-chū. 〇十卷 〇存、日本大藏經方部章疏第四 〇明元賢(萬曆六一年順治一四年A.D. 1578-1657)著

本書は、福州鼓山湧泉寺元賢禪師撰述の首楞嚴經略疏を以て諸家の註疏中に傑出せるものと爲し、略疏に依つて本經の句脈貫通し、義理簡易直捷にして諸疏の葛藤を斷ち日月を掲ぐるが如き趣あり賞讃し、今この折衷に於ては、大綱を此の略疏に採り、衆目を張る爲に諸家の衆説を採り、經及び疏に於て細註を附し、經を上に冠し疏を下に註し、折衷を以て折衷を表し、疏文と檢別せしめ、略疏を補足して折衷十卷を成したものである。即ち元祿九年四月八日常陸國多賀郡日立の天童山大雄院に於て序文を撰し、同年(A.D. 1697)十月廿日且大雄院に於て開筆偈を撰し、本書を完成したものである。明崇禎十一年(A.D. 1638)八月中秋日元賢の撰文せる略疏縁起を載せ、凡例三則に於て折衷の用例を示し、統綱に於て本書の大綱を叙して居る。即ち統綱に於ては、序分の通別は文の如く解し、阿難見

佛以下を正宗分とし、要解に正宗分を五分して一見道分、二修道分、三證果分、四結經分、五助道分とし、次に流通分に終ると説明し、本書に於ての取扱ひを述べて居る。要するに略疏を本とし、此れを補足するに諸疏を折衷して本書を成したものである。龍大は大雄院の常僧會地開闢で、連山交易、海門元曠、德嚴乘存と住持次第して居る。

首楞嚴經盡測 〇(日) Shu-ryō-gon-kyō-zei-soku. 〇十卷 〇存、日本大藏經方部章疏第四 〇連山交易(寛永一二年野下A.D. 1635-1697)述

下野國下郡賀郡富山村太平山大中等の連山交易禪師が、元祿七年十一月廿二日六十歳示寂の二年前の元祿五年七月申元日に、大中寺に於て自序し、同八月望日(A.D. 1692)跋文を撰し、本書を撰述する功德を以て父母同種の洪恩の一分に報ひんと念じたもので、撰述に際して敬虔の念を以て事に従つたものである。また序文に於て自序する如く、杜預(字元凱)が左傳の辭ありて春秋左氏傳集解を出せるは、交易が楞嚴の辭あり本證疏を著すに類するも、實に於て遠く及ばず、ただ本經を尊信するの一念を筆にして其の妙旨を測らんとしたものである。然し此れは盡を測らんとするの類であるから著述と題したと序して居るが、圓熟せる時の著作であり、水戸光圀公に崇信せられて、常陸多賀郡日立の天童山大雄院に住し、元祿二年五十五歳にして大

中寺に轉じて僧祿に任ぜられた洞門の宗匠であるだけに、其の註疏の内容は他の諸家の作に比して優れたものがある。

首楞嚴合微 〇(日) Shu-ryō-gon-kyō-gai-etsu. (支) Shou-leng-yeu-ching-gai-etsu. 〇十卷 〇存、記讀一・三三・一〇一 〇明代通潤(一天啓元年A.D. 1621)述、〇首楞嚴經合微の下を見よ。

帝國、三三・一〇一(大久保堅瑞)

首楞嚴三昧經 〇(日) Shu-ryō-gon-kyō-san-mei-kyō. (支) Shou-leng-yeu-ching-san-mei-kyō. (支) Shou-leng-yeu-ching-san-mei-kyō. (支) Shou-leng-yeu-ching-san-mei-kyō. 〇十卷 〇存、大正一五・六二九No. 642、縮黃七、二二・一、北390得、南391得、元388得、明北395得、清393得、麗379得、天385得、指349改、法372得、至388改、明南391得、NY. 399、佛泰地摩羅什譯、〇弘始四一弘始一四(A.D. 402-412)

首楞嚴三昧は梵語にて、亦是首楞伽摩三昧ともいふ。此に勇健定、或は健行定、健相定と譯す。菩薩此の三昧を得れば、諸の煩惱及び惡魔も之を破壞することを得ざるのみならず、恰も大將が諸兵を率ゐるが如く、一切の三昧皆悉く之に隨從するといふのである。此經は専ら此三昧の大用を説きたるものにして、佛、堅意菩薩の請に應じて此

名所行録(名庫書)高麗所現 月年の刊寫(書考參書釋註)書末 説解存内 代年作撰 著書 缺存 數卷(名書)名題 説略字數

【シ】

三昧の名を唱ふるや、諸の衆會忽然として現はれ、諸佛各々寶座に坐し給へり。次に佛還た神力を擧めて一切衆會た一佛を見るや、此三昧は初地二地三地四地五地六地七地八地九地の菩薩の能く得る所に非ず。たゞ第十地の菩薩能く此三昧を得ると説き、百句の義を以て此三昧を解説してある。又堅意菩薩が云何にして此三昧を學び得るやといふ問に對し、佛は尤も興味ある射を學ぶ喻を擧げて其の次第を説き、次に其の三昧を得たるもの、實例として、遠く三千大千世界の最も邊外に在る持須彌山といふ帝釋天や、近く此會中に在る現意天子が其の神力を示現し、又この會中に魔界行不汚菩薩ありて魔女を濟度するや、魔女も爲に「魔界佛界不二不別」佛魔一如の悟りを得、惡魔も亦五縛を解きて、佛に其の宮殿を施し、佛其の中に在て此三昧を説きたまひ、次に又堅意菩薩や名意菩薩の佛に問ふあり、彌勒菩薩の神通、文殊菩薩の古佛なるを説く等、首尾悉く首楞嚴三昧の神變不思議なる趣きを説き示してある。然るに之を第十地の首楞嚴經に比するに、彼の經は支那日本に亘りて盛んに流行し、隨つて多々の末註あれども、此經は古來之を讀む人の至つて稀れるやうである。(松原恭雄)

首楞嚴壇場修證儀 ①(日)Shu-yō-dan-jō-shū-shō-gi. (支)Shou-ta-hg-yen-fan-chang-hsia-cheng-gi. ①卷 ②存、正續一・九五・五 ③宋淨源(大中祥符四一元祐三A. D. 1011-1083)編纂 ④照寧四(A. D. 1071)

本書は首楞嚴壇場を建立して懺悔する儀式を叙述したものである。淨源の傳は未詳。先づ緣起を叙す。長水子游、孤山智圓、金剛仁岳(吳興仁岳)等の註疏を參照して懺悔の法を擧り、宗經の校閱を得たと記してある。續、緣起の終りに勸修利益を説く。次に懺悔法十門の名を列ね、次第に一の門を擧げて懺悔の儀式を詳説してある。(陀羅尼、呪を用ひてゐる點は密教風であるが三觀を修し七境を明し、聖位を歷ることを説くが如きは顯教の儀儀である)。淨源は傳教菩薩觀を以て自己の本務なりと信じて華嚴普賢行願修證儀を記した者であるから、本書の記の足りない所は行願儀等を見よと記してゐる。宋代の教誨一致信仰が宗教的行事を示す時に本書の如きものが製作されて爾るべきことを示したものと考へられる。唐代の尊勝陀羅尼信仰と比較する場合に時代宗教の行事が變化するよき例の一である。(田島徳香)

修學士臺 ①(日)Shū-gaku-dō-tai. ①帖 ②存 ③徳川時代寫 ④實菩提院

修儀私類聚鈔 ①(日)Shū-gi-shū-hi-jū-gō-hō. ①卷 ②存 ③慈恩記 ④寫本(明徳院)

修行儀則 ①(日)Shū-gyō-gi-soku. ③卷 ④存 ⑤陸奥造 ⑥(參考)眞言宗全書刊行決定目録

修行勸業經 ①(日)Shū-gyō-kwan-jū-gyō. (支)Hsia-hsing-chuan-t-ching. ①卷 ②失譯 ③修行道地經第二卷の抄出。

④(參考) 出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第一六、貞元錄第二六

修行外記 ①(日)Shū-gyō-ge-ki. ③存 ④(參考) 續編目録

修行次第決疑論 ①(日)Shū-gyō-shi-dai-ke-sai-gi-ron. (支)Hsia-hsing-tz'u-chih-chi-lun. 華嚴經決疑論、略釋新華嚴經修行次第決疑論 ④四卷 ⑤存、大正三六・一〇一・No. 1741、正續一・七・一一

⑥唐李通玄(貞觀九—開元一八 A. D. 635—730)述 ⑦華嚴經決疑論の下を見よ。

⑧(參考) 新編諸宗宗教總論第一

修行慈經 ①(日)Shū-gyō-ji-gyō. (支)Hsia-hsing-tz'u-ching. ①卷 ②失譯 ③修行道地經第一卷の抄出。④(參考) 出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

修行鈔筆記 ①(日)Shū-gyō-shō-hi-ki. 如說修行鈔筆記、實記撰要 ②1卷 ③存、日蓮宗宗學全書第四日蓮正宗部 ④日寛(寛文六—享保一 A. D. 1666—1736)撰

⑤宗祖日蓮の如說修行鈔を釋せるもの。日寛の人(本因妙)の行者日蓮(法(本因妙)の題目)一體の本尊義が散説されてゐる。實記撰要下巻に收められてゐる。(望月厚厚)

修行道地經 ①(日)Shū-gyō-dō-ji-gyō. (支)Hsia-hsing-tao-ti-ching. 順道行經 ⑦七卷 ⑧缺 ⑨後漢安世高(一建和二—建寧三A. D. 148—170)譯 ⑩第一譯

④(參考) 開元錄第一五、貞元錄第二五

修行道地經 ①(日)Shū-gyō-dō-ji-gyō. (支)Hsia-hsing-tao-ti-ching. 修行經、維摩經復編經 ⑦七卷或八卷 ⑧存、大正一五・一八一・No. 606、縮卷六、正續一・五・北987、南1003、元999、明北1315、明、清1315、明、順991、天992、指948、法975、至1437、明南1081、終、Nj. 1225 266—313)

⑥本經第一卷には「修行道地經」の字あり、第六卷末には、「經名を修行と曰ふ」、「是の道地教を奉行す」等とあるは蓋し經名の所以である。衆經の大教を統べ、修行の經路を示せるものである。

現行のもの七卷三十品となつてゐるが、古い時代には二十七品であつた。關西の文士竺徒征が原本を燬燬に害すや月支の菩薩沙門法護と相值うて共に演べ、法業法寶之を筆受した。賢者李應榮以下三十餘人成く勸助して大康五年二月二十三日始めて訖つた時には上下二十七品六卷であつた。『出三藏記集』卷十に收むる道安の經序も二十七品としてゐる。最後の三品は「法華經」によりて後より加へられたものである。

(第一卷) 集散品第一では無行の行・修行・修行道を説く。即ち無行とは疑念を念じざる等である。而して能く順行し修習進歩するこれ修行であり、專精寂道は修行道である。その修行には三品ある。凡夫、

名所行目◎ (名庫書) 高麗所現◎ 月年の刊寫◎ (書考書目録註) 書主◎ 説解存内◎ 代年作著◎ 書著◎ 缺存◎ 數卷◎ (名書) 名題◎ 號略字數

【シ】

學問道、無所學である。

五陰本品第二 修行道には五陰の本を觀すべきである。五陰は東西南北の若干の家屋合して城を爲す如く、一色一塵を以て陰となすに非ず、八百色・八百觸・八百想・八百行・八百識有つて夫々五陰をなすと云ふ風に五陰の本を解さねばならない。

五陰相品第三 修行には五陰の相を解すべきである。光明あるも、色像相あるも、獲得する所も、他人に示すもこれは色である。習樂・不樂不痛これ痛である。識相は想である。造作する所は行である。總想は識である。斯くの如く各々五陰の相を了すべきである。

分別五陰品第四 修行には五陰の本を分別せねばならない。五陰の本を觀了するとは、譬へば人が貫珠を見て意中に欣然として往いて取らうとする場合、最初に見るのは色陰であり、愛樂は痛陰であり、是を貫珠と知るは想陰であり、取らうとするは行陰であり、貫珠を分別するは識陰である。是の如く五陰は一時に俱行する。眼に限らず他の一切諸入も同様である。

五陰成敗品第五 修行道には五陰成敗の變を知らねばならない。五陰成敗とは譬へば人あつて命が終らうとしてゐる時の如しとして以下遂に死して更に宿業の善惡に隨つて入胎出生して再び四百四病の發する順序を事細かに述べ、五陰所從の成敗を觀すべきを説いてゐる。

(第二卷) 慈品第六 修行道には願志を棄て常に慈心を奉ぜよと云ひ、口慈・念慈・

等慈等について述べ、

恐怖品第七 では行道者が閑居又は屏處に在つて恐怖を懐く時には如來功德の善形像觀及佛法樂僧を念ぜよ、而して慈哀を奉行する時恐怖の心は無くなると云ふ。

分別相品第八 精進・智慧を説き、修行は樹園を修治するが如し、地を耕し雜草を除きて以て樹木大となり華實生ずる様に、修行も亦法師の教を受けて、疑念復欲想諸穢を除きて遂に道を得るに至るのであると説く。

(第三卷) 勸意品第九 では修行道地には何の方便を以てその心を正しくするかと云ふ問題を説いてゐる。昔ある國王が聰明にして博達、志弘雅にして威あつて暴ならず、名徳具足の士を募つて輔臣にせんとし、その採用法として油を滿した鉢を以て城の北門より南門に至り城を去ること二十里の圓盤園まで到り一滴も零さないことを求めた。零せば死罪に行ふのであるが、一人の男は大勢の見物中に居る美人にも目をくれず、大群象が現れても畏れず、城中に失火し、深山の峰が出て毒を放つても驚かず、又聖賢講にも怖れずして目的地に至つた。これは心堅固なる爲めであつて修行道も心を御すること、是の如く諸患及び疑念穢が諸根を亂しても心を護つて隨はず、意を攝すること第一とせねばならない。

離倒品第十 修行道は心を勤め、四顧例を捨て、行地を専らとすべきを説く。

曉了食品第十一 食物は美味不味に拘らず消化して大小便となり涕唾となり、藏中

要味は體を養つて疑念を起すのである。併し、多くの小鳥が捕へられその中からよく肥つたものが幾羽かづ、食膳に供す爲め殺されるので、ある一羽の鳥は食を減じて肥らないこととして助かつたと云ふ譬喩の如く、修行も是の如く食を輕減し睡眠を少くして坐行經行喘息安穩ならしめ疑念は薄くすべきだと説く。

伏勝諸品第十二 牛が澤に出で禾穀を食したる爲め倒主に打たれる。その翌日は又他の苗を食して打たれる。斯くて終には恐れてそう云ふ罪を犯さない様になる。是の如く行者は五根を誡め情欲に隨はせない様にならねばならない。

忍辱品第十三 行者が罵詈された時には音聲のみあつて空と考へる。盲人は何も見ない如く、夷狄の言語は通じない如く、空吹く風と考へて居れと云ふ。

棄加惡品第十四 人が刀杖瓦石を加ふる時は捕たるも捕つても無所有である。瞋るとしても一體誰が誰に瞋るのか。毒蛇百足等の如く考へて加報するな。又外患は除いても心中の四百四病八十種蟲は何とも出来ないではないか。内心を伏し諸の垢穢を除きその志を寂定にする。これが修行である。天眼見終始品第十五 自ら心を御し懈怠を棄捐し臥衰を思はず、若し睡が止らなければ起つて經行する、不定の時はその坐を移すと云ふ風に修行を勵むと道眼を成じ三千界を見、人の生死善惡所處を見ることが出来る。これが所達神通である。

天耳品第十六 又天耳を成じて微聽する

ことを得、

念住世品第十七 識本宿命神通を得ると

知人心念品第十八 江邊人及び買客の譬喩等を説いて行者の専心勵むをすゝむ。

地獄品第十九 黑繩地獄・合會地獄・鐵業地獄・沸灰地獄・阿鼻地獄等の有様を述べ、修行者は心に吾が身未だ此の患より脱せずと思ひ自ら制して輕戲しない。そうすれば夙夜其の法に違はないのである。

(第四卷) 勸悅品第二十 修行進むに従ひ益々自ら勤み進歩精勵するを説く。

行空品第二十一 國王佛兒の譬喩を以て道心誘進の要を説き、吾我の觀念に關しては特に筆を費し、國王琴瑟の譬喩を説き、ついで小兒が沙城を作りて遊ぶ中一人の小兒が過つて他人の沙城を壞した、すると大勢でこれを罰したが夕方になると自らこれを壞して家路に急いだと云ふ話を出して是の如くであるから修行は吾我の觀念をなくせねばならない。三界は空と見なければならぬと説く。

(第五卷) 神足品第二十二 或は先づ寂を得て後に觀に入る人があり、或は先づ觀に入りて後に寂を得る人がある。何れも解脱を得るのであるとて、寂を説き、觀については惡露觀と數息あるを説く。

數息品第二十三 修行は足を繋がれたる雀が飛去つて果樹清涼池水に至るも引き戻さるゝ如く、梵天に至るも又欲界へ還るものであるから勤苦しなければならぬと云ひ、此處には數息の法を解説するとて出息

名所行目◎ (名庫書) 高麗所現◎ 月年の刊寫◎ (書考書目録註) 書主◎ 説解存内◎ 代年作著◎ 書著◎ 缺存◎ 數卷◎ (名書) 名題◎ 號略字數

は安、入息は般、息の出入に随つて他念無しと説いてゐる。

〔第六卷〕觀品第二十四 是觀に關する解説である。ある富者が火を犯して取り出した寶篋の中は蛇鼠で一杯であつた。是の如く一切の形を見ては毒蛇の如しと考へるを以て觀に至るを得るのである。

學地品第二十五 修行者が已に道跡を得たと思つても、諸の五樂を見ると疑意が動く。譬へば梵志の子が、指が不淨だから火を以て淨めんとするが指に近づくと熱いので驚いて腕いと云つた指をなめる様なものである。これはまだ不遺道を得ないからである。一心に無學地を求めねばならぬ。

無學地品第二十六 學地に在つて無所著を得て五品を斷じ人中上となる。これが阿羅漢である。

無學品第二十七 斯くて有餘泥洹に住し漸々に無餘泥洹に至る。是を以て本經を修行と云ふのであると説く。

〔第七卷〕修行品第二十八 買人遊行・長者三子・龍狐等の譬喩を説いて五陰を制すれば魔も長るゝ無きをとく。

修學品第二十九 三乘は宛も天帝を見んと欲する人が邊王を見て天帝と思ひ誤る如きものであるとて長者火宅の譬喩を以て一乘を宣揚す。

菩薩品第三十 かくて菩薩は積功累徳して、人卒かに立つて國王となる如く、菩薩大士も深慧を馳し無礙に至つて佛道を成ずるを得るに至るのである。

以上の所説を見るに文は簡潔であるが義は豊富で、譬喩を遠近にとり好心を防制する。三昧禪を以て數々務とし、解空して無に歸し衆想爲めに定まるのである。支を鈎き妙を致し能く深奥を體し、眞に離患の至寂無爲の道と謂ふべきで、迷くるを勧め、惑へるを勵まし大慈悲を以て衆生を弘益する心がよく表れてゐる。本經は印度僧伽羅刹の造と傳へられて居り、竺法護の傳譯後六朝時代即ち羅什の入關前に於ては盛に講究せられた様である。後漢安世高譯の『道地經』一卷並に支暹譯の『小道地經』一卷は共に本經と同本別譯である。註疏に道安の『道地經註』一卷がある。(三好虎雄)

修行道地經 ①(日)Shu-gyo-do-ji-kyo. 國譯修行道地經 ②存、國譯一切經々集部第四 ③佐藤泰舜譯

修行道地經見受 ①(日)Shu-gyo-do-ji-kyo-ken-jin. (支)Hsin-hsing-tao-ti-ching-chen-shou. ②三卷 ③缺 ④(參考)奈良朝現在一切經目錄3508

修行道地經和譯 ①(日)Shu-gyo-do-ji-kyo-wa-yaku. ②一卷 ③存、慈雲尊者全集第一六輯 ④飲光(享保三)文化元(A. D. 1718-1804)譯 ⑤延享三(A. D. 1746)

修行念佛七日道場懺悔方法 ①(日)Shu-gyo-nem-butsu-shichi-nitchi-do-jo-san-ga-ho-ho. ②一卷 ③圓仁(延

曆一三頁觀六 A. D. 791-804) ④(參考)淨土依憑論章疏目錄

修行の念願 ①(日)Shu-gyo-no-gen-gan. ②一卷 ③存 ④刊本(正大、一〇九、二五八)

修行方便經 ①(日)Shu-gyo-ho-hen-kyo. (支)Hsin-hsing-fang-pien-ching. ②二卷 ③缺 ④吳代支謙譯 ⑤(參考)開元錄第一五、貞元錄第二五

修行方便經 ①(日)Shu-gyo-ho-ben-kyo. (支)Hsin-hsing-fang-pien-ching. ②一卷 ③疑偽經 ④(參考)法經錄第四、仁壽錄第四、靜泰錄第四、內典錄第一〇、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

修行本起經 ①(日)Shu-gyo-hon-kyo. (支)Hsin-hsing-pan-ki-ching. ②二卷 ③(參考)出三藏記第三

修行本起經 ①(日)Shu-gyo-hon-kyo. (支)Hsin-hsing-pan-ki-ching. 宿行本起經 ②二卷 ③存、大正三四六一No. 154. 縮版一〇、正四、北777頁、南789頁、元783頁、明北660頁、清692頁、開772頁、天776頁、指739頁、法766頁、至1013頁、明南646頁、Ny. 664 ④竺大力、廣孟詳共譯 ⑤後漢建安二(A. D. 197)

〔他經との關係〕本經は本經部に屬する二卷七品の佛傳である。譯者竺大力、廣孟詳には外にこの譯出に後ること十年、(後漢建安十二年)に譯出せる中本起經二卷がある。此經は明かに本經と合して一部の佛傳を形成してゐる。而して歴代三寶記第

四等に依て、兩經共にその原本は曇果が迦旃維衛國から將來せることが知られること、又その内容は本經が釋尊の本生より説き起して、その成道後の二買客入信に終るに對し、中本起經は二買客入信を前者末段と似寄りの文を以て説くに始めて、成道後の初轉法輪乃至佛在世中の傳道の事實を述べてゐること、更に又道安は本經を「中本起」の對稱と思はるる「小本起」の名を以て呼ぶることなどから、兩者は本來姉妹經として存せるものなることが知られる。尙ほ推測すれば、原本本は一部の佛傳であつたものが譯出の都合上前後二篇に分たれ、何らかの理由に依て兩者異名を冠せられるに至つたものかも知れぬ。尙ほ本經の異譯と思はるるものに「太子瑞應本起經」三卷、「異出菩薩本起經」一卷がある。殊に瑞應經はその所説の内容殆んど本經と同一であり、兩者相一致する佛傳なども添へられて、同本異譯たることを充分に示してゐるが、本經が二買客入信に終つてゐるに對し、瑞應經は下卷の初分(三分の一弱)を以て本經所説の内容を終り、下卷の殘部は、龍王歸佛、五比丘得度、三迦葉濟度までに説き及んでゐる點を異にするだけである。異出經は、内容は略々瑞應經に同じいけれども、佛傳は全然なく、その所説略略なれば、若し同本異譯としても、これは取意的翻譯であらう。因みに瑞應經が全く本經の異譯と言ひ得るに拘らず、三迦葉濟度までを説いてゐる一事は、本經と中本起經との原本一經説に助證を提供せるものであらう。

〔内容〕上卷は三品、下卷は四品に分れる。第一現變品、釋尊の本生譚で、彼は説光佛の時に無垢光といふ婆羅門童子となり、賢劫の世に成佛するとの授記をうけ、三阿僧祇九十一劫の間、生死を重ね六波羅蜜、十地行を爲し、遂に一生補處の菩薩として兜術天上に生ずる。第二菩薩降神品、菩薩は兜術天より降臨し、白淨王の摩耶夫人の胎に入り、四月八日誕生、長ずるや種々の學問を習ふ。第三試藝品、太子十七歳にして、諸釋子と藝藝を競うて優勝し裘夷(Gopa)と名づく夫人を娶つたが、太子は樂まなかつたので、更に衆稱味(Anand)に、常樂意の二夫人を與へられたが、太子は依然として樂まなかつた。第四遊觀品、太子出家の直接原因とされる四門出遊の物語である。第五出家品、太子十九にして城を脱して出家せられたる物語である。途中摩竭國の瓶沙王より王とならんこととの勸告をうけたれども、辭して山に入り修行を始む。第六勸苦品、菩薩は修行者の教に満足せず、六年間の苦行を始めたが、之が無益なることを悟り、二女より乳糜の供養をうけて、菩提樹下に坐し觀念を凝した。第七降魔品、恩愛、常樂、大樂の三魔女を始め諸魔の誘惑脅迫を降伏し、遂に菩薩が成道せられた。是れ即ち七品の大要である。

〔參考〕三寶記第四、法經錄第三、內典錄第一、譯經圖記第一、開元錄第一、貞元錄第二 (寺崎修一) 修行用心 ①(日)Shu-gyo-yu-jin. ①一卷 ②存 ③海記 ④寫本

修行要記 ①(日)Shu-gyo-yo-ki. ①一冊 ②存 ③寫本(高大、1・711)

利益に約して名を立てたものである。されば此經は圓教絕對の觀門である。故に卷末の頌文にも「備尋、諸教本、集、慈華嚴觀」とあり。然るに古來譯者を誤りて、或は之を杜順の作とし、或は眞偽を疑ひ、或は寄顯門の説と云ふものありしは、何れも杜撰である。此の書の大綱を云へば、起信論の所明に准じ増數に約して六門を立て、又た其の六門中に於て其の數の如く別開するが故に、總じて二十一門を分けてある。よりに凝然の法界義に觀行の狀を明すに十類を擧ぐる中、三、安盡還源觀一卷賢首師作、彼有六門、總明觀行、即是增數重開之相、一體、二用、三攝、四德、五止、六觀、總合有二十一門、其四德相是事妙用、餘即圓滿菩薩觀門」と説してある。先づ一體とは自性清淨圓明體にて、これより二用を起す、其の中、海印森羅常住用は、一切萬象を印現する海印三昧であり、法界圓明自在用は、廣く萬行を修起する華嚴三昧である。而して其の一々の用が法界に普周することを示すが三攝であり、其の境に依て四種の行を修するが四德である。次に止觀兩門を修するは正しく觀行成就の相を示したものである。然れば此の六重は一貫の觀門にして、解行の方軌なれども、其の一々の觀皆悉く悟入法界の要路を成じて、何れかの一門に入れば、隨て餘門を具して法界に入ることを得るのである。故に六重の觀門を述べたや、圓珠の六孔の喻を擧げて其の義を示してある。

〔注釋〕香水淨淨の安盡還源觀疏鈔補解 名所行目 ①(名華書)高麗所現 ② 月年の刊寫 ③(書考參書釋註)書本 ④ 說解存內 ⑤ 代年作著 ⑥ 書著 ⑦ 缺存 ⑧ 數卷 ⑨(名書)名題 ⑩ 寶略字數

名所行目 ①(名華書)高麗所現 ② 月年の刊寫 ③(書考參書釋註)書本 ④ 說解存內 ⑤ 代年作著 ⑥ 書著 ⑦ 缺存 ⑧ 數卷 ⑨(名書)名題 ⑩ 寶略字數

一巻、同じく安産源流料一巻。漢書の華嚴安産源流料五巻(寫本三、四缺。實英の安産源流料一巻。經歴の安産源流料一巻。宜然明道の安産源流料支及び科文一巻。南紀芳英の安産源流料支及三巻。伏明の安産源流料前日録一巻。持淨の安産源流料講録一巻。法泉大安の安産源流料講録二巻。龍天の安産源流料私記一巻。照通の安産源流料講義一巻。その他失名の支談等あり。

①(正六、二四、四一) (松原春樹)

修驗安心義鈔

①(日) Shūgen-an-shin-gi-shū. ①一巻 ②海浦義經述 明治三二刊 ③(龍大、二六六九、二) 京大、大末、七四二(帝國、八一三、八)

修驗一派引導作法

①(日) Shūgen-pai-in-dō-shū. ①一巻 ②存、日本大藏經修驗道章疏第二法則類。

③修驗道に於ける引導の諸作法を集めたもの。入棺、行列次第、墓所作法、位牌、靈供作法、茶湯次第より成つてゐる。

修驗引導文軌

①(日) Shūgen-ō-dō-mon-ki. ①存、修驗聖典第五諸供養法。

修驗聖印三昧耶引導法

①(日) Shūgen-san-mai-ya-in-dō-hō. ①一巻 ②存、日本大藏經修驗道章疏第一法則類 ③元景(延喜一四一長徳元 A. D. 914-965)撰

④修驗道章疏印法流による亡者引導の次第法

則。大慈惠喜捨三昧耶會、普禮、平等觀、自護身、潔淨、佛性三昧耶、淨土變、觀佛、金剛起、普禮、表白、神分、登覺台、佛性三昧耶、勸請、五大願、法界圓滿、佛果輪、大金剛輪、地結、地天、四方結、金合、入門、合門生、招降中、摧降、震降除、成菩提心、道場觀、授與三皈依、大虛空藏、大智慧、小金剛輪、金剛摩尼轉成福智、送車輪、請車輪、招請、四明、結界、度缺思、金剛網、火院、大三昧耶、開伽、華座、讚、振鈴、五供養(理事)、普供養、三力、祈願、禮佛、佛眼、亡者成佛印、大五秘密印明、發願、破地獄成淨土、六地藏、八大金剛童子、正念誦、本尊加持、字輪、本尊加持、散念誦、五供養(理事)、開伽、撥道、護身法、普禮等の諸印明より成り、終に初七日不動以下十五佛の印明を舉ぐ。更に心得之事、道順進事、梵天之事、修驗得度之事、得度書卷之事、摩訶形落變之事を附載してゐる。醍醐三寶院門主實濟大僧正の傳本で、承應より寛政に至る先達の奥書である。(服部如實)

修驗聖印總漫筆摺

①(日) Shūgen-san-in-tō-man-pi-sō. ①一冊 ②存、日本大藏經修驗道章疏第一法則類、修驗聖典第三惠印法流

東方院乃至北方院と稱せられてゐるが、十大菩薩の配置は眞言の曼荼羅と異つてゐる。東南の月輪不動院に五尊、西南の愛染院に九尊、西北の藏王院に五尊、東北龍樹院に三尊である。第二重が第四院で四隅に嬉遊歌舞の四菩薩、南方深砂大王院には七尊、北方字寶神王院には五尊、東方は十二宮院、西方は七星院である。第三重は第五院で、四隅に外四供養、四方に四攝、その間に四天王、空白の處に廿八宿を配してゐる。第四重は第六院で、廿天が布列されてゐる。然し大藏經及び修驗聖典所載のものとは寫誤と認められる點が多い。(服部如實)

修驗聖印六壇漫筆摺

①(日) Shūgen-san-in-yoku-dan-man-pi-sō. ①一冊 ②存、日本大藏經修驗道章疏第一法則類、修驗聖典第三惠印法流

修驗聖印法流に於ける龍樹、不動、愛染、金剛童子、深砂、辨財天女の六壇法の

本尊曼荼羅。六曼荼羅各別に仕立てるのが本義であるが、合稱の時は右方より龍樹、不動、愛染、左方より金剛童子、深砂、辨財天と次第する習ひである。その中、龍樹、不動、深砂、辨財の三曼は二重、他は、三重の組織である。(服部如實)

修驗聖則

①(日) Shūgen-sei-noku. ①一巻 ②存、日本大藏經修驗道章疏第三教義類 ③信牛撰 ④寛政一(一) A. D. 1799)

聖護院門跡の教を奉じて撰定したものである。修驗の宗旨、神山の灌頂、眞言院龍尼讀誦の用心、禪定、妻帯、帶刀等について本義を明かしてゐる。(服部如實)

修驗記 ①(日) Shūgen-ki. ①一巻 ②存、西藏院不英記 ③寫本(京大、大末、七二〇-七二一)

修驗行者易誦法 ①(日) Shūgen-jō-shō-jō-hō. ①一巻 ②存、普門撰 ③天保一三刊 ④(谷大、餘大、三三〇六)

修驗行者傳記 ①(日) Shūgen-jō-shō-den-ki. ②二冊 ③存、刊本(實、二〇、四、二四)

修驗行滿雜記 ①(日) Shūgen-jō-shō-jō-man-zasshi. ①一巻 ②存、日本大藏經修驗道章疏第三教義類 ③良運記 ④寛永一七(A. D. 1640)

⑤古蹟行門修驗書の一。山門正塔院北谷正教房第十一代新達阿闍梨良運が參詣の始末、行滿仕出、祝賀慶應の次第を記した記録。元禄十二年書寫の奥書がある。(服部如實)

修驗切紙集 ①(日) Shūgen-kiri-shū. ①一巻 ②存、寫本(京大、大末、七三三)

修驗故事便覽 ①(日) Shūgen-toji-benran. ②五巻 ③存、日本大藏經修驗道章疏第三法華行者修驗書 ④日榮著

⑤修驗道關係の故寫四十九項目を解説したもので、各項目を更に小分して數項目とし、和漢古今の事例を擧げて典據及びその

可能なることを立證せんとした書である。其の引用書目の如き、大日經、大集經、仁王經、金光明經、涅槃經、楞嚴經、七佛所說神咒經、不思議境界經、鬼子母經、雜寶輪經、提謂經の諸經、十住毗婆娑論、摩訶止觀・文句、華嚴經等の論疏、佛眼統記、法苑珠林、梁宗高僧傳、南海寄歸傳、釋氏要覽、信史略、經律異相、風土記、拾心記、明心寶鑑、塔婆銘書の類、事文類聚、瑞珙代辭、本神御目、西陽雜俎、軍林寶鑑、雍州府志、事物紀原、沈括夢溪筆談、黃帝內經靈樞、古今圖書集成醫史部、群林等の俗書、神佛其應經、神國決疑篇、醫學入門、謙述論、王子一覽、續博物志、神山集、夷子記、扶桑故事要略、温故要略、舊事本記、太平御覽、太平記抄、源氏物語、谷響集等を引用し、且つ元亨釋書に見える故事を擧げ、其他心經秘藏等あらゆる諸書を参照してゐるから、和漢古今の興趣ある物語を見ることが出来ると共に幾細な行事の因縁來由を知ることさへ出来て而も驗門の意圖を知らず識らずの間に味得することを得ることは類書中第一の貴重書と云ふべきである。今左に四十九の大項目のみを擧げることとする。 婦女。幣。注連。敷符。加持杖。加持名義。壇鏡。諸符。筒封。瘧鬼。疫病。瘧民將來。瘧毒。野狐。鬼病。鬼蟻。守並口字。札。求子。石榴。團。輪馬。九字。雷。祈禱。正五九月祈禱。七難。九厄。鬼神。鬼門。星祭。月持。日持。牛玉寶印。寺門置。獅子像。事。社壇。双方二神。大黑天神之神。甲子祭。大黒天。之評。三寶兜神。妙見菩薩。地祭。庚神。忌火神。忌經水。臣供養五所禱。所願成不。修驗者用心。

病人教化。平形念珠。祈禱相承書がその項目である。本書は洛陽西陣光明山忍辱殿日榮がその故博な知識を傾けて著したもので、終の文によれば享保十五年六月廿日火災に遭つた時、此の原稿のみを出したと云ふことが記されてゐるから、縱令引文の相違、料簡の差誤、文字魚書の誤等云ふに及ばざると云つてゐても、それは彼の謙遜であつて、如何に彼が多年書集めた原稿を大切にしたいか判ると共に、本書あつて始めてその由來因縁を知り得る故事の多いことは確に後世を益するものと云はねばならぬ。修驗の二字を冠すると雖も必ずしも修驗に限つたもののみでないと思はれるものが多いが、これは又他面、修驗道が如何に廣く深く民間信仰に食ひ入つてゐたかを證據だつてゐるであらう。修驗道研究者は勿論、一般人士と雖も必讀すべき名著である。因に本書全部の書記は中村平五三近子である。

修驗聖印灌頂印明

①(日) Shūgen-san-in-kwanzō-in-ōshō. ①一巻 ②存、日本大藏經修驗道章疏第一、法則類修驗聖典第三惠印法流 ③勝覺(天喜五一)大治四 A. D. 1067-1129)

法華經灌頂大事は一に作禮而去大事とも稱し、先づ虚空を道場、草木を供物と觀じ、次に先づ字の智火を以て三毒を燒盡し、又字の智火を以て三業を燒盡し、又字の智火を以て自身即大日、大日即自身と成り、如法華印明を結誦して五智如來の三昧を契證することを明し、終に方便・安樂行・善量・普門の四要品の秘密印明と偈とを擧げたもの。修驗灌頂作法は佛性三昧耶戒、虚空藏・摩訶印・外五古・普賢三昧耶の五印明と護身法とより成つてゐる。印可加行表白は許可灌頂の印明を受けんとするに當り、不動の密軌を修して本尊の真意を乞ふ趣旨を述べたものである。(服部如實)

修驗聖印灌頂法祝口決

①(日) Shūgen-san-in-kwanzō-hōshū-kōketsu. ①一巻 ②存、日本大藏經修驗道章疏第一、法則類修驗聖典第三惠印法流 ③勝覺(天喜五一)大治四 A. D. 1067-1129)

④修驗道章疏灌頂に於ける導師及び先達・受者・承仕等の心得を記したもので、導師は大日法を修すべきこと及び法流相續・印信授與等秘密の口訣を録したものである。終に金篋・明鏡・輪寶・方鏡の圖と寸法並に道場圖をも出してゐる。(服部如實)

修驗最勝聖印三昧耶護摩法

①(日) Shūgen-saijō-san-mai-ya-go-hō. ①一巻 ②存、日本大藏經修驗道章疏第一法則類 ③聖實(天長九一)延喜九 A. D. 823-900)

檀木・乳木・百八支・加持物・五穀・藥種等の數量及び護摩壇の圖を出してゐる。修驗最勝聖印三昧耶六壇法儀軌に加ふるべきものである。(服部如實)

修驗最勝聖印三昧耶灌頂法 ①(日) Shūgen-saijō-san-mai-ya-kwanzō-hō. ①一巻 ②存、日本大藏經修驗道章疏第一法則類 ③聖實(天長九一)延喜九 A. D. 823-900)

④修驗灌頂灌頂の所作次第で、聖實律師が大率再興の時行者の靈導によつて龍樹菩薩より直傳した惠印法流である。即ち第一減灌頂、第二覺悟灌頂、第三佛法灌頂、第四結緣灌頂と次第し、各々その所作次第を記してゐる。第一の減灌頂は攝護の身身夜作業の業報を滅除するための灌頂、第二の覺悟灌頂は開迷愚心の無明道を覺悟せしめて無上正等の覺合に登らしめる意義を持ち、第三の佛法灌頂は一に傳燈秘法灌頂とも稱し山伏道の秘典、其密の傳授をなす灌頂である。而して此の三種の灌頂は次で如く減惡趣菩薩・龍樹菩薩・大日如來を本尊とし、本書には減惡趣曼荼羅及び龍樹曼荼羅を挿入してゐる。第四の結緣灌頂は世俗の人を都率の内院に引入して秘密教法の善緣を結ばしめる儀儀で、本尊は又大日如來である。終に支度之事、傳法灌頂大護摩之時座位之事を出し、更に龍樹・不動・愛染・金剛童子・深砂・辨財の六種の曼荼羅を附録してゐる。(服部如實)

【シ】

希望を絶つべきこと、朝暮勤行懈怠すべからざること、四威儀怠るべからざること、入峰修行の道具及び峯中の秘書を大切にすべきこと、三十三通秘訣等を守らざること等、各道の用心・出世の指南を指摘強調されてゐる。

修験道初學辨談

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

元文二年冬、下總國葛飾郡恒福泉が

門初學者の爲めに草記したもので、傳の正誤を辨じ、考證あり、論議があつて是れ亦修験研究上には注意すべき一書であらう。上巻には修験三國融通辨、位優婆塞制法、修験道名義稱道辨、帶劍刃辨、坊合稱寺辨、修験道大要、新編主意並下策用否辨、三國新辨、持・持幣・兼・執・辨・奉幣辨、注連・阿尾・拾・神符・九字呪辨、唵念如律令・火生三昧・不動明王・愛染明王・不動本誓二頌之辨、金剛藏王・飯圓之辨、金毗羅神・龍神・三寶賢神同社家説・宇賀神・草神・夷大黒の二十七頌あり、下巻には五辛食内・高具異類化度眞偽・傳記云々本山天台山伏・説辨・中世大峯發願辨、富山方眞言云々山伏・辨・地帯巫女・可否・年忌法・羅什三藏傳・神分用・心經・辨・三長月・厭離・僧位階・經論新舊譯辨・佛敎用・吳音・神・俱利伽羅木據・登山山嶺稱云・禪定・辨の十六頌をあけて、一々正誤を辨じ考證論議した點、看過し難い良書である。

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

九・七(京大、日大末・七四一)(高大、一一一六)

修験道無常用集

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第二法則類 ④續清科 ⑤延享二(A.D.1745)

修験道傳記

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、元禄四刊 ④(京大、一一二・一一一)

修験道入峯心得

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②一冊 ③存、寛永(哲・三・左・二九)

修験道峯中火堂書

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第一法則類之内 ④秋月纂

鳥海山光明寺秋月が修験道の禁燈護摩に

用ふる事物に數理的解釋を施し、口傳護摩等を集めたものが本書で、上巻尾題は火堂書と云ひ、下巻内題は大峯火堂下口傳護摩となつてゐる。上巻には小木・小木先達の禮儀次第、香波次第、宿立時床莊、圓水・護摩作法、龍比・金剛供養、兼中帶不解事、香波之次第等を解説し、下巻には發・法螺貝吹事、圓御土器・鐵・散杖・乳木・如意・香呂・須彌・香帳・道草・峯中秘藏深語音・禪衣・庄松・大峰・山伏之裝束・柿ノ摺衣・時中秘事・峯中説法・願峯・出峯札について口傳を記してゐる。文政三年及び慶應元年書寫の奥書がある。

修験道法具要解

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②一巻 ③存、明治三四刊 ④(龍大、二六六)

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

味耶得度作法の下を見よ。

修験頓覺速設集

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第二教義類 ④即傳撰

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

修験道諸神勸請通用

①(日)Shu-gen-do-sho (Fakari-ben-dan) ②二巻 ③存、日本大藏經修験道章疏第三教義類之内 ④草

シ

一般ニ此修證義ヲ用テ布教ノ標準トナシ自カラ信シ人ヲシテ信セシメテ吾宗教ヲ顯揚セヨトある如ク、一宗の安心は生を明らかにし、死を明らかにし佛を承當するにありとし、本書の中間の章句は是を布説するものとして、正法眼藏中よりはる主旨に該當する語句を採録編纂したもので、正法眼藏中の語句の原意と本書に編纂された語句との間には、原意と異なるものが生じて居るの

其の内容の構成は、第一章總序に於て生を明らかに死を明らかにするは佛家一大事因縁なる所以を説き、次に第二章懺悔滅罪、第三章受戒入位、第四章發願利生、第五章行持報恩の四章を正法眼藏即心是佛の卷その他に於て説示された如く「即心是佛トハ發心修行菩提涅槃ノ諸佛ナリ未ダ發心修行菩提涅槃セザルハ即心是佛ニアラズ」云々とある發心、修行、菩提、涅槃を此に配したもので、涅槃に該當する第五行持報恩に於て、一宗安心の究極地たる即心是佛を説示して本書を結んで居る。當時に於ては、この第三章に説かれた受戒入位を重視した様であるが、即心是佛を承當する高祖の只管打坐の坐禪を、坐禪章として掲げなかつたのは、或は禪戒一如の見地に據つたのかもと思はれる。兎に角、一宗安心の標目を指示したものとて意義深いものである。

- 時(濃谷琢宗)。修證義典義(福山默堂)。修證義開解(大内青樹)。修證義講話(古知知常)。修證義說教(今川勇輝)。修證義說教大全(曹洞宗務局文書課編)。修證義說教軌範(新井石碑)。修證義說教講話(水野雲牛)。修證義講話(新井石碑)。修證義講話(孤峯智庵)。修證義說教(吉村雄風)。冠註修證義(峰玄光)。修證義講話(大内青樹)。修證義大綱講話(岸澤惟安)。修證義講話(原田風岳)。漢譯として漢譯修證義(隨緣庵)。修證義茶席布鼓がある。(譯籍目録参照) (大久保堅瑞)

- 古知知常述、寺島得一編 明治二四刊 ①東京森江書局
- 修證義說教 ①(日)Shu-sho-gi-tek-kyo. ②存、曹洞宗講義第六 ③吉村雄風述 ④大正六刊 ⑤東京光臨館
- 修證義說教軌範 ①(日)Shu-sho-gi-tek-kyo-ki-han. ②一巻 ③存、新井石碑(元治元一昭和二)A.D.1861-1927)
- 修證義說教講話 ①(日)Shu-sho-gi-tek-kyo-kyo-wa. ②一巻 ③存、水野雲牛述 ④(參考) 譯籍目録
- 修證義說教大全 ①(日)Shu-sho-gi-tek-kyo-dai-kan. ②一巻 ③存、曹洞宗務局文書課編 ④明治三五、昭和二刊 ⑤東京光臨館
- 修證義茶席布鼓 ①(日)Shu-sho-gi-tek-kyo-cha-ki-pan. ②一巻 ③存、曹洞宗務局文書課編 ④明治三四刊 ⑤東京鴻盟社
- 修證義答問 ①(日)Shu-sho-gi-tek-kyo-dan. ②一巻 ③存、隨緣庵撰 ④大正一〇刊 ⑤(駒大) ⑥名古屋圓通寺僧堂
- 修證義典義 ①(日)Shu-sho-gi-tek-kyo-dien-kan. ②一巻 ③存、曹洞宗務局文書課編 ④(參考) 譯籍目録
- 修證義評釋 ①(日)Shu-sho-gi-tek-kyo-haku. ②一巻 ③存、(參考) 譯籍目録
- 修證義開解 ①(日)Shu-sho-gi-tek-kyo-kai-kan. ②一巻 ③存、曹洞宗務局文書課編 ④一巻 ③存

- 大内青樹(弘化二一)大正七A.D.1845-1918)述 ⑤明治四〇刊 ⑥東京鴻盟社
- 修證心印 ①(日)Shu-sho-shin-in. ②一巻 ③存、寂靜撰 ④刊本(正大一八四・四七)
- 修心訣 ①(日)Shu-shin-ke-tsu. (支)Hsu-hsin-chieh. 高麗國普照禪師修心訣、普照禪師修心訣 ②存、大正四八・一〇〇五No.3023) 縮刷一〇・二二二・一八・五、明北1542) 清1633) 清1648) 譯門撮要卷下、國譯禪宗叢書第三 ③朝鮮知節(普照)正隆三一大安11 A.D.1158-1210) ④高麗國普照禪師修心訣の下を以て。
- 修設瑜伽集要施食壇儀 ①(日)Shu-sei-yu-ga-shu-yo-se-jiki-dan-pi. (支)Eisa-shu-yu-ga-shu-yo-se-jiki-dan-pi-shi-tan-i. 瑜伽集要儀軌 ②存、正續三・九・八、雲棲法苑第二〇 ③明株安(嘉靖一一一)萬曆四〇A.D.1532-1612) 說萬曆四三、年八一)重訂

名解行目◎(名庫書)表題所現◎ 月年の刊行◎ (書考書目録註)書末◎ 説解存内◎ 代年作撰◎ 著書◎ 録存◎ 數巻◎ (名書)名題◎ 説略字數

シ

修設瑜伽集要施食壇儀補註

①(支)Shu-sei-yu-ga-shu-yo-se-jiki-dan-gi-ho-cha. (支)Hsu-shu-yo-se-jiki-cha-yo-shi-shih-cha-i-pa-cha. ②存、雲棲法苑第二一 ③明株安(嘉靖一一一)萬曆四〇A.D.1532-1612) 說萬曆四三、年八一)重訂

④本書は、明萬曆三十四年五月望日、自序して重訂した修設瑜伽集要施食壇儀を補註したもので、劉慧開が、清光緒二十五年七月(A.D.1900)金剛經處に於て損益録列したものである。即ち行人をして瑜伽集要の儀軌を正修せしめんが爲めに、行法の次第、諸眞言、印相等に就て懇切に説明したもので、卷末には、竹窓隨筆中の物語を引用し、施食の易からざることを説いて居る。(大久保堅瑞)

修仙靈要錄

①(日)Shu-sen-ryo-yo-rioku. ②一冊 ③存、刊本(智、七・八・中・五)

④法智大師知禮は天禧五年六十二歳、この年眞宗は知禮の盛名を知り、賜命を宣し、中貴人(内侍)、又は内殿頭(倉源清を院に遣し、法華三昧を三晝夜修し國の爲めに祈願せしめた。この時源清は知禮に對して法法の旨趣を知りたいと申し込んだ。この希望を受けて本書を撰述して彼に贈つた。これ

が本書撰述の由來。本書は獨り法華儀法のみに限つた修儀の要旨ではなく、大乘經典に説かれてある修儀の要旨を述べんとしたもので、その述べた所は摩訶止觀及び法華三昧儀に依つて儀用心の要領を述べたもの。従つて儀法を修する時に用ひる師文等は記してある。本書は三章より成る。第一は大乗經典に説く所の行法を身儀に約して列すれば四種(常坐、常行、半行半坐、非行半坐)を出でなかつた。次に今修した所の法華三昧に就いて述べたと云つて、一には功徳を示し、第二には正しく法華三昧を解説し、止觀並に法華三昧儀の文によつて儀法の意義を詳述し、第三には儀法行を修することは圓頓止觀を究免せんと欲するがためであると結ぶ。附記に香華運想偈があるが、科文作者は不明。要するに本書は摩訶止觀と法華三昧儀とによつて法華三昧の要領を記述したもので、僅かに三紙の内には止觀實修の要が述べられてゐるので宋代には廣く一般に流行した。

- 修儀要旨略疏 ①(日)Shu-ryo-yo-shi-ryaku-sho. ②一巻 ③存、智海記
- 寫本
- 修善行經 ①(日)Shu-zen-gyo-kyo. (支)Hsu-shan-hsing-king. ②一巻 ③存、(參考) 武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八
- 修善要法集 ①(日)Shu-zen-yo-ho-shu. ②三巻 ③存、圓忍編 ④寶延二刊 ⑤(谷大、餘大・三三・八八) ⑥(京大、藏・二四・三七)
- 修禪和尚義眞留芳集 ①(日)Shu-jen-ryo-ho-shu. ②一巻 ③存、日本大藏經天台宗顯教章疏第二
- 修禪和尚義眞留芳集 ①(日)Shu-jen-ryo-ho-shu. ②一巻 ③存、日本大藏經天台宗顯教章疏第二
- 修禪和尚義眞留芳集 ①(日)Shu-jen-ryo-ho-shu. ②一巻 ③存、日本大藏經天台宗顯教章疏第二

⑤本書は圓戒論撰起、僧官補任、一心戒文、續日本後記等の内に記されてある修禪大師義眞に關する戒牒、公驗等を輯録したもので、大正四州國清寺戒牒(これは小乘具足戒戒牒である。得戒清輪和尚戒牒。古州刺史陸淳が給した古州公驗。明州刺史鄭審則が給した明州公驗(公驗のこと) 治部省公驗(これは日本、支那に於ける受法を證明したもの。天長元年任、一宗僧官、官符、以、觀山虛空尼本願堂、爲、御願寺、官符、請願講讀所處分、表。天台大師畫像贊。(田島德音)

名解行目◎(名庫書)表題所現◎ 月年の刊行◎ (書考書目録註)書末◎ 説解存内◎ 代年作撰◎ 著書◎ 録存◎ 數巻◎ (名書)名題◎ 説略字數

【シ】

に本書は勿論傳教大師の真蹟には非ず、唐の貞元二十四年は平城天皇大同三年に當る大師歸朝後の年代なり、且つ大師に本書に誌す如き組織體系を有する本覺明の口傳法門の存したる事は考ふること能はず、恐らくは傳教歸朝後三百年餘年忠孝が漢光類案を著したるより稍前に觀山惠心流の哲匠に依つて偽作せられたるものなるべし。

④明治四〇寫 ⑤(各大、餘大・一八七四)

修禪寺相傳日記

①(日)Shu-zen-ji-ki. ②二卷、日本大藏經天台宗顯教章疏第一、傳教大師全集第三 ③最後(神護堂元一弘仁一三A.D. 767-823)記 ④唐貞元二四(A.D. 808)相傳

傳教大師在唐中に道遠和尚より相傳を詳記せる修禪寺の四箇大事の内前二帖即ち一心三觀、心鏡義の内題を修禪寺相傳私注と云ふ、後二帖即ち止觀大旨、法華深義の内題を修禪寺相傳日記と云ふ。別項修禪寺相傳私注を往見よ。(聖入亮忠)

修禪定法

①(日)Shu-zen-ji-ho. ②(支)Hsin-shan-ying-t'ing-fa. ③一巻、④陳眞諦(永元元一大建元A.D. 499-569)撰 ⑤(參考)開元錄第一五、貞元錄第二五

修禪要訣

①(日)Shu-zen-yo-keisu. ②(支)Hsin-shan-yao-shaoh. ③一巻、④(参考)二・一五・五 ⑤覺愛説、唐代明僧問

⑥本書は北天竺の婆羅門禪師佛陀波利(唐支、覺愛)が問に隨つて禪要を略説したる

ので、同録者は、唐の西京禪林寺明僧問であり、唐の儀鳳二年(A.D. 677)に同寺の梵僧慧智が傳譯したものである。續藏所收本は、卷末に「承保三年六月二十二日於光明書寫畢」の識語、天明四年冬播磨の沙門智暉の別修禪要訣序のあるもので、本書の傳承を窺ふことが出来る。智暉は字大幻、空庵と號し、播磨の春日寺、小山寺を創め、法樂寺に住し、天明四年(A.D. 1784)十二月十五日六十八歳で示寂した密教の僧で、序は朱盈居士の別行するに序したものである。其の時説せられた内容は、修禪の諸障難のこと、禪と諸行との關係、結跏坐の坐法、經行、禪と戒、出定の用心、魔事、坐處のこと等、修禪の際に心得べき種々の要訣を示したものである。

修禪六妙門

①(日)Shu-zen-rokku-an-yo-mon. ②(支)Hsin-shan-liu-miao-men. ③一巻、④隋智顛(中大通三開皇一七A.D. 531-597)著 ⑤(參考)東城傳燈目錄卷下、傳教大師將來台州錄、諸宗章疏錄第一

修道講話

①(日)Shu-do-ko-wa. ②一巻、③存 ④多田鼎述 ⑤明治四二刊

修道生活

①(日)Shu-do-sei-kei-wa. ②一巻、③存 ④竹田豐三郎著 ⑤昭和七刊 ⑥京都顯真學苑

修道禪話

①(日)Shu-do-zen-wa. ②一巻、③存 ④(参考)大久保聖彌

修禪六妙門

①(日)Shu-zen-rokku-an-yo-mon. ②(支)Hsin-shan-liu-miao-men. ③一巻、④隋智顛(中大通三開皇一七A.D. 531-597)著 ⑤(參考)東城傳燈目錄卷下、傳教大師將來台州錄、諸宗章疏錄第一

修道講話

①(日)Shu-do-ko-wa. ②一巻、③存 ④多田鼎述 ⑤明治四二刊

修道生活

①(日)Shu-do-sei-kei-wa. ②一巻、③存 ④竹田豐三郎著 ⑤昭和七刊 ⑥京都顯真學苑

修道禪話

①(日)Shu-do-zen-wa. ②一巻、③存 ④(参考)大久保聖彌

【シ】

①一卷、②存、禪學文庫第四 ③新井石禪(元治元一昭和二A.D. 1864-1937)述 ④大正三刊 ⑤東京平午出版社

修道の知津 ①(日)Shu-do-no-chi-shin. ②一巻、③存 ④板原開教著 ⑤昭和七刊 ⑥和歌山經典研究會

修道用心偶六百首布鼓 ①(日)Shu-do-yo-jin-gu-ropp-pyaku-shu-fu-ko. ②一巻、③存 ④陸誠嚴著 ⑤大正一四刊

修法 ①(日)Shu-ho. ②一巻、③存、大日本佛教全書第三五四卷抄之内 ④承慶(元久二一弘安五A.D. 1205-1283)撰

修法儀式見修抄 ①(日)Shu-ho-ritsu-shiki-ken-shu. ②一巻、③存 ④慈風 ⑤寫本(曼珠院)

修法聲明 ①(日)Shu-ho-sho-myō. ②一帖、③存 ④足利時代寫 ⑤(寶善提院)

修法叢談 ①(日)Shu-ho-sōdan. ②一巻、③存 ④磯村靜著 ⑤明治四〇刊

修法打聞抄 ①(日)Shu-ho-damon-sho. ②一帖、③存 ④南北朝時代寫 ⑤(寶善提院)

修法壇 ①(日)Shu-ho-dan. ②一葉、③存 ⑤徳川時代寫 ⑤(寶善提院)

修法雜用心 ①(日)Shu-ho-zo-yo-jin. ②一巻、③存、大日本佛教全書第三五四卷抄之内 ④承慶(元久二一弘安五A.D. 1205-1283)撰

修法打聞抄 ①(日)Shu-ho-damon-sho. ②一帖、③存 ④南北朝時代寫 ⑤(寶善提院)

修法壇 ①(日)Shu-ho-dan. ②一葉、③存 ⑤徳川時代寫 ⑤(寶善提院)

修法之記 ①(日)Shu-ho-no-ki. ②二冊、③存 ④延享三寫 ⑤(寶善提院)

修法用心條 ①(日)Shu-ho-yo-jin-jō. ②一巻、③存 ④覺起(寛永一七一元祿八A.D. 1640-1695)記 ⑤天和元寫 ⑥(妙法院)

修法要集 ①(日)Shu-ho-yo-shū. ②一巻、③存 ④行然作 ⑤建長八(A.D. 1256) ⑥(無動寺)

修密問辨 ①(日)Shu-mitsu-monben. ②一冊、③存 ④通玄(享保一六A.D. 1731)記 ⑤徳川時代寫 ⑥(金剛三昧院)

修藥師儀軌布壇法 ①(日)Shu-yaku-shi-gi-ki-fu-dan-ho. ②(支)Hsin-yao-shih-tu-kuei-pu-tan-fa. ③一巻、④存、大正一九・六四No. 928 ⑤阿旺扎什補譯 ⑥(初め西藏玉頌藏期布(喀贊合甫 sro-bha-shan-sgan-po)は梵本藥師七佛本願功德經を翻譯した。建祖喇嘛普智持金剛(Kun-tse-tse-tso-je-can?)は供養儀軌(藥師七佛供養儀軌如意王經)を造つた。後此の儀軌の漢土未暗なるを見たる傳儀工布布はその漢譯(正藏、一九八〇)を出した。阿旺扎什は此の儀軌に布壇法なきを知りて、此れが補譯を完成し尙二大増越の共済によりて、増儀、各方位佛相、三十五佛相、救度佛母二十一相の添繪、並びに梵天文字等を寫出した。此れが修藥師儀軌布壇法である。布壇法とは即ち曼茶羅であるが、普通の曼茶羅とは異つて、謂ゆる羯磨曼茶羅に當

る。尙此の布壇法の外に修習法が明されてある。

1 (註) 工布札布とは西藏流の名前P. Kung-pu-cha-pu P. a. 此れは恐らく mkhan-po-chen-po (大規範師)即ち傳儀と云ふ義を西藏流に呼んだものではなからうか。蒙古流に観れば Gombochhap. P. 蒙古人なることは勿論、烏來穆素(Ujam-chin)旗の出生で、蒙古人中唯一の漢譯家である。

2 阿旺扎什(A-Wang-cha-shih)は清の道光年間北京淨住寺に住したるも何許の人なるや不詳と傳ふ。恐らくこの人は青海か蒙古の人で、A-wang-jishi と觀るべき名前の人であらう。

3 梵天文字とは古き時代の梵語文字のことであらう。此處には初めに梵字(梵天文字)を挙げ、次に西藏字にて音寫し、次に西藏譯し、更に藏音寫字に隨つて漢音寫し、それを漢譯してゐる。大正藏經中にはかくの如き體裁の印刷は殆んど此處のみであらう。一例を挙げれば次の如し。

梵字
(ācāra-byuhasya-sapta-bhāsa)
藏音寫
(ācāra-byuhasya-sapta-bhāsa)
藏譯
(ācāra-byuhasya-sapta-bhāsa)
漢音寫
(ācāra-byuhasya-sapta-bhāsa)
漢譯
(ācāra-byuhasya-sapta-bhāsa)

修禪要訣 ①(日)Shu-zen-yo-keisu. ②(支)Hsin-shan-yao-shaoh. ③一巻、④(参考)二・一五・五 ⑤覺愛説、唐代明僧問

⑥本書は北天竺の婆羅門禪師佛陀波利(唐支、覺愛)が問に隨つて禪要を略説したる

ので、同録者は、唐の西京禪林寺明僧問であり、唐の儀鳳二年(A.D. 677)に同寺の梵僧慧智が傳譯したものである。續藏所收本は、卷末に「承保三年六月二十二日於光明書寫畢」の識語、天明四年冬播磨の沙門智暉の別修禪要訣序のあるもので、本書の傳承を窺ふことが出来る。智暉は字大幻、空庵と號し、播磨の春日寺、小山寺を創め、法樂寺に住し、天明四年(A.D. 1784)十二月十五日六十八歳で示寂した密教の僧で、序は朱盈居士の別行するに序したものである。其の時説せられた内容は、修禪の諸障難のこと、禪と諸行との關係、結跏坐の坐法、經行、禪と戒、出定の用心、魔事、坐處のこと等、修禪の際に心得べき種々の要訣を示したものである。

修禪六妙門 ①(日)Shu-zen-rokku-an-yo-mon. ②(支)Hsin-shan-liu-miao-men. ③一巻、④隋智顛(中大通三開皇一七A.D. 531-597)著 ⑤(參考)東城傳燈目錄卷下、傳教大師將來台州錄、諸宗章疏錄第一

修道講話 ①(日)Shu-do-ko-wa. ②一巻、③存 ④多田鼎述 ⑤明治四二刊

修道生活 ①(日)Shu-do-sei-kei-wa. ②一巻、③存 ④竹田豐三郎著 ⑤昭和七刊 ⑥京都顯真學苑

修道禪話 ①(日)Shu-do-zen-wa. ②一巻、③存 ④(参考)大久保聖彌

修禪要訣 ①(日)Shu-zen-yo-keisu. ②(支)Hsin-shan-yao-shaoh. ③一巻、④(参考)二・一五・五 ⑤覺愛説、唐代明僧問

⑥本書は北天竺の婆羅門禪師佛陀波利(唐支、覺愛)が問に隨つて禪要を略説したる

ので、同録者は、唐の西京禪林寺明僧問であり、唐の儀鳳二年(A.D. 677)に同寺の梵僧慧智が傳譯したものである。續藏所收本は、卷末に「承保三年六月二十二日於光明書寫畢」の識語、天明四年冬播磨の沙門智暉の別修禪要訣序のあるもので、本書の傳承を窺ふことが出来る。智暉は字大幻、空庵と號し、播磨の春日寺、小山寺を創め、法樂寺に住し、天明四年(A.D. 1784)十二月十五日六十八歳で示寂した密教の僧で、序は朱盈居士の別行するに序したものである。其の時説せられた内容は、修禪の諸障難のこと、禪と諸行との關係、結跏坐の坐法、經行、禪と戒、出定の用心、魔事、坐處のこと等、修禪の際に心得べき種々の要訣を示したものである。

修禪六妙門 ①(日)Shu-zen-rokku-an-yo-mon. ②(支)Hsin-shan-liu-miao-men. ③一巻、④隋智顛(中大通三開皇一七A.D. 531-597)著 ⑤(參考)東城傳燈目錄卷下、傳教大師將來台州錄、諸宗章疏錄第一

修道講話 ①(日)Shu-do-ko-wa. ②一巻、③存 ④多田鼎述 ⑤明治四二刊

修道生活 ①(日)Shu-do-sei-kei-wa. ②一巻、③存 ④竹田豐三郎著 ⑤昭和七刊 ⑥京都顯真學苑

修道禪話 ①(日)Shu-do-zen-wa. ②一巻、③存 ④(参考)大久保聖彌

修禪要訣 ①(日)Shu-zen-yo-keisu. ②(支)Hsin-shan-yao-shaoh. ③一巻、④(参考)二・一五・五 ⑤覺愛説、唐代明僧問

⑥本書は北天竺の婆羅門禪師佛陀波利(唐支、覺愛)が問に隨つて禪要を略説したる

ので、同録者は、唐の西京禪林寺明僧問であり、唐の儀鳳二年(A.D. 677)に同寺の梵僧慧智が傳譯したものである。續藏所收本は、卷末に「承保三年六月二十二日於光明書寫畢」の識語、天明四年冬播磨の沙門智暉の別修禪要訣序のあるもので、本書の傳承を窺ふことが出来る。智暉は字大幻、空庵と號し、播磨の春日寺、小山寺を創め、法樂寺に住し、天明四年(A.D. 1784)十二月十五日六十八歳で示寂した密教の僧で、序は朱盈居士の別行するに序したものである。其の時説せられた内容は、修禪の諸障難のこと、禪と諸行との關係、結跏坐の坐法、經行、禪と戒、出定の用心、魔事、坐處のこと等、修禪の際に心得べき種々の要訣を示したものである。

名所行目◎(名庫書)表題所現◎ 月年の刊寫◎ (書考參書附註)書末◎ 説解存内◎ 代年作著◎ 著書◎ 缺存◎ 數卷◎ (名書)名題◎ 號明字數

名所行目◎(名庫書)表題所現◎ 月年の刊寫◎ (書考參書附註)書末◎ 説解存内◎ 代年作著◎ 著書◎ 缺存◎ 數卷◎ (名書)名題◎ 號明字數

【シ】

⑥享保五 (A. D. 1730)
 ⑦峰中十種の形儀によつて十界一如の説を明し、大日不動の正灌頂・當相即道の規則・即事而眞の教旨・如實知自心の内證・凡聖不二・即身成佛の秘蘊を説き、修證道の奥蘊を究明した書。第一巻には當山階級昇進圖・華中十種形儀・十種形儀淺深・十種形儀・第一樂量形儀・同設斷形儀・同水斷形儀・同相模形儀、第二巻には第二儀悔形儀・儀悔文・六親・福田敬田忠田・當山初入新客並度衆・新發意製法・坊號・第三延年形儀・院號・第四應身形儀・錦地・抖擻・五停心觀、第三巻には第五頭形儀・二種獨覺・緣覺乘菩薩乘所持錫杖・法花十八品事・十二因緣・四生百却・權律師並三僧祇・三妄執之再釋、第四巻には第六乳木榮燈形儀・榮頂摩・當山護摩五段・神供・護摩支具表示・彌勒菩薩・轉法輪形儀・權大小僧都、第五巻には第七床定形儀並經緯・金剛界三十七尊・一百廿八尊・十佛刹微塵數・文殊菩薩、第八自供養法形儀・觀音阿闍梨・一切供養・阿闍梨位・觀自在菩薩・雜問答、第六巻には第九本有明形儀之事並摩羅語書、普賢大越家・五轉・種子並眞言・大越家職・降三世教令輪寶菩薩・普賢・鈴繫・北大摩・俗稱普行・大峰略緣起・安居精求・持錫・寺・不動使者・五大虛空・變音・牛王・孔雀明王咒・降童・願物・持物・心即本尊・探基歌・梵唄・八宗九宗等・青龍・三摩耶・齊料・精進・鐘馗・大般若轉讀、第七巻には第十床形儀・日用床座・出世法印職・摩婆金・八輻輪寶並成儀・蘇嚧之製衣白色・兩部大日・不二事並毗盧遮那を説述してゐる。記

修六通觀行次第

① (日) Shu-roku
 ② (支) Hsu-shi-shi-dai
 ③ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ④ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑤ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑥ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑦ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑧ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑨ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑩ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑪ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑫ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑬ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑭ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑮ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑯ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑰ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑱ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑲ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑳ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉑ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉒ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉓ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉔ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉕ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉖ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉗ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉘ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉙ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉚ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉛ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉜ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉝ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉞ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉟ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊱ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊲ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊳ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊴ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊵ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊶ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊷ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊸ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊹ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊺ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊻ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊼ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊽ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊾ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊿ (支) Hsu-shi-shi-dai

述顯密に亙り、神道にも關聯し、所論的確、證門詳書中の白眉と稱せられてゐる。
 (風部如實)
 ① (支) Hsu-shi-shi-dai
 ② (支) Hsu-shi-shi-dai
 ③ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ④ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑤ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑥ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑦ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑧ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑨ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑩ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑪ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑫ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑬ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑭ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑮ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑯ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑰ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑱ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑲ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑳ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉑ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉒ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉓ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉔ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉕ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉖ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉗ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉘ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉙ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉚ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉛ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉜ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉝ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉞ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉟ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊱ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊲ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊳ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊴ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊵ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊶ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊷ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊸ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊹ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊺ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊻ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊼ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊽ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊾ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊿ (支) Hsu-shi-shi-dai

珠香院御葬禮記

① (日) Shu-kyo
 ② (支) Hsu-shi-shi-dai
 ③ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ④ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑤ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑥ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑦ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑧ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑨ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑩ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑪ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑫ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑬ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑭ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑮ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑯ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑰ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑱ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑲ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑳ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉑ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉒ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉓ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉔ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉕ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉖ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉗ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉘ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉙ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉚ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉛ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉜ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉝ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉞ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉟ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊱ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊲ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊳ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊴ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊵ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊶ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊷ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊸ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊹ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊺ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊻ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊼ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊽ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊾ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊿ (支) Hsu-shi-shi-dai

須河警噓經

① (日) Shu-kyo
 ② (支) Hsu-shi-shi-dai
 ③ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ④ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑤ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑥ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑦ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑧ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑨ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑩ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑪ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑫ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑬ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑭ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑮ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑯ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑰ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑱ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑲ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑳ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉑ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉒ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉓ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉔ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉕ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉖ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉗ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉘ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉙ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉚ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉛ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉜ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉝ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉞ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉟ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊱ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊲ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊳ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊴ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊵ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊶ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊷ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊸ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊹ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊺ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊻ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊼ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊽ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊾ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊿ (支) Hsu-shi-shi-dai

須眞天子經

① (日) Shu-kyo
 ② (支) Hsu-shi-shi-dai
 ③ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ④ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑤ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑥ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑦ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑧ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑨ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑩ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑪ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑫ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑬ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑭ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑮ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑯ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑰ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑱ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑲ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑳ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉑ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉒ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉓ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉔ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉕ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉖ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉗ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉘ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉙ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉚ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉛ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉜ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉝ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉞ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉟ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊱ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊲ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊳ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊴ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊵ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊶ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊷ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊸ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊹ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊺ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊻ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊼ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊽ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊾ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊿ (支) Hsu-shi-shi-dai

ある。通常は單に『須眞天子經』又は佛説を冠して『佛説須眞天子經』と云はれる。須眞天子と文殊師利の問答によつて摩訶乘辟支佛業を彈呵して菩薩業を宣揚するものである。
 四卷十八品に分れたる内容を略述する。
 (第一卷) 問四事品第一 須眞天子は菩薩の不安信を得て大乘を志す所以以下三十二の質問をなし、佛はこれに應じて一々佛を以て答へ給ふ。
 (第二卷) 答法議品第二 懇ろなる三十二事章句法の説法を聽きたる須眞天子は文殊師利に、重ねて廣説せんことを願ひ、文殊師利は簡單なる句を以てこれに答へ、佛は善哉々々と讃嘆する。
 法純淑品第三 我所問の法は純淑と爲すや否やとの須眞天子の問に對し文殊師利は答へて『所有無ければ則ち純淑の法議』であると言ひ、次いで非時時心の心關して論じてゐる。
 摩訶品第四 是に於いて須眞天子は諸大弟子に疑問の點があれば文殊師利にきけと云ふ。そこで摩訶迦葉・舍利弗・目健連等の佛十大弟子は夫々質問を試みては文殊師利の答に歡喜默然する。而して文殊師利は『其れ大乘は皆一切乘を生ず』と述べて本品を結んでゐる。
 (第三卷) 無畏品第五 更に文殊師利は須眞天子の菩薩の畏に關する質疑に對し、菩薩の畏懼は有爲無爲の兩因縁に從ふと述べ、無所畏を得るの所以を併せ説く。

珠玉抄

① (日) Shu-kyo
 ② (支) Hsu-shi-shi-dai
 ③ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ④ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑤ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑥ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑦ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑧ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑨ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑩ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑪ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑫ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑬ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑭ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑮ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑯ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑰ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑱ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑲ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑳ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉑ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉒ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉓ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉔ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉕ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉖ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉗ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉘ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉙ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉚ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉛ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉜ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉝ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉞ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉟ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊱ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊲ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊳ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊴ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊵ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊶ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊷ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊸ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊹ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊺ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊻ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊼ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊽ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊾ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊿ (支) Hsu-shi-shi-dai

須陀利經

① (日) Shu-kyo
 ② (支) Hsu-shi-shi-dai
 ③ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ④ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑤ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑥ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑦ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑧ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑨ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑩ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑪ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑫ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑬ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑭ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑮ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑯ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑰ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑱ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑲ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑳ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉑ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉒ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉓ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉔ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉕ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉖ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉗ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉘ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉙ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉚ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉛ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉜ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉝ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉞ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉟ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊱ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊲ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊳ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊴ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊵ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊶ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊷ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊸ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊹ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊺ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊻ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊼ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊽ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊾ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊿ (支) Hsu-shi-shi-dai

須大摩太子經

① (日) Shu-kyo
 ② (支) Hsu-shi-shi-dai
 ③ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ④ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑤ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑥ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑦ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑧ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑨ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑩ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑪ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑫ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑬ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑭ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑮ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑯ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑰ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑱ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑲ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑳ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉑ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉒ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉓ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉔ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉕ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉖ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉗ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉘ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉙ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉚ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉛ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉜ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉝ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉞ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉟ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊱ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊲ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊳ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊴ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊵ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊶ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊷ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊸ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊹ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊺ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊻ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊼ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊽ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊾ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊿ (支) Hsu-shi-shi-dai

【シ】

住道品第六 云何んが菩薩は道に住することを得るかとの須眞天子の問に對して文殊師利は、菩薩は六波羅密を持たずして而も六波羅密を具す、故に道に住することを得と説き、次いで
 菩薩行品第七 その六波羅密によつて、心意平等なるは施與行、心意已調なるは戒行、心意已寂なるは忍辱行、意懈息せざるは精進行、身意靜默なるは禪思行、所有に著せざるは慧智行であると述べる。
 分別品第八 文殊師利は須眞天子に向つて菩薩の徳を讃嘆し、結局菩薩は一切法を知り、當來未法の法を知るよとする。
 (第四卷) 須眞天子の問に答へて菩薩の徳を讃し、最後に
 道相品第十 於ては、『我所處は道類』と説く。道處は寂靜であると云ひ、道相は虛空であると述べる。佛はこれを讃し、彌勒菩薩及び阿難に對し、本經の受持を勧めらる。
 以上の所説を見るに本經に主として活躍せるは須眞天子と文殊師利童子である。文殊師利の所説を以て大乘佛敎を強調するものがある。
 (三好鹿雄)

須眞天子經記

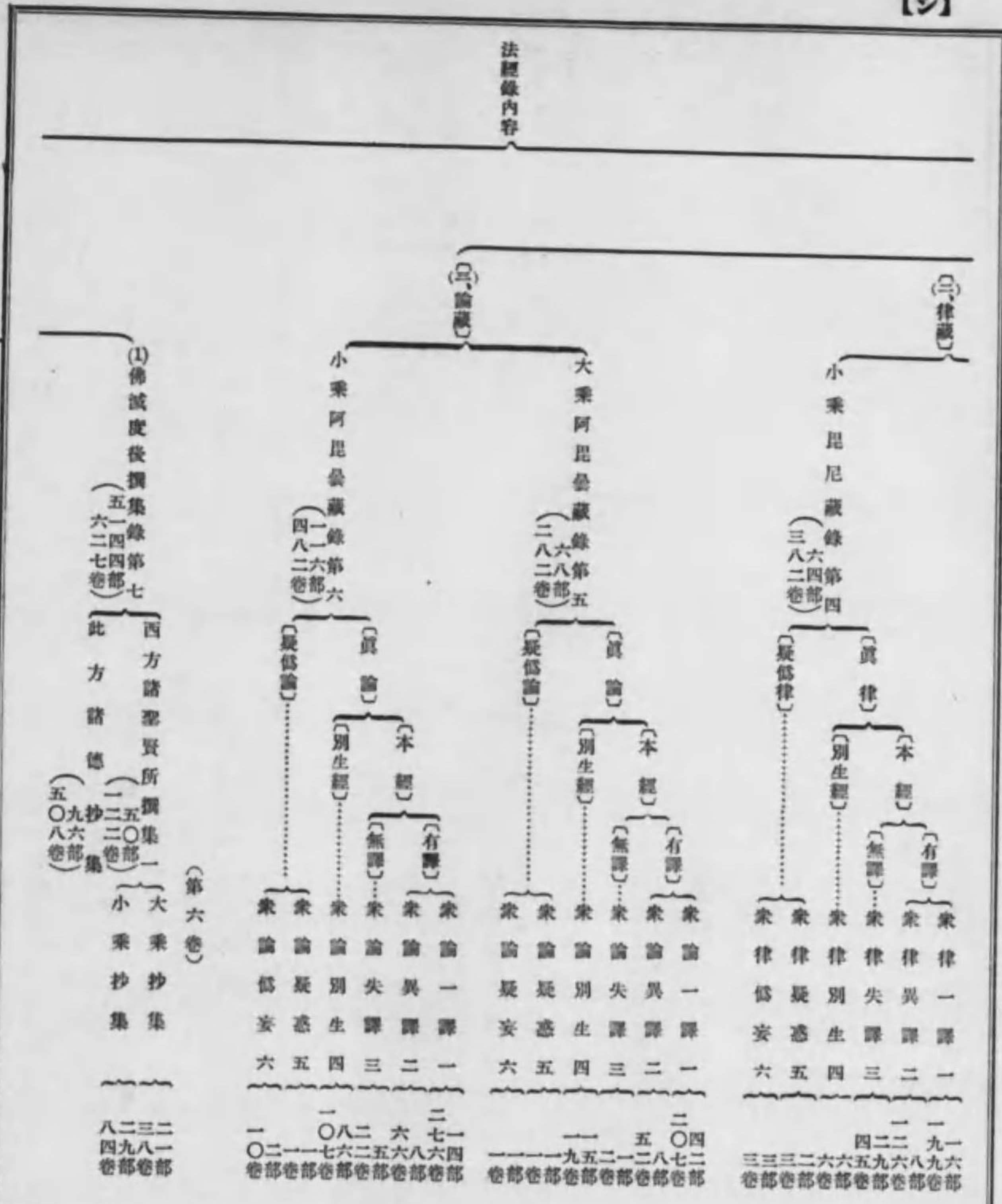
① (日) Shu-shin-ten
 ② (支) Hsu-shi-shi-dai
 ③ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ④ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑤ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑥ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑦ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑧ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑨ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑩ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑪ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑫ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑬ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑭ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑮ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑯ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑰ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑱ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑲ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑳ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉑ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉒ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉓ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉔ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉕ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉖ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉗ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉘ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉙ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉚ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉛ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉜ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉝ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉞ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉟ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊱ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊲ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊳ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊴ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊵ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊶ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊷ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊸ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊹ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊺ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊻ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊼ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊽ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊾ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊿ (支) Hsu-shi-shi-dai

須多羅入胎經

① (日) Shu-ta-ra
 ② (支) Hsu-shi-shi-dai
 ③ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ④ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑤ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑥ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑦ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑧ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑨ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑩ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑪ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑫ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑬ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑭ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑮ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑯ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑰ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑱ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑲ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑳ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉑ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉒ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉓ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉔ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉕ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉖ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉗ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉘ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉙ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉚ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉛ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉜ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉝ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉞ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉟ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊱ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊲ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊳ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊴ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊵ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊶ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊷ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊸ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊹ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊺ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊻ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊼ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊽ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊾ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㊿ (支) Hsu-shi-shi-dai

須大摩太子經

① (日) Shu-dai-ai
 ② (支) Hsu-shi-shi-dai
 ③ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ④ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑤ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑥ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑦ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑧ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑨ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑩ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑪ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑫ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑬ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑭ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑮ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑯ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑰ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑱ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑲ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ⑳ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉑ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉒ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉓ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉔ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉕ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉖ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉗ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉘ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉙ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉚ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉛ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉜ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉝ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉞ (支) Hsu-shi-shi-dai
 ㉟ (支) Hsu-shi-shi-dai



従つたものであるから、その間に多少の無理があつたり、時に又想像もしいやうな間違ひに陥つて居る點も尠くない。然し、それにしてもこれだけの配當が出来たといふことは、流石に二十大徳の合議編纂の賜であつたと云はなければならぬのである。猶、以上の組織の中で特に注意して置かなければならないことは、經律論の各部に存する疑惑分なる項目である。この疑惑分なる部分の内容をなすものは本録に特有のものであつて、従前の經錄には全然偽經と考ふるものか、或は偽經の疑を持つものを、非真經とか、或は疑偽經とかとして區別した例があるけれども、其れ等は本録に云ふ疑惑分と全然性質を異にして居る。本録に云ふ疑惑分なるものは明かな非真經であつて、この點は問題にならないことであるが、本録に疑惑分と云つて居るものには二種類のものがあつて、一つはそれが偽經ならざるやに就て疑ひを挿んで居るものであり、他はその翻譯者が何人たるかに就て議論のある經に關して暫く「その翻譯者に關して」疑問を附して居るものである。例へば、大乘經の疑惑分中にある龍樹尊師變化經一巻が安公の偽經中にある四事解脫經とその内容が同じき爲に偽經の疑ひを挿んで居る如きは、その内容中に疑ひを挿んで居るものの例であり、大乘經の疑惑分にある仁王經であるとか、或は衆論疑惑分の中にある起信論の如きは、仁王經の下註に「別錄撰此經是竺法護譯經首又題云是羅什撰集佛語今案此經始末義理文詞似非二寶所撰」

名所行録 (名庫書) 漢語所撰 月年の刊寫 (書考參書釋註) 書本 (説解存内) 代年作著 (書考) 缺存 (名書) 名題 (書考) 號字數



提耶合北天竺健陀羅國三藏閣那多等の如きも、皆當寺に於て譯經に従事し、當時の大興善寺には成都の沙門智顛、昭玄都監陳留沙門僧榮、成都沙門釋僧現等を始め長安洪度等の如き諸徳が居つたから、此等の僧榮、僧現、洪度の如きもその中に居つたかも知れない。又、開皇十二年、健陀羅國三藏閣那多の大興善寺に入るや、僧休、法榮、法經、慧藏、洪遵、慧遠、法纂、僧暉、明穆、曇遷等の十大徳に勸して大興善寺に住せしめ、始末を監掌し、指歸を設定せしめられたと傳へられて居る。この十大徳中の明穆は揚化寺の明穆である。法經錄は、前述の如く、開皇十四年五月十日の勅命に基き、七月十四日に淨寫を終り上献したのであるから、勿論此等の諸徳がその二十大徳の中に含まれて居つたであらうことは、蓋し推測に難くない。唯この中の慧遠は淨影寺の慧遠であつて、前記の十大徳の員に備つて居つたけれども、開皇十二年の六月に示寂して居るから、法經錄の撰集には加つて居らなかつたものと見なければならぬ。又歴代三寶記の撰集者費長房も、後に説く如く本録撰集の二十大徳の一員であつたものやうである。

貞元錄第三〇 (林屋友次郎) 衆經目錄 (白) Sha-kye-mokke-ya ku (文) Chang-ching-mu-lu. 仁壽内典錄、隋五卷錄、仁壽錄、彥偉錄 (五卷) 存、大正五五・一五〇 No. 2147. 續編二、三三三三、北1055席、南1074席、元1069

名所行録 (名庫書) 漢語所撰 月年の刊寫 (書考參書釋註) 書本 (説解存内) 代年作著 (書考) 缺存 (名書) 名題 (書考) 號字數

【シ】

① 卷 ② 存 ③ 澄香記 ④ 弘安二〇寫 (南漢藏)
受法指南鈔 ① (日) Ju-hō-shi-nan-shō. ① 卷 ② 存 ③ 寫本(龍大)二六一三・一二(享保一一寫(寶善提院))
受法用心集 ① (日) Ju-hō-yō-jin-shū. 破邪歸正鈔 ② 二卷 ③ 存 ④ 正定(建保三—文永五後 A. D. 1215—1268—)撰
足利時代寫 ① (寶龜院)
受明灌頂作法次第 ① (日) Ju-myō-kwan-jō-sa-hō-shi-ki. ② 二卷 ③ 存 ④ 寫本(金剛三昧院)
受明灌頂再三阿闍梨位一度事 ① (日) Ju-myō-kwan-jō-sai-san-a-ri-rit-t-lahl-do-no-koto. ② 一帖 ③ 存 ④ 寶永二寫 (寶龜院)
受明灌頂私記 ① (日) Ju-myō-kwan-jō-shi-ki-kam-mon. ② 一冊 ③ 存 ④ 德川時代寫 (寶善提院)
受明灌頂初後夜作法 ① (日) Ju-myō-kwan-jō-shō-go-ya-sa-hō. ② 二帖 ③ 存 ④ 德川時代寫 (寶龜院)
受明灌頂投花包紙 ① (日) Ju-myō-kwan-jō-tō-ke-tsu-sumi-gami. ② 二包 ③ 存 ④ 德川時代寫 (寶龜院)
受明灌頂用意私記 ① (日) Ju-myō-kwan-jō-yō-i-shi-ki. ② 一帖 ③ 存 ④

方常記 ① 寛政一二寫 (寶龜院)
受用三水要行法 ① (日) Ju-yō-san-yō-hō. (支) Shou-yung-san-shūi-yō-hō. ① 卷 ② 存 ③ 大正四五・九〇(二)No. 1902. 縮本六・三三〇・八 義淨(貞觀九—先天二 A. D. 635—713)撰 ④ 唐翻經一四—開元元 (A. D. 697—713)
 本書は佛敎家に於ける僧俗の飲用及び洗滌に關する三種用水の性質使用法を明せるもので、著者義淨は華教を博く索めて依憑として、彼れが印度遊歴に依つて實見して來た所謂西方僧伽衆生所用法を基として、書けるものである。義淨の所謂華教と言ふのは有部の新舊律のこと即ち十誦律及び彼れの將來の有部毘奈耶のことである。大約千五百字の小品のもので前半は三水について説明する。三水は(一)には非時水で沙彌人が自らを以つて灌漑して手前のみ用ふるに足るもの、(二)には時水で手汚染のものが直接水に觸れぬに掃除の水で、比丘の用ふるもの、時非時に任せて飲み得るもので煎茶煮茶等に用ふるもの、(三)に觸用水で大小便向處手足洗滌に用ふるもの、洗滌用水を言ふので、三者の中時水について最も詳細に取扱ひ方を論じて居る。後半は専ら三水受用の過誤又は準備及び貯藏方より生ずる過失について律制に従つて六罪より一萬五千四百八十罪に至る罪を生ずることを明して居る。本書は十誦律等に虫水の使用に關して四種の禁律のあるより生じた水の使用法に關する方法で、水中の生

虫を殺さるゝこと、比丘の飲用水は絕對なるべきことを全巻に亘つて強調して居る。(佐藤密雄)
受用三水要法 ① (日) Ju-yō-san-yō-hō. (支) Shou-yung-san-shūi-yō-hō. ① 卷 ② 存 ③ 大正四五・九〇(二)No. 1902. 縮本六・三三〇・八 唐義淨(貞觀九—先天二 A. D. 635—713)撰 (參考) 東城傳燈目錄卷一
受欲聲經 ① (日) Ju-yoku-shō-kyō. (支) Shou-yū-shēng-ching. ① 卷 ② 失譯 (參考) 貞元錄第三
呪温疫氣經 ① (日) Ju-on-yak-ki-kyō. (支) Chou-wen-i-chi-ching. ② 一巻 ③ 爲疑經 (參考) 武周錄第一五
呪鵝齒經 ① (日) Ju-ka-shi-kyō. (支) Chou-ka-shi-ching. 呪鵝齒 ① 卷 ② 失譯 (參考) 東晉竺曇無蘭(一太元六一〇 A. D. 381—395)撰 (參考) 出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、辨泰錄第三、武周錄第一、開元錄第一、貞元錄第二四
呪鵝齒呪 ① (日) Ju-ka-shi-ju. (支) Chou-ka-shi-chou. ② 一巻 ③ 失譯 (參考) 三寶紀第四、內典錄第一
呪鵝 ① (日) Ju-ka. ② 存 ③ 惠心僧都全集第五
呪鵝 ① 葬送の呪願文。三界無常を述べて、亡者に知識の教へを信じて心佛衆生三無差別を悟り、永離生死、煩惱盡せよと勸め文を擧げて心外無別法心淨土淨云々と云ふ。恐く禪宗風の罪儀が流行した頃の作。故に惠心

僧都に假托して後人の偽作したものであらう。
 ④ 寫本(寶龜院)(寶善提院) (鳥島德音)
呪願經 ① (日) Ju-gwan-kyō. (支) Chou-guan-ching. ② 一巻 ③ 疑偽經 (參考) 法經錄第四、仁壽錄第四、辨泰錄第四
呪願大事 ① (日) Ju-gwan-dai-ji. ② 一帖 ③ 存 ④ 德川時代寫 (寶龜院)
呪牙齒經 ① (日) Ju-ge-shi-kyō. (支) Chou-ya-chi-ching. ② 一巻 ③ 失譯 (參考) 東晉竺曇無蘭(一太元六一〇 A. D. 381—395)撰 (參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四
呪牙痛呪 ① (日) Ju-ge-shi-ju. (支) Chou-ya-tung-chou. 呪牙痛、呪牙痛 ② 一巻 ③ 失譯 (參考) 出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、辨泰錄第三、歷代三寶紀第四、內典錄第一
呪眼痛經 ① (日) Ju-ge-shi-kyō. (支) Chou-yan-tung-ching. ② 一巻 ③ 失譯 (參考) 東晉竺曇無蘭(一太元六一〇 A. D. 381—395)撰 (參考) 法經錄第二、仁壽錄第三、辨泰錄第三、武周錄第一、開元錄第一、貞元錄第二四
呪眼痛呪 ① (日) Ju-ge-shi-ju. (支) Chou-yan-tung-chou. 呪眼痛呪 ② 一巻 ③ 失譯 (參考) 出三藏記第四、三寶紀第四、內典錄第一
呪五首 ① (日) Ju-go-shū. (支) Chou-wu-shou. 呪五首經、龍藏乘即千轉陀羅尼經 ② 一巻 ③ 存 ④ 大正三〇・一七 No. 1034

名所行録◎(名家書)漢藏所撰◎月年の刊寫◎(書考)書經註書太◎説解書内◎代年作漢◎漢書◎缺存◎教書◎(名書)名題◎號鳴字數

【シ】

館同〇・二二一・一、北三三四良、南三三三良、元三三三良、明北三三三能、清三三三能、歷三三三、天三三三良、法三三三男、明南三三三改、天三三三〇
 ④ 唐玄奘(玄奘)譯(貞觀元 A. D. 627—645)撰 ⑤ 顯慶元(A. D. 654)
 ① 此は單に以下の五首の眞言が列記されてあるだけで、序文も流通文も無いから、断片的に咒文だけを集めて有るのに過ぎない。龍藏乘即千轉陀羅尼咒・六字(文殊)咒・七俱胝・佛咒・一切如來隨心咒・觀自在菩薩隨心咒の五首が漢字音譯で出である。尙千轉陀羅尼咒は更に梵字眞言が添加されてある。千轉陀羅尼は陀羅尼集第五卷に出てあるが(大正、一八、八二六)音譯が略々一致して居る、同經では此の陀羅尼を誦すれば、四重禁並に五逆罪が悉く皆な消滅すと説いてある。
 ② (參考) 內典錄第五、譯經圖記第四、開元錄第八 (神林隆淨)
呪三首經 ① (日) Ju-san-shū-kyō. (支) Chou-san-shou-ching. ② 一巻 ③ 存 ④ 大正二一・六四〇 No. 1338. 縮成一二、二二・一、元三三三良、明北三三三能、清三三三能、天三三三良、明南三三三改、天三三三〇
 ④ 漢風元—垂拱四年(A. D. 676—685)撰 ⑤ 貞三首とは大輪金剛陀羅尼と日光菩薩咒と摩利支(Marici)陀羅尼と日光菩薩咒と金剛陀羅尼を誦すること二十一遍して、一切の瘴場に入る時は、その法悉く成就すとあり、第二に日光菩薩の呪を一週誦すれば、一切の障を滅し、惡魔と天災とを辟除すとあり、第三の摩利支天の咒を誦すれば、

護身となると説いてある。摩利支天の眞言は兵法虎の巻にも出である。
 (神林隆淨)
呪齒經 ① (日) Ju-shi-kyō. (支) Chou-shi-ching. 呪齒痛經、鵝齒經 ② 一巻 ③ 存 ④ 大正二一・四九一 No. 1337. 縮成一二、二二・一、五、北三三四良、南三三三良、元三三三良、明北三三三能、清三三三能、天三三三〇
 ④ 唐玄奘(玄奘)譯(貞觀元 A. D. 627—645)撰 ⑤ 太元六一〇(一〇 A. D. 381—395)
 ① 齒痛の時、誦する所の經。佛、法、僧は三寶と舍利弗とに歸命し、且彼國王として差呪無の名が擧げてある。總て一二二字にして、密教諸經中、最小に屬する經である。又此の經は陀羅尼集第五卷(大正二一、六〇九)咒齒陀羅尼と題して收められ、これには「淨水哈咒一週、吐水器中咒七週止」の十四字が終りに加へられてある。尙ほ同集第八卷(大正二二、六二六)に大神仙赤眼咒牙齒痛經と題する經は、是れ亦同類の經と思はるゝものである。出三藏記集第四失譯經錄に「咒齒商一卷、或云咒齒商、或云咒齒。咒齒商異本」とあるもの恐らく前の二經と思はるゝも詳かにし難い。(神林隆淨)
呪時氣經 ① (日) Ju-jiki-kyō. (支) Chou-shi-ki-ching. 呪時氣、呪時氣病經 ② 一巻 ③ 存 ④ 東晉竺曇無蘭(一太元六一〇 A. D. 381—395)撰 (參考) 出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、辨泰錄第三、開元錄第一四、貞元錄第二四
呪時氣病經 ① (日) Ju-jiki-byō-kyō. (支) Chou-shi-ki-byō-ching. 呪時氣病經 ② 一巻 ③ 存 ④ 東晉竺曇無蘭(一太元六一〇 A. D. 381—395)撰 (參考) 出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、辨泰錄第三、開元錄第一四、貞元錄第二四

呪小兒經 ① (日) Ju-shō-ki-kyō. (支) Chou-shō-ki-ching. ② 一巻 ③ 存 ④ 大正二一・四九一 No. 1339. 縮成一二、二二・一、五、北三三四良、南三三三良、元三三三良、明北三三三能、清三三三能、天三三三〇
 ④ 唐玄奘(玄奘)譯(貞觀元 A. D. 627—645)撰 ⑤ 呪小兒經は眞言と佛法・僧の三寶、と過去七佛に歸依することを記した、極めて簡短なもので、五行足らずのものである。
 小兒の頭痛或は腹痛の時に誦する所の經である。蓋し眞言密教にては小兒を祈るには本經を用ひず、阿梨帝母經に據る。但し仁海は咒願經に依つて小兒を祈つたから、小野流にては之に據る。(神林隆淨)
呪腫發地神放鳥等 ① (日) Ju-shū-hatsu-ji-shin-hō-cho-ō. ② 一帖 ③ 存 ④ 德川時代寫 (寶龜院)
呪小兒經 ① (日) Ju-shō-ki-kyō. (支) Chou-shō-ki-ching. ② 一巻 ③ 存 ④ 大正二一・四九一 No. 1339. 縮成一二、二二・一、五、北三三四良、南三三三良、元三三三良、明北三三三能、清三三三能、天三三三〇
 ④ 唐玄奘(玄奘)譯(貞觀元 A. D. 627—645)撰 ⑤ 呪小兒經は眞言と佛法・僧の三寶、と過去七佛に歸依することを記した、極めて簡短なもので、五行足らずのものである。
 小兒の頭痛或は腹痛の時に誦する所の經である。蓋し眞言密教にては小兒を祈るには本經を用ひず、阿梨帝母經に據る。但し仁海は咒願經に依つて小兒を祈つたから、小野流にては之に據る。(神林隆淨)

呪小兒經 ① (日) Ju-shō-ki-kyō. (支) Chou-shō-ki-ching. ② 一巻 ③ 存 ④ 大正二一・四九一 No. 1339. 縮成一二、二二・一、五、北三三四良、南三三三良、元三三三良、明北三三三能、清三三三能、天三三三〇
 ④ 唐玄奘(玄奘)譯(貞觀元 A. D. 627—645)撰 ⑤ 呪小兒經は眞言と佛法・僧の三寶、と過去七佛に歸依することを記した、極めて簡短なもので、五行足らずのものである。
 小兒の頭痛或は腹痛の時に誦する所の經である。蓋し眞言密教にては小兒を祈るには本經を用ひず、阿梨帝母經に據る。但し仁海は咒願經に依つて小兒を祈つたから、小野流にては之に據る。(神林隆淨)
呪眼調法記大全 ① (日) Ju-yan-chō-hō-ki-tai-zen. ② 一巻 ③ 存 ④ 安永一〇刊 (龍大)二〇九九・一七五)
呪眼 ① (日) Ju-yan-zōku. (支) Chou-yan-chō. 呪眼 ② 一巻 ③ 失譯 (參考) 漢安世高(一建和二—建享三 A. D. 148—170)撰 (參考) 出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、辨泰錄第三、開元錄第一四、貞元錄第二四
呪賊經考異 ① (日) Ju-zōki-kyō. ② 一巻 ③ 存 ④ 如幻道空(寛文六一—寶曆元 A. D. 1666—1751)撰 (參考) 大日本佛敎全書續刊決定書目
呪賊經法 ① (日) Ju-zōki-kyō-hō. ② 一帖 ③ 存 ④ 德川時代寫 (寶龜院)

名所行録◎(名家書)漢藏所撰◎月年の刊寫◎(書考)書經註書太◎説解書内◎代年作漢◎漢書◎缺存◎教書◎(名書)名題◎號鳴字數

【シ】

呪賊呪法 ①(日) Ju-zoku-ju-ho. (支) Chou-tsei-chou-fa. 呪賊呪法經 ①一巻 ②缺 ③後漢代失傳 ④(參考) 三寶記第四、内典錄第一、武周錄第一、開元錄第一、第一四、貞元錄第二、第二四、新撰調法記 ①(日) Ju-chu-to-ki. 新撰調法記 ①一巻 ②存 ③同大觀編 ④昭和七刊 ⑤京都藤井佐兵衛

呪土經 ①(日) Ju-do-kyo. (支) Chou-tu-ching. ①一巻 ②失傳 ③(參考) 法苑珠林第一、仁壽錄第三、靜泰錄第三、武周錄第一

呪等傳宮大事 ①(日) Ju-to-sen-gu-dai-ji. ①三紙 ②存 ③徳川時代寫 ④(寶龜院)

呪毒 ①(日) Ju-doku. (支) Chou-ai. 呪毒經 ①一巻 ②缺 ③東晉竺曇無蘭 (一太元六一〇A. D. 381—395—)譯 ④(參考) 出三藏記第四、開元錄第一四、貞元錄第二四

呪符類 ①(日) Ju-fu-ri. ①一括 ②存 ③徳川時代寫 ④(寶善提院)

呪經 ①(日) Ju-bi-kyo. (支) Chou-mei-ching. 呪經 ①一巻 ②存 ③大正八五・一三三No. 2082 ④疑偽經 ⑤(參考) 法苑珠林第四、仁壽錄第四、靜泰錄第四、開元錄第一八、貞元錄第二八

呪魅經 ①(日) Ju-mi-kyo. (支) Chou-mei-ching. 呪魅經 ①一巻 ②存 ③大正八五・一三八三No. 2882 ④本經はスチン氏蒐集の燧燧出土本にして同本数部あり、各所に散在してゐる。業

代以後隋頃までに生ぜし疑偽經の一。本經は僧祐の出三藏記集に見當らず、隋の開皇十四年(A. D. 594)七月、法經等の撰述に成る「衆經目錄卷第四」の疑偽目錄中(大正五五・一七四頁・中)に初めて出てゐるもの。武周刊定疑偽目錄(大正五五・四七三頁・中)にも呪魅經一巻としてゐる。但し宋・元明の三本は魅を媚に作る。一經の内容は其の題名の示す如く、呪魅の生成より其の限りなき多くの殊寄を書き列ね、大力菩薩の請問に依つて此等の魅を退散せしめしこと、更に四天神王、南無佛陀、四天大龍王、中頭阿佛等の諸菩薩を請し、更に東方青帝、南方赤帝、西方白帝、北方黑帝、日月五星二十八宿等を集めて、呪魅人の頭を七分に裂き、恰も阿梨樹の枝の如くになし、呪魅を退散消滅せしめ、一切衆生皆悉く除かれて解脱を得たることを以て終つた。 (鳴沙餘韻解説第二部二〇一—二〇二頁参照)

④(參考) 内典錄第一〇、武周錄第一五 ⑤燧燧出土本(大英博物館藏 S. 433並 S. 2817)

呪目經 ①(日) Ju-moku-kyo. (支) Chou-mu-ching. (梵) Cakras-visodhana-vi-dya. (藏傳) ①一巻 ②存 ③大正二一・四九一No. 1338 縮成二二・二二二・五、北447並、南400並元、451並、明北479行、清479行、麗455並、天455並、明南450行、N. 483. ④四十二字の呪文が記され、後に若し日帝の時に、此の呪を誦すること七遍すれば即ち瘴やとあり、極て短少なる經である。

呪文輯釋 ①(日) Ju-mon-shu-shaku. ①一巻 ②存 ③刊本(京大、藏二四・三九)

授衣鉢作法 ①(日) Ju-i-hatsu-isa. 佛祖正傳授衣鉢作法 ①一巻 ②存 ③希養 ④嘉永五寫 ⑤(正大、一一八五・四四)

授一乘菩薩比丘戒灌受法私記 ①(日) Ju-ichi-to-kyo-satsu-bi-ku-kai-kyo-a-j-i-to-shi-ki. ①一巻 ②存 ③慈忍 ④寫本(叡山文庫)

授印可 ①(日) Ju-in-ka. ①一帖 ②存 ③徳川時代寫 ④(寶龜院)

授印信略作法 ①(日) Ju-in-jin-ryaku-shu-ho. ①一帖 ②存 ③榮海(弘安元—貞和三A. D. 1278—1348)記 ④建武四(A. D. 1337)

授圖頓菩薩戒儀 ①(日) Ju-en-ton-to-sak-kai-gi. ①一巻 ②存 ③天保二寫 ④(正大、一一八五・五四、五七)

授戒機緣 ①(日) Ju-kai-ki-en. ②存 ③寫本(龍大、研眞)

授戒加行中說戒大略 ①(日) Ju-kai-ke-gyo-chu-sek-kai-tai-ryaku. ①一巻 ②存 ③寫本(龍大)

授戒家範 ①(日) Ju-kai-ke-han. ②一巻 ③存 ④義譜記 ⑤天和三刊 ⑥(龍大、二六・一三・一一)

授戒講話 ①(日) Ju-kai-ka-wa. ①一巻 ②存 ③推尾辨區述 ④昭和六刊

④東京弘福閣

授戒作法 ①(日) Ju-kai-shu. ①一巻 ②存 ③大日本佛教全書第四〇阿婆摩沙之内 ④承授(元久二—弘安五A. D. 1305—1382)撰

授戒作法 ①(日) Ju-kai-shu. ①一巻 ②存 ③大准令傳述 ④寛政元寫 ⑤(龍大)

授戒次第 ①(日) Ju-kai-shi-dai. ①一巻 ②存 ③寫本(龍大)

授戒次第 ①(日) Ju-kai-shi-dai. ①一巻 ②存 ③寫本(龍大)

授戒諸作法 ①(日) Ju-kai-sho-sa-ho. ①一巻 ②存 ③寫本(龍大)

授戒說教 ①(日) Ju-kai-sek-kyo. ①一巻 ②存 ③松浦百英述 ④昭和二刊 ⑤東京鴻聖社

授戒說教附受戒の功德 ①(日) Ju-kai-sek-kyo-tokukai-ji-ku-kai-no-ku-do. ①一巻 ②存 ③雲樞泰譯(寶曆二—文化一三A. D. 1753—1816)述、高田道見 (一太元一一A. D. 1923)校 ④明治四二刊 ⑤(龍大)

授戒の榮 ①(日) Ju-kai-no-ehori. ②二巻 ③存 ④井上俊果編 ⑤昭和四刊 ⑥高山眞隆成圓通寺

授戒布薩和讃 ①(日) Ju-kai-fusa-wa-san. ①一摺 ②存 ③(龍大、研眞)

授戒法 ①(日) Ju-kai-ho. (支) Shou-chieh-fa. ①一巻 ②存 ③明棟宏(嘉靖一一—萬曆四〇A. D. 1532—1621)説萬曆

【シ】

四三、年八一(一)撰 ②(參考) 譯語目錄

授戒法則 ①(日) Ju-kai-ho-soku. ②二巻 ③存 ④慈覺尊者全集第六卷之内 ⑤慈覺光(享保三—文化元A. D. 1713—1804) ⑥延享五(A. D. 1748)集、寶曆八(A. D. 1758)再注

①上巻には三歸、五戒、八背戒、同自誓受、十善戒、菩薩戒の六授戒法則を收め、下巻には出家作法、同結髮剃刀式、形同沙彌受戒作法、法同沙彌受戒式、授大戒儀の五則を收む。

授戒所持本(高貴寺) (高見寬應)

授戒遺編 ①(日) Ju-kai-yan-kin. ②一巻 ③存 ④京極寂明述 ⑤(參考) 譯語目錄

授戒略儀規 ①(日) Ju-kai-ryaku-gi. ①一巻 ②存 ③寫本(谷大、餘大、三〇八五)

授記 ①(日) ak-ki. ②存 ③安永六刊 ④(立大、A. D. 139)

授灌頂金剛最上乘菩提心戒義 ①(日) Ju-kwan-ju-kon-go-sai-ji-j-i-bo-dai-shin-kai-gi. (支) Shou-kuan-tang-chi-kang-tsu-shang-ch'ang-p'u-t'i-hsia-ch'i-ch'i. 受菩提心戒儀、授灌頂金剛最上乘菩提心戒文、授發菩提心戒 ①一巻 ②存 ③大正一八・九四〇No. 915 縮一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇、一〇一、一〇二、一〇三、一〇四、一〇五、一〇六、一〇七、一〇八、一〇九、一一〇、一一一、一一二、一一三、一一四、一一五、一一六、一一七、一一八、一一九、一二〇、一二一、一二二、一二三、一二四、一二五、一二六、一二七、一二八、一二九、一三〇、一三一、一三二、一三三、一三四、一三五、一三六、一三七、一三八、一三九、一四〇、一四一、一四二、一四三、一四四、一四五、一四六、一四七、一四八、一四九、一五〇、一五一、一五二、一五三、一五四、一五五、一五六、一五七、一五八、一五九、一六〇、一六一、一六二、一六三、一六四、一六五、一六六、一六七、一六八、一六九、一七〇、一七一、一七二、一七三、一七四、一七五、一七六、一七七、一七八、一七九、一八〇、一八一、一八二、一八三、一八四、一八五、一八六、一八七、一八八、一八九、一九〇、一九一、一九二、一九三、一九四、一九五、一九六、一九七、一九八、一九九、二〇〇、二〇一、二〇二、二〇三、二〇四、二〇五、二〇六、二〇七、二〇八、二〇九、二一〇、二一一、二一二、二一三、二一四、二一五、二一六、二一七、二一八、二一九、二二〇、二二一、二二二、二二三、二二四、二二五、二二六、二二七、二二八、二二九、二三〇、二三一、二三二、二三三、二三四、二三五、二三六、二三七、二三八、二三九、三四〇、三四一、三四二、三四三、三四四、三四五、三四六、三四七、三四八、三四九、三五〇、三五二、三五三、三五四、三五五、三五六、三五七、三五八、三五九、三六〇、三六一、三六二、三六三、三六四、三六五、三六六、三六七、三六八、三六九、三七〇、三七二、三七三、三七四、三七五、三七六、三七七、三七八、三七八、三九九、四〇〇、四〇一、四〇二、四〇三、四〇四、四〇五、四〇六、四〇七、四〇八、四〇九、四一〇、四一一、四一二、四一三、四一四、四一五、四一六、四一七、四一八、四一九、四二〇、四二一、四二二、四二三、四二四、四二五、四二六、四二七、四二八、四二九、四三〇、四三一、四三二、四三三、四三四、四三五、四三六、四三七、四三八、四三九、四四〇、四四一、四四二、四四三、四四四、四四五、四四六、四四七、四四八、四四九、四五〇、四五二、四五三、四五四、四五五、四五六、四五七、四五八、五五九、五六〇、五六二、五六三、五六四、五六五、五六六、五六七、五六八、五六九、五七〇、五七二、五七三、五七四、五七五、五七六、五七七、五七八、五七九、五八〇、五八二、五八三、五八四、五八五、五八六、五八七、五八八、五八九、五九〇、五九二、五九三、五九四、五九五、五九六、五九七、五九八、五九九、六〇〇、六〇二、六〇三、六〇四、六〇五、六〇六、六〇七、六〇八、六〇九、六一〇、六一二、六一三、六一四、六一五、六一六、六一七、六一八、六一九、六二〇、六二二、六二三、六二四、六二五、六二六、六二七、六二八、六二九、六三〇、六三二、六三三、六三四、六三五、六三六、六三七、六三八、六三九、六四〇、六四二、六四三、六四四、六四五、六四六、六四七、六四八、六四九、六五〇、六五二、六五三、六五四、六五五、六五六、六五七、六五八、六五九、六六〇、六六二、六六三、六六四、六六五、六六六、六六七、六六八、六六九、六七〇、六七二、六七三、六七四、六七五、六七六、六七七、六七八、六七九、六八〇、六八二、六八三、六八四、六八五、六八六、六八七、六八八、六八九、六九〇、六九二、六九三、六九四、六九五、六九六、六九七、六九八、六九九、七〇〇、七〇二、七〇三、七〇四、七〇五、七〇六、七〇七、七〇八、七〇九、七一〇、七一二、七一三、七一四、七一五、七一六、七一七、七一八、七一九、七二〇、七二二、七二三、七二四、七二五、七二六、七二七、七二八、七二九、七三〇、七三二、七三三、七三四、七三五、七三六、七三七、七三八、七三九、七四〇、七四二、七四三、七四四、七四五、七四六、七四七、七四八、七四九、七五〇、七五二、七五三、七五四、七五五、七五六、七五七、七五八、七五九、七六〇、七六二、七六三、七六四、七六五、七六六、七六七、七六八、七六九、七七〇、七七二、七七三、七七四、七七五、七七六、七七七、七七八、七七八、七九九、八〇〇、八〇二、八〇三、八〇四、八〇五、八〇六、八〇七、八〇八、八〇九、八一〇、八一二、八一三、八一四、八一五、八一六、八一七、八一八、八一九、八二〇、八二二、八二三、八二四、八二五、八二六、八二七、八二八、八二九、八三〇、八三二、八三三、八三四、八三五、八三六、八三七、八三八、八三九、八四〇、八四二、八四三、八四四、八四五、八四六、八四七、八四八、八四九、八五〇、八五二、八五三、八五四、八五五、八五六、八五七、八五八、八五九、八六〇、八六二、八六三、八六四、八六五、八六六、八六七、八六八、八六九、八七〇、八七二、八七三、八七四、八七五、八七六、八七七、八七八、八七九、八八〇、八八二、八八三、八八四、八八五、八八六、八八七、八八八、八八九、八九〇、八九二、八九三、八九四、八九五、八九六、八九七、八九八、八九九、九〇〇、九〇二、九〇三、九〇四、九〇五、九〇六、九〇七、九〇八、九〇九、九一〇、九一二、九一三、九一四、九一五、九一六、九一七、九一八、九一九、九二〇、九二二、九二三、九二四、九二五、九二六、九二七、九二八、九二九、九三〇、九三二、九三三、九三四、九三五、九三六、九三七、九三八、九三九、九四〇、九四二、九四三、九四四、九四五、九四六、九四七、九四八、九四九、九五〇、九五二、九五三、九五四、九五五、九五六、九五七、九五八、九五九、九六〇、九六二、九六三、九六四、九六五、九六六、九六七、九六八、九六九、九七〇、九七二、九七三、九七四、九七五、九七六、九七七、九七八、九七九、九八〇、九八二、九八三、九八四、九八五、九八六、九八七、九八八、九八九、九九〇、九九二、九九三、九九四、九九五、九九六、九九七、九九八、九九九、一〇〇〇、一〇〇二、一〇〇三、一〇〇四、一〇〇五、一〇〇六、一〇〇七、一〇〇八、一〇〇九、一〇一〇、一〇一二、一〇一三、一〇一四、一〇一五、一〇一六、一〇一七、一〇一八、一〇一九、一〇二〇、一〇二二、一〇二三、一〇二四、一〇二五、一〇二六、一〇二七、一〇二八、一〇二九、一〇三〇、一〇三二、一〇三三、一〇三四、一〇三五、一〇三六、一〇三七、一〇三八、一〇三九、一〇四〇、一〇四二、一〇四三、一〇四四、一〇四五、一〇四六、一〇四七、一〇四八、一〇四九、一〇五〇、一〇五二、一〇五三、一〇五四、一〇五五、一〇五六、一〇五七、一〇五八、一〇五九、一〇六〇、一〇六二、一〇六三、一〇六四、一〇六五、一〇六六、一〇六七、一〇六八、一〇六九、一〇七〇、一〇七二、一〇七三、一〇七四、一〇七五、一〇七六、一〇七七、一〇七八、一〇七九、一〇八〇、一〇八二、一〇八三、一〇八四、一〇八五、一〇八六、一〇八七、一〇八八、一〇八九、一〇九〇、一〇九二、一〇九三、一〇九四、一〇九五、一〇九六、一〇九七、一〇九八、一〇九九、一一〇〇、一一〇二、一一〇三、一一〇四、一一〇五、一一〇六、一一〇七、一一〇八、一一〇九、一一一〇、一一一二、一一一三、一一一四、一一一五、一一一六、一一一七、一一一八、一一一九、一一二〇、一一二二、一一二三、一一二四、一一二五、一一二六、一一二七、一一二八、一一二九、一一三〇、一一三二、一一三三、一一三四、一一三五、一一三六、一一三七、一一三八、一一三九、一一四〇、一一四二、一一四三、一一四四、一一四五、一一四六、一一四七、一一四八、一一四九、一一五〇、一一五二、一一五三、一一五四、一一五五、一一五六、一一五七、一一五八、一一五九、一一六〇、一一六二、一一六三、一一六四、一一六五、一一六六、一一六七、一一六八、一一六九、一一七〇、一一七二、一一七三、一一七四、一一七五、一一七六、一一七七、一一七八、一一七九、一一八〇、一一八二、一一八三、一一八四、一一八五、一一八六、一一八七、一一八八、一一八九、一一九〇、一一九二、一一九三、一一九四、一一九五、一一九六、一一九七、一一九八、一一九九、一二〇〇、一二〇二、一二〇三、一二〇四、一二〇五、一二〇六、一二〇七、一二〇八、一二〇九、一二一〇、一二一二、一二一三、一二一四、一二一五、一二一六、一二一七、一二一八、一二一九、一二二〇、一二二二、一二二三、一二二四、一二二五、一二二六、一二二七、一二二八、一二二九、一二三〇、一二三二、一二三三、一二三四、一二三五、一二三六、一二三七、一二三八、一二三九、一二四〇、一二四二、一二四三、一二四四、一二四五、一二四六、一二四七、一二四八、一二四九、一二五〇、一二五二、一二五三、一二五四、一二五五、一二五六、一二五七、一二五八、一二五九、一二六〇、一二六二、一二六三、一二六四、一二六五、一二六六、一二六七、一二六八、一二六九、一二七〇、一二七二、一二七三、一二七四、一二七五、一二七六、一二七七、一二七八、一二七九、一二八〇、一二八二、一二八三、一二八四、一二八五、一二八六、一二八七、一二八八、一二八九、一二九〇、一二九二、一二九三、一二九四、一二九五、一二九六、一二九七、一二九八、一二九九、一三〇〇、一三〇二、一三〇三、一三〇四、一三〇五、一三〇六、一三〇七、一三〇八、一三〇九、一三一〇、一三一二、一三一三、一三一四、一三一五、一三一六、一三一七、一三一八、一三一九、一三二〇、一三二二、一三二三、一三二四、一三二五、一三二六、一三二七、一三二八、一三二九、一三三〇、一三三二、一三三三、一三三四、一三三五、一三三六、一三三七、一三三八、一三三九、一三四〇、一三四二、一三四三、一三四四、一三四五、一三四六、一三四七、一三四八、一三四九、一三五〇、一三五二、一三五三、一三五四、一三五五、一三五六、一三五七、一三五八、一三五九、一三六〇、一三六二、一三六三、一三六四、一三六五、一三六六、一三六七、一三六八、一三六九、一三七〇、一三七二、一三七三、一三七四、一三七五、一三七六、一三七七、一三八八、一三八九、一三九〇、一三九二、一三九三、一三九四、一三九五、一三九六、一三九七、一三九八、一三九九、一四〇〇、一四〇二、一四〇三、一四〇四、一四〇五、一四〇六、一四〇七、一四〇八、一四〇九、一四一〇、一四一二、一四一三、一四一四、一四一五、一四一六、一四一七、一四一八、一四一九、一四二〇、一四二二、一四二三、一四二四、一四二五、一四二六、一四二七、一四二八、一四二九、一四三〇、一四三二、一四三三、一四三四、一四三五、一四三六、一四三七、一四三八、一四三九、一四四〇、一四四二、一四四三、一四四四、一四四五、一四四六、一四四七、一四四八、一四四九、一四五〇、一四五二、一四五三、一四五四、一四五五、一四五六、一四五七、一四五八、一五五九、一五六〇、一五六二、一五六三、一五六四、一五六五、一五六六、一五六七、一五六八、一五六九、一五七〇、一五七二、一五七三、一五七四、一五七五、一五七六、一五七七、一五七八、一五七九、一五八〇、一五八二、一五八三、一五八四、一五八五、一五八六、一五八七、一五八八、一五八九、一五九〇、一五九二、一五九三、一五九四、一五九五、一五九六、一五九七、一五九八、一五九九、一六〇〇、一六〇二、一六〇三、一六〇四、一六〇五、一六〇六、一六〇七、一六〇八、一六〇九、一六一〇、一六一二、一六一三、一六一四、一六一五、一六一六、一六一七、一六一八、一六一九、一六二〇、一六二二、一六二三、一六二四、一六二五、一六二六、一六二七、一六二八、一六二九、一六三〇、一六三二、一六三三、一六三四、一六三五、一六三六、一六三七、一六三八、一六三九、一六四〇、一六四二、一六四三、一六四四、一六四五、一六四六、一六四七、一六四八、一六四九、一六五〇、一六五二、一六五三、一六五四、一六五五、一六五六、一六五七、一六五八、一六五九、一六六〇、一六六二、一六六三、一六六四、一六六五、一六六六、一六六七、一六六八、一六六九、一六七〇、一六七二、一六七三、一六七四、一六七五、一六七六、一六七七、一七八八、一七八九、一七九〇、一七九二、一七九三、一七九四、一七九五、一七九六、一七九七、一七九八、一七九九、一八〇〇、一八〇二、一八〇三、一八〇四、一八〇五、一八〇六、一八〇七、一八〇八、一八〇九、一八一〇、一八一二、一八一三、一八一四、一八一五、一八一六、一八一七、一八一八、一八一九、一八二〇、一八二二、一八二三、一八二四、一八二五、一八二六、一八二七、一八二八、一八二九、一八三〇、一八三二、一八三三、一八三四、一八三五、一八三六、一八三七、一八三八、一八三九、一八四〇、一八四二、一八四三、一八四四、一八四五、一八四六、一八四七、一八四八、一八四九、一八五〇、一八五二、一八五三、一八五四、一八五五、一八五六、一八五七、一八五八、一八五九、一八六〇、一八六二、一八六三、一八六四、一八六五、一八六六、一八六七、一八六八、一八六九、一八七〇、一八七二、一八七三、一八七四、一八七五、一八七六、一八七七、一八七八、一八七九、一八八〇、一八八二、一八八三、一八八四、一八八五、一八八六、一八八七、一八八八、一八八九、一八九〇、一八九二、一八九三、一八九四、一八九五、一八九六、一八九七、一八九八、一八九九、一九〇〇、一九〇二、一九〇三、一九〇四、一九〇五、一九〇六、一九〇七、一九〇八、一九〇九、一九一〇、一九一二、一九一三、一九一四、一九一五、一九一六、一九一七、一九一八、一九一九、一九二〇、一九二二、一九二三、一九二四、一九二五、一九二六、一九二七、一九二八、一九二九、一九三〇、一九三二、一九三三、一九三四、一九三五、一九三六、一九三七、一九三八、一九三九、一九四〇、一九四二、一九四三、一九四四、一九四五、一九四六、一九四七、一九四八、一九四九、一九五〇、一九五二、一九五三、一九五四、一九五五、一九五六、一九五七、一九五八、一九五九、一九六〇、一九六二、一九六三、一九六四、一九六五、一九六六、一九六七、一九六八、一九六九、一九七〇、一九七二、一九七三、一九七四、一九七五、一九七六、一九七七、一九七八、一九七九、一九八〇、一九八二、一九八三、一九八四、一九八五、一九八六、一九八七、一九八八、一九八九、一九九〇、一九九二、一九九三、一九九四、一九九五、一九九六、一九九七、一九九八、一九九九、二〇〇〇、二〇〇二、二〇〇三、二〇〇四、二〇〇五、二〇〇六、二〇〇七、二〇〇八、二〇〇九、二〇一〇、二〇一二、二〇一三、二〇一四、二〇一五、二〇一六、二〇一七、二〇一八、二〇一九、二〇二〇、二〇二二、二〇二三、二〇二四、二〇二五、二〇二六、二〇二七、二〇二八、二〇二九、二〇三〇、二〇三二、二〇三三、二〇三四、二〇三五、二〇三六、二〇三七、二〇三八、二〇三九、二〇四〇、二〇四二、二〇四三、二〇四四、二〇四五、二〇四六、二〇四七、二〇四八、二〇四九、二〇五〇、二〇五二、二〇五三、二〇五四、二〇五五、二〇五六、二〇五七、二〇五八、二〇五九、二〇六〇、二〇六二、二〇六三、二〇六四、二〇六五、二〇六六、二〇六七、二〇六八、二〇六九、二〇七〇、二〇七二、二〇七三、二〇七四、二〇七五、二〇七六、二〇七七、二〇七八、二〇七九、二〇八〇、二〇八二、二〇八三、二〇八四、二〇八五、二〇八六、二〇八七、二〇八八、二〇八九、二〇九〇、二〇九二、二〇九三、二〇九四、二〇九五、二〇九六、二〇九七、二〇九八、二〇九九、二一〇〇、二一〇二、二一〇三、二一〇四、二一〇五、二一〇六、二一〇七、二一〇八、二一〇九、二一一〇、二一一二、二一一三、二一一四、二一一五、二一一六、二一一七、二一一八、二一九九、二二〇〇、二二〇二、二二〇三、二二〇四、二二〇五、二二〇六、二二〇七、二二〇八、二二〇九、二二一〇、二二一二、二二一三、二二一四、二二一五、二二一六、二二一七、二二一八、二二一九、二二二〇、二二二二、二二二三、二二二四、二二二五、二二二六、二二二七、二二二八、二二二九、二二三〇、二二三二、二二三三、二二三四、二二三五、二二三六、二二三七、二二三八、二二三九、二三四〇、二三四二、二三四三、二三四四、二三四五、二三四六、二三四七、二三四八、二三四九、二三五〇、二三五二、二三五三、二三五四、二三五五、二三五六、二三五七、二三五八、二三五九、二三六〇、二三六二、二三六三、二三六四、二三六五、二三六六、二三六七、二三六八、二三六九、二三七〇、二三七二、二三七三、二三七四、二三七五、二三七六、二三七七、二三八八、二三八九、二三九〇、二三九二、二三九三、二三九四、二三九五、二三九六、二三九七、二三九八、二三九九、二四〇〇、二四〇二、二四〇三、二四〇四、二四〇五、二四〇六、二四〇七、二四〇八、二四〇九、二四一〇、二四一二、二四一三、二四一四、二四一五、二四一六、二四一七、二四一八、二四一九、二四二〇、二四二二、二四二三、二四二四、二四二五、二四二六、二四二七、二四二八、二四二九、二四三〇、二四三二、二四三三、二四三四、二四三五、二四三六、二四三七、二四三八、二四三九、二四四〇、二四四二、二四四三、二四四四、二四四五、二四四六、二四四七、二四四八、二四四九、二四五〇、二四五二、二四五三、二四五四、二四五五、二四五六、二四五七、二四五八、二四五九、二四六〇、二四六二、二四六三、二四六四、二四六五、二四六六、二四六七、二四六八、二四六九、二四七〇、二四七二、二四七三、二四七四、二四七五、二四七六、二四七七、二四七八、二四七九、二四八〇、二四八二、二四八三、二四八四、二四八五、二四八六、二四八七、二四八八、二四八九、二四九〇、二四九二、二四九三、二四九四、二四九五、二四九六、二四九七、二四九八、二四九九、二五〇〇、二五〇二、二五〇三、二五〇四、二五〇五、二五〇六、二五〇七、二五〇八、二五〇九、二五一一、二五一二、二五一三、二五一四、二五一五、二五一六、二五一七、二五一八、二五一九、二五二〇、二五二二、二五二三、二五二四、二五二五、二五二六、二五二七、二五二八、二五二九、二五三〇、二五三二、二五三三、二五三四、二五三五、二五三六、二五三七、二五三八、二五三九、二五四〇、二五四二、二五四三、二五四四、二五四五、二五四六、二五四七、二五四八、二五四九、二五五〇、二五五二、二五五三、二五五四、二五五五、二五五六、二五五七、二五五八、二五五九、二五六〇、二五六二、二五六三、二五六四、二五六五、二五六六、二五六七、二五六八、二五六九、二五七〇、二五七二、二五七三、二五七四、二五七五、二五七六、二五七七、二五七八、二五七九、二五八〇、二五八二、二五八三、二五八四、二五八五、二五八六、二五八七、二五八八、二五八九、二五九〇、二五九二、二五九三、二五九四、二五九五、二五九六、二五九七、二五九八、二五九九、二六〇〇、二六〇二、二六〇三、二六〇四、二六〇五、二六〇六、二六〇七、二六〇八、二六〇九、二六一〇、二六一二、二六一三、二六一四、二六一五、二六一六、二六一七、二六一八、二六一九、二六二〇、二六二二、二六二三、二六二四、二六二五、二六二六、二六二七、二六二八、二六二九、二六三〇、二六三二、二六三三、二六三四、二六三五、二六三六、二六三七、二六三八、二六三九、二六四〇、二六四二、二六四三、二六四四、二六四五、二六四六、二六四七、二六四八、二六四九、二六五〇、二六五二、二六五三、二六五四、二六五五、二六五六、二六五七、二六五八、二六五九、二六六〇、二六六二、二六六三、二六六四、二六六五、二六六六、二六六七、二六六八、二六六九、二六七〇、二六七二、二六七三、二六七四、二六七五、二六七六、二六七七、二七八八、二七八九、二七九〇、二七九二、二七九三、二七九四、二七九五、二七九六、二七九七、二七九八、二七九九、二八〇〇、二八〇二、二八〇三、二八〇四、二八〇五、二八〇六、二八〇七、二八〇八、二八〇九、二八一〇、二八一二、二八一三、二八一四、二八一五、二八一六、二八一七、二八一八、二八一九、二八二〇、二八二二、二八二三、二八二四、二八二五、二八二六、二八二七、二八二八、二八二九、二八三〇、二八三二、二八三三、二八三四、二八三五、二八三六、二八三七、二八三八、二八三九、二八四〇、二八四二、二八四三、二八四四、二八四五、二八四六、二八四七、二八四八、二八四九、二八五〇、二八五二、二八五三、二八五四、二八五五、二八五六、二八五七、二八五八、二八五九、二八六〇、二八六二、二八六三、二八六四、二八六五、二八六六、二八六七、二八六八、二八六九、二八七〇、二八七二、二八七三、二八七四、二八七五、二八七六、二八七七、二八七八、二八七九、二八八〇、二八八二、二八八三、二八八四、二八八五、二八八六、二八八七、二八八八、二八八九、二八九〇、二八九二、二八九三、二八九四、二八九五、二八九六、二八九七、二八九八、二八九九、二九〇〇、二九〇二、二九〇三、二九〇四、二九〇五、二九〇六、二九〇七、二九〇八、二九〇九、二九一〇、二九一二、二九一三、二九一四、二九一五、二九一六、二九一七、二九一八、二九一九、二九二〇、二九二二、二九二三、二九二四、二九二五、二九二六、二九二七、二九二八、二九二九、二九三〇、二九三二、二九三三、二九三四、二九三五、二九三六、二九三七、二九三八、二九三九、二九四〇、二九四二、二九四三、二九四四、二九四五、二九四六、二九四七、二九四八、二九四九、二九五〇、二九五二、二九五三、二九五四、二九五五、二九五六、二九五七、二九五八、二九五九、二九六〇、二九六二、二九六三、二九六四、二九六五、二九六六、二九六七、二九六八、

【シ】

由ると辨ず。第三には初重巻物は毒毒の作と云ふ説の眞偽不審、之に十一箇條の理由を擧げてそれを否定して居るのである。

【参考】 總淨土依憑章疏 ④寫本(大正、一五五二・二一九) (林彦明)

授手印請決清濁

①(日) Ju-shu-in-sho-keusu-sei-daku. ②存、傳燈綱要卷中(一五五〇) ③(日) Ju-shu-in-sho-keusu-sei-daku. ④存、傳燈綱要卷中(一五五〇)

此の書は延徳二年九月七日勢譽愚底(了曉の弟子)が其の師の口訣授手印請決に對する弁難を辯駁した書物である。文明十六年五月英警了月が關授手印請決邪正義一卷を著して、了曉の信法半印は所化の左手印であると云ふを異論とし、傳心鈔に左手印右手印は所授印と云ふてゐるのは、信法半印を沙汰するの無、授手印に斯く記されれば所授印を示したと云ふ迄で手印作法を云ふのでない、自分の相承は信法は能化の左手印であると主張した。此了月の主張を勢譽が誤謬として攻撃したのが此の書である。信法半印の左手と云ふには異論は無いが、其左手が能化か所化かと云ふ事であつて、互に師傳を主張した曉は百誓より其の相傳の證として血脈ありと云ひ、了月も明誓より能化左手の證たる血脈ありと云つて兩々相譲らず諍ふたものである。此は頗る奇怪な事である。西警も明誓も共に聖阿の弟子であつて、明誓は師勝瓜達常福寺を襲ひ、西警は増上寺の開山となつたのであるのに、その師傳に此の様な差異があるとは奇事なことであるが、各々主張を譲らな

授手印傳心鈔

①(日) Ju-shu-in-sho-keusu-sei-daku. ②存、淨土宗全書第一〇、傳燈綱要卷中(一五五〇) ③了譽聖阿(勝應四一應永二) A. D. 1341-1420

淨土宗五重相傳の傳書なる第二重授手印の末書である、著者聖阿は謂ゆる五重傳法の創始者であるから、その傳書の各々に末釋を造つて居るその中の一である。此書に於ては授手印に就て大綱と義題との二段に分ち、大綱の中で述作の由来と深奥の旨趣とに就て辨じて居る、その述作の由来は觀西辨阿の門下修阿と敬蓮社と至誠心の體に於て説を異にし、修阿の弟子滿願社が師に背て敬蓮社に與みしたと云ふ不信の紛糾に、辨阿が憂ひて末代の爲に宗義行相を記され口訣とされたのが授手印であることを述べ、次に奥旨は此の書を讀前序の傳と心得、五正行、助正、三心、五念等は結歸一行三昧と相傳するものであると爲す。次に義題とは入文解釋であつて初に序分を解説し、次に本文に就て口傳を用ひて解釋されてゐる。而して其本文に於て明される法數即ち内容は六重(五正行、助正、三心、五念、四修、三種行儀)二十二件、五十五種と分たれ、それが終に一行三昧の具徳と爲すのである。その五十五の法數は圖示すれば左の如し。(六重(二十二件) (五十五法數)

第一重。五種正行	讀誦	六種
第二重。正助二行	讀誦	二種
第三重。三心	讀誦	三十種
第四重。五念門	讀誦	五種
第五重。四修	讀誦	九種
第六重。三種行儀	讀誦	三種

授十善戒儀作法

①(日) Ju-shu-in-sho-keusu-sei-daku. ②存、的門上人全集第二二〇の門(文化五一明治二二) A. D. 1808-1889

授十八契印作法

①(日) Ju-shu-in-sho-keusu-sei-daku. ②存、泉慶(貞元二)永承四 A. D. 977-1049

授灌頂口傳鈔

①(日) Ju-shu-in-sho-keusu-sei-daku. ②存、日蓮聖人御遺文之内 ③日蓮(貞應元一弘安五) A. D. 1173-1262

戒儀・戒行・戒相がそれである。順次に戒法戒體等を解説し、大體に於いて天台の説を採用し、南山道宣の戒學と天台大師の戒學とを調和し、十科を列ねて戒儀を組織してゐる。この組織法は天台大師の戒體にある六家の儀(梵網本、地持本、高昌本、瓊瑤本、新撰本、制旨本)及び古今の諸文に準據し參詳去取したもので、十科とは第一求師授法、第二請聖證明、第三歸佛求加、第四策舉勸信、第五歸過求悔、第六請師乞戒、第七立誓問遮、第八加法納體(兼法授戒)、第九說相示誡、第十數德發願。元照(傳は釋門正統八、佛祖統紀三〇等)の戒學は天台華嚴南山律等の融會説であるが其思想の根本を南山律に置き大乘戒學を奉じたもの。故に大局から云へば本書も亦南山律の戒學を論じたものと云ふべきである。(田島徳吉)

授日課法則

①(日) Ju-shu-in-sho-keusu-sei-daku. ②存、傳燈綱要卷中之内

授八戒文

①(日) Ju-shu-in-sho-keusu-sei-daku. ②存、傳燈綱要卷中之内

授菩薩戒儀

①(日) Ju-shu-in-sho-keusu-sei-daku. ②存、傳燈綱要卷中之内

一、庭儀戒儀、廣戒儀 ①存、大日本佛教全書第七二、續淨土宗全書第九 ②天台宗系の菩薩戒を授くる庭上儀式を記したるもの。先づ教授師及び僧衆等、戒和尚の房の前庭に到りて整列し、戒和尚は大衣を着して正面に坐し、侍者二人は香爐を執つて左右に侍立し、衆僧は華鬘を執る。次に持幡童二人、左右衆僧の間より前歩し、與を相從し、侍者は坐具を與に展べ、戒和尚は與に乘り、讀鉢、教授師は香爐を執つて與の前立ち、持幡者は與の左右に立ち、次に與を擧げて戒道場に向ふ等の行儀を記す。堂上に於ける儀式は古戒儀を用ひるといふ。本書は聖阿の關淨土傳戒論に、「長意和尙は正しく傳戒綱々なり。故に即ち廣(庭儀)中(堂上略)の三種戒儀を以て、時に隨ひ人に依りて普く之を行ひたまふ」といふ中の、廣戒儀なるもので、三種戒儀はそれより慈念乃至寂空、深空と相承し、淨土宗に相傳すと云ふ。(大野法道)

授菩薩戒儀

①(日) Ju-shu-in-sho-keusu-sei-daku. ②存、大日本佛教全書第七二、續淨土宗全書第九

授菩薩戒儀

①(日) Ju-shu-in-sho-keusu-sei-daku. ②存、大日本佛教全書第七二、續淨土宗全書第九

授菩薩戒儀

①(日) Ju-shu-in-sho-keusu-sei-daku. ②存、大日本佛教全書第七二、續淨土宗全書第九

具さに十重禁戒を擧げ、第十二勸持門から妙觀門事理具足、十業十境といふ天台の觀心法を除いたこと等である。又續淨土宗全書本には、書後に「次念誦(或百或千)、次授與日課(二千遍)、次後供養并後讀解界奉送下座、次受者敬禮讚頌及和尙出堂、次和尙敬禮讚頌出堂、右觀頌作法(或法)といひ、淨土宗義に依る作法を附加してある。(参考) 聖谷古本戒儀、蓮門經緯卷下、決疑鈔直釋第一〇、圓戒啓蒙、淨土戒學總論。

授菩薩戒儀

①(日) Ju-shu-in-sho-keusu-sei-daku. ②存、大日本佛教全書第七二、續淨土宗全書第九

授菩薩戒儀

①(日) Ju-shu-in-sho-keusu-sei-daku. ②存、大日本佛教全書第七二、續淨土宗全書第九

授菩薩戒儀

①(日) Ju-shu-in-sho-keusu-sei-daku. ②存、大日本佛教全書第七二、續淨土宗全書第九

本書は天台系の菩薩戒、即ち圓頓戒家に於て最も重視される戒儀である。この後に作られたものは皆本書の改造に過ぎないのに依つて知らる。然るに本書は勇躍に、「古徳及び梵網、瓊瑤、地持、并に高昌等の文に依つて、菩薩戒を授くる行事の儀、略して十二門と爲す。専ら一家に依らずと雖も並に聖教に違はず」と言ふによりて、由来する所あるを知る。その中、梵網、瓊瑤、地持、高昌の戒儀は、六朝時代に行はれたもので、天台戒疏にはこの外に新撰本、制旨本の二種を加へ、六種の戒儀の要項を擧げてゐる。然るに所授の一として擧ぐる「古徳」とは、誰であるか明かでないが、蓋し南岳の作と傳ふる受菩薩戒儀と、慧沼の大唐三藏法師傳西域正法藏受菩薩戒法であらう。南岳の戒儀は、唐譯八十華嚴の偈を引くこと、檢益有情戒といふ支那譯以後に用ひられる名稱を擧げることによつて、到底南岳の作とは認められぬが、蕪溪の此の戒儀は多く南岳より採られ、殊に七遮を問ふは諸種戒儀中、南岳のみに出るもの、受戒後の説相に十重禁を説くも亦南岳を受けた。慧沼の戒儀は勸發菩提心集卷下に載せられてゐるものであるが、本書は十二門の組織に於て彼を擧ぎ、且つ文意も多く取られてゐる。蕪溪が専ら一家に依らぬを告ぐるは、この支那系の典據あるを暗示すると見て差支へなからう。されば本書は組織を慧沼に學び、しかも内容を梵網及び瓊瑤戒とし、天台宗の實踐をも加味したものである。本書を淨土教の眼で見れば、發心に觀

授菩薩戒儀

①(日) Ju-shu-in-sho-keusu-sei-daku. ②存、大日本佛教全書第七二、續淨土宗全書第九

授菩薩戒儀

①(日) Ju-shu-in-sho-keusu-sei-daku. ②存、大日本佛教全書第七二、續淨土宗全書第九

授菩薩戒儀

①(日) Ju-shu-in-sho-keusu-sei-daku. ②存、大日本佛教全書第七二、續淨土宗全書第九

【2】

經の念佛見佛、佛心慈悲を引き、廣願に共
生極樂を言ふことが注意されるべきである。
⑦〔注釋書〕要解一卷(義山)、佛祖統記第
七、傳教大師台州録、東城傳燈目錄卷下、諸
宗章疏卷第一、蓮門經緯卷下(大野法道)
⑧授菩薩戒儀 ①(日) J. Do-sak-
ka. ②. 机受戒略戒儀 ①一卷 ②存、大
日本佛教全書第七二、機淨土宗全書第九
③蓮亮(弘仁三)貞觀二 A. D. 812—860)
④一乘菩薩戒を授くる略式を記したるも
の。

次第は澗水。三禮。如來明。表白。法界
身心の摩訶尼盧舍那佛等、乃至南岳天台の
列祖等を勧請し、影向を請ひ、一體。受者
は持戒功德を讃じ受戒の意を陳べ、三禮
願請す。三歸を授け、三業淨戒を授け、十
重禁戒を授け、各三説す。更に持戒の功德
を説き、滅罪生善、往生淨土、現當の悉地
成就すとし、諸佛の證明を乞ふ。次に神分
祈願同向にて説る。

本書は、聖阿闍梨淨土傳戒論に廣中略の
三種戒儀を擧ぐる中、略戒儀といふもので、
體亮の作とし長意、慈念乃至觀空、淨空相承
し、それより山門神護寺傳信、三井常寂院
隆禪之を傳ふといふ。併し全長は享保二年
に之を上梓するに當つて、「學者深く聽し
て世に行はれず。之れに依つて風習相承
の人と雖も、未だ曾て見ざる者も頗る多
し。故に余、流通の廣遠ならんことを欲し
て、衣鉢の資を捨て、傳戒論補註と共に
同じく梓に録めて、新受戒者書寫の勞を助
くと云」と言つてゐる。

【3】

⑦〔參考〕蓮門經緯卷下 (大野法道)
⑧授菩薩戒儀 ①(日) J. Do-sak-ka-
ka. ②. Shon-pu-sa-chi-ki. ③. 一巻
④存、己藏二六、一金剛集卷上 ⑤宋遺式
〔乾德二〕明道元 A. D. 964—1033) 撰
⑥本書は菩薩戒儀を十科に分け、受戒の次
第を述べたもの。本書は梵網戒の受戒作法
であるが、天台の戒學に基いて製作したも
の、はた南山律の戒學によつたものか、
其記述明確を欠く。元來支那天台宗では戒
學の獨自性が明瞭に發表されてゐない。こ
れを日本天台宗の圓戒思想に對照する場合
に愈々その感を得る。南山律が大乗律
を標榜し、教誨一致の態度を四分律から主
張する大膽さに比較し、天台戒が法華思想
に立脚して戒學を説く力が弱く迫力が足ら
ないのは如何なる事情によつたのか。惟ふ
に支那天台は止觀は禪宗に、戒は南山律に
融合し、更に教宗として華嚴法相と對立的
關係を結んだためであらうが、支那天台と
しての戒學が何故に發展性が乏しかったの
か。支那天台學が我が邦に興起するや、徳川
時代には安樂律なるものとなつて特殊なる
戒學を高調して支那天台戒學のために光輝
を放つてゐる。本戒儀の十科は第一開導
信心。第二諸三寶請天加護。第三歸依三
寶。第四四弘誓願。第五下座佛前乞戒。第
六發四弘誓願。第七開導問答。第八三番羯
磨。第九諸佛證明。第十示持戒相であらう。
(田島徳音)

⑦〔參考〕蓮門經緯卷下 (大野法道)
⑧授菩薩戒儀 ①(日) J. Do-sak-ka-
ka. ②. Shon-pu-sa-chi-ki. ③. 一巻
④存、己藏二六、一金剛集卷上 ⑤宋遺式
〔乾德二〕明道元 A. D. 964—1033) 撰
⑥本書は菩薩戒儀を十科に分け、受戒の次
第を述べたもの。本書は梵網戒の受戒作法
であるが、天台の戒學に基いて製作したも
の、はた南山律の戒學によつたものか、
其記述明確を欠く。元來支那天台宗では戒
學の獨自性が明瞭に發表されてゐない。こ
れを日本天台宗の圓戒思想に對照する場合
に愈々その感を得る。南山律が大乗律
を標榜し、教誨一致の態度を四分律から主
張する大膽さに比較し、天台戒が法華思想
に立脚して戒學を説く力が弱く迫力が足ら
ないのは如何なる事情によつたのか。惟ふ
に支那天台は止觀は禪宗に、戒は南山律に
融合し、更に教宗として華嚴法相と對立的
關係を結んだためであらうが、支那天台と
しての戒學が何故に發展性が乏しかったの
か。支那天台學が我が邦に興起するや、徳川
時代には安樂律なるものとなつて特殊なる
戒學を高調して支那天台戒學のために光輝
を放つてゐる。本戒儀の十科は第一開導
信心。第二諸三寶請天加護。第三歸依三
寶。第四四弘誓願。第五下座佛前乞戒。第
六發四弘誓願。第七開導問答。第八三番羯
磨。第九諸佛證明。第十示持戒相であらう。
(田島徳音)

⑦〔參考〕蓮門經緯卷下 (大野法道)
⑧授菩薩戒儀 ①(日) J. Do-sak-ka-
ka. ②. Shon-pu-sa-chi-ki. ③. 一巻
④存、己藏二六、一金剛集卷上 ⑤宋遺式
〔乾德二〕明道元 A. D. 964—1033) 撰
⑥本書は菩薩戒儀を十科に分け、受戒の次
第を述べたもの。本書は梵網戒の受戒作法
であるが、天台の戒學に基いて製作したも
の、はた南山律の戒學によつたものか、
其記述明確を欠く。元來支那天台宗では戒
學の獨自性が明瞭に發表されてゐない。こ
れを日本天台宗の圓戒思想に對照する場合
に愈々その感を得る。南山律が大乗律
を標榜し、教誨一致の態度を四分律から主
張する大膽さに比較し、天台戒が法華思想
に立脚して戒學を説く力が弱く迫力が足ら
ないのは如何なる事情によつたのか。惟ふ
に支那天台は止觀は禪宗に、戒は南山律に
融合し、更に教宗として華嚴法相と對立的
關係を結んだためであらうが、支那天台と
しての戒學が何故に發展性が乏しかったの
か。支那天台學が我が邦に興起するや、徳川
時代には安樂律なるものとなつて特殊なる
戒學を高調して支那天台戒學のために光輝
を放つてゐる。本戒儀の十科は第一開導
信心。第二諸三寶請天加護。第三歸依三
寶。第四四弘誓願。第五下座佛前乞戒。第
六發四弘誓願。第七開導問答。第八三番羯
磨。第九諸佛證明。第十示持戒相であらう。
(田島徳音)

【4】

⑦〔參考〕蓮門經緯卷下 (大野法道)
⑧授菩薩戒儀 ①(日) J. Do-sak-ka-
ka. ②. Shon-pu-sa-chi-ki. ③. 一巻
④存、己藏二六、一金剛集卷上 ⑤宋遺式
〔乾德二〕明道元 A. D. 964—1033) 撰
⑥本書は菩薩戒儀を十科に分け、受戒の次
第を述べたもの。本書は梵網戒の受戒作法
であるが、天台の戒學に基いて製作したも
の、はた南山律の戒學によつたものか、
其記述明確を欠く。元來支那天台宗では戒
學の獨自性が明瞭に發表されてゐない。こ
れを日本天台宗の圓戒思想に對照する場合
に愈々その感を得る。南山律が大乗律
を標榜し、教誨一致の態度を四分律から主
張する大膽さに比較し、天台戒が法華思想
に立脚して戒學を説く力が弱く迫力が足ら
ないのは如何なる事情によつたのか。惟ふ
に支那天台は止觀は禪宗に、戒は南山律に
融合し、更に教宗として華嚴法相と對立的
關係を結んだためであらうが、支那天台と
しての戒學が何故に發展性が乏しかったの
か。支那天台學が我が邦に興起するや、徳川
時代には安樂律なるものとなつて特殊なる
戒學を高調して支那天台戒學のために光輝
を放つてゐる。本戒儀の十科は第一開導
信心。第二諸三寶請天加護。第三歸依三
寶。第四四弘誓願。第五下座佛前乞戒。第
六發四弘誓願。第七開導問答。第八三番羯
磨。第九諸佛證明。第十示持戒相であらう。
(田島徳音)

⑦〔參考〕蓮門經緯卷下 (大野法道)
⑧授菩薩戒儀 ①(日) J. Do-sak-ka-
ka. ②. Shon-pu-sa-chi-ki. ③. 一巻
④存、己藏二六、一金剛集卷上 ⑤宋遺式
〔乾德二〕明道元 A. D. 964—1033) 撰
⑥本書は菩薩戒儀を十科に分け、受戒の次
第を述べたもの。本書は梵網戒の受戒作法
であるが、天台の戒學に基いて製作したも
の、はた南山律の戒學によつたものか、
其記述明確を欠く。元來支那天台宗では戒
學の獨自性が明瞭に發表されてゐない。こ
れを日本天台宗の圓戒思想に對照する場合
に愈々その感を得る。南山律が大乗律
を標榜し、教誨一致の態度を四分律から主
張する大膽さに比較し、天台戒が法華思想
に立脚して戒學を説く力が弱く迫力が足ら
ないのは如何なる事情によつたのか。惟ふ
に支那天台は止觀は禪宗に、戒は南山律に
融合し、更に教宗として華嚴法相と對立的
關係を結んだためであらうが、支那天台と
しての戒學が何故に發展性が乏しかったの
か。支那天台學が我が邦に興起するや、徳川
時代には安樂律なるものとなつて特殊なる
戒學を高調して支那天台戒學のために光輝
を放つてゐる。本戒儀の十科は第一開導
信心。第二諸三寶請天加護。第三歸依三
寶。第四四弘誓願。第五下座佛前乞戒。第
六發四弘誓願。第七開導問答。第八三番羯
磨。第九諸佛證明。第十示持戒相であらう。
(田島徳音)

⑦〔參考〕蓮門經緯卷下 (大野法道)
⑧授菩薩戒儀 ①(日) J. Do-sak-ka-
ka. ②. Shon-pu-sa-chi-ki. ③. 一巻
④存、己藏二六、一金剛集卷上 ⑤宋遺式
〔乾德二〕明道元 A. D. 964—1033) 撰
⑥本書は菩薩戒儀を十科に分け、受戒の次
第を述べたもの。本書は梵網戒の受戒作法
であるが、天台の戒學に基いて製作したも
の、はた南山律の戒學によつたものか、
其記述明確を欠く。元來支那天台宗では戒
學の獨自性が明瞭に發表されてゐない。こ
れを日本天台宗の圓戒思想に對照する場合
に愈々その感を得る。南山律が大乗律
を標榜し、教誨一致の態度を四分律から主
張する大膽さに比較し、天台戒が法華思想
に立脚して戒學を説く力が弱く迫力が足ら
ないのは如何なる事情によつたのか。惟ふ
に支那天台は止觀は禪宗に、戒は南山律に
融合し、更に教宗として華嚴法相と對立的
關係を結んだためであらうが、支那天台と
しての戒學が何故に發展性が乏しかったの
か。支那天台學が我が邦に興起するや、徳川
時代には安樂律なるものとなつて特殊なる
戒學を高調して支那天台戒學のために光輝
を放つてゐる。本戒儀の十科は第一開導
信心。第二諸三寶請天加護。第三歸依三
寶。第四四弘誓願。第五下座佛前乞戒。第
六發四弘誓願。第七開導問答。第八三番羯
磨。第九諸佛證明。第十示持戒相であらう。
(田島徳音)

【5】

⑦〔參考〕蓮門經緯卷下 (大野法道)
⑧授菩薩戒儀 ①(日) J. Do-sak-ka-
ka. ②. Shon-pu-sa-chi-ki. ③. 一巻
④存、己藏二六、一金剛集卷上 ⑤宋遺式
〔乾德二〕明道元 A. D. 964—1033) 撰
⑥本書は菩薩戒儀を十科に分け、受戒の次
第を述べたもの。本書は梵網戒の受戒作法
であるが、天台の戒學に基いて製作したも
の、はた南山律の戒學によつたものか、
其記述明確を欠く。元來支那天台宗では戒
學の獨自性が明瞭に發表されてゐない。こ
れを日本天台宗の圓戒思想に對照する場合
に愈々その感を得る。南山律が大乗律
を標榜し、教誨一致の態度を四分律から主
張する大膽さに比較し、天台戒が法華思想
に立脚して戒學を説く力が弱く迫力が足ら
ないのは如何なる事情によつたのか。惟ふ
に支那天台は止觀は禪宗に、戒は南山律に
融合し、更に教宗として華嚴法相と對立的
關係を結んだためであらうが、支那天台と
しての戒學が何故に發展性が乏しかったの
か。支那天台學が我が邦に興起するや、徳川
時代には安樂律なるものとなつて特殊なる
戒學を高調して支那天台戒學のために光輝
を放つてゐる。本戒儀の十科は第一開導
信心。第二諸三寶請天加護。第三歸依三
寶。第四四弘誓願。第五下座佛前乞戒。第
六發四弘誓願。第七開導問答。第八三番羯
磨。第九諸佛證明。第十示持戒相であらう。
(田島徳音)

⑦〔參考〕蓮門經緯卷下 (大野法道)
⑧授菩薩戒儀 ①(日) J. Do-sak-ka-
ka. ②. Shon-pu-sa-chi-ki. ③. 一巻
④存、己藏二六、一金剛集卷上 ⑤宋遺式
〔乾德二〕明道元 A. D. 964—1033) 撰
⑥本書は菩薩戒儀を十科に分け、受戒の次
第を述べたもの。本書は梵網戒の受戒作法
であるが、天台の戒學に基いて製作したも
の、はた南山律の戒學によつたものか、
其記述明確を欠く。元來支那天台宗では戒
學の獨自性が明瞭に發表されてゐない。こ
れを日本天台宗の圓戒思想に對照する場合
に愈々その感を得る。南山律が大乗律
を標榜し、教誨一致の態度を四分律から主
張する大膽さに比較し、天台戒が法華思想
に立脚して戒學を説く力が弱く迫力が足ら
ないのは如何なる事情によつたのか。惟ふ
に支那天台は止觀は禪宗に、戒は南山律に
融合し、更に教宗として華嚴法相と對立的
關係を結んだためであらうが、支那天台と
しての戒學が何故に發展性が乏しかったの
か。支那天台學が我が邦に興起するや、徳川
時代には安樂律なるものとなつて特殊なる
戒學を高調して支那天台戒學のために光輝
を放つてゐる。本戒儀の十科は第一開導
信心。第二諸三寶請天加護。第三歸依三
寶。第四四弘誓願。第五下座佛前乞戒。第
六發四弘誓願。第七開導問答。第八三番羯
磨。第九諸佛證明。第十示持戒相であらう。
(田島徳音)

⑦〔參考〕蓮門經緯卷下 (大野法道)
⑧授菩薩戒儀 ①(日) J. Do-sak-ka-
ka. ②. Shon-pu-sa-chi-ki. ③. 一巻
④存、己藏二六、一金剛集卷上 ⑤宋遺式
〔乾德二〕明道元 A. D. 964—1033) 撰
⑥本書は菩薩戒儀を十科に分け、受戒の次
第を述べたもの。本書は梵網戒の受戒作法
であるが、天台の戒學に基いて製作したも
の、はた南山律の戒學によつたものか、
其記述明確を欠く。元來支那天台宗では戒
學の獨自性が明瞭に發表されてゐない。こ
れを日本天台宗の圓戒思想に對照する場合
に愈々その感を得る。南山律が大乗律
を標榜し、教誨一致の態度を四分律から主
張する大膽さに比較し、天台戒が法華思想
に立脚して戒學を説く力が弱く迫力が足ら
ないのは如何なる事情によつたのか。惟ふ
に支那天台は止觀は禪宗に、戒は南山律に
融合し、更に教宗として華嚴法相と對立的
關係を結んだためであらうが、支那天台と
しての戒學が何故に發展性が乏しかったの
か。支那天台學が我が邦に興起するや、徳川
時代には安樂律なるものとなつて特殊なる
戒學を高調して支那天台戒學のために光輝
を放つてゐる。本戒儀の十科は第一開導
信心。第二諸三寶請天加護。第三歸依三
寶。第四四弘誓願。第五下座佛前乞戒。第
六發四弘誓願。第七開導問答。第八三番羯
磨。第九諸佛證明。第十示持戒相であらう。
(田島徳音)

【2】

即通那法身の如來、大日法身なりといひ、
三千成儀が即ち菩薩戒なりといひ、今は純
圓門に寄せて戒儀を釋すといふ。又登壇受
戒は多く出家の菩薩に約すといひ、祇園圖
には在家出家の菩薩戒壇があると記してゐ
るといふ。この説では南都戒壇と接近した
主張と考へられる點が認められる。第三請
師の所では「大唐和上觀の受菩薩戒」の文
を引き高座法に就いて述ぶ。「大唐和上
觀」とは誰を指すのか未詳。第四禮佛の所
では佛滅を「周穆王壬申」と定め授戒が佛
滅何年に當るかを示し、次に比丘戒の傳
授は出家でも滿二十年以上ならざるべから
ずと制し、第六問達の所では年滿二十以上
の者にして菩薩三業を受ければ比丘比丘尼
と名づけるといふ。又唐の菩薩戒壇は多く
は通受。別受は少ない。故に羯磨をしても
年滿二十、三衣鉢具等の言を載せなす。我
國の菩薩戒壇は多くは別受。通受は少な
い。この別受には著衣等が行れるのである
から、教に據つて年衣鉢具を記載すべし。
若し然らざれば別受とならなす。この事
は當時可成重大事であつたらしいが詳細の
ことは知れない。第七受戒の所では瑜伽論
の菩薩地品、瑜伽處戒品の授菩薩戒法、唐
三藏(玄奘)譯菩薩戒羯磨論等の文を引用し
て善男子とは在家、法弟とは出家のことと
あらう。論の説は通授法であると述ぶ。此
の説は瑜伽戒と天台の菩薩戒との區別を明
示したものである。第十説相の所では南岳
大師の戒儀の文を引用してゐる。この引文
と現行の南岳の戒儀の文とは一致するか

ら、南岳の戒儀は確かに梁陳の南岳思撰
であるといふ。乍然現存南岳戒儀全部が
果して南岳撰であらうか、多少の疑點があ
る。本書の文によつて南岳戒儀が眞撰たる
ことを證明する根拠が明らかになつた。又
本書に記されてゐないが授菩薩戒儀の朱書
には(第七受戒)三業淨戒を「虚空不動戒(攝
律儀戒)。定(攝善法戒)。惠(饒益有情戒)」
と記す。これ三學俱學の戒學説である。本
書は斷片的記述ではあるが、日本天台戒學
研究上熟讀すべきもの。
⑦〔參考〕初學抄、願示鈔、圓戒廣談、秩
外新定智證大師書錄一(尊通撰)
⑧授菩薩戒儀式 ①(日) J. Do-sak-ka-
ka. ②. Shon-pu-sa-chi-ki. ③. 一巻
④存、己藏二六、一金剛集卷上 ⑤宋遺式
〔乾德二〕明道元 A. D. 964—1033) 撰
⑥本書は菩薩戒儀を十科に分け、受戒の次
第を述べたもの。本書は梵網戒の受戒作法
であるが、天台の戒學に基いて製作したも
の、はた南山律の戒學によつたものか、
其記述明確を欠く。元來支那天台宗では戒
學の獨自性が明瞭に發表されてゐない。こ
れを日本天台宗の圓戒思想に對照する場合
に愈々その感を得る。南山律が大乗律
を標榜し、教誨一致の態度を四分律から主
張する大膽さに比較し、天台戒が法華思想
に立脚して戒學を説く力が弱く迫力が足ら
ないのは如何なる事情によつたのか。惟ふ
に支那天台は止觀は禪宗に、戒は南山律に
融合し、更に教宗として華嚴法相と對立的
關係を結んだためであらうが、支那天台と
しての戒學が何故に發展性が乏しかったの
か。支那天台學が我が邦に興起するや、徳川
時代には安樂律なるものとなつて特殊なる
戒學を高調して支那天台戒學のために光輝
を放つてゐる。本戒儀の十科は第一開導
信心。第二諸三寶請天加護。第三歸依三
寶。第四四弘誓願。第五下座佛前乞戒。第
六發四弘誓願。第七開導問答。第八三番羯
磨。第九諸佛證明。第十示持戒相であらう。
(田島徳音)

雲元一弘仁一三 A. D. 767—833) が撰補し、
圓頓戒授戒の式文としたもの。本書には智
證大師圓珍(日本弘仁五—寛平三 A. D. 814
—893) が仁和元一仁和五年(A. D. 850—893)
の五ヶ年間に朱書を以つて添註してある。
この朱書は日本天台宗の圓戒研究上益する
所が尠ならず存する。三井寺法明院敬光
律師(寛保元—寛政七 A. D. 1741—1795) は
圓戒廣談二(授戒結法篇六)に本書を得てこ
れを寫傳し珍重したことを記し、又圓耳眞
律師(正徳元—安永二 A. D. 1711—1734) は
圓頓大戒綱要に「山家の所立は唯大の七
業が受くる所の戒法である。この戒法には
通受法と別受法とがある。其の通受法は山
家大師(最澄)が荆溪の十二門儀によつて其
の文を添削し、自ら戒儀を製した。大師は
方士の風習に順つて初めに神分敬白等を加
へた。蓋し三業得の法である。古來比丘と
沙彌との受戒には並びに通じて此の戒儀を
用ひた云云」と。眞流は神分敬白を初めに
添へたと云ふが、智證大師圓珍の朱註本に
は神分敬白が添加してない。故に眞流の見
た山家大師の戒儀とは叡山戒壇院で用ゆる
受戒作法のことか。未詳。本書を眞流も敬
光も六祖判談の十二門戒儀を改訂したもの
と簡單に取扱つてゐるが、余の考ふる所に
よれば山家大師が修訂した所は、日本天
台宗圓頓戒壇に於ける授戒作法の制定にあ
るのであるから、極めて重要な意義を含有
んだ改訂だと思ふ。例せば荆溪の戒儀には
單に「菩薩戒」といつてゐる所を「菩薩金剛
寶戒」と改め、又菩薩戒の意義を擧げて「如

したことはなからうか。戒儀を圓珍が用
ひた明確な年號は同じく奥書に「貞觀十一
年(A. D. 869) 弘仁元年(A. D. 885) ま
で登壇授戒を行ふ毎に件の文を用ひた」と
記してある。本書は何年から記し初め何
年まで續いたらうか。眞書には年號の記し
てある所もない所があるため正確な年號
は知れない。今年號を早い年から順に記せ
ば「貞觀十二年。同十六年。元慶五年。仁
和元年。同二年。同三年。同五年(寛平元
年)」と七ヶ年が記されてゐる。貞觀十二
—寛平元年(A. D. 870—893) までは二十年間
に渉るのである。この年間の圓珍の傳を智
證大師年譜によつてみると、貞觀十年四月
三日座主安惠寂。同年六月三日圓珍は延暦
寺座主に勅任。同十五年良勇登壇受戒。仁
和二年尊意受大戒。寛平二年延暦寺圓兼
から朝廷への上表文には「座主圓珍は座主
ること二十年。木又をもつて衆を化するこ
と千萬人」と記す。此等の記事によれば授
戒は座主職となつてから以後行ひ、その度
毎に本裏書を記したものではなからうか。
若しこの推考の如しとすれば上古の叡山の
授戒は座主一人のみに限つて與へられた特
權であり、他の者は決して授戒會を行はな
かつたものと云へる。本書は二十八箇の裏
書から成る。その主要なるものを記せば、
第一開導の所では、要略を見るべしとい
ひ、戒戒の廣略(五八具無量)に就いて大
論の文を引き、如來一戒、金剛寶戒の文は
本朝の祖師(傳教大師)が撰補したものであ
ると記し、開教所説の佛即ち戒本は丈六

【シ】

大正二〇・五七八 No. 1135 縮印五、卅一
五・八、北1354巻、南1357佐、元1356佐、
明北955巻、清953巻、麗1318佐、天1347佐、
法1129巻、至661事、明南7001流、Nj. 960
①不空(神龍元)大曆九 A. D. 705—774) 譯
②唐天寶五—大曆九 (A. D. 746—774) 譯
一切如来金剛壽命陀羅尼經の下を見よ。
③壽量義説 ①(日) Ju-ryō-gi-kyō-shū.
②一卷 ③存 ④聖空光護(承應元)元文
四 A. D. 1453—1739) ⑤享保二刊 ⑥(龍
大正四一三・三七) (谷大、倫大・三三三六
京大・日大未四一) (正大、一四二・一)
⑦壽量顯本義 ①(日) Ju-ryō-kyō-mon-
hon. ②一卷 ③存 ④日蓮述 ⑤明治三
七 ⑥(立大、B〇四・一四) (京大、日大
未・五六七)
⑧壽量品經疏 ①(日) Ju-ryō-hon-
shō. ②一卷 ③存 ④大正四刊 (青寫真
本) ⑤(立大、D〇〇・一六九)
⑨壽量品科文 ①(日) Ju-ryō-hon-kwa-
mon. ②一卷 ③存 ④同珍(弘仁五—寛平三
A. D. 814—891) 説寛平四年、年七八(説撰
⑤(参考) 山家祖徳撰述高目集巻上
⑥(参考) ⑦(日) Ju-ryō-hon-ko-
ki. ⑧一卷 ⑨存 ⑩大正四刊(青寫真本)
⑪(立大、D〇〇・一六〇)
⑫壽量品私見聞 ①(日) Ju-ryō-hon-
shi-kem-mon. ②一卷 ③存 ④日蓮
寫本(立大、D〇〇・一七三)
⑬壽量品得意鈔 ①(日) Ju-ryō-hon-
-toku-t-shō. ②一卷 ③存、日蓮聖人御
遺文之内 ④日蓮(貞應元—弘安五 A. D.

1222—1282) ⑤文永八 (A. D. 1271)
⑥日蓮が鎌倉に於て司天博士安部晴長に與
つた書と傳ふ。法華經の壽量品は釋尊の久
遠實成を開顯した經であつて、若し一切經
中此經が無かつたらば、天に無日月、國
に大王なく、山海に玉なく、人にたましむ
無らんがごとし、「一切經は、「たづらひごと
なるべし」所詮壽量品の肝心南無妙法蓮華
經こそ十方三世の諸佛の母にて御坐し候
」と説いたものであつた。
⑦(参考) 餘外考文第五 (馬田行啓)
⑧壽量品妙義 ①(日) Ju-ryō-hon-nyō-
gi. ②壽量妙義 ③一卷科文一卷 ④同珍
(弘仁五—寛平三 A. D. 814—891) 説寛平
四年、年七八(説撰) ⑤(参考) 諸宗章疏録
第二
⑥壽量品文底大事 ①(日) Ju-ryō-
hon-mon-kei-dai-jishi. ②高 ③存、日蓮
宗々學全書興隆全集之内 ④日興(寛元四—
正慶元 A. D. 1246—1323)
⑤日蓮の上足六老僧の一人富士門流の祖日
興が日蓮の所説を筆受したものと傳ふ
る短文の書、「開目鈔」上にある、「一念三千
ノ法門ノ壽量品ノ文底ニ結玉ヲ玉ケリ」と
ある所謂日蓮の文底結玉の法門につき、「仰
云」として獨特の解釋を下し、其は久遠下種
の名字の妙法であるといひ、更に唱題の一
行を専らとし餘行を交へんからする義を説
したものであつた。(馬田行啓)
⑦壽量妙義 ①(日) Ju-ryō-hon-nyō-gi. 壽
量品妙義 ②一卷 ③同珍(弘仁五—寛平
三 A. D. 814—891) 説寛平四年、年七八(説撰)

述 ⑦(参考) 山家祖徳撰述高目集巻上
⑧數珠經辨譯 ①(日) Ju-zu-kyō-ben-
yaku. ②一卷 ③存 ④(京大)
⑨數珠功德經 ①(日) Ju-zu-ku-de-
kyō. (支) Shu-chu-kuang-te-ching. 校量數
珠功德經 ②一卷 ③存、大正一七・七二
七 No. 733 縮印一三、卅一〇・七、北235
女、南297女、元293女、明北291知、清291
知、麗285傷、天294女、指265傷、法290傷、
至362得、明南288才、Nj. 295 ④寶思惟譯
⑤唐神龍元 (A. D. 702) ⑥校量數珠功德經
6下を見よ。⑦寫本(龍大、二四一三)
⑧數珠功德經 ①(日) Ju-zu-ku-dok-
kyō. (支) Shu-chu-kuang-te-ching. 曼殊室
利呪藏中校量數珠功德經、校量數珠功德經、
曼殊數珠功德經 ②一卷 ③存、大正一七
二六 No. 787 縮印一三、卅一〇・七、北
286女、南293女、元291女、明北292知、清
292知、麗264傷、天295傷、指265傷、法
281傷、至363得、明南289才、Nj. 295 ④
唐義淨(貞觀九—先天二 A. D. 635—713) 譯
⑤曼殊室利呪藏中校量數珠功德經6下を見
よ。
⑥數珠功德經偈語鈔 ①(日) Ju-zu-
ku-dok-kyō-ka-go-shō. ②一卷 ③存
④原田了澄述 ⑤明治二七刊 ⑥正大、一
一七九・九四
⑦數珠功德經鈔 ①(日) Ju-zu-ku-
doku-kyō-shō. ②一卷 ③存、日本大藏
經方部部章疏第六 ④亮法(元和八—延寶
八 A. D. 1622—1680) 述
⑧本書は、巻頭に數珠經辨譯として、數珠經

は開元録十二によれば、唐寶思惟譯の校量
數珠功德經一卷とありて二經は同本異譯なりと
し此の外、唐不空三藏の譯に金剛頂輪佛念
誦經一卷あるが、先の功德經が雜部に屬すもの
なるに對して是は純部に屬するものである
と解説し、次に義淨譯本によつて一經を三
段に分け、經の題目と譯説と本文を詳解し
てゐる。(岡田契昌)
⑨樹下御法 ①(日) Ju-ge-go-hō. ②一
卷 ③豪寬(元祿頃 A. D. 1688—1703—)
撰 ④(参考) 山家祖徳撰述高目集巻上
⑤樹下雜錄 ①(日) Ju-ge-zo-roku. ②
十卷 ③存 ④漢興祖芳記 ⑤(参考) 大
日本佛教全書續刊決定書目
⑥樹下堂漫記 ①(日) Ju-te-dō-man-
ji. ②十七卷 ③存 ④漢興祖芳記
⑤(参考) 大日本佛教全書續刊決定書目
⑦樹生婆羅門懺慢經 ①(日) Ju-shū-
-ba-ra-mon-kyō-man-gyō. (支) Shu-sheng
-pa-ra-mon-chiao-man-ching. ②一卷
③根本説一切有部毘奈耶雜事第三十四卷末
乃至第三十五卷初の抄出。
④(参考) 開元録第一六、第一七、貞元録
第二六
⑧樹泉集 ①(日) Ju-sen-shū. (支) Shu-
chuan-shū. ②十卷 ③存 ④清代退翁弘
儲 ⑤(参考) 譯録目録
⑨樹提伽經 ①(日) Ju-dai-ka-kyō. (支)
Shu-ti-ka-ching. ②一卷 ③存、

【シ】

大正一四・八二五 No. 549 縮印七、卅二・
四、北593行、南533行、元533行、明北449
羊、清449羊、麗519巻、天533行、指474巻、
法495巻、至475巻、明南331頁、Nj. 453
⑩宋求那跋陀羅譯 ⑪元嘉一一二〇〇(A.
D. 435—443)
⑫樹提伽は印度跋波城に住せし長者の名で
ある『南本涅槃經』によれば、城の長者に
繼嗣がなかつたので六師外道に歸依して子
息を求め間もなく、其の婦は懷妊した。所
が六師のこれを相して女兒と云ふのをきい
て再び煩悶した。會々ある知識より佛の尊
き事並に附近にて化導せることをきき、佛
所に至りて胎兒のことを訪問し、男子なる
こと疑なしと云ふのをきいて歡喜し、家に
歸つて出生を待った。然るに六師の爲めに
僞られて毒羅果に毒を混じたるを呑んだ婦
は遂に命終したので火葬に附した。佛は直
ちに大醫者婆を遣して火中に入りて婦の腹
中より兒を取り出さしめ、猛火中より生じ
たからとて樹提伽(Jotika)と名けしめた
と云ふ。後須婆沙羅王に養はれて富裕を極
めた。『西域記』は王舍城の側に長者の故里
のあることを云つてゐる。この樹提伽長者
の往昔の因事を叙して布施の功德を説く
が本經の内容であつて、その人によつて經
題としたものである。
富貴なること國王を凌ぐ樹提伽長者が、
一日池邊に掛けた拭體の巾が風の爲めに吹
き上げられ、王殿の前に落ちた。王は群臣
を集めて下問したが、諸臣は皆王の國が大
いに興らんとする前途で、天が白銀を賜つ

たのであると云ふのに、一人樹提伽だけは
黙つて答へない。王は長者にそのわけをき
くと、敢て王を欺かずとて事實を述べた。
數日後長者の後園の金華が萎落し、それが
風に吹かれて又王殿の前に落ちた。今回
も諸臣は皆瑞兆として、樹提伽は敢て王
を欺すとして事實を述べた。そこで王は長
者の家を訪ねて見度いと考へ、行つて見る
とその立派なること、事毎に驚き、歸るを
忘れて二ヶ月を費してしまつた。遂にその
富裕なること甚だしく王に過ぎたるより、
これを伐たんとして、四十萬衆を差し向け
た。然し一力士の爲め打ち倒されてしまつ
た。今は國王、樹提伽を伴つて佛所に詣り、
長者の前身に何の功德あつて然るかをき
いた。佛はこれ布施の功德であるとして、往昔商
主が諸商人を誘つて重寶を賣す途中一病人
に逢つた。この道人に草屢を給したものが
あつたが、それがこの長者夫婦であり、道
人とは佛自身、商主とは今の國王であると
説いてゐる。(三好鹿雄)
⑬樹提伽經 ①(日) Ju-dai-ka-kyō. (支)
Shu-ti-ka-ching. ②一卷(別本)
③存、大正一四・八二五 No. 549
④本經は大正大藏經が別本として載せてゐ
るものであるが、「樹提伽經」には、「大官長
者」が大長者となつて居り、「挂著池邊」が
「掛著池邊」となつて居り、「無言」が「不言」
となつてゐる等の如き僅かの字句の相違あ
るのみで内容は全然同じである。(三好鹿雄)
⑭樹提伽經 ①(日) Ju-dai-ka-kyō. (支)
Shu-ti-ka-ching. ②一卷(別本)
③存、大正一四・八二五 No. 549
④本經は大正大藏經が別本として載せてゐ
るものであるが、「樹提伽經」には、「大官長
者」が大長者となつて居り、「挂著池邊」が
「掛著池邊」となつて居り、「無言」が「不言」
となつてゐる等の如き僅かの字句の相違あ
るのみで内容は全然同じである。(三好鹿雄)

(支) Shu-ti-ka-ching. ②一卷 ③失譯
④(参考) 出三藏記第四、法經錄第三
⑤樹提摩納發菩提心誓願經 ①(日) Ju-
-da-mo-na-ho-hotsu-bo-dai-shin-
-sei-gwan-kyō. (支) Shu-ti-mo-na-la-pa-
-ti-hsin-shih-yuan-ching. ②一卷 ③失
譯 ④悲華經第五卷の抄出。⑤(参考) 出
三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜
泰錄第三、開元録第一六、貞元録第二六、
⑥(参考) 朝野群載書行豫定書目
⑦儒佛質疑論 ①(日) Ju-shaku-shisan-
-gi-ron. ②二卷 ③存 ④寫本(京大、藏
二四〇・三六)
⑧儒佛宗傳稿議 ①(日) Ju-shaku-shū-
-den-seisan-gi. (支) Ju-shih-tsung-chuan-
-chih-i. ②五卷 ③存 ④明智旭(萬曆
二七一—永曆九 A. D. 1599—1655) 撰 ⑤享
保二刊 ⑥龍大、二九六四・二四〇(谷大、餘
大・二二九六)
⑨儒佛筆陣 ①(日) Ju-shaku-hisshū-jin.
②一卷 ③存 ④玄光獨庵(寛永七一—元祿
一一 A. D. 1630—1698) 記 ⑤天和二刊 ⑥
⑦(駒大) (谷大、餘大・二二九七) (哲・え・七・
左・八)
⑩儒佛問答 ①(日) Ju-shaku-mon-dō.
三教辨論 ②五卷 ③存 ④月海述 ⑤寛
文七刊 ⑥龍大、二八一三・三四(谷大、餘
大・二二八五) (京大、日大未・八〇七) (駒大)
⑪儒佛問答拔擢 ①(日) Ju-shaku-
-mon-dō-batsu-pi. ②四卷 ③存 ④(參

考) 譯録目録
⑫儒童經 ①(日) Ju-dō-kyō. (支) Ju-
-t'ang-ching. 儒童菩薩經 ②一卷 ③失譯
④六度集經第八卷の抄出。⑤(参考) 出三
藏記第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元
録第一六、貞元録第二六
⑥(帝國) (一九九・二四二)
⑦儒佛合論 ①(日) Ju-butsu-gō-ron.
②九卷 ③存 ④智脫述 ⑤寛文八刊 ⑥
龍大、二八一三・三三(哲・え・七・中・一五)
⑧儒佛花見問答 ①(日) Ju-butsu-ha-
-na-mi-mon-dō. ②一冊 ③存 ④刊本
(哲・え・七・左・三三)
⑨儒佛問答 ①(日) Ju-butsu-mon-dō.
②三卷 ③存 ④林信勝問、須祐答 ⑤刊
本(龍大、二八一三・三五) (哲・え・七・左・
一)
⑩儒佛論肝要鈔 ①(日) Ju-butsu-ron-
-kann-yō-shō. ②二冊 ③存 ④刊本(哲・
え・七・右・一六)
⑪儒佛或問 ①(日) Ju-butsu-waku-
-mon. ②三冊 ③存 ④刊本(哲・え・十・
左・三五)
⑫滿首童眞經 ①(日) Ju-shū-dō-shūn-
-kyō. (支) Ju-shou-t'ung-ch'uan-ching.
②一卷 ③失譯 ④(参考) 出三藏記第四
⑬滿首菩薩經 ①(日) Ju-shū-do-sak-
-kyō. (支) Ju-shou-p'u-sa-ching. ②二卷
③失譯 ④(参考) 出三藏記第四、三寶紀
第五、內典錄第三

名所行目◎(名庫書)書影所現◎月年の刊記◎(書考)書影註書末◎説解存内◎代年作撰◎著書◎缺存◎數巻◎(名書)名題◎號地字號

【シ】

潘首菩薩無上清淨分衛經
 ① (C) Ju-shu-ho-satsu-mu-ji-sho-ji-hu-nan-e-kyo. (支) Ju-shou-p'u-sa-wu-shang-ch'ing-ch'ing-fen-wei-ching. 決了諸法如幻化三昧經 ② 二卷 ③ 後漢嚴佛調 (一) 中平五 A. D. 188 (譯) ④ 第一譯 ⑤ (參考) 出三藏記第四、開元錄第一四、貞元錄第二四

潘首菩薩無上清淨分衛經
 ① (C) Ju-shu-ho-satsu-mu-ji-sho-ji-hu-nan-e-kyo. (支) Ju-shou-p'u-sa-wu-shang-ch'ing-ch'ing-fen-wei-ching. (英) Farca-satika-prajalapatramita. (藏傳) ② 二卷 ③ 存、大正八・七四〇 No. 334 節月九、二五・六 ④ 宋代刊本

⑤ 本書は、一名『決了諸法如幻化三昧經』ともいひ、劉宋の代刊本の所譯にかゝる。これは既に、その別名の示す如く、潘首の法身清淨分衛諸法如幻化三昧を説けるものであつて、前には龍首に對して説き、後には須菩提や舍利弗や、長者・優婆塞等を借りて説きせしめ、更に潘首の久修無著三三昧成就の讃嘆を交へてゐる。本經は、『出三藏記集』、卷四には失譯とし、『法經錄』卷一には、『期公南海に於て譯す』とし、以下諸經錄何れもこれに倣してゐる。惟ふに、期公の所譯とするが正しき歟。『歷代三寶紀』卷四及び卷十には、別に同名の二本を出して、一を期公、他を嚴佛調の所譯としてをり、『三寶紀』以後の諸錄またこれに倣つてゐるが、更にまた以上二經の外に、『潘首菩薩經』なる名を出し、『出三藏記集』は

鷲峯開山三江紹益禪師履歷記
 ① (C) Ju-ho-kai-san-san-ko-sho-eki-zen-j'i-ri-eki-ki. ② 一巻 ③ 存 ④ (參考) 大日本佛教全書續刊決定書目

鷲峯開山法燈國師行實年譜
 ① (C) Ju-ho-kai-san-ho-to-koku-shi-er-shi-nen-pu. ② 一巻 ③ 存 ④ 自南溟撰 ⑤ (參考) 大日本佛教全書續刊決定書目

鷲峯開山法燈國師緣起
 ① (C) Ju-ho-kai-san-ho-to-koku-shi-er-shi. ② 二巻 ③ 存 ④ (參考) 大日本佛教全書續刊決定書目

鷲峯拾葉鈔
 ① (C) Sho-ri-shu-cho. ② 二十四巻 ③ 存、日本大藏經法華部章疏第三 ④ 尊勝(寶德三 A. D. 1451) 撰 ⑤ 永正九(A. D. 1512)

⑥ 本書は妙法蓮華經の談義本である。故に經題に就つて五重玄義の談義を評述してゐない。經文の談義であるが先づ開講要義として簡略な法花の大意。直説の由來即ち談義の變遷。傳譯。山家大師の三種法花。調卷の不同。七佛藥師。一乘守護明神等の解説を試み、次に天台大師の説により一部廿八品の各品毎に來意、釋名、入文判釋の三段に大別して一節毎に其の意義を記述し、更に入文判釋の下では經文を一々章節に分科し、各科の下で一々文章、字義、訓釋、因縁物語を説き進んで和歌を添へて經文の意を知らしめてゐる。是の如き著作は殆んど他には見當らない。本書とや類似したものには榮心の法花直説抄廿巻(この

書は禮那波の法花經調讀を用ひ)があるが記述が本書のように詳密ではない。恐らく本書は我國の法華經講義として特異性を顯した唯一のものであらう。次に著者の傳。尊勝は常陸中郡月山寺の學僧。傳は止觀見聞語註一之乾に出づ。詳細の點は明記しなきを缺いてゐる。本書第九、廿卷奥書に「永正九年生年六十二歳」とあるから推算して生年が知られるが寂年は未詳。次に本書述作の由來。本書第六、九卷の奥書に尊勝は著作の目的等を記してゐる。第六卷奥書には「永正八年辛未仲秋初二日常州黒子千妙寺別當房に於いて老眼の涙を流しつゝ、菟毫を染め、殘暑の汗を拭ひながら鳥跡を刺ぎ、愚昧ながら調卷を集め、後昆の鑒意に示さんとして記したものである。『すまのよのたれとはなしにのこしをく、こころのあともなきたならずや』明四明護士志願尊勝とあり、第九卷奥書には「永正九年壬申夏十八日常州黒子千妙寺に於いて且つは收童勸誘のため、且つは法輪を染めため、老眼の涙を拭ひながら調卷を染めため記した。野聖老比丘尊勝生年六十二歳」とある。これに依ると尊勝は月山寺から千妙寺へ轉住し、千妙寺で本書を記したことになる。然るに武藏川越仙波院住持實海の誌した本書の序文を見ると、「余は來業に示さんと思ひ少しく草案を作つたが、友人亮尊も舊聞を始め、新書として名づけて鷲峯拾葉鈔と曰ひ、余に示された。熟々これを閲みするに美を盡し善を盡したものである。故に余

これを以て、恐らく前者と同本ならむとするも、『法經錄』以下は、獨立せる別個の異譯として取扱ひ、『歷代三寶紀』等は、これを號吳若くは漢代に擬してゐる。さりながら、この『潘首菩薩經』なるものは、『出三藏記集』の『くろくが如く、獨立せる異譯ではなくして、本經と異名同本たるものではなからうか。また嚴佛調譯とあるものも、果して別存してゐたかどうかは疑はしき。惟ふに、宋代戦亂相次ぎ、加ふるに排佛の難に遭ひ、譯業多く邊土において行はれしため、譯者の如きも或は知られず、爲に後らに及んで、かく異れる譯者の名を以て傳へらるゝに至つたのであると思はれる。譯出年代詳かならず、支婁譯『大般若經』第八會那伽室利分は、まさしく本經に相當するものである。(深浦正文)

鷲山しをり
 ① (C) Ju-shan-shi-wo-ri. ② 一巻 ③ 存 ④ 武内享撰述、淨住省吾編 ⑤ 無門關の注釋 ⑥ 明治三三刊 ⑦ (駒大)

鷲峯一枝
 ① (C) Ju-ho-ichi. ② 一巻 ③ 存 ④ 三江和益(一慶安三 A. D. 1650) 撰 ⑤ (參考) 大日本佛教全書續刊決定書目

末期の佛教。特に天台宗寺院と對社會との關係等が反面から觀察され、又十宗を認め新興佛教たる淨土宗と禪宗との獨立を述べてゐる。然るに日蓮宗の問題には全く觸れてゐないのは如何なる事由によるのか。是の如く諸の宗教事象の説明を通俗的に記述してゐるから興趣湧いて盡きずといへる。本書は學的の半面と通俗趣味に投ずる半面と口決傳授の半面とから組織されてゐる。學的の方面は上代天台學の研究。通俗的記述は天台宗史及び支那史日本史の研究。口決傳授は相承傳授の尊重と出家學侶の在俗とは相違した修行を傳へてゐることを明かにし、そして在俗の權從信徒から施物を獻げしめ、又は師が弟子から布施を掛けしめるのであるから、經濟的意義が多分に含蓄されてゐるものである。これに觀察しても足利期の寺院の資財は布施中心となりつゝあり莊園收入の維持は漸く不可能となりつゝあつたことが了解し得るであらう。この故に本書の特色は口傳法門と因縁物語と和歌連歌とにあると云ふべきである。物語は印度支那日本の物語を各方面から引き來つてゐる其數頗る多く恐らく五百種位に及ぶであらう。和歌連歌は引用した數二百三首。上は萬葉集から室町中期に至るまで僧俗各方面の詠歌を擧げてゐる。この點は室町時代文學の一である談義文學書の代表的なものであり又説話文學書として觀察しても優に其價值は大なるものがあると思ふ。

【シ】

が更に加ふべきものはかない。時に永正龍集上章(庚)教詳(午)仲冬甲子日。仙波星野山北院住持法印實海」と記してある。尊勝は月山寺から常陸黒子千妙寺へ轉住して法系の亮の字を繼ぎ亮尊と改めたのであらう。一説に亮尊と改めたといふ。而し亮尊では本書の序文の亮尊と矛盾する。奥書に尊勝としてゐるのは舊名を用ひたので、千妙寺住持としての本名は亮尊であつたのであらう。上章教詳即ち庚午なる干支は永正七年に當る。こゝで本書奥書と序文との間に記年が一致しなくなる。序では永正七年には本書が出来て實海に示したといひ、六、九卷奥書では永正八年同九年にこれを記したといふからである。恐らくこの矛盾は尊勝即ち亮尊が草稿本を實海に示し實海が草稿本に序を興へたものであり、六、九卷の奥書は再治した時に記した年月ではなからうか。若し亮尊と尊勝とが別人であれば是の推定は無用となる。別人説が成立すれば尊勝は著者ではなく、寫本したものと云はなければならなくなる。今は亮尊は尊勝であるとして認むべきであらう。次に本書の内容。本書は文句、文句等に基づいて記したことは勿論、廣く支那日本撰述を参照引用し、口傳、記録等も適宜に案配して用ひ、又因縁物語と和歌連歌を頗る豊富に援引して直説たる本旨を十分に發揮し、各地の談義所即ち權林今日の學校に於ける初學者の參考書たる役割を完全に果してゐる。猶日本天台の惠禮兩流の口傳及び一貫神道等の説も盛んに引用してゐるから室町時代

⑧ 慶安三刊 ⑨ (正六、一三六・六六)(立六、

A 一・二・三五九(高六、寄一・二四)
秀句十勝鈔
 ① (C) Sho-ku-ju-cho. ② 存、日蓮聖人御遺文之内 ③ 日蓮(貞應元一弘安五 A. D. 1232-1282) 撰 ④ 文永八(A. D. 1271)
秀聖記
 ① (C) Sho-sei-ki. ② 七巻 ③ 存 ④ 尊勝記 ⑤ 寫本(龍大、研眞)
秀聖秘記
 ① (C) Sho-sei-hi-ki. ② 八巻 ③ 存 ④ 秀聖(享保七 A. D. 1722) 撰 ⑤ 寫本(谷大、宗洋・一七一)
秀山遺芳
 ① (C) Sho-san-yu-ho. ② 寫真 ③ 小倉市立・記念圖書館
秀山御調
 ① (C) Sho-san-jo-ki. ② 存、尾州五僧安心料理卷八 shirabe. ③ 寫本(谷大、宗洋・一七一)
秀存語錄
 ① (C) Sho-son-go-roku. ② 一巻 ③ 存 ④ 佐々木月樵(明治八一昭和元 A. D. 1875-1926) 編 ⑤ 明治四〇刊
秀存法話
 ① (C) Sho-son-ho-wa. ② 一巻 ③ 存 ④ 秀存(天明八—萬延元 A. D. 1798-1860) 撰 ⑤ 佐々木月樵(明治八一昭和元 A. D. 1875-1926) 編 ⑥ 大正三、昭和五刊 ⑦ (谷大、宗洋・三二八)
秀如上人法語
 ① (C) Sho-nyo-sho. ② 一冊 ③ 存 ④ 寫本(京大、日大・六七七)
秀野林禪師語錄
 ① (C) Sho-ya-hin-zen-ji-go-roku. (支) Hain-yeh-lin-ch'an-shih-yu-lu. ② 一巻 ③ 存 ④ 清代

秀野明林語、最正等編 ⑤ 康熙二三刊(駒大)
宗意安心
 ① (C) Sho-i-an-jin. ② 一巻 ③ 存 ④ 岸澤惟安著 ⑤ 昭和七刊 ⑥ 東京甲子社書房
宗意安心問題講述
 ① (C) Sho-i-an-jin-ron-dai-ko-jutsu. ② 一巻 ③ 存 ④ 雲山龍珠著 ⑤ 大正六刊 ⑥ (龍大、一五〇・一四)
宗意綱要
 ① (C) Sho-i-ko-yo. ② 存、教導講演集之内 ③ 丘宗譯著 ④ 大正一〇刊 ⑤ 東京曹洞宗務院
宗意言上書
 ① (C) Sho-i-gon-jyo. ② 一巻 ③ 存 ④ 知叟(寛永一一—享保三 A. D. 1631-1718) 記 ⑤ 寫本(龍大、一七七一・一六、研史)
宗意三業願生記
 ① (C) Sho-i-san-gwan-sho-ki. ② 一巻 ③ 存 ④ 寫本(龍大、研眞)
宗意問答改悔篇
 ① (C) Sho-i-mon-do-gan-ke-hen. ② 一巻 ③ 存 ④ 寫本(龍大、一五〇・九二)
宗意惑亂一件吟味伺書
 ① (C) Sho-i-waku-ran-ik-en-gin-mi-ukigata-sho. ② 一巻 ③ 存 ④ 寫本(龍大、一四八)
宗一大師廣錄
 ① (C) Sho-i-da-i-shi-ko-roku. (支) Tsung-ta-shih-kuang-lu. 支沙師備禪師廣錄 ② 三巻 ③ 存、正續二・三・一・二 ④ 唐師備支沙(一開平二 A. D. 908) 撰 ⑤ 支沙師備禪師廣錄の下を見よ ⑥ 元祿三刊 ⑦ (駒大)(谷大、龍大、

【シ】

in-dan-tsun-g-yen-pai. 諸家宗派 ① 一巻
 ② 存、己續二〇・三三・三三 ③ 清代寺一編
 ④ 一に諸家宗派と云ふ。宗(釋)教(天台)華
 嚴(律)等の支那諸宗派の傳統次第を簡単に
 記し、更にその要を時局し易き數句に約し
 して述べしものである。一、臨濟源流談。
 二、沩仰源流談。三、洞山源流談。四、雲
 門源流談。五、法眼源流談。六、天台宗源
 流談。七、天台教觀。八、華嚴賢音教。九、
 南山律派。十、附列不知世數未考何宗各家
 宗派の十に分り。(家本善隆)

宗家難問答 ① (日) Sha-ke-nam-
 mon-do. ② 一巻 ③ 足利時代寫
 ④ (寶龜院)

宗決 ① (日) Sha-ke-tsu. 宗義決擇集
 ② 二十巻 ③ 存 ④ (京本)

宗憲評論 ① (日) Sha-ken-hyo-ron.
 ② 一巻 ③ 存 ④ 下間空教(一昭和六A.D.
 1931)著 ⑤ (京本)

宗元錄 ① (日) Sha-gen-roku. (支)
 Tsung-yuan-lu. ② 百巻 ③ 宋吳興元撰
 (一政和二年A.D.1122) ④ (參考) 諸宗
 章疏卷第二

宗文義抄 ① (日) Sha-gen-gi-sho.
 ② 一巻 ③ 存 ④ 日辰述 ⑤ 大正四寫
 (立大、D.O.166)

宗源餘滴 ① (日) Sha-gen-yo-teki.
 ② 六巻 ③ 存 ④ 五家正宗贊の註釋。⑤ 寫
 本(駒大)見文庫本寫本(帝國、二二九・八
 二)

宗源錄 ① (日) Sha-gen-roku. ② 續
 卷餘滴 ③ (參考) 諸宗章疏卷第二

宗光寺中興盛海僧正傳論 ① (日) Sha-ko-ji-chu-ko-sei-kai-so-jo-
 den-ron. ② 一巻 ③ 存 ④ 覺風記 ⑤ 寫
 本(正大)

宗綱口授抄 ① (日) Sha-to-ku-ju-
 sho. ② 一帖 ③ 存 ④ 足利時代寫 ⑤ (寶
 龜院)

宗綱對問 ① (日) Sha-ko-tai-mon.
 ② 一冊 ③ 存 ④ 刊本(首、三・中・三三)
 (立大、A.O.六・七九、八一―八二)

宗綱綿繹篇 ① (日) Sha-ko-men-pa-
 hen. ② 一冊 ③ 存 ④ 刊本(首、三・三・
 右・三〇)

宗號次第便覽 ① (日) Sha-go-shi-
 dai-ben-ran. 淨土真宗一向宗宗號次第便
 覽 ② 二巻 ③ 存 ④ 寫本(龍大、研史)

宗號定由錄 ① (日) Sha-go-ji-ya-
 roku. 復照宗號定由錄 ② 一巻 ③ 存 ④
 寫本(龍大、一九七・一五五)

宗號錄 ① (日) Sha-go-roku. ② 二巻
 ③ 存 ④ 寫本(正大、一五七・七六)

宗號論除疣 ① (日) Sha-go-ron-
 usuketari-jo-ya. ② 二巻 ③ 存 ④ 玄機
 典(享保五文化一〇A.D.1720-1813)
 ⑤ (參考) 諸宗目錄

宗權抄 ① (日) Sha-ko-sho. ② 一
 巻 ③ 存 ④ 心海撰 ⑤ 天文三寫 ⑥ 眞
 如院)

宗權道肝 ① (日) Sha-ko-kan-do-kan.
 ② 一巻 ③ 存 ④ 寫本(金剛三昧院)

宗權論 ① (日) Sha-ko-ron. (支)
 Tsung-chi-lun. ② 虛堂本(一紹興三A.
 D.1133) ③ (參考) 諸宗章疏卷第二

D.1133) ③ (參考) 諸宗章疏卷第二

宗骨鈔 ① (日) Sha-ko-shu. ② 一
 帖 ③ 存 ④ 德川時代寫 ⑤ (寶龜院)

宗四分比丘尼隨門要行儀 ① (日)
 Sha-shi-ban-bi-ku-ni-mon-yo-gyo-gi.
 (支) Tsung-sat-ten-pi-chi-ni-sui-mon-yo-
 tsung-gi. 宗四分比丘尼隨門要行儀、四分比
 丘尼隨門要行儀 ② 一巻或二巻 ③ 存、大正
 八五・六五四 No.291 ④ (參考) 入唐新
 求聖教目錄、東城傳燈目錄卷下

宗四分比丘尼隨門要略行儀
 ① (日) Sha-shi-ban-bi-ku-ni-mon-yo-
 ryaku-gyo-gi. (支) Tsung-sat-ten-pi-chi-
 ni-sui-mon-yo-hyo-ryaku-gi. 宗四分比丘尼
 隨門要行儀、四分比丘尼隨門要略行儀 ② 一巻或
 二巻 ③ 存、大正、八五・六五四 No.291
 ④ 本書はスライク氏蒐集の煨煨出土古寫
 本、大英博物館藏同種二本の中の一、首部
 は缺佚してをるけれども、末尾に「宗四分
 比丘尼隨門要略行儀」とありて題名を知るこ
 とが出来た。佛滅後百年頃出世と傳ふる曇
 無德の四分律に基いて比丘の行儀の要略を
 示したもので、殘卷の初に戒場に関する圖
 相あり、それより順次、結戒場七法、解界
 法、說戒法、對首安居法、對首受七日法、
 僧中自恣法、分比丘尼隨門要略法、受非時樂
 法、捨墮悔法、展轉悔法、明還財物
 法、毘羅發露法、疑罪發露法、我作餘食
 法、作六念法、受罰錢作淨等法、淨業
 業等法、八業五法の二十一法に就いて説明
 し、開ゆる比丘の日常生活其他の規定を舉

びてゐる。永祖(A.D.1014-1095)の東城
 傳燈錄下(大正五五・一五六頁上)に「宗四
 分比丘尼隨門要行儀」一巻智證大師證來目錄
 (大正五五・一〇六頁上)に「四分比丘尼隨
 門要行儀二巻」とあるから吾々は本邦に傳來
 したことが判かる。(鳴沙餘韻解説第一
 部一三二―一三三頁參照)

④ 煨煨出土本(大英博物館藏(S.290))
 (矢吹慶輝一成田昌信)

宗御改五人組帖 ① (日) Sha-
 shi-o-aratame-go-nin-gumi-ji. 都原村松
 宗御改五人組帖 ② 一巻 ③ 存 ④ 明和
 五寫 ⑤ (立大、D.1111)

宗旨開話解 ① (日) Sha-shi-kan-
 wa-ge. ② 一巻 ③ 存 ④ 高臥述 ⑤ (參考)
 諸宗目錄

宗旨疑問指略答 ① (日) Sha-
 shi-gi-mon-shi-kyaku-to. ② 一巻 ③
 存、眞宗全書第五四 ④ 圓智(一寛文頃A.
 D.1661-1672)述

④ 圓智は寛文年間(於ける眞宗の學匠であ
 る。本書は弟子慧空の提出せる十七條の疑
 問を解明せんとして、未だ成らざるに曉然
 長逝す、後に慧空はこれを淨寫し、自家の
 腋底に貼せしものなること卷末の慧空の跋
 に依て推知せられる。内容は十七條の中、
 彌陀眞化、諸佛能化、滅罪盡不、他作回
 向、宿善厚薄、果遂宿善、微善成德、釋迦
 形像、彌陀三尊の九條に就て解説せるもの
 である。

④ 寛文一〇寫 ⑤ (谷大、宗大、二五八三)
 (荻生隆三)

名所行録 (名庫書) 諸宗現現 月年の刊載 (書考參書附註) 書主 説解存内 代年作著 著書 録存 數巻 (名書) 名題 號略字數

【シ】

宗旨言上記 ① (日) Sha-shi-gon-ji-
 ki. ② 一巻 ③ 存 ④ 知宗(寛永一一享
 保三A.D.1634-1718)記 ⑤ 寫本(龍大、一
 九七・一七)

宗旨提要記 ① (日) Sha-shi-yatsu-
 yo-ki. ② 一巻 ③ 存 ④ 日辰(享保二〇
 一文化一三A.D.1735-1816)記 ⑤ 寫本
 (京大、日大、五八三)

宗旨雜記 ① (日) Sha-shi-zaki-ki.
 ② 二巻 ③ 存 ④ 日辰記 ⑤ 天保二刊
 (龍大、六九二・三) ⑥ 谷大、餘大、二〇三〇)
 (首、三・四・中・一五) ⑦ 立大、A.O.四・一〇
 二二) ⑧ 帝國、二四一・一九(京大、國史)

宗旨要解 ① (日) Sha-shi-yo-ge. ②
 十巻 ③ 存 ④ 日辰(享保二〇一文化一三
 A.D.1735-1816)述 ⑤ 寫本(立大、D.O.
 七六・三一九)

宗釋相傳條々 ① (日) Sha-shaku-
 se-den-ji-ji. ② 一巻 ③ 存 ④ (京本)

宗釋莊句類聚 ① (日) Sha-shaku-
 so-ku-tai-ju. ② 一帖 ③ 存 ④ 德川時代
 寫 ⑤ (寶龜院)

宗宗淺淺隨聞記 ① (日) Sha-sha-
 sen-sen-sui-mon-ki. ② 一巻 ③ 存 ④ 譯
 那集 ⑤ 寫本(曼珠院)

宗乘講義錄 ① (日) Sha-jo-ko-gi-
 roku. ② 存 ③ 清水梁山、加藤文雅編
 ④ 明治三七一三九刊 ⑤ (立大、B.O.九・一
 八六四)

宗乘講本 ① (日) Sha-jo-ko-hon. ②
 一巻 ③ 存 ④ 山上青源編 ⑤ 示院院文、
 歸依三寶、安居、坐禪儀、四攝法、行持、

赴粥飯法、衆寮清(儀)規、對大己法、學道
 用心集、普勸坐禪儀、坐禪用心記を収む。
 ④ 大正二刊 ⑤ (駒大) ⑥ 東京和融社

宗乘論題 ① (日) Sha-jo-ron-dai.
 ② 一巻 ③ 存 ④ 内田寛孝(天明七一明治
 一一A.D.1787-1879)述 ⑤ 寫本(龍大)
 ⑥ 寫本(龍大、研眞)

宗乘論題名目集 ① (日) Sha-jo-
 ron-dai-myō-moku-shū. ② 一巻 ③ 存
 ④ 寫本(龍大、研眞)

宗圖 ① (日) Sha-ju. ② 一冊 ③ 存
 ④ 享保三刊 ⑤ (高六、寄・一一一)

宗圖目錄 ① (日) Sha-ju-moku-ro-
 ku. ② 三冊 ③ 存 ④ 刊本(高六、寄・一一
 〇)

宗制改革論 ① (日) Sha-sei-kaifu-
 ron. ② 一巻 ③ 存 ④ 土屋詮數編 ⑤
 大正三刊 ⑥ (立大、B.19・一一)

宗制寺法並宗記 ① (日) Sha-sei-ji-
 ho-narabini-sho-ki. ② 二冊 ③ 存 ④ 刊
 本(高六、一・五七)

宗制寺法並補則 ① (日) Sha-sei-ji-
 ho-narabini-sho-soku. 眞宗大谷派宗制寺
 法並補則 ② 一巻 ③ 存 ④ 昭和五刊
 ⑤ 京都大谷派本願寺

宗制要論 ① (日) Sha-sei-yo-ron.
 ② 一巻 ③ 存 ④ 石井了玄著 ⑤ 明治三四
 刊 ⑥ (正六、一〇八・一四〇) ⑦ 東京淨土
 教報社

宗改革新論 ① (日) Sha-sei-kaifu-
 shin-ron. ② 一巻 ③ 存 ④ 山田英海著
 ⑤ 大正八刊 ⑥ (立大、B.O.七・三)

宗祖遺跡記 ① (日) Soku-ji-ki. ②

宗祖遺法、衆寮清(儀)規、對大己法、學道
 用心集、普勸坐禪儀、坐禪用心記を収む。
 ④ 大正二刊 ⑤ (駒大) ⑥ 東京和融社

宗乘論題 ① (日) Sha-jo-ron-dai.
 ② 一巻 ③ 存 ④ 内田寛孝(天明七一明治
 一一A.D.1787-1879)述 ⑤ 寫本(龍大)
 ⑥ 寫本(龍大、研眞)

宗乘論題名目集 ① (日) Sha-jo-
 ron-dai-myō-moku-shū. ② 一巻 ③ 存
 ④ 寫本(龍大、研眞)

宗圖 ① (日) Sha-ju. ② 一冊 ③ 存
 ④ 享保三刊 ⑤ (高六、寄・一一一)

宗圖目錄 ① (日) Sha-ju-moku-ro-
 ku. ② 三冊 ③ 存 ④ 刊本(高六、寄・一一
 〇)

宗制改革論 ① (日) Sha-sei-kaifu-
 ron. ② 一巻 ③ 存 ④ 土屋詮數編 ⑤
 大正三刊 ⑥ (立大、B.19・一一)

宗制寺法並宗記 ① (日) Sha-sei-ji-
 ho-narabini-sho-ki. ② 二冊 ③ 存 ④ 刊
 本(高六、一・五七)

宗制寺法並補則 ① (日) Sha-sei-ji-
 ho-narabini-sho-soku. 眞宗大谷派宗制寺
 法並補則 ② 一巻 ③ 存 ④ 昭和五刊
 ⑤ 京都大谷派本願寺

宗制要論 ① (日) Sha-sei-yo-ron.
 ② 一巻 ③ 存 ④ 石井了玄著 ⑤ 明治三四
 刊 ⑥ (正六、一〇八・一四〇) ⑦ 東京淨土
 教報社

宗改革新論 ① (日) Sha-sei-kaifu-
 shin-ron. ② 一巻 ③ 存 ④ 山田英海著
 ⑤ 大正八刊 ⑥ (立大、B.O.七・三)

宗祖遺跡記 ① (日) Soku-ji-ki. ②

五. ① 一巻 ② 存 ③ 寫本(谷大、宗大・二
 四五三)

宗祖遺文集 ① (日) Sha-jo-i-mon-
 shū. ② 一巻 ③ 存 ④ 古寫本(京大、印哲
 R.一八)

宗祖圓光大師御法語 ① (日) Sha-
 jo-en-ko-dai-shi-go-ho-go. ② 一巻 ③
 存 ④ 源空(長承二建曆二A.D.1133-
 1213)語 ⑤ 刊本(龍大、二六八・一一一、
 研眞)

宗祖紀 ① (日) Sha-jo-ki. ② 一巻
 ③ 法常作 ④ (參考) 淨土眞宗教典卷第二

宗祖觀 ① (日) Sha-jo-kan. ② 一巻
 ③ 存 ④ 大谷學士會編 ⑤ 明治四四刊
 (谷大、宗洋・三八三)(龍大、研眞)

宗祖五百回忌大會見聞集
 ① (日) Sha-jo-go-hyak-kwai-ken-dai-
 ken-mon-shū. ② 一巻 ③ 存 ④ 白嶺(一
 寶曆元A.D.1751)記 ⑤ 寫本(谷大、宗
 大、一八九四)

宗祖御遷化記錄 ① (日) Sha-jo-
 en-ge-ki-roku. ② 一篇 ③ 存、日蓮宗
 々學全書興隆全集之内 ④ 日興(寛元四一
 正慶二A.D.1245-1332) ⑤ 弘安五(A.
 D.1282)

④ 日蓮の上尼老僧の日記が、宗祖日蓮の
 入滅に關して記録した書。弘長元年の伊豆
 配流、文永八年の佐渡流罪、同十一年の身延
 隱棲、弘安五年十月八日日本弟子六人の定め
 同十三日の入滅、同十四日の葬送次第等に
 亙つて記録し、同年十月十六日の日附があ
 る、参考とすべき資料である。(馬田行啓)

宗祖三百五十年忌法事記
 ① (日) Sha-jo-san-byaku-go-jū-nen-ki-
 ho-ji-ki. ② 一巻 ③ 明春記 ④ 元和八
 (A.D.1623)四月 ⑤ (參考) 淨土眞宗教
 典卷第二

宗祖三百年忌法會記 ① (日) Sha-
 jo-san-byaku-nen-i-ho-e-ki. ② 一巻
 ③ (參考) 淨土眞宗教典卷第二

宗祖七十三輩考 ① (日) Sha-jo-
 shichi-ju-san-pai-ko. ② 一巻 ③ 存、親
 鸞傳書之内 ④ 惠旭(一安永五A.D.1776
 一)記

④ 親鸞聖人の門弟中、性善、西佛、性信、
 蓮位、教信、親性、行圓、法善、法興、祐
 元、本誓、教順、定相、念名、寂念、宗雲、
 明慶、西念、了智、明光、源誓、證性、善
 性、教名、興說、眞佛、善性、信海、順信、
 乘念、信樂、成然、是信、無爲信、善念、教
 念、定信、道圓、入信、唯圓、入信、明法、
 慈善、唯佛、唯信、唯信、眞佛、唯圓、眞
 證、善性、明性、支海、教美、明夜、念信、
 安了、眞佛、顯智、專空、了海、覺信、空
 誓、誓海、了源、開善、覺念、教圓、念信、
 圓善、善性、佛性、西圓、道法、等七十三人
 の生國、俗姓、行化等を略述したものであ
 りて、惠旭の著、宗祖世傳の附録とも言ふ
 べきものである。(藤枝昌遠)

宗祖聖人四百年忌誌 ① (日)
 Sha-jo-shū-nin-shi-hyaku-nen-ki-nis-
 shi. ② 一巻 ③ 存 ④ 祐俊(慶長六一天和
 二A.D.1601-1682)記 ⑤ 寛文元寫 ⑥
 (龍大、別置)

名所行録 (名庫書) 諸宗現現 月年の刊載 (書考參書附註) 書主 説解存内 代年作著 著書 録存 數巻 (名書) 名題 號略字數

【シ】

宗祖聖人略傳十六門記 ①(日) Sha-so-shō-shū-in-ryaku-den-jū-roku-mon-ki. ①1巻 ②存 ③了風(一貫曆頃 A. D. 1751-1763)撰 ④昭和二年刊 ⑤(正)大(一六・六)

宗祖親覽聖人御遺蹟圖 ①(日) Sha-so-shin-ran-shō-nin-go-kyū-seki-zu. ①1巻 ②存 ③明治三三刊 ④(龍大)

宗祖世錄 ①(日) Sha-so-sei-roku. ①5巻 ②存 ③眞宗全書第六七 ④斐旭記 ⑤安永六(A. D. 1777)

⑥眞宗開祖親覽の在世九十年間に於ける社會の狀勢を諸記録によりて忠實に蒐集せるものにして、著者三十六年間苦心の力作である。東都の深講これを校して刊行し、現にその住寺たる東京赤坂成満寺に、その版木を藏すとす。内容は始め入滅、吉水入室、出家、四十五歳、四十六歳の三聖二攝を中心として記述し、更に誕生の年より次第に隔年體に録し、祖師遊風の事蹟、門侶等のことをも附記してゐる。(高千穂徹著)

宗祖茶毘所延仁寺系説 ①(日) Sha-so-da-hi-shō-en-nin-ji-shū-sei. ①1巻 ②存 ③寫本(龍大別號)

宗祖大師御作書目録 ①(日) Sha-so-dai-shū-go-saku-shō-moku-roku. 高祖御製作目録 ②存 弘法大師全集第一五附録 ③覺樓(嘉保二)廣治二 A. D. 1095

④高祖御製作目録 ⑤存 弘法大師全集第一五附録 ⑥覺樓(嘉保二)廣治二 A. D. 1095

⑦高祖御製作目録の下を見よ。

宗祖大師小消息講話 ①(日) Sha-so-dai-ko-shō-shū-ko-ku-ka. ①1巻 ②存 ③吉岡阿成(元治元)明治三八 A. D. 1864-1905)述 ④明治三九刊 ⑤(龍大、研眞)

宗祖大師小消息和辨 ①(日) Sha-so-dai-ko-shō-shū-ka-ka-wa-ten. ①1巻 ②存 ③寫本(龍大、二六八・一一一)

宗祖教徳文 ①(日) Sha-so-kyō-toku-bun. ①1巻 ②存 ③淨土眞宗教典第一に曰く「應善如上人需、神之以誠、報恩講式後」に云。

宗祖の皮髓 ①(日) Sha-so-no-hi-zu. ①1巻 ②存 ③山崎辨榮(安政六)大正九 A. D. 1859-1923)著 ④大正一四刊 ⑤(正)大(一五五・八・一一) ⑥京都一香社

宗祖本地辨 ①(日) Sha-so-hon-ji. ①2巻 ②存 ③日恒述 ④寫本(立大、D. O. 一九九)

宗祖本傳 ①(日) Sha-so-hon-den. 御傳抄、善信聖人傳、善信聖人親覽傳、本願寺聖人親覽傳、親覽傳 ②2巻或四巻 ③存 ④大正八三、七五〇、3064、眞宗聖典宗祖讀仰編 ⑤覺如(文永七)觀應文元 A. D. 1270-1351)詞 ⑥淨賢(建治元)延文元 A. D. 1275-1356)論 ⑦(參考) ⑧淨土眞宗教典第一

宗祖門弟總系譜 ①(日) Sha-so-mon-ni-shū-kei. 親覽聖人御門弟等交名 ②1巻 ③存 ④(參考) ⑤淨土眞宗教典第二、眞宗全書刊行決定書目

宗祖門侶交名牒 ①(日) Sha-so-mon-ryō-kyō-myō-chō. ①1巻 ②存 ③大正五刊 ④(谷大、宗大、三二六九)

宗祖六百五十回忌大師號字撰 ①(日) Sha-so-ropp-pyaku-go-jū-kai-ji. ①1巻 ②存 ③臨谷瑛謙、善尼教書共編 ④明治四五刊 ⑤(龍大、一〇六・三五)

宗體決疑鈔 ①(日) Shō-tai-kei-sū. ①1巻 ②存 ③日蓮宗々學全書上聖部之内 ④日誌(永仁六)應安七 A. D. 1296-1374)著

⑤日蓮宗初期の學僧日誌の著。「午前得道有無事。觀佛三昧經、摩耶經事。涅槃經説。四教一事。諸教所講多在「論陀」事。餘深法中樂教利喜事。於一佛乘分別説之事。於此命終即往安樂世界事。一稱南無佛皆已成佛道事。法既本妙、應由物情、並但除其執不除其法事。諸論各異端修行理無二、偏執有是非、違者無異評事。三重教相次第委細可注給之候。屬累品以後被説、隨他意法門、云事。三大部觀事。爾前法華同異事。相持絕待並約教部違目事。釋宗念佛事中有、不思議奇特事。大論云、自法愛染故毀、背他人法、離持戒行人不、地獄苦事。壽量品五百應助救衣示事。安樂行品於諸如來起慈父想事。涅槃不説、一

字云事。本門戒担事の二十二條を擧げ本化獨特の宗義を宣揚した書。(馬田行啓)

宗體辨 ①(日) Sha-tai-ben. ①1巻 ②存 ③寫本(龍大、一〇五一・五一一)

宗體門隨聞記 ①(日) Sha-tai-mon-zui-mon-ki. ①1巻 ②存 ③東林記

宗大事口傳抄 ①(日) Sha-da-ji-ku-ben-shō. 二帖抄見聞 ②十七巻 ③存 ④等海(一貞和五 A. D. 1349-)述 ⑤康永二一貞和五(A. D. 1343-1349)

⑥本書は口傳の説を等海が筆録したと云はれる「七箇口傳二帖抄」を武藏仙波の等海が参照して註解を施したものである。本書著作の緣由は等海が自ら記して云ふ。「稽古の用意のためと法門の失錯を顧慮したためとの二つの動機に依つて、平常披見した所持の聖教と從來傳受した法門の深義の口訣とを資料として本書を草案した。本書は康永二年八月十日に起稿し、貞和五年六月二日に脱稿した。前後七ヶ年の星霜を重ねて漸く功を免つた。見聞共に少しも私案を立てて改變することをせず、皆相承のままこれを記したものである。本書は嫡弟一人の外には授與しない。甚深々々の書である、第十七巻の跋語)と。この跋語にあるように等海は引證の文を擧げて書名を附す。今念のため余は手元にある各種の書と對照したが悉く現存本の本文と一致してゐる。これを他の口傳書例せば漢光類聚に比較すれば本書は文獻尊重の方針を取つてゐたことが

名所行録◎(名書書)表題所現◎月年の刊載◎(書考書)書目◎説解存内◎代年作書◎著者◎録存◎教書◎(名書)名題◎號字教

【シ】

られる。そして漢光類聚ほど有名な書を一ヶ所も引用してゐない。乍然當時既に口傳書は相當多く作られてゐたらしい。兎に角本書は宗大事口傳書ではあるが頗る眞面目に文獻に基いた口傳を記述したものである。従つて口傳書撰述年代を本書に依つて區別付けることが可能であると思ふ。等海の傳は四明僧録三百十九號所收の「日本天台口傳法門の由来及其發達」(同教蓮氏記)参照。葛は武藏川越仙波喜多院にある。本書は宗大事口傳を抄記したもの。宗大事とは傳法要偈の四箇大事と弘仁略傳三箇大事のこと。これを惠心流七箇大事といふ。この七箇大事は天台の三大部の重要事項を掲げたものであつてこの七箇大事を掲げれば論議の宗要、義科、問要となり、三百條乃至千七百條の算題と分れる。故に七箇大事は三部研究に歸するといへる。此等を總括して宗大事といふのである。次に圓教。圓氏の説では本書は「十七巻並に一代教相肝心一卷」と合して「十八巻」から成るといふ。又島地大等氏著「天台教學史」も本書を十八巻なりと記してゐる。現存本は慶安四年刊本は十七巻で「一代教相肝心」一卷は附いてゐない。正保二年刊本があるようだが未見。十八巻説は何書に出る説か未詳。次に本書の散逸複製。仙波祐賢法印の代、享徳三年(A. D. 1456)十二月二十七日關東兩上杉藤胤の際、仙波の原本は散逸したが、其型康正元年(A. D. 1455)嘉興和尚が諸方から寫本を集めて再録した。この再録本が現存書である。故に多少の脱落若しくは附

加があるようだとはいへない。第九巻に眞正發菩提心、及び起慈悲の一心三觀の口傳が脱落。又第二巻の山王三國傳來血脈圖には後人の添加がある等はこの爲めであらう。

本書は惠心流七箇口傳法門即ち四箇大事(一心三觀、心境界、止觀大旨、法花深義)と略傳三箇大事(圓教三身、常寂光土義、蓮華因果)を一念三千本覺法門(前田慧雲氏は本覺法門とは合尊一致、合尊一致の法門のことだといふ)に依つて叙述し、先づ四箇三箇の別を説き、四箇大事は山家大師(傳教大師)が道遠和尚から傳法したもの、三箇大事は四箇大事の中の法花深義から開出したものであると兩大事の關係を述べ、略傳三箇大事は日本名僧傳(光定著)に記す「第一回は弘仁三年最澄が圓澄に付屬し、第二回は又圓澄に授けた(授法年未明)この授法が三箇の傳授である」といふ説を認め、更に四箇傳法は「傳法要偈」によるのか「止觀心要」によるのかと疑ひ、兩書共に用ひて説述を進め必要の起つた時に限つて用ひるに留まる。本文に入るに當つて本書の大綱を示せば

一心三觀——第一、二巻。
心境界——第三巻。
止觀大旨——第四、五、六、七、八、九、十巻。
法華深義——第十一巻。
圓教三身——第十二、十三巻。
常寂光土義——第十四巻。
蓮華因果——第十五、十六巻。

天台眞言華嚴三論同異——第十七巻。となる。第一「一心三觀」の下では境の一心三觀。鏡像圓融の法門、通相三觀第一巻了(智)一心三觀。境智一心三觀。一紙口決。要の文による。一心三觀與圓融。これは山王一心三觀。山王三國傳來口決(ここに血脈圖が記してある。これは本書は後人の添加が行れた證據の一。今血脈を示せば山王—慶論—勝範—長蒙—忠尋—泉覺—純源—俊綱—勝明—政海—一海—承海—等海—良海—心昌)。

三輪山王(述門三輪山王。本門三輪山王。觀心三輪山王(第二巻))

第二「心境界」の下では一心三觀一念三千兩重相承。圓融行者所觀觀法性觀觀無明。理造三千事造三千。南岳大師明一念三千。歎。必要南岳御釋云事諸流不共許。玄義文句明一念三千。妙法蓮華首顯互三千三觀。(第三巻了)。

第三「止觀大旨」の下では宗教宗旨相承。山家大師内證相承血脈譜有(四重不同(第一は體相相承。第二は傳大士相承。第三は南岳相承。第四天台相承)。口傳血脈三重(第一重は付法藏經の金口相承で教學相傳。第二重は南岳心要で今師相承。第三重は印可血脈。この印可血脈の下で近代授血脈事無二正體事也。只似物授之也と慨嘆してゐる)。第三重體付屬。(第四巻了)泉覺口傳頌。三重中道。塔中相承一心三觀中論相承一心三觀不同。本有三諦。終窮究竟一心三觀。三種止觀。即身成佛。三業即身成

佛。三業即身成佛。六道即身成佛。六即即身成佛。四教即身成佛。爾前述門本門即身成佛。眞言天台所立即身成佛。(第五巻了)。

摩訶止觀第一大章章の事を本書では同章といふ。開章。止觀一部肝心略頌。止觀付機根一設。解行。歎。機根。教説。大意五略圖。止觀發菩提心六讚歎九讚歎。(ここが解明御義に云くとして傳教大師は道遠から九讚歎心を傳へ、行滿から六讚歎心を傳ふ。惠心流那兩流の義不同であるといふ)。

六即。元品無明能治智。元品無明體。妙覺智體。勝節二諦。緣起有種(俊綱御義として眞言教緣起は法界・佛界・衆生の三緣起があると)。斷惑入位入位斷惑。三惑同時斷異時斷。體用三惑。惣體別體無明。六即一位口傳。玄義止觀六即不同。以上で大意章畢(第六巻了)。

第二修大行。四種三昧圖。止觀行儀相。修大行與正觀章正行。不同。四種三昧本尊。心實御義に云く。附文の時では四三昧各別。元意の時では四行共本地の阿彌陀を本尊となす)調直定(心實御義に云く、散亂心の當體即調直定である)。三業相應念佛(心實御義に云く當流では善導家の念佛と性生要集の決定性生の念佛と摩訶止觀の念佛との三重念佛は不同也と習ふ)。天台修行無相行、眞言修行有相行云時眞言勝。天台一觀。六觀音。占察實相觀一家實相觀。山家大師の唯識唯心の唐決。向上一路云事如何、以上で止觀の大意章畢(第七巻了)。

第六方便章。天台意成戒開會(南都律を評してゐる)。行五法(心實御義に云く。二十五法の中では行五法を本

名所行録◎(名書書)表題所現◎月年の刊載◎(書考書)書目◎説解存内◎代年作書◎著者◎録存◎教書◎(名書)名題◎號字教

【シ】

吉州眞應禪師。佛陀波利尊者。秦跋陀禪師。耶舍尊者。波羅提尊者。寶誌公和尚。南嶽慧思和尚。天台智者大師。明州布袋和尚。天台豐干禪師。寒山子。天台拾得。婺州善慧大師。先淨照禪師。無著和尚。公期和尚。總首座。錢塔鎮使。洪州太守許式。大宋太宗皇帝。亡名古宿。

〔卷四〕 南嶽懷讓禪師。江西道一禪師。池州南泉禪師。廬山智常禪師。明州法常禪師。杭州齊安國師。京兆懷惲禪師。兩州寶微禪師。婺州靈默禪師。麻谷寶微禪師。虔州智藏禪師。紫玉山道通禪師。百丈大智禪師。

〔卷五〕 越州慧海禪師。信州大義禪師。池州智堅禪師。漳州道行禪師。撫州慧嚴禪師。宜州道明禪師。那州洪恩禪師。佛光如滿禪師。三角山慧印禪師。池州寶雲禪師。伏牛山自在禪師。昆陵太誠禪師。漳州知會禪師。宜州觀寂禪師。汾州大達國師。五臺山隱峯禪師。越州神藏禪師。定州明哲禪師。京兆惟寬禪師。漳州龍山和尚。鄂州無等禪師。洪州惟政禪師。京兆本堂和尚。南嶽西園藏禪師。漳州秀給和尚。鄂州大陽伊禪師。鎮州金牛和尚。江西北蘭禪師。韶州乳源和尚。筠州道遠和尚。洪州水波和尚。洪州西山亮座主。齊峯和尚。古寺和尚。烏臼和尚。石臼和尚。松山和尚。本溪和尚。石林和尚。浮盃和尚。洞安和尚。百靈和尚。濠州和尚。別首座。襄州廬山居士。

〔卷六〕 趙州從諗禪師。衡州和巖禪師。鄂州東菴禪師。荊州曇照禪師。長沙覺禪師。

〔卷七〕 終南師韻禪師。日子和尙。陸耳大夫。池州甘贊行者。福州靈訓禪師。漢南高亭和尚。金州操禪師。那州古提和尚。徽州善化和尚。壽州良遠座主。虔州處微禪師。五臺秘慶和尚。湖南麻林和尚。

〔卷八〕 揚州慧覺禪師。太原李上座。婺州新建禪師。日守遠禪師。紫樹和尚。石梯和尚。筠州末山尼了然。婺州俱胝和尚。襄州道吾和尚。宜州慧寂禪師。鄂州智閑禪師。杭州洪濟禪師。福州大安禪師。福州雙峯和尚。福州志勤禪師。福州慧慧禪師。晉州佛雲通禪師。隆州神英禪師。元康和尚。京兆米和尚。襄州王敬初常侍。

〔卷九〕 睦州龍興陳尊宿。徽州義支禪師。福州靈巖禪師。

〔卷十〕 洪州米徹和尚。益州法真禪師。韶州知聖敏禪師。鄒十三娘。福州雙峯古禪師。睦州陳操和尚。鎮州保壽禪師。鎮州慧然禪師。魏府大覺和尚。魏府存美禪師。鄂州滄谿因禪師。幽州深空和尚。定州善星禪師。徽州萬壽和尚。桐峯座主。虎窟庵主。襄州歷村和尚。雲山和尚。覆盆庵主。杉洋和尚。定上座。覆盆庵主。

〔卷十一〕 吉州如寶禪師。鶴湖和尚。鄂州慧情禪師。汝州思明禪師。鎮州第二世保壽和尚。徽州大惠和尚。廬州受德禪師。廬州大覺和尚。汝州寶應禪師。太行山克賓禪師。守廓侍者。際上座。鄂州清淨禪師。鄂州歸靜禪師。汝州省沼禪師。汝州廣慧禪師。

〔卷十二〕 汾州石樓和尚。漳州大同濟禪師。丁行者。漳州道吾智禪師。漳州曇晟禪師。秀州德誠禪師。宜州慧省禪師。泰山高沙彌。郎州刺史李朝。漳州崇信禪師。京兆無學禪師。吉州性空禪師。米和尚。漳州善道禪師。德天和尙。漳州義忠禪師。馬鞍山本空和尚。本生和尚。韓愈文公。

〔卷十三〕 漳州普會禪師。漳州仲興禪師。祿普和尚。筠州良份禪師。漳州僧密禪師。南嶽和尚。漳州善會禪師。鄂州宜靈禪師。洪州寶華和尚。舒州大同禪師。湖州如訥禪師。袁山光仁禪師。

〔卷十四〕 鄂州道深禪師。河中僧一禪師。台州景欣禪師。漳州志安禪師。福州復船山存禪師。鳳翔府石住禪師。撫州耽章禪師。三世道深禪師。撫州羅山仁禪師。漳州文惠禪師。京兆休靜禪師。台州道南禪師。高安木仁禪師。益州北院通禪師。越州乾峯和尚。洛京道備禪師。明州成啓禪師。

〔卷十五〕 漳州元安禪師。撫州月輪禪師。

〔卷十六〕 洛京寶善禪師。福州義存禪師。鄂州全讓禪師。泉州兀棺。襄州高亭簡禪師。

〔卷十七〕 洪州常察禪師。吉州澄源放禪師。撫州從志禪師。虔州廣利容禪師。襄州處真禪師。杭州佛日和尙。洪州同安不禪師。洪州懷巖禪師。歙州朱鑑禪師。池州普山章禪師。漳州報慈藏禪師。襄州善智禪師。襄州獻藏禪師。筠州黃獎禪師。隨州守澄禪師。鳳翔傳楚禪師。鄂州桐泉和尚。襄州善道禪師。福州師傳禪師。福州慧披禪師。

〔卷十八〕 福州泓洞大師。漳州從展禪師。韶州文保禪師。福州支通禪師。杭州道慈禪師。福州皎然禪師。福州神晏禪師。明州今參禪師。越州可休禪師。福州道因禪師。台州師彥禪師。

〔卷十九〕 漳州桂琛禪師。福州慧球禪師。泉州法因禪師。福州光贊禪師。婺州寶賢禪師。新羅龜山和尚。泉州王延彬太尉。福州彥禪師。泉州省俊禪師。漳州道照禪師。韶州子祥禪師。岳州顯鑑禪師。隨州師寬禪師。襄州守初禪師。韶州克欽禪師。新州悟空寂禪師。深明二上座。益州澄遠禪師。漳州清密禪師。婺州德謙禪師。西川慧禪師。鄂州海慶禪師。

〔卷二十〕 鄂州緣觀禪師。金陵法眼益禪師。襄州洪進山主。撫州和修山主。金陵休復禪師。連州寶華和尚。韶州月華和尚。靈徹散聖。斷王五祖戒禪師。羅州峯峯老主。東嶽第二世和尚。嘉州黑水和尚。鄂州警玄禪師。天台德韶國師。金陵法燈欽禪師。金陵支則禪師。金陵支覺遠禪師。相州從誦禪師。

名所行録 (名庫書) 高麗所現 月年の刊寫 (書考書影註) 書末 説解管内 代年作書 著書 録存 數巻 (名書) 名題 讀地字數

【シ】

〔卷二十一〕 桂州齊曉禪師。舒州白雲禪師。金陵仁勇禪師。漳州慧誌禪師。吉州龍慶禪師。洪州黃龍心禪師。洪州眞淨文禪師。洪州滄潭來禪師。瑞州黃葉禪師。江州東林總禪師。吉州德香禪師。黃葉菴翠永老主。新州五風演禪師。漳州智本禪師。提刑郭祥正。湖州上方益禪師。鄂州壽聖禪師。洪州日倫禪師。洪州登祥禪師。黃龍死心新禪師。滄潭草堂清禪師。漳州夾山純禪師。大史黃庭堅。洪州湛堂準禪師。洪州兜率悅禪師。東州法雲果禪師。蘇州香鑑禪師。瑞州希廣禪師。均州淨覺禪師。南嶽齊活禪師。泉州慧明雲禪師。江州開光既禪師。東坡居士。泉州有朋禪師。南康系南禪師。南嶽有達禪師。彬州念禪師。襄州靜顯禪師。參政蘇轍居士。成都昭覺禪師。金陵佛鑑禪師。舒州佛眼遠禪師。彭州南元靜禪師。漳州道寧禪師。漢州宗泰禪師。新州表自禪師。嘉州九頂素禪師。元禮首座。法闍上座。漳州自賢禪師。金道婆。建寧慧素禪師。東京繼成禪師。秀州性空老主。福州慧空禪師。東京天寧草禪師。洪州天遊禪師。洪州法清禪師。越州慈氏仙禪師。明州天童交禪師。江州圓通受禪師。明州知和老主。温州了成禪師。

〔卷二十二〕 杭州大慧果禪師。蘇州虎丘隆禪師。金陵華嚴民禪師。台州此老元禪師。杭州法堂遠禪師。眉州風覺禪師。蘇州晏玩禪師。蘇州元淨禪師。侍郎李彌遜。覺

〔卷二十三〕 湖州佛燈禪師。鄂州文殊心禪師。漳州龍牙才禪師。福州竹菴注禪師。杭州智策禪師。成都金剛文禪師。樞密吳居厚。中丞直教。揚州石塔禪師。福州那那禪師。泉州彌光禪師。明州佛照光禪師。江州已老禪師。福州思岳禪師。建寧宗元老主。蘇州妙總禪師。無垢居士。明州曇華禪師。杭州別峯印禪師。湖州師體禪師。內翰曾開。知府葛刻志。杭州師一禪師。漳州仲安禪師。福州慧光禪師。荆門玉泉禪師。明州密庵禪師。杭州崇岳禪師。東京道楷禪師。鎮州惟素禪師。杭州戒弱禪師。金陵法泉禪師。明州淡交禪師。建州崇梵禪師。江州慧通禪師。東京圓照本禪師。東京法秀禪師。鎮州應天禪師。杭州佛日方禪師。北京重元禪師。台州子鴻禪師。江州智通禪師。舒州三祖會禪師。越州元善禪師。無爲軍因禪師。侍郎揚傑。東京枯木成禪師。東京善本禪師。舒州修顯禪師。泗州善寧禪師。蘇州題式禪師。金陵子英禪師。杭州宗廣禪師。漳州法思禪師。漳州自勸禪師。明州雲振禪師。眞州眞敬了禪師。明州宏智覺禪師。

〔卷二十四〕 宗門得意鈔 (日) Sha-mon-yaku 一巻 ④ 存 ④ 寫本 (立大、D O、四六)

〔卷二十五〕 宗門人別御改帳 (日) Sha-mon-nin-betsu-o-aratame-dka 相州高座郡深谷村宗門人別御改帳 ④ 存 ④ 明治三寫 (立大、D、二二)

〔卷二十六〕 宗門年譜 (日) Sha-mon-nen-pu 一巻 ④ 存 ④ 圓性 (元和九一實永五、A、一)

〔卷二十七〕 宗門拈古 (日) Sha-mon-nen-ko ④ 寫本 (龍大、一九三、二二) ④ 支 (Tsung-meh-nien-ku) ④ 存、雙弓調 ④ 譯師語卷二至卷四 ④ 清代雙弓調撰

〔卷二十八〕 宗門拈古彙集 (日) Sha-mon-nen-ko-tshih ④ 四十五巻 ④ 存、記續二、一〇、三、一五 ④ 清淨符 (康熙三、A、D、166+) ④ 本書は、宗門提要彙集に收められた宋元以前の諸師の拈提標榜の語を補正し、是に準じて諸師の一拈一別、一代一微の語を採録し、統要彙集に續いで、南岳下三十三世、青原三十六世までに及んだもので、佛祖が、機縁に應じて宗旨を拈提し、諸師これに拈別代微の語を附した古則公案の蒐録である。金陵横山棲霞寺大成和尚は、虎林報恩院に於て、二十年來の道友自撰淨符に請はれて宗門拈古彙集序を撰じ、淨符は清康熙三年重陽日 (A. D. 1667) 自序を附して行はしめた。機縁本に依つて其の篇次を示せば、卷首に自序、大成の序、凡例、目次、本文の順位で、其の本文に收められたものは次の如くである。

〔卷二十九〕 (七佛) 釋迦。附諸經。

〔卷三十〕 (應化聖賢、西天) 文殊。普賢。無邊身。維摩。殊摩。摩訶。天親。舍利弗。城東老母。廣願。波羅提。勝思惟。障蔽。須菩提。寶頂。〔卷四〕 (應化聖賢、東土) 忻州老人。臺山翁。金陵寶誌。雙林善慧。南嶽慧思。天台豐干。天台寒山。

〔卷三十一〕 天台拾得。明州布袋。杜法順。〔西天祖師〕 迦葉。阿羅。伏伽密多。勝。師子。婆舍斯多。般若多羅。〔卷五〕 (東土祖師) 菩提達磨。慧可。僧來。慧能。〔秀出祖師〕 (一) 四祖秀出。牛頭法融。安國玄挺。鶴林玄素。徑山道欽。鳥窠道林。〔二〕 五祖秀出。〔卷六〕 (六祖秀出) 南陽慧忠。永嘉玄覺。航源應眞。〔卷七〕 (宋詳法嗣) 先淨照。因禪。僧肇。實性。圓通。壽寧。天台智者。公期。宋太宗。老子明。茶陵牧。渡行婆。〔亡名古宿〕 老宿古德。行者。住持僧。守衣鉢僧。總處婆。寶勝婆。跨驢人。施主。廣南僧。長者。韓居士。〔曹溪出並二支〕 青原行思。南嶽懷讓。〔青原一世〕 石頭希遷。〔卷八〕 (南岳一世) 馬祖道一。〔南岳二世〕 百丈懷海。〔卷九一〕 (南岳二世) 南泉普願。歸宗智常。鹽官齊安。大梅法常。普賢實雲。盤山寶積。麻谷實微。東寺如會。西堂智藏。章敬懷傑。五洩靈默。百丈惟政。菴溪道行。三角鶴印。中邑洪恩。杉山智堅。石梁慧藏。紫玉山道通。芙蓉太誠。葛湖大義。臺山隱峰。無業大達。西園曇藏。金牛。利山。乳源。道遙。水潦。烏臼。石臼。百靈。龍山。則川。龍藏。〔卷一三〕 (卷一四) (青原二世) 藥山惟儼。丹霞天然。天皇道悟。長慶曉。大川。大通濟。大同濟。〔南岳三世〕 鴻山靈祐。〔卷一五一〕 (卷一八) (南岳三世) 黃蘗希運。長慶大安。大慈寰中。平田普岸。安和寺通。百丈涅槃。趙州從諗。趙州從諗。長沙景岑。茱萸。子湖利蹤。白馬曇照。香

名所行録 (名庫書) 高麗所現 月年の刊寫 (書考書影註) 書末 説解管内 代年作書 著書 録存 數巻 (名書) 名題 讀地字數

【シ】

嚴義端。日子。雲際師。陸豆大夫。甘贊。善化。良遂。金州操。秘魔巖。上林戒。雲。青原三世。道吾宗智。雲巖。船子德誠。神樹慧省。拍巖明哲。高沙彌。卷一九。(青原三世)龍潭崇信。翠微無學。孝義性空。德天。三平義忠。本生。石室善道。(南岳四世)陸州道明。(卷二。卷二二)(南岳四世)臨濟義玄。烏石靈寂。大隨法真。靈樹如敏。雲雲志勤。仰山慧寂。香嚴智閑。徑山洪諤。定山神英。延慶法鑑。未胡。九峯慧慈。晉州霍山。元康。三角法遇。王敬初。光孝慧覺。新興嚴陽。石梯。日容。末山了然。關南道吾。金華俱胝。(青原四世)石霜慶諸。(卷二二。卷二五)(青原四世)漸源仲興。泚清。德山宣鑑。投子大同。清平令暹。夾山善會。洞山良价。俯密。南岳。卷二六。卷二七。(南岳五世)南塔光涌。靈山覺通。無著文喜。興化存美。寶壽沼。三聖慧然。覆盆。魏府大覺。善觀。源空。演溪志閑。萬壽。桐峰。雲山。定上座。陳操。(青原五世)九峰道虔。湧泉覺欣。覆船洪慈。洛浦元安。

【卷二八。卷三二】(青原五世)韶山靈普。上堂令超。牛頭微。巖頭全露。雪峰義存。雪峰義存。高亭簡。曹山本寂。雲峰道膺。疎山匡仁。青林師虔。白水本仁。龍牙居道。華嚴休靜。九峰普滿。北院通。洞山道全。乾峰。天童成啓。欽山文邃。(卷三二)(南岳六世)南院慧願。克賓。守廓。西院思明。賽壽二世。表福如實。芭蕉慧清。(卷三三。卷三七)(青原六世)同安常察。禾山無殷。羅山道閑。瑞巖師彥。香

巖從簡。聖壽殿。玄沙師備。長慶慧枝。保福從展。鏡清道愍。雲門文偃。鼓山神晏。翠巖合參。長生皎然。安國弘瑄。太原孚金峰從志。曹山慧寂。同安五。悟山章。朱溪謙。佛日本空。報慈藏。護國守澄。(南岳七世)風穴延沼。芭蕉繼微。興陽歸靜。(卷三八)(青原七世)同安志。石門慧微。廣德周。香林澄遠。白雲子祥。德山緣密。巴陵顯鑿。雙泉師寬。洞山守初。北禪寂。奉先深。黃龍贊。招慶道匡。報慈光雲。王延彬。淨衆歸信。明招德謙。黃龍游機。鼓山智嶽。大龍智洪。報慈文欽。地藏桂琛。安國慧球。大章契如。(卷三九)(南岳八世)首山省念。廣慧真。(青原八世)梁山緣觀。法眼文益。清溪洪進。龍齊紹偕。東禪玄亮。智門光祐。德山慧遠。五祖師戒。祥菴主。東樹二世。歸宗道詮。(卷四〇)(南岳九世)汾陽善昭。素真歸省。谷隱繼。廣慧元耀。三玄智嵩。(青原九世)太陽智玄。雪竇重顯。天台德韶。法燈泰欽。報恩慧明。洞山曉鏡。北禪智賢。天平從簡。(卷四一)(南岳十世)石霜楚圓。耶那慧覺。大風守芝。法華全舉。芭蕉谷泉。天聖皓峯。(青原十世)投子義海。興陽清潤。天衣義懷。雲居曉曉。許式。玉泉承皓。法昌倚遇。雲居元。永明延壽。鼓峰師木。瑞巖遇安。雲居道齊。(卷四二)(南岳十一世)黃龍慧南。揚岐方會。興教坦。雲峰文悅。(青原十一世)芙蓉道楷。壽山法泉。佛日戒明。法雲法秀。(南岳十二世)黃龍顯心。寶峰克文。禮澤洪英。積翠水。白雲守端。保寧仁勇。長慶惠運。(青

原十二世)丹波子淳。寶峰惟照。淨因法成。【卷四三】(南岳十三世)黃龍悟新。法雲泉。九峰希廣。慧力可昌。眉山蘇軾。五祖法演。郭正祥。(青原十三世)長慶清了。天童宏智。智者法鈺。(卷四四)(南岳十四世)圓通道安。昭覺克勤。龍門清遠。九頂清素。元鏡。法閱。會道葵。(青原十四世)嶽麓海。天童宗杲。吉祥元實。(南岳十五至二十三)徑山宗杲。何山守均。吳居厚。英將。靈隱崇獻。天寧楚琦。育王如珙。淨慈妙倫。高峯原妙。天寧道濟。笑巖德寶。徑山性沖。龍池正傳。興善慧廣。天童圓悟。普明妙用。(卷四五)(青原十五至三十六)雪竇智鑑。天童如淨。鹿門覺。普照一辨。天童岫。大明寶。玉山體。雪巖滿。報恩行秀。靈隱文奉。實應福遇。香巖文方。少室契斌。壽昌慧經。雪門圓澄。博山元來。東苑元鏡。(大久保堅瑞)

其所行録(名庫書)高麗所現 月年の刊行(書考書目註)書本 説解存内 代年作著 書書 缺存 數卷 (名書)名題 賢略字數

【シ】

武庫の下を見よ。(参考) 禪籍志卷下
①古版(帝國、特別)・貴
宗門無盡燈論 ①(日)Shōmon-enjin-shō-ton. ②二卷。大正八・五八ノNo. 3575 ③東嶺圓慈(享保六)寛政四A. D. 1721-1793)述 ④寛延四(A. D. 1751)九月
⑤禪門に於ける信心修行の次第を述べたるもの。内容は宗由第一。信修第二。現境第三。實踐第四。透關第五。向上第六。力用第七。師承第八。長養第九。流通第十に分ち、附録に持論がある。撰者は白隱門下に於ける禪文筆の英俊で曾て京洛河東の邊に苦修を積み、爲めに五臟勞脱して疾患日に重く、三十五年の命に過ぎずと知り、自ら病苦を冒し、藥法師の刑に臨んで論を著すに及し、日夜蒲團上に打坐して、僅かに三十日を出でずして本書の草稿を結了したといはれて居る。故に後來の學徒の爲めに信心修行の次第を叙ぶること極めて親切丁寧なものがある。
⑥寛政一二刊 ⑦(胸大)(立大) (安藤文英)

宗門無盡燈論講録 ①(日)Shōmon-enjin-shō-ton-jū-shō-ton-kyō-ron. ②二卷。大正一四刊 ③(谷大、餘大)四〇一四一四〇一五(龍大、研佛)
宗門略列祖傳 ①(日)Shōmon-jūkyū-ressō-den. 本朝傳來宗門略列祖傳 ②四卷。國文東方佛敎叢書第一輯第六傳記部下 ③大冥開撰 ④文化六刊 ⑤

【胸大】(哲、な、八右一) ①(日)Shōmon-jūkyū-ressō-den. ②二卷。大正一四刊 ③(谷大、餘大)四〇一四一四〇一五(龍大、研佛)
宗門類要 ①(日)Shōmon-rui-yō. ②八卷。存。大正一四刊 ③(谷大、餘大)四〇一四一四〇一五(龍大、研佛)
宗門聯燈會要 ①(日)Shōmon-ren-tō-e-yō. (支) Tsung-men-hen-tō-g-hai-yao. 聯燈會要 ②三十卷。存。己續二ノ九・三一五 ③宋時翁悟明集
④本書は、水庵永禪師の法嗣である南岳下十八世福建泉州府崇福禪寺の眞懶子晦翁悟明禪師が、宋淳熙十年(夏A. D. 1183)浙江温州府永嘉の中川に安居中、傳燈會要等の諸録を閲して、從上の諸老宿に就て、人天の眼目たる六百餘家を採録しその機縁答問、よく宗旨の要妙を全提せし語句を蒐め、聯燈會要と題して三十卷を成したものである。宋淳熙十年(夏)五日江心泮光室に於て自序し、同十六年三月(A. D. 1189)李泳(淡齊)の序を附し、編纂の助縁捐資によつて浙江寧波府鄞縣阿育王山に於て行つたものである。後、元至元年二十八年(A. D. 1291)十二月八日江蘇松江府蘇州府の思忠和尚序を撰し、文雅藏王鄭氏等の助縁により浙江寧波府鄞縣阿育王山に於て重刊したものである。我が國に於ては、慶應三年(A. D. 1399)京都總持の臨川寺に於て上梓し、元祿三年(A. D. 1690)四月京都大應寺祖泰印行せしもの等がある。續藏本の篇次は宋淳熙十六年李泳の序、元至元二十八年育王重刊の刊記、康熙元年臨川寺刊記、元祿三年大應寺祖泰の刊記、元祿三年大應寺祖泰の刊記の順序に採録されて居る。其の列目は次の如くである。(敬稱を略す)

【卷一】(七佛)毗婆尸佛。尸棄佛。毗舍浮佛。拘留孫佛。拘留那牟尼佛。迦葉佛。釋迦牟尼佛。附、竺乾陀化賢聖。(西天祖師)初祖摩訶大迦葉。二祖阿難陀。三祖商那和修。四祖優婆塞。五祖提多迦。六祖彌遮迦。七祖婆須密。八祖佛陀難提。九祖伏殺多。十祖羅尊者。
【卷二】(西天祖師)十一祖富那夜者。十二祖馬鳴。十三祖迦毗摩羅。十四祖龍樹。十五祖迦提婆。十六祖羅漢羅。十七祖僧迦提。十八祖迦那含多。十九祖鳩摩羅多。二十祖闍夜多。二十一祖婆修盤頭。二十二祖摩訶羅。二十三祖觀勒那。二十四祖師子。二十五祖婆舍斯多。二十六祖不如密多。二十七祖般若多羅。二十八祖菩提達磨。(東土祖師)二祖慧可。三祖僧肇。四祖道信。五祖弘忍。六祖慧能。
【四祖(旁出)】(一)牛頭一世、金陵牛頭法融。(二)牛頭二世、金陵牛頭智嚴。(三)牛頭三世四世無機無載。(四)牛頭五世、潤州鶴林玄素。宜州安國玄挺。舒州天桂崇慧。(五)牛頭六世、天台佛窟嚴惟則。杭州徑山道欽。(六)牛頭七世、天台雲居智。杭州鶴林道林。
【卷三】(五祖(旁出)) 北京神秀。嵩山慧安。雲州蒙山道明。
【五祖(旁出)二世] 嵩山普寂。交州降魔藏。嵩山破祖。嵩山元珪。
【五祖(旁出)三世] 終南山惟政。
【五祖(旁出)四世] 益州保唐無相。
【六祖法嗣] 西天鳩多三藏。韶州法海。永

其所行録(名庫書)高麗所現 月年の刊行(書考書目註)書本 説解存内 代年作著 書書 缺存 數卷 (名書)名題 賢略字數

【シ】

宗要集智見抄 ①(日)Sha-yō-shō-shū-shō. ②十卷 ③存 ④承應二刊
⑤(龍大、二六五・一三) (谷大、餘大・八〇五) (哲、キ・七・右・一) (正大、一三二・一〇) (立大、A. 11・四四〇—四四二)

宗要序分抄物 ①(日)Sha-yō-bun-shō-motsum. ②一卷 ③存 ④寛永一六寫 ⑤(高大、寄・一・二四)

宗要小部集 ①(日)Sha-yō-shō-hi-shō. ②十三種 ③存 ④真宗本願寺派先德の小品十三種を輯む。⑤寫本(谷大、宗大・一七五八)

宗要抄 ①(日)Sha-yō-shō. ②二卷 ③存 ④正保四刊 ⑤(正大、一八二・一〇九) (龍大、二六二・一八) (高大、寄・一・二四)

宗要抄秘藥 ①(日)Sha-yō-shō-hi-yaku. ②一卷 ③存 ④覺語記

宗要鈔 ①(日)Sha-yō-shō. ②六卷或十二卷 ③存 ④宗源記 ⑤文明四一五(A. D. 1472—1473) ⑥佛、教相、五時、菩薩、二乘、雜の六部に分ちて、天台の宗要を説述したるもの。

宗要二刊 (龍大、二六五・一〇) 寛永一九寫(谷大、餘大・二三四八) 寫本(龍大、二六五・一・一)

宗要鈔最秘 ①(日)Sha-yō-shō-sai-shō. ②二卷 ③存 ④存海潤 ⑤寫本(日光) ⑥存 ⑦蓮心流口筆、海上房抄

宗要相承口傳抄 ①(日)Sha-yō-shō-jō-kō-den-shō. ②宗要相承口傳抄安儀 ③七卷 ④存 ⑤蓮心流口筆、海上房抄

⑥寫本(飯山文庫)
⑦寫本(龍大)
⑧六卷 ⑨存 ⑩寫本(龍大)
⑪宗要傳授見聞 ①(日)Sha-yō-den-jō-kem-mon. ②二卷或四卷 ③存 ④直海記 ⑤寛文一寫(谷大、餘大・三二二九) 寫本(正教藏)

宗要二百論題 ①(日)Sha-yō-ni-hyaku-ron-dai. ②二卷 ③存 ④利井辨妙(天保六一・大正三 A. D. 1835—1914) 寫本(龍大、研眞)

宗要必持 ①(日)Sha-yō-itsun-jū. ③三卷 ④存 ⑤寫本(龍大)

宗要百論題 ①(日)Sha-yō-hyaku-ron-dai. ②一卷 ③存 ④義山(文政七—明治四三 A. D. 1824—1910) 寫本(龍大、一五〇一・二七)

宗要百論題 ①(日)Sha-yō-hyaku-ron-dai. ③三卷 ④存 ⑤東陽圓月(文政元—明治三五 A. D. 1818—1902) 著 ⑥明治二六刊(龍大、一五〇一・二五) 京大、大東、六九八(帝國、一五・三三三) 明治三三刊(谷大、宗大・三三七) (龍大、研眞)

宗要白光 ①(日)Sha-yō-byōka. ②十卷 ③存 ④蓮心上人談 ⑤元亨元(A. D. 1321) ⑥(正教藏)

宗要廟 ①(日)Sha-yō-byō. ②二卷 ③存 ④寫本(正大、一三九・二七)

宗要法集和解 ①(日)Sha-yō-hō-shō-wa-gō. ②一卷 ③存 ④日壽述 ⑤寫本(立大、D. 〇・三〇〇) 原本(京都本隆寺藏)

宗要本來口傳抄 ①(日)Sha-yō-hon-rai-kō-den-shō. ②二卷 ③存 ④聖光(應保二—曆仁元 A. D. 1162—1238) 著 ⑤延寶三刊 ⑥(正大、一五五三・三九)

宗要本來私見聞 ①(日)Sha-yō-hon-rai-shi-kem-mon. ②一冊 ③存 ④聖門(曆應四—應永二七 A. D. 1341—1430) 聖門(貞治五—永享一二 A. D. 1366—1440) 了庵(文明一五 A. D. 1483) ⑤延寶三刊 ⑥(京大、日大未・六三六)

宗要文 ①(日)Sha-yō-mon. ②二卷 ③存 ④蓮聖(正保元—享保六 A. D. 1644—1721) 撰 ⑤刊本(谷大、宗大・三二八四)

宗要文 ①(日)Sha-yō-mon. ②二卷 ③存 ④金森智開撰 ⑤刊本(龍大、一五〇二・一〇九) (京大、一・二六・五九)

宗要略抄 ①(日)Sha-yō-ryaku-shō. ②一卷 ③存 ④觀海(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1226—1304) 著 ⑤(參考) 諸宗叢錄第三

宗要類聚 ①(日)Sha-yō-ruijū. ①政海撰 ②(參考) 山家祖傳撰述書目集卷下

宗要六條義 ①(日)Sha-yō-rokujō-gi. ②一卷 ③存 ④觀海(延享四—文化一〇 A. D. 1747—1813) 述 ⑤文化八寫 ⑥(谷大、長保・二・一一)

宗要論義 ①(日)Sha-yō-ron-gi. ②五卷 ③良忠(正治元—弘安一〇 A. D. 1199—1287) 著 ④(參考) 淨土正依體論書目録

宗要論題 ①(日)Sha-yō-ron-dai. ②二卷 ③存 ④道振(安永二—文政七 A. D. 1771—1827) 述 ⑤寫本(龍大、一五〇一・二八—三二) (研眞)

宗要論題決擇編 ①(日)Sha-yō-ron-dai-kec-chaku-hen. ②十卷 ③存 ④利井辨明(天保六一・大正二 A. D. 1835—1914) 述 ⑤(參考) 淨土真宗全書刊行豫定書目 ⑥明治四三刊 ⑦(龍大、一五〇一・三四) 研眞(立大、A. 10・二四) (帝國、一・二五・一七)

宗要論題講述 ①(日)Sha-yō-ron-dai-kō-jūten. ②一卷 ③存 ④是山惠覺著 ⑤大正六刊 ⑥(谷大、宗洋・四一八) (龍大、一五〇一・三五)

宗要論題持持抄 ①(日)Sha-yō-ron-dai-ken-ji-shō. ②一卷 ③存 ④斷經(明治二 A. D. 1869) 述 ⑤寫本(龍大、一五〇一・三六)

宗略大要義 ①(日)Sha-ryaku-tai-yō-gi. ②全佛往生宗略大要義 ③一卷 ④存 ⑤關通(元祿六一・明和七 A. D. 1693—1770) 述 ⑥刊本(谷大、長保・六六)

宗論論 ①(日)Sha-ron-ron. (支) Tsung-ron-ron. 異部宗論論 ②一卷 ③存 ④大正四九・一五 No. 2031. 縮刷四、出二五・四、北990消、南996消、元992消、明北1279消、清1279消、麗983消、天987消、指940消、法969消、至1438消、明南1438消、NI. 1286 ⑤玄奘(仁壽二—麟德元 A. D. 602—654) 撰 ⑥唐龍興(A. D. 662) ⑦異部宗論論の下を見よ。

宗論論疏 ①(日)Sha-ron-ron-shō. (支) Tsung-ron-ron-shō. 異部宗論論疏 ⑦

名所行録◎(名庫書)表題所現◎ 月年の刊寫◎(書考參書釋註)書式◎ 説解有内◎ 代年作者◎ 著書◎ 録存◎ 數卷◎(名書)名題◎ 號略字數

【シ】

部宗論論記、異部宗論論述記 ②一卷 ③存、記讀一八三三 ④唐鑑基(貞觀六一—永淳元 A. D. 632—683) 述 ⑤異部宗論論述記の下を見よ。 ⑥(參考) 注進法相宗章疏、東城傳燈目錄卷下、諸宗章疏卷第一、奈良朝現在一切經疏目錄2603

宗論論述記 ①(日)Sha-ron-ron-jūki. (支) Tsung-ron-ron-jūki. 異部宗論論述記、異部宗論論記、異部宗論論記 ②一卷 ③存、記讀一八三三 ④唐鑑基(貞觀六一—永淳元 A. D. 632—683) ⑤異部宗論論述記の下を見よ。 ⑥(哲、ら・六・中・八)

宗論論述記轉輪抄 ①(日)Sha-ron-ron-jūki-ten-shō. ②三卷 ③存 ④良俊述 ⑤天明八寫 ⑥(京大、一・二四・一九)

宗論 ①(日)Sha-ron. ③存、輪池叢書第一 ④(帝國、特別・4・7)

宗論記 ①(日)Sha-ron-ki. ②一卷 ③存、大日本佛教全書第九七宗論叢書第一 ④(阿記) ⑤(明曆二(A. D. 1656))

⑥淨土宗愛染院の觀阿が淨土宗對諸宗の宗論を淨土宗の立場から記述した書。内容は「文治御淨論。文龜御佛決。天正御正決。慶長成實決」の三項を掲げて、文治二年の法然と諸山との問答、文龜元年の淨土宗慶蓮社と日蓮宗本願寺正覺院、淨土宗妙光院と日蓮宗賢大房との問答、天正七年の安土淨樂院に於ける淨土對日蓮の問答、慶長十三年の江戸城に於ける淨土宗龍山と日蓮宗常樂院日蓮との問答の次第及決著を記したるもの。就中後二項を詳記してゐる。(馬田行啓)

宗論八講記 ①(日)Sha-ron-hachijōki. ②一卷 ③存 ④增命記 ⑤寫本(無動寺)

周易抄 ①(日)Sha-eki-shō. ②三卷 ③存 ④(永享二—延徳元 A. D. 1430—1489) 著 ⑤(參考) 日本釋林撰述書目

周易釋解 ①(日)Sha-eki-zen-gō. (支) Chou-tshih-shō. ③三卷 ④存 ⑤明智旭(萬曆二七—永曆九 A. D. 1599—1655) 撰 ⑥(大正、一・二五・二二 No. 26. 196)

周旋雜記 ①(日)Sha-son-zakki. ②一卷 ③存 ④松井寧記 ⑤寫本(龍大、別館)

周那經 ①(日)Sha-na-kyō. (支) Chou-na-kyō. (支) Chou-na-wa-shien-ching. ②(支) M. 8. Satekha S. ③存、中阿含經第二六(大正一・五七二 No. 26. 91)

秋波集 ①(日)Sha-ha-shū. (支) Chūha-shū. ②一卷 ③存 ④朝鮮僧撰編 ⑤(大正、一・五五)

拾異類編 ①(日)Sha-tsu-ri-hen. ②三卷 ③存 ④(龍大、二〇九・九・一七三)

拾遺雲門即道禪師語錄 ①(日)Sha-tsumon-ōki-dō-zen-jō-go-roku. ②一卷 ③存 ④即道語、太樹編 ⑤天明

元刊 ①(龍大、研眞) (京大、日大未・五三二)

拾遺御文 ①(日)Sha-tō-jūmai. ②一卷 ③存、蓮如上人全書 ④蓮如(應永二—明應八 A. D. 1415—1499) 都路光代編 ⑤愛知縣人部路光代の編で、皆な實如上人御證列の本に依れりといふ。明治十四年同村の同本撰三郎初稿として二十三通を刊行した。特に拾遺と題したのは帖外御文の後を繼ぐとしたのである。

⑥明治九寫(谷大、宗大・三〇八八) 明治一四刊(谷大、宗大・一〇〇〇) (龍大、研眞) (帝國、一三三・一一七) (安井廣度)

拾遺往生傳 ①(日)Sha-tō-jūden. ②三卷 ③存、大日本佛教全書第一〇七・續淨土宗全書第六、續群書類從第八 ③三善爲康(永承四—保延五 A. D. 1049—1139) 撰 ④天永二(A. D. 1111) 撰 ⑤著者は頗る紀傳學、算數學などに堪能であつたが、平素深く觀音を信じ、續樂往生を慕ひ、日常の行事を回向して以て、悉く彼の土に生ずる爲の行業となされたといふ。本書編纂の由來に就いては、因より彼の發願に基づく所であらうけれども、彼の序文に依れば、承徳三年(A. D. 1098)八月四日の晩に夢を見た。其の夢に、己が將に死なんとしたが、その時に丈六の阿彌陀如來の來現に會し、正しく決定往生の疑なきを證明せられ、そして汝の命根が未だ盡きざるにより、今は御迎へすることが出来ないのでと記し、更に康和元年(A. D. 1090)九月十三日、四天寺に參詣し、百萬遍の念佛修行を行すに至りて、益と決定の信心を固めたるを述し、されば今、大江區房の續本朝往生傳に接いで、豫て從來の往生人中、古今遺漏の輩を記して往生人の結縁、勸進の爲に本書を述作したものであることを記してゐる。従つて本書成立の年代は著者の五十年代以後、傳中に出づる新しい年號天永二年(A. D. 1111) 即ち六十三歳頃まで書き集めて上梓したものであらう。尙其の後、著者は、後拾遺往生傳三卷(別項解説参照)にも編著したのである。勿論之は鎌倉以前に於ける淨土教研究の根本史料の一である。便宜上日次三卷を次に列挙しやう。

〔卷一〕 善仲、善算、開成、最澄、安藤、玄奘、定昭、陽生、法善、仙命、教懐、維範、清海、覺念、以圓、長慶、源算、運待、安助、清仁、經運、寂禪、利慶、明實、壇妙、仁慶、廣清、廣日、淨瑠、道乘の三十人。

〔卷中〕 淨藏、講仙、平順、賢貳、好延、尊寂、泰延、乘運、寂入、源因、榮謙、良相、寂源、雅通、經隆、永清、教末、爲恒、學入、親元、戒寂、時武、眞菅太、重武、尼釋妙、尼妙意、尼妙法、義實、守輔の二十九人。

〔卷下〕 相惠、峰延、護命、永快、順源、正範、顯通、經實室家、道昭、眞綱、眞能、時範、延教、平圓、長明、尊忍、歡子、定秀、成勝、永觀、善法、聖命、圓空、尼安樂の二十五人。

名所行録◎(名庫書)表題所現◎ 月年の刊寫◎(書考參書釋註)書式◎ 説解有内◎ 代年作者◎ 著書◎ 録存◎ 數卷◎(名書)名題◎ 號略字數

【シ】

①(参考) 淨土真宗教典志第三 ①元祿一
刊(正大、一〇三六・一九)(龍大、二九六
五・四三) 明治一四刊(龍大、二九六五・二
五〇) 明治一五刊(正大、一〇三六・一四)
(成田昌信)

拾遺苦心齋藏書 ①(日)Shō-tō-kan
shin-kwan-kyō-shū. ①一巻 ②寫本
(谷大、長保・九五)

拾遺黒谷語燈錄 ①(日)Shō-tō-kan
fō-dan-ko-kyō-shū. 拾遺黒谷上人語燈錄
③三巻 ④存、大正八三・三三九No. 2913
淨土宗全書第九 ⑤源空(長承二一建曆二
A. D. 1133-1212)述、了惠(寛元一元徳二
A. D. 1243-1330) ⑥漢語燈錄、和語燈
録の4巻照。

拾遺漢語燈錄 ①(日)Shō-tō-kan
bo-ji-kyō-shū. ①一巻 ②存、黒谷上人語燈
録(大正八三・三三九No. 2913)内、淨土宗
全書第九 ③源空(長承二一建曆二 A. D.
1133-1212)述、了惠(寛元一元徳二 A. D.
1243-1330) ④漢語燈録の下巻照。

寶永二刊 ①(正大、一五四・三三三)
②(日)Shō-tō-kan-bo-ji-kyō-shū. ①一巻 ②存、眞宗聖
眞宗法要第二六一七、眞宗聖典全書和文
部 ③覺如(文永七一觀應二 A. D. 1270-
1351)撰 ④正安三(A. D. 1301)十一月十
九日一十二月五日

⑤源空上人の繪詞傳なり。之より先、源覺
の十六門記、信瑞の一巻傳、耽空の本朝祖
師傳記繪詞等、世に行はれしゆ、此等の
書に對し、『拾遺』の語を冠せしならん。

凡そ七十二段あり、圖書のみを抄出せるも
の世に行はれ、元祿五年の刊行本(五冊)あ
り。又眞宗法要卷二十六、二十七に收む。
眞宗教典志卷一に依るに坊間本は卷四小經
釋より、耳四郎縁に至る、三十二紙を脱せ
しが、眞宗法要校刻の時、明覺寺本を以て
補ひたりとあり。

①(参考) 淨土真宗教典志第二、淨土眞宗
聖教目録 ②元祿五刊(龍大、研眞)寫本(谷
大、宗大、三一五八)(龍大、別置)

拾遺古徳傳遺事 ①(日)Shō-tō-kan
fō-dan-kyō-shū. ①一巻 ②存 ③大正六寫
④(谷大、宗大、一五三三)

拾遺古徳傳繪詞 ①(日)Shō-tō-kan
fō-dan-kyō-shū. ①九巻 ②存、眞宗聖
教大全卷上、眞宗法要第四 ③覺如(文永
七一觀應二 A. D. 1270-1351)撰

④源空上人の繪詞傳なり。遺徳法輪集卷六
に「常陸國那珂郡松原上宮寺寶物、拾遺古
徳傳、この傳は九巻あり、繪は土佐法眼の
筆にて、文は覺如上人の御筆なり、水戸黃
門公(光圀)より御所望なされ、上げければ
衰美として山を拜領せられたり、後に古徳
傳は、黃門公より菩提所の淨土寺へ寄進し
給(り)とあり。今尙は國內瓜連村常福寺
(淨土宗)に傳來し、國費に加へらる。又二
十四聖記卷六に「常陸國那珂郡島村無
量壽寺、拾遺古徳傳寶物、覺如上人御製
作、畫、土佐將監光美、阿書世尊寺行儀
傳」とあり。法輪集には之を「法然上人繪
傳、この繪は土佐將監の筆にて、わき書は

世尊寺行儀の筆なり」とせり。此の繪卷は
第一、第九兩卷の内の一巻を存し、就中第
九卷の後半部を最も多量に存せり。これ瓜
連常福寺に藏するもの一巻なりや、又別
本なりや明かならず。

①(参考) 淨土真宗教典志第一
(脇谷攝護)

拾遺古徳傳繪詞略註 ①(日)Shō-
tō-kan-kyō-shū-ryaku-chū. ①三巻
②存、眞宗大系第二六 ③惠證

④本書は拾遺古徳傳の繪卷中の内、最も細
密に研究されたものであつて、その代表的註
釋として重んぜられて居る。著者惠證師は
三河豊橋市眞宗大谷派正琳寺の人と傳へら
れて居る。然し乍ら本書の文中「湖東釋惠
證師述、惠證校」とあるより見れば、近江
の人であるやうに思はれる。かの大谷派の
講師理院惠琳師の門人にして、若狭小濱
の證明寺に住した慶海師は、その一名を惠
證と稱して居つた。しかも本書の述作年時
が、慶海師の時代とほぼ同時に屬するより
見れば、本書の作者を慶海師となすことに
於て、容易に首肯されるであらう。

本書述作の年時は之を缺くも、巻尾に
「子時、天明八戊申應龍上流七日功畢」と
あり、また延享三年奥書ある出口光善寺の
元祖繪傳の文を引用する邊より、寛延、寶
曆、明和頃に製作されたものなることが
想像せられる。

①(名古屋市淨土寺藏) (岡時正護)

拾遺語燈錄 ①(日)Shō-tō-kan-kyō-
shū. 拾遺黒谷上人語燈錄 ③三巻 ④存、

大正八三・三三九No. 2912 淨土宗全書第九
⑤源空(長承二一建曆二 A. D. 1133-1212)
述、了惠(寛元一元徳二 A. D. 1243-
1330) ⑥(参考) 淨土真宗教典志第
一

拾遺雜集 ①(日)Shō-tō-kan-
zasshū. ①一巻 ②存、弘法大師全集第一〇 ③長谷
實秀編 ④明治四三(A. D. 1910)

⑤弘法大師全集編纂に方り、弘法大師(空
海)作の短篇にして、遍照發揮性靈集及び高
野雜筆等に漏れたるものを、經國集、弘法
大師年譜、弘法大師弟子譜、元亨釋書等より
抽出して編次したものである。その目次。
在唐日示、觀南性上、離合時、南山中新羅道
者見過、過金心寺、留別青龍寺義持園
梨、在唐觀、規法和尙小山、現果時、過因
時、秋山望、雲雨、以境比心、感物、傷
滯海王大使孝廉中途物故、鏡時、天長七年
三月於六甲山、以機木刻造如意輪尊像
讚、天長八年十月十八日於六甲山、慶
大殿、偶、同如意尼答、戒、戒、高壇灌
頂記、興福寺南圓堂銅燈臺銘、般若願經呪
願、濟恩寺願文、講仁王經、願文、建
金剛峰寺、最初勸、講經守、啓白文、講、東寺
每年安居講、守護經、表、東寺講堂願、奉
造、東寺塔、材木曳運勸進表、答、傳教大師、
書、答、某書、答、止觀座主、書、高貴寺塔
築銘文、金剛子并緣起六相圓融後世、東
寺大札銘、已上

(吉野眞康)

拾遺三寶感應傳 ①(日)Shō-tō-kan-
fō-kann-ōden. ①十巻 ②存 ③支光
(寛永七一元祿一 A. D. 1630-1698)撰

名所行録 (名庫書) 漢語釋名 月年の刊載 (書考多書釋註) 書太 説解管内 代年作書 著書 録存 數巻 (名書) 名題 號地字數

【シ】

①元祿一〇刊(龍大、一〇九九・三三三)(京大、
一・一一・四一)(高木、寄、一・一一)(首
あ、二・右・一九) 貞享三刊(谷大、餘大、一七
〇七)(龍大、研史)(正大、一〇三五・四七)

拾遺性靈集 ①(日)Shō-tō-kan-
shō. ①一帖 ②存 ③元和五寫 ④(寶
壽院)

拾遺專念往生傳 ①(日)Shō-tō-kan-
sen-nen-ōden. ①一巻 ②存 ③公阿
(文政四一明治一 A. D. 1821-1879)撰
④明治二刊 ⑤(谷大、宗大、一〇一)
(正大、一〇三六・七二)

拾遺和語燈錄 ①(日)Shō-tō-kan-
wa-kyō-shū. ①二巻 ②存、拾遺黒谷語燈
録(大正八三・三三九No. 2913)内、淨土宗
全書第九 ③源空(長承二一建曆二 A. D.
1133-1212)述、了惠(寛元一元徳二 A. D.
1243-1330) ④和語燈録の下巻照。

⑤正徳五刊(正大、一五四・三三三)大正六刊
(正大、一五四・三三三) ⑥(日)Shō-tō-kan-
wa-kyō-shū. ①三冊

拾芥抄 ①(日)Shō-tō-kan-
shō. ①一巻 ②寄、一・一一四

拾玉集 ①(日)Shō-kyōku-shū. ①一
巻 ②存 ③慈圓(久壽二一嘉祿元 A. D.
1153-1235)撰 ④(参考) 大日本佛教全
書續刊決定書目

拾玉篇 ①(日)Shō-kyōku-hen. ①一
巻 ②存 ③寫本(龍大)

拾言記 ①(日)Shō-gon-ki. ①三巻
或四巻 ②存 ③元祿三刊(正大、一三〇・
三四) 元祿四刊(谷大、餘大、二四四一)(立
大、A. D. 一四二二)

拾、袖、習、執

拾碎難見記 ①(日)Shō-sai-nan-
kan-ki. ①三巻 ②存 ③刊本(谷大、宗
大、二六三三)

拾珠鈔 ①(日)Shō-jū-shō. ①三巻
②存 ③寫本(龍大、二九一・四一五)

拾慶記 ①(日)Shō-kei-ki. ①一巻
②存、戊午書第三、蓮如上上一期記付録
③實悟(明徳元一天正一 A. D. 1493-
1583) ④主に蓮如上上人の言行を録す。

拾塵抄 ①(日)Shō-jin-shō. ①十七冊
②存 ③日證撰 ④寫本(立大、D. O. 11
四)

拾穗集 ①(日)Shō-sui-shū. ①三巻
②存 ③明曆二刊(龍大)(首、二・四・左・二
八) 正保三刊(谷大、餘大、二五二・一八)(京大、
一・二六・一〇)

拾昆尼儀鈔科文 ①(日)Shō-bi-
ni-gi-shō-kyō-wa-anon. (支)Shō-bi-ni-ki-
an-kyō-wa-an. ①一巻 ②存 ③宋元照
(慶應八一政和六 A. D. 1048-1116)撰

④寫本(京大、藏、四・一)

拾菩薩抄 ①(日)Shō-bō-shō. ①一
巻 ②存 ③(参考) 眞言宗全書刊行
決定目録

拾要意 ①(日)Shō-yō-i. ①一巻
②存 ③理智院僧正述 ④寫本(京大、一・一
六・四一)

拾要記 ①(日)Shō-yō-ki. ①七巻
②藏然(仁治元一元享元 A. D. 1240-1321)
作 ③(参考) 淨土真宗教典志第三

拾要集 ①(日)Shō-yō-shū. ①一巻
②存 ③寶曆七寫(谷大、餘大、二四〇九)

世尊寺行儀の筆なり」とせり。此の繪卷は
第一、第九兩卷の内の一巻を存し、就中第
九卷の後半部を最も多量に存せり。これ瓜
連常福寺に藏するもの一巻なりや、又別
本なりや明かならず。

①(参考) 淨土真宗教典志第一
(脇谷攝護)

拾遺古徳傳繪詞略註 ①(日)Shō-
tō-kan-kyō-shū-ryaku-chū. ①三巻
②存、眞宗大系第二六 ③惠證

④本書は拾遺古徳傳の繪卷中の内、最も細
密に研究されたものであつて、その代表的註
釋として重んぜられて居る。著者惠證師は
三河豊橋市眞宗大谷派正琳寺の人と傳へら
れて居る。然し乍ら本書の文中「湖東釋惠
證師述、惠證校」とあるより見れば、近江
の人であるやうに思はれる。かの大谷派の
講師理院惠琳師の門人にして、若狭小濱
の證明寺に住した慶海師は、その一名を惠
證と稱して居つた。しかも本書の述作年時
が、慶海師の時代とほぼ同時に屬するより
見れば、本書の作者を慶海師となすことに
於て、容易に首肯されるであらう。

本書述作の年時は之を缺くも、巻尾に
「子時、天明八戊申應龍上流七日功畢」と
あり、また延享三年奥書ある出口光善寺の
元祖繪傳の文を引用する邊より、寛延、寶
曆、明和頃に製作されたものなることが
想像せられる。

①(名古屋市淨土寺藏) (岡時正護)

拾遺語燈錄 ①(日)Shō-tō-kan-kyō-
shū. 拾遺黒谷上人語燈錄 ③三巻 ④存、

大正八三・三三九No. 2912 淨土宗全書第九
⑤源空(長承二一建曆二 A. D. 1133-1212)
述、了惠(寛元一元徳二 A. D. 1243-
1330) ⑥(参考) 淨土真宗教典志第
一

拾遺雜集 ①(日)Shō-tō-kan-
zasshū. ①一巻 ②存、弘法大師全集第一〇 ③長谷
實秀編 ④明治四三(A. D. 1910)

⑤弘法大師全集編纂に方り、弘法大師(空
海)作の短篇にして、遍照發揮性靈集及び高
野雜筆等に漏れたるものを、經國集、弘法
大師年譜、弘法大師弟子譜、元亨釋書等より
抽出して編次したものである。その目次。
在唐日示、觀南性上、離合時、南山中新羅道
者見過、過金心寺、留別青龍寺義持園
梨、在唐觀、規法和尙小山、現果時、過因
時、秋山望、雲雨、以境比心、感物、傷
滯海王大使孝廉中途物故、鏡時、天長七年
三月於六甲山、以機木刻造如意輪尊像
讚、天長八年十月十八日於六甲山、慶
大殿、偶、同如意尼答、戒、戒、高壇灌
頂記、興福寺南圓堂銅燈臺銘、般若願經呪
願、濟恩寺願文、講仁王經、願文、建
金剛峰寺、最初勸、講經守、啓白文、講、東寺
每年安居講、守護經、表、東寺講堂願、奉
造、東寺塔、材木曳運勸進表、答、傳教大師、
書、答、某書、答、止觀座主、書、高貴寺塔
築銘文、金剛子并緣起六相圓融後世、東
寺大札銘、已上

(吉野眞康)

拾遺三寶感應傳 ①(日)Shō-tō-kan-
fō-kann-ōden. ①十巻 ②存 ③支光
(寛永七一元祿一 A. D. 1630-1698)撰

①(参考) 淨土真宗教典志第一、淨土眞宗
聖教目録

②寫本(谷大、宗大、三二二三)(安井廣慶)

袖中寶 ①(日)Shō-chū-hō. 袖中鈔
①一巻 ②存、眞義集(了詳稿本)第一五、
蓮如上上人小部集、眞宗聖教大全附録、眞宗
假名寶典卷中 ③(参考) 淨土真宗教典志
第二

袖珍勸考 ①(日)Shō-chin-kan-
kō. ①一巻 ②存 ③義圭(寛政一 A. A.
D. 1799)著 ④明和九刊 ⑤(京大、一・二
六・三九)

習學護摩抄 ①(日)Shō-gaku-go-
hō-shū. ①一巻 ②存 ③陽宣記 ④
⑤(参考) 本朝古風撰述密部書目 ⑥寫本
(南溪院)

習合印信拾八帖目錄 ①(日)Shō-
gō-in-jin-jū-hachi-jō-moku-roku. ①一
帖 ②存 ③徳川初期寫 ④(寶善院)

習合神道伊勢流印信 ①(日)Shō-
gō-shin-dō-ise-ryū-in-jin. ①一冊 ②
③ ④元和元寫 ⑤(寶善院)

習合神道印信拔書 ①(日)Shō-gō-
shin-dō-in-jin-nuki-gaki. ①一冊 ②存
③ ④元和五寫 ⑤(寶善院)

習練五十題 ①(日)Shō-ren-go-jū-
dai. ①一巻 ②存 ③湖江慶(一)明治
二九 A. D. 1896) ④寫本(谷大)

執行代聞書 ①(日)Shō-gyō-dai-
kiki-gaki. ①一帖 ②存 ③徳川時代寫
④(寶善院)

執金剛阿利沙記 ①(日)Shō-kōn-
gō-ari-sha-ki. ①一帖 ②存 ③徳川時代寫
④(寶善院)

名所行録 (名庫書) 漢語釋名 月年の刊載 (書考多書釋註) 書太 説解管内 代年作書 著書 録存 數巻 (名書) 名題 號地字數

シ

道安(寛文六一) 寶曆元 A. D. 1666—1751) 記 ①寫本(谷大、餘大・一九五二)

執持鈔 ①(日) Sha-i-sha. ②一巻 ③存、大正八三・七三五 No. 2662、眞宗法要第六、眞宗假名聖教新撰眞宗聖典之内、假名聖教坊本、假名聖教八部之内、眞宗聖教大全卷上、眞宗聖典宗義傳統編 ④覺如(文永七—觀應二 A. D. 1270—1352) 述 ⑤本願寺第三世覺如上人、學内外に通じ、而も一家の安心に精し。其の著書十数部ある中、本鈔は特に眞宗の安心を略釋せり。後醍醐天皇の嘉暦元年九月、上人五十七歳、飛騨國福智房永承の需に應じて著せるものである。その内容五章ある中、前の四章は本願寺聖人仰云と稱して、その口傳せる宗

祖觀覺の教語を掲げ、後の一章は、私にいはくと標して、前四章の祖師の教化に對し上人自ら領解せられた心境を開陳し宗義の骨目を透成せられてある。而して前四章の中第一章は來迎不來迎の義を明かにし、眞宗に於ける平生業成の立場から臨終まつことなく來迎たのむことなしと、以て他流の臨終來迎業成の義を簡び、第二章は宗祖が其師法然上人の教に絕對信順せる態度を示して、これ自力をすて、他力に歸する相なりと斷じ、第三章は善惡の二業ともに往生の助け障りとならず、偏に大願業力に由ることを明かにし、第四章には光明名號の因縁と信心獲得とについて、他力廻向の内容を顯彰せられてある。されば内容五章の組織を表示すれば

第一章 明不期、臨終來迎、業成 第二章 明捨自力、歸他力、相持 第三章 解法善惡二業問題、示先就因縁他力義 第四章 開陳自己領解、述成宗義

平生業成義 祖語一所成 他力安心義 執持鈔所成

斯く本鈔一部之を要するに、自力を捨て、他力に歸し、名號を執持して疑はざれば、往生の業因成辦すと示すにあり。これ即ち覺如が其一代に高調せる謂ゆる三代傳持の法門にして、この他力安心平生業成の義たるや、第十八願成就の文に淵源し、名號を開いて信ずる一念に、臨終を待たずして往生の業事全く成辦することを顯すにあり。而して之を執持と題せるは、小經に執持名號と説き、觀經に持是諸者即是持無量壽佛名とあつて、名號の謂れを領受して運り變

ることなく、一度得たれば永く持ちて忘失せず、其人の内面に信仰の純粹に持續せられるをいふ。即ち本鈔第五章に、名號を正定業となづくることは、佛の不思議力をたもてて往生の業まさしくさだまるなり……我すでに本願の名號を持念す、往生の業すでに成辦することをよるこぶし、かるがゆへに臨終に再び名號を稱へずとも往生をとげべきこと勿論なりとあるがこの執持と云へる語の趣旨である。さればその辭世の歌にも「南無阿彌陀佛力ならぬのりぞなき、

たもつころもわれとおこらず」とあつて、執持とらひ持念とらひるもの、即ち覺如にあつては其の信仰の特質を表明せる標語であつた。されば本鈔は簡短な小冊子ではあるが、覺如の著述中特に純粹の他力安心を表現せるものとして重要視せられる。(参考) 淨土眞宗教典第一、淨土眞宗聖教目錄、眞宗假名聖教目錄 ①寫本(龍大、別置、研眞) (大須賀秀道) 執持鈔 ①(日) Sha-i-sha. ②一巻 ③存、大正八三・七三五 No. 2662、眞宗法要第六、眞宗假名聖教新撰眞宗聖典之内、假名聖教坊本、假名聖教八部之内、眞宗聖教大全卷上、眞宗聖典宗義傳統編 ④覺如(文永七—觀應二 A. D. 1270—1352) 述 ⑤本願寺第三世覺如上人、學内外に通じ、而も一家の安心に精し。其の著書十数部ある中、本鈔は特に眞宗の安心を略釋せり。後醍醐天皇の嘉暦元年九月、上人五十七歳、飛騨國福智房永承の需に應じて著せるものである。その内容五章ある中、前の四章は本願寺聖人仰云と稱して、その口傳せる宗

①一巻 ②存 ③宣明(寛延二—文政四 A. D. 1749—1821) 述 ④文化二(谷大、1815) 寫本(谷大・九二二) 執持鈔講義 ①(日) Sha-i-sha-ko. ②一巻 ③存、眞宗大系第二四 ④靈莊(安永四—嘉永四 A. D. 1775—1831) 述 ⑤天保七(A. D. 1836) 寫本(谷大・一八五七) 執持鈔講義 ①(日) Sha-i-sha-ko. ②一巻 ③存 ④宣成(安永六一—文久元 A. D. 1777—1861) 述 ⑤寫本(谷大・一八二三・一八四六) 執持鈔講義 ①(日) Sha-i-sha-ko. ②一巻 ③存 ④環定(一明治二 A. D. 1869) 述 ⑤文久元寫 ⑥谷大、宗大、三八七六) 執持鈔講義 ①(日) Sha-i-sha-ko. ②一巻 ③存 ④日暮龍城述 ⑤明治三九(A. D. 1906) 寫本(谷大・一一二七) 執持鈔講義 ①(日) Sha-i-sha-ko. ②一巻 ③存 ④池原雅壽(嘉永三—大正一三 A. D. 1850—1924) 述 ⑤明治四一(A. D. 1928) 寫本(谷大・宗洋・九四) 執持鈔講義 ①(日) Sha-i-sha-ko. ②一巻 ③存 ④義學(文化二—明治一四 A. D. 1805—1831) 述 ⑤慶應二(A. D. 1866) 寫本(谷大・宗大・一八二六) 執持鈔講義 ①(日) Sha-i-sha-ko. ②一巻 ③存 ④池原

シ

飛騨(嘉永三—大正一三 A. D. 1850—1924) 述 ⑥大正六刊 ⑦谷大、宗大・二八八〇) 執持鈔講義 ①(日) Sha-i-sha-ko-roku. ②一巻 ③存 ④水井昇道(一明治二 A. D. 1869) 述 ⑤寫本(谷大・宗大・二一六八) 執持鈔講義 ①(日) Sha-i-sha-ko-roku. ②一巻 ③存 ④利井興隆著 ⑤大正七刊 ⑥龍大、研眞) 執持鈔探要記 ①(日) Sha-i-sha-ko-tan-yo-ki. ②一巻 ③存 ④龍澤(寛政一—明治一八 A. D. 1800—1885) 述 ⑤嘉永五(A. D. 1832) 寫本(谷大・宗大・九二二) 執持鈔通津 ①(日) Sha-i-sha-ko-hei-adi-roku. 執持鈔講義 ②三巻 ③存、眞宗大系第二五 ④法海(明和五—天保五 A. D. 1768—1834) 述 ⑤本書は大派易行院法海講師が、覺如上人の執持鈔を講説せられた開記である。文化十三丙子歲朝日、名古屋御坊に於て開建し、同十六日に至る間、凡二十六會に講説せしもの。其講辭に五門を分ち、一に覺師一代の著作十二部を擧げて一々に之を解題し、二に興由に緣起と意圖とを別ち、三に一部の大意として、名號を執持する時往生の業を成辦するにありと見て其趣旨を詳述し、四に題號を釋し、五に本文に入りて、

五章の内容を順次に講解せり。而して其所説の平正にして而も想到あるは、師の講解の特色にして、一代の講説、何れも高倉の正脈を開明せられたるも、本鈔は殊に覺師一代の教學を懇切に論述せられたるのみならず、宗祖の古より蓮師の後に及びて、覺師の一代に強調せられた平生業成の宗義を詳論せられてあるから、眞宗の要義殊に覺師教學の内容を知らんと欲するもの、先づ本書を讀みかば、其便益多大なるものがあらう。(大須賀秀道) 執持鈔丙申記 ①(日) Sha-i-sha-ko-hei-adi-roku. 執持鈔講義 ②一巻 ③存、眞宗大系第二四 ④靈莊(安永四—嘉永四 A. D. 1775—1831) 述 ⑤天保七(丙申) A. D. 1836) 大派開悟院靈莊講師が、天保七丙申歲十二月、覺如上人の執持鈔を講説せられたその講記である。講辭に四門を分ち、一來章に通別あり、通には報佛恩の爲に、別には願智房の請に應じて、三代傳持の法脈を顯さんが爲なりとし、二大意には、若し義に約すれば、平生業成の義を明すにありとなし、更に文に約して平生業成の義を詳論し、三題號、平生業成を釋す見、四本文に入つて、順次に五章を釋し其趣旨を詳解せり。此に其本文五章に對する科文を出して其所見の大意を示さば、(一)明平生業成義、(二)舉佛示歸他力相、(三)明上凡夫託願力入報土、(四)明光明名號因縁、(五)私釋。にして、師が願成就に依れる眞宗の安心、平生業成の内容を高調せる一代の宗學は、本書の上に遺憾なく開明せ

られたる。(大須賀秀道) 執持鈔開記 ①(日) Sha-i-sha-ko-roku. ②一巻 ③存 ④宣成(安永六一—文久元 A. D. 1777—1861) 述 ⑤寫本(龍大、研眞) 執持鈔開記 ①(日) Sha-i-sha-ko-roku. ②一巻 ③存 ④智通寺 ⑤寫本(龍大) 執持鈔略述 ①(日) Sha-i-sha-ko-roku. ②一巻 ③存 ④吉谷覺壽(天保一—大正三 A. D. 1842—1914) 述 ⑤明治三八刊(谷大、宗小・一六五) 龍大、二四一・六) 明治四一刊(立大、A四〇・八〇) 京都西村護法館 執中學及則註解 ①(日) Sha-i-sha-gaku-gaku-sha-aku-cho-ge. ②一巻 ③存 ④藤田一郎述 ⑤刊本(京大、尊・別) 執中學派葬祭式略解 ①(日) Sha-i-sha-gaku-ha-sha-sai-shiki-yaku-ge. ②一巻 ③存 ④刊本(京大、尊・別) 執中學派立教大意 ①(日) Sha-i-sha-gaku-ha-sha-kyo-tai. ②一巻 ③存 ④藤田一郎述 ⑤明治二〇刊 ⑥京大、尊・別) 執筆法使筆法 ①(日) Shūp-pen-shō. ②一巻 ③存、弘法大師全集第九 ④空海(實龜五—承和二 A. D. 774—835) ⑤執筆及び使筆法の圖を挿入して簡單なる説明をしたものである。高野大師眞蹟書談、續弘法大師年譜第八參照。(吉野眞雄) 終焉印明 ①(日) Shaen-in-ai-myō.

⑥存 ⑦徳川時代寫 ⑧(實龜院) 終焉作法 ①(日) Sha-en-shō. ②一巻 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(實龜院) 終焉家業 ①(日) Sha-nan-ke-gō. ②一巻 ③存 ④Chung-nan-chia-yeh. ⑤六巻 ⑥存、己種二・一〇四—一五 ⑦守一述、行枝 ⑧宋嘉定六一淳祐二(A. D. 1213—1242) ⑨守一の南山律宗に關する短篇を、門人行枝が集録したもの。すなべて二十篇あり。〔上巻〕(I)教觀提要。(II)三觀慶壽。(III)答日本佛法師教問答。(IV)重受戒文。(V)戒律正義直言。(VI)四淨要論。(VII)衣制格言。(VIII)論分節。(IX)論僧體。(X)科釋雜心論出三有對文。(XI)受緣重開。〔下巻〕(I)論心用變持犯結制罪。(II)辯止并八九名義。(III)重釋一事鈔持犯當通塞文。(IV)重答三欲師應問。(V)折然參庵持犯四難。(VI)微・顯定道二戒。(VII)略・辨正用相經。(VIII)略・第七非體。(IX)辨略教結犯。 ⑩)十篇は製作年時を篇尾に記す。その上限は南宋嘉定六年(A. D. 1213) 下限は淳祐二年(A. D. 1242) である。著者守一は鎌倉とす。律宗第十九祖と云はれる石鼓法久と同門の如庵了安の門人である。本書は、律宗に大乘思想を含有することを主張した元照の傾向を延長し、殊に教觀縁要に於ては、南山の弘律は妙觀を本と爲すこととまで極言した。之が爲めに第二十祖と云はれる上翁妙蓮は、實祐二(A. D. 1234)に蓬折直辯を著はして本書を攻撃した。撰

【シ】

は目次の題下に「四明齋齋宗師述、門人行
技編」とある。律宗綱要巻下、律宗瓊章
第六、蓬折直辨、蓬折法參照。

終南六字釋疑記

①(日)Shi-
nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

②(日)Shi-
nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

終南六字釋疑記 ①(日)Shi-nan-
roku-ji-shaku-cho-ki. ①1巻 ②存

僧亮(文化六一安政六A. D. 1809-1859)述

③(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

④(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

⑤(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

⑥(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

⑦(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

⑧(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

⑨(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

⑩(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

⑪(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

⑫(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

⑬(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

⑭(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

⑮(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

⑯(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

⑰(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

⑱(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

⑲(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

⑳(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㉑(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㉒(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㉓(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㉔(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㉕(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㉖(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㉗(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㉘(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㉙(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㉚(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㉛(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㉜(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㉝(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㉞(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㉟(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㊱(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㊲(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㊳(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㊴(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㊵(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㊶(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㊷(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㊸(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㊹(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㊺(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㊻(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㊼(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㊽(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㊾(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

㊿(日)Shi-nan-yo-kawa-ton-tai-cho-ki. ①1巻

【シ】

安矣、止觀現在前、三昧宜無休息、智慧宜
無量、觀佛無厭足の十一を以て佛を憶念す
べきことを説いたものであり、後には慈無
量心を修し慈心解脫を得れば、臥安、覺
安、不見惡夢、天譴、人愛、非人所敬、不
毒、不兵、水火不喪、亦不加刑、身壞分終
生天の十一果報を受くることを説いたもの
である。前者には同本が見當らなすが、後
者は A. XI. 16 Meita. 増一阿含四九品第
十經(第四十七卷、大正二・八〇六上)の二同
本である。

十一通御書

①(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

②(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

③(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

④(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

⑤(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

⑥(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

⑦(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

⑧(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

⑨(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

⑩(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

⑪(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

⑫(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

⑬(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

⑭(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

⑮(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

⑯(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

⑰(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

⑱(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

⑲(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

⑳(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㉑(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㉒(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㉓(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㉔(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㉕(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㉖(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㉗(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㉘(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㉙(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㉚(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㉛(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㉜(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㉝(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㉞(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㉟(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊱(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊲(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊳(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊴(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊵(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊶(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊷(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊸(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊹(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊺(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊻(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊼(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊽(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊾(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊿(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊿(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊿(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊿(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊿(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊿(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊿(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊿(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊿(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊿(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

㊿(日)Ja-tai-ku-sho. ①1巻

【シ】

元二 A. D. 714)述 ⑥(参考) 注進法相宗
章疏、請宗章疏卷第一 ⑦(参考) 廣和四章
(實善院)

⑧(参考) 廣和四章 (實善院)

⑨(参考) 廣和四章 (實善院)

⑩(参考) 廣和四章 (實善院)

⑪(参考) 廣和四章 (實善院)

⑫(参考) 廣和四章 (實善院)

⑬(参考) 廣和四章 (實善院)

⑭(参考) 廣和四章 (實善院)

⑮(参考) 廣和四章 (實善院)

⑯(参考) 廣和四章 (實善院)

⑰(参考) 廣和四章 (實善院)

⑱(参考) 廣和四章 (實善院)

⑲(参考) 廣和四章 (實善院)

⑳(参考) 廣和四章 (實善院)

㉑(参考) 廣和四章 (實善院)

㉒(参考) 廣和四章 (實善院)

㉓(参考) 廣和四章 (實善院)

㉔(参考) 廣和四章 (實善院)

㉕(参考) 廣和四章 (實善院)

㉖(参考) 廣和四章 (實善院)

㉗(参考) 廣和四章 (實善院)

㉘(参考) 廣和四章 (實善院)

㉙(参考) 廣和四章 (實善院)

㉚(参考) 廣和四章 (實善院)

㉛(参考) 廣和四章 (實善院)

㉜(参考) 廣和四章 (實善院)

㉝(参考) 廣和四章 (實善院)

㉞(参考) 廣和四章 (實善院)

㉟(参考) 廣和四章 (實善院)

㊱(参考) 廣和四章 (實善院)

㊲(参考) 廣和四章 (實善院)

㊳(参考) 廣和四章 (實善院)

㊴(参考) 廣和四章 (實善院)

㊵(参考) 廣和四章 (實善院)

㊶(参考) 廣和四章 (實善院)

㊷(参考) 廣和四章 (實善院)

㊸(参考) 廣和四章 (實善院)

㊹(参考) 廣和四章 (實善院)

㊺(参考) 廣和四章 (實善院)

㊻(参考) 廣和四章 (實善院)

㊼(参考) 廣和四章 (實善院)

㊽(参考) 廣和四章 (實善院)

㊾(参考) 廣和四章 (實善院)

㊿(参考) 廣和四章 (實善院)

【シ】

元二 A. D. 714)述 ⑥(参考) 注進法相宗
章疏、請宗章疏卷第一 ⑦(参考) 廣和四章
(實善院)

⑧(参考) 廣和四章 (實善院)

⑨(参考) 廣和四章 (實善院)

⑩(参考) 廣和四章 (實善院)

⑪(参考) 廣和四章 (實善院)

⑫(参考) 廣和四章 (實善院)

⑬(参考) 廣和四章 (實善院)

⑭(参考) 廣和四章 (實善院)

⑮(参考) 廣和四章 (實善院)

⑯(参考) 廣和四章 (實善院)

⑰(参考) 廣和四章 (實善院)

【シ】

元二 A. D. 714)述 ⑥(参考) 注進法相宗
章疏、請宗章疏卷第一 ⑦(参考) 廣和四章
(實善院)

⑧(参考) 廣和四章 (實善院)

⑨(参考) 廣和四章 (實善院)

⑩(参考) 廣和四章 (實善院)

⑪(参考) 廣和四章 (實善院)

⑫(参考) 廣和四章 (實善院)

⑬(参考) 廣和四章 (實善院)

⑭(参考) 廣和四章 (實善院)

⑮(参考) 廣和四章 (實善院)

⑯(参考) 廣和四章 (實善院)

⑰(参考) 廣和四章 (實善院)

【シ】

元二 A. D. 714)述 ⑥(参考) 注進法相宗
章疏、請宗章疏卷第一 ⑦(参考) 廣和四章
(實善院)

⑧(参考) 廣和四章 (實善院)

⑨(参考) 廣和四章 (實善院)

⑩(参考) 廣和四章 (實善院)

⑪(参考) 廣和四章 (實善院)

⑫(参考) 廣和四章 (實善院)

⑬(参考) 廣和四章 (實善院)

⑭(参考) 廣和四章 (實善院)

⑮(参考) 廣和四章 (實善院)

⑯(参考) 廣和四章 (實善院)

⑰(参考) 廣和四章 (實善院)

【シ】

元二 A. D. 714)述 ⑥(参考) 注進法相宗
章疏、請宗章疏卷第一 ⑦(参考) 廣和四章
(實善院)

⑧(参考) 廣和四章 (實善院)

⑨(参考) 廣和四章 (實善院)

⑩(参考) 廣和四章 (實善院)

⑪(参考) 廣和四章 (實善院)

⑫(参考) 廣和四章 (實善院)

⑬(参考) 廣和四章 (實善院)

⑭(参考) 廣和四章 (實善院)

⑮(参考) 廣和四章 (實善院)

⑯(参考) 廣和四章 (實善院)

⑰(参考) 廣和四章 (實善院)

【シ】

元二 A. D. 714)述 ⑥(参考) 注進法相宗
章疏、請宗章疏卷第一 ⑦(参考) 廣和四章
(實善院)

⑧(参考) 廣和四章 (實善院)

⑨(参考) 廣和四章 (實善院)

⑩(参考) 廣和四章 (實善院)

⑪(参考) 廣和四章 (實善院)

⑫(参考) 廣和四章 (實善院)

⑬(参考) 廣和四章 (實善院)

⑭(参考) 廣和四章 (實善院)

⑮(参考) 廣和四章 (實善院)

⑯(参考) 廣和四章 (實善院)

⑰(参考) 廣和四章 (實善院)

【シ】

元二 A. D. 714)述 ⑥(参考) 注進法相宗
章疏、請宗章疏卷第一 ⑦(参考) 廣和四章
(實善院)

⑧(参考) 廣和四章 (實善院)

⑨(参考) 廣和四章 (實善院)

⑩(参考) 廣和四章 (實善院)

⑪(参考) 廣和四章 (實善院)

【シ】

⑪十一面觀世音菩薩の神呪の功德を説ける經にして雜部密經に屬す。即ち其の内容は、往昔觀世音菩薩は百蓮華眼無障蔽功德光明如來の所に於て大持呪仙人中の王と作つて、十一面心呪を得、此の心呪を誦する者が現身に得る所の十種の果報及び四種の果報を擧げ、又曼陀羅香如來の所に於ては優婆塞身となつて、復此の咒を得、其の咒を説く時は、一切諸佛の大慈大悲、大喜大捨、智慧藏法門を得、此の法門力を以て、一切衆生の種々の難を解脱せしめ、又此の咒を誦する者の功德を説き、次に此の經法の次第を擧げ、根本呪、水呪、衣呪、香呪、華呪、油呪、食呪、火呪、結界呪及び行道の咒、造像法、行法の日願を願説し、若し此の法を悉く満足せば四願を得ると説き、四願とは、一には原坐處を離れずして空に處りて自在無碍なること、二には一切賢聖の中にあること、三には持呪仙人中の王たらんこと、四には現身に觀世音菩薩に隨逐することである、又次に別種の三種の成就法を説いてある。

一面神呪心經(支那)がある。
 ⑪(参考) 法經卷第一、歷代三寶記第十一、續高僧傳第二、開元錄第七 (神林隆淨)
 ⑪十一面觀世音菩薩略緣起
 ⑪(支) Ja-tchi-men-kwan-ze-ou-bo-satsu
 ⑪ Ryaku-en-gi ① 1卷 ② 存 ③ 關榮達
 ⑪刊本(正六、一〇三三、三三三)
 ⑪十一面悔過 ⑪(支) Ja-tchi-men-ke
 ⑪ kva ① 1卷 ② 存 ③ 寫本(正六、一五三三、二二七)
 ⑪十一面護摩私記 ⑪(支) Ja-tchi-men-go-ma-shi-ki ① 1帖 ② 存 ③ 德川時代寫 ④ (實錄院)
 ⑪十一面護摩法 ⑪(支) Ja-tchi-men-go-ma-ho ① 1册 ② 存 ③ 寫本(實善院)
 ⑪十一面薩埵法 ⑪(支) Ja-tchi-men-sat-ta-ho ① 1帖 ② 存 ③ 蓮體(寛文三享保一、A. D. 1663—1726) ④ 德川時代寫 ⑤ (實錄院)
 ⑪十一面疏 ⑪(支) Ja-tchi-men-sho ① 1卷 ② 存 ③ 寫本(實善院)
 ⑪(支) Shi-t-mien-shu ① 11面經疏 ② 1卷 ③ 唐代遺傳述 ④ (参考) 諸宗章疏卷第二
 ⑪十一面鈔 ⑪(支) Ja-tchi-men-sho ① 1卷 ② 寫信(應德元一、仁平、A. D. 1084—1153) ③ (参考) 諸宗章疏卷第三
 ⑪十一面神呪經 ⑪(支) Ja-tchi-men-shi-ji-kyo ① (支) Shi-t-mien-shen-chou-ching ① 11面觀世音神呪經 ② 11面觀世音呪並功德經 ③ 1卷 ④ 存 ⑤ 大正二〇・一四九 No. 1070 ⑥ 縮成一、二、三、四、一〇、一〇、北311良、南322良、元313良、明北323能、清233能、龍310才、天315良、指289才、法304男、至556積、明南315改、N327 ⑦ 北周耶舍編多 ⑧ 十一面觀世音神呪經の下を見よ。
 ⑪十一面神呪經 ⑪(支) Ja-tchi-men-shi-ji-kyo ① (支) Shi-t-mien-shen-chou-ching ① 11面神呪心經 ② 1卷 ③ 存 ④ 大正二〇・一五三〇、一五三三 No. 1071 ⑤ 縮成一、二、三、四、一〇、北312良、南323良、元319良、明北334能、清234能、龍311才、天319良、法305男、至567積、明南315改、N328 ⑥ 唐支英(仁壽二、依蓮經論章疏目錄 ⑦ 平安朝時代寫(實善院) ⑧ 德川時代寫(實錄院)
 ⑪十一面神呪經疏 ⑪(支) Ja-tchi-men-shi-ji-kyo-gi-sho ① (支) Shi-t-mien-shen-chou-ching-gi-sho ① 11面神呪心經疏 ② 11面經疏 ③ 11面經疏 ④ 1卷 ⑤ 存 ⑥ 大正三九・一〇〇四 No. 1802 ⑦ 仁讓一、三七、一 ⑧ 唐慧沼(一開元、A. D. 714)撰
 ⑪十一面神呪心經 ⑪(支) Ja-tchi-men-shi-ji-kyo ① (支) Shi-t-mien-shen-chou-ching ① (支) Avalokitesvara-khadanukha-dharati ① (譯傳) ② 甲 Hakarasu-sha-shal-bou-gi-g-pai rig-shags kpi sin-po shes-bya-bahi grunak ③ 重翻 ④ N Hphags-pa spyan-tas-gigs dban-phyag shal-bou-gi-g-pa shes-bya-bahi grunak ⑤ 1卷 ⑥ 存 ⑦ 大正二〇・一五三〇、一五三三 No. 1071 ⑧ 縮成一、二、三、四、一〇、北312良、南323良、元319良、明北334能、清234能、龍311才、天319良、法305男、至567積、明南315改、N328 ⑥ 唐支英(仁壽二、依蓮經論章疏目錄 ⑦ 平安朝時代寫(實善院) ⑧ 德川時代寫(實錄院)
 ⑪十一面神呪心經疏 ⑪(支) Ja-tchi-men-shi-ji-kyo-gi-sho ① (支) Shi-t-mien-shen-chou-ching-gi-sho ① 11面神呪心經疏 ② 11面經疏 ③ 11面經疏 ④ 1卷 ⑤ 存 ⑥ 大正三九・一〇〇四 No. 1802 ⑦ 仁讓一、三七、一 ⑧ 唐慧沼(一開元、A. D. 714)撰

⑪十一面觀自在菩薩の心呪の威力及び之を受持し、讀誦し、書寫し、流布する者の功德を説けるもので、雜部密經に屬す。即ち其の内容は、觀自在菩薩は過去無量阿僧祇劫の所に於て、此の十一面の神呪を受け、もし此の呪を念誦する者は現身に十種勝利及び四種功德勝利を得ると説き、又美音香如來の所に於ても亦此の呪を得、此の呪を誦持する者は諸佛大慈智藏一切菩薩の解脱法を得、其の威力に依て種種の苦難より救はれ、或は種種の罪を除滅するを叙し。次に此の供養儀式法を願説し、根本呪、水呪、衣呪、燈呪、華香曼呪、獻佛供呪、薪呪、結界呪、自宮呪、洗像法、並に行法の日次を述べ、終に八種の成就法を説いてある。

⑪十一面神呪心經疏 ⑪(支) Ja-tchi-men-shi-ji-kyo-gi-sho ① (支) Shi-t-mien-shen-chou-ching-gi-sho ① 11面神呪心經疏 ② 11面經疏 ③ 11面經疏 ④ 1卷 ⑤ 存 ⑥ 大正三九・一〇〇四 No. 1802 ⑦ 仁讓一、三七、一 ⑧ 唐慧沼(一開元、A. D. 714)撰
 ⑪十一面神呪心經疏 ⑪(支) Ja-tchi-men-shi-ji-kyo-gi-sho ① (支) Shi-t-mien-shen-chou-ching-gi-sho ① 11面神呪心經疏 ② 11面經疏 ③ 11面經疏 ④ 1卷 ⑤ 存 ⑥ 大正三九・一〇〇四 No. 1802 ⑦ 仁讓一、三七、一 ⑧ 唐慧沼(一開元、A. D. 714)撰
 ⑪十一面神呪心經疏 ⑪(支) Ja-tchi-men-shi-ji-kyo-gi-sho ① (支) Shi-t-mien-shen-chou-ching-gi-sho ① 11面神呪心經疏 ② 11面經疏 ③ 11面經疏 ④ 1卷 ⑤ 存 ⑥ 大正三九・一〇〇四 No. 1802 ⑦ 仁讓一、三七、一 ⑧ 唐慧沼(一開元、A. D. 714)撰

名所行註◎(名東圖)漢語釋◎ 月年の刊載◎ (書考)書目録◎ 書目◎ 代年作書◎ 書目◎ 書目◎ (名書)名題◎ 書目◎

【シ】

⑪十一面神呪心經 (Ekadasamukharadhi-mantra-hridaya-sutra) の解釋である。初に經名に就て、十一面、神呪心、經の各の意義を明し、次に六義を以て此の經を釋して居る。六義とは第一に大意を明し、第二に經宗を明し、第三に功能を明し、第四に階位を明し、第五に感應を明し、第六に文義を明し、第七に觀世音菩薩の化世の大意と方便出世して娑婆を度するの因縁と幾劫の化を爲すやとを説明せるものである。第二の經宗を明すとは、此の經は觀世音菩薩の行法と神呪と徳力とを以て經宗と爲すことを説き、更に之を廣説せるものである。第三の功德を明すとは、觀世音菩薩神呪の功能の非一類、處々異なることを廣説せるものである。第四の階位を明すとは、菩薩の二種の階位を説き、更に觀世音菩薩のそれについて論ぜしものである。第五の感應を明すとは、觀世音菩薩と有情との感應關係について種々の方面より詳に説けるものである。第六の文義を明すとは、古來より經文を釋するに龍樹菩薩及び羅什師の如く文義を釋するのみのものと、天親菩薩及び釋道安師の如く章に分ち段に開いて釋するものとの二種ありとなして、本義疏は兩者の特色をとり、分章・開段には後者のそれにならひ、文義を釋するには前者にならひつて經の文義を明すものであるとして、初に經を三段を大別し、更にこれを細分して説明し、後に一々の文について其の義を述べて居るのである。

本書は六義を以て經を釋するに當つては、往々問答體をかりて其の說を明確にしつゝ、華嚴經、涅槃經、法華經、方廣經、大無量壽經、無量壽經、彌勒本願經、天地本起經、淨土三昧經、不空罽索經、觀世音經、觀世音三昧經、觀音授記經、弘猛海龍經、龍樹菩薩讀文等の諸經文より廣く經文を引用して其の說を立證し、而も且つ其の中に於て觀世音信仰を高揚せんとして居るのである。
 ⑪寫本(京大、藏一、六八、八) 龍大、二四八・八五(谷大、餘大、一〇〇九) (大石秀典)
 ⑪十一面尊供 ⑪(支) Ja-tchi-men-sou-gu ① 1帖 ② 存 ③ 德川時代寫 ④ (實善院)
 ⑪十一面尊法 ⑪(支) Ja-tchi-men-sou-ho ① 1帖 ② 存 ③ 足利時代寫 ④ (實善院)
 ⑪十一面陀羅尼經鈔 ⑪(支) Ja-tchi-men-da-ra-ni-kyo-sho ① 11面觀音陀羅尼經鈔 ② 科十一面陀羅尼經鈔 ③ 1卷 ④ 存 ⑤ 亮法(元和八、延寶八、A. D. 1622—1680) ⑥ 延寶七刊 ⑦ 京大、日大未・七九(立大、A. D. 1831—1841) ⑧ 正六、一六二二—二二二)
 ⑪十一面法 ⑪(支) Ja-tchi-men-ho ① 存 ② 應永二寫 ③ (金剛三昧院) (實善院)
 ⑪十一面法字輪觀口訣 ⑪(支) Ja-tchi-men-ho-ji-ri-n-kwan-ku-kei-shu ① 1帖 ② 存 ③ 德川時代寫 ④ (實善院)
 ⑪四因緣義 ⑪(支) Shi-yin-sad-gyan-gi ① 1卷 ② 存 ③ 寫本(谷大、餘大、四一八)

⑪十一面神呪心經 ⑪(支) Shi-t-mien-shen-chou-ching ① 11面神呪心經 ② 11面經疏 ③ 11面經疏 ④ 1卷 ⑤ 存 ⑥ 大正三九・一〇〇四 No. 1802 ⑦ 仁讓一、三七、一 ⑧ 唐慧沼(一開元、A. D. 714)撰
 ⑪十一面神呪心經 ⑪(支) Shi-t-mien-shen-chou-ching ① 11面神呪心經 ② 11面經疏 ③ 11面經疏 ④ 1卷 ⑤ 存 ⑥ 大正三九・一〇〇四 No. 1802 ⑦ 仁讓一、三七、一 ⑧ 唐慧沼(一開元、A. D. 714)撰
 ⑪十一面神呪心經 ⑪(支) Shi-t-mien-shen-chou-ching ① 11面神呪心經 ② 11面經疏 ③ 11面經疏 ④ 1卷 ⑤ 存 ⑥ 大正三九・一〇〇四 No. 1802 ⑦ 仁讓一、三七、一 ⑧ 唐慧沼(一開元、A. D. 714)撰
 ⑪十一面神呪心經 ⑪(支) Shi-t-mien-shen-chou-ching ① 11面神呪心經 ② 11面經疏 ③ 11面經疏 ④ 1卷 ⑤ 存 ⑥ 大正三九・一〇〇四 No. 1802 ⑦ 仁讓一、三七、一 ⑧ 唐慧沼(一開元、A. D. 714)撰
 ⑪十一面神呪心經 ⑪(支) Shi-t-mien-shen-chou-ching ① 11面神呪心經 ② 11面經疏 ③ 11面經疏 ④ 1卷 ⑤ 存 ⑥ 大正三九・一〇〇四 No. 1802 ⑦ 仁讓一、三七、一 ⑧ 唐慧沼(一開元、A. D. 714)撰

⑪十一面神呪心經 ⑪(支) Shi-t-mien-shen-chou-ching ① 11面神呪心經 ② 11面經疏 ③ 11面經疏 ④ 1卷 ⑤ 存 ⑥ 大正三九・一〇〇四 No. 1802 ⑦ 仁讓一、三七、一 ⑧ 唐慧沼(一開元、A. D. 714)撰
 ⑪十一面神呪心經 ⑪(支) Shi-t-mien-shen-chou-ching ① 11面神呪心經 ② 11面經疏 ③ 11面經疏 ④ 1卷 ⑤ 存 ⑥ 大正三九・一〇〇四 No. 1802 ⑦ 仁讓一、三七、一 ⑧ 唐慧沼(一開元、A. D. 714)撰
 ⑪十一面神呪心經 ⑪(支) Shi-t-mien-shen-chou-ching ① 11面神呪心經 ② 11面經疏 ③ 11面經疏 ④ 1卷 ⑤ 存 ⑥ 大正三九・一〇〇四 No. 1802 ⑦ 仁讓一、三七、一 ⑧ 唐慧沼(一開元、A. D. 714)撰
 ⑪十一面神呪心經 ⑪(支) Shi-t-mien-shen-chou-ching ① 11面神呪心經 ② 11面經疏 ③ 11面經疏 ④ 1卷 ⑤ 存 ⑥ 大正三九・一〇〇四 No. 1802 ⑦ 仁讓一、三七、一 ⑧ 唐慧沼(一開元、A. D. 714)撰
 ⑪十一面神呪心經 ⑪(支) Shi-t-mien-shen-chou-ching ① 11面神呪心經 ② 11面經疏 ③ 11面經疏 ④ 1卷 ⑤ 存 ⑥ 大正三九・一〇〇四 No. 1802 ⑦ 仁讓一、三七、一 ⑧ 唐慧沼(一開元、A. D. 714)撰

名所行註◎(名東圖)漢語釋◎ 月年の刊載◎ (書考)書目録◎ 書目◎ 代年作書◎ 書目◎ 書目◎ (名書)名題◎ 書目◎

一帯 ① 存 ② 遺書 ③ 寫本(正教藏) ④ 寫本(正教藏) ⑤ 寫本(正教藏) ⑥ 寫本(正教藏) ⑦ 寫本(正教藏) ⑧ 寫本(正教藏) ⑨ 寫本(正教藏) ⑩ 寫本(正教藏) ⑪ 寫本(正教藏) ⑫ 寫本(正教藏) ⑬ 寫本(正教藏) ⑭ 寫本(正教藏) ⑮ 寫本(正教藏) ⑯ 寫本(正教藏) ⑰ 寫本(正教藏) ⑱ 寫本(正教藏) ⑲ 寫本(正教藏) ⑳ 寫本(正教藏) ㉑ 寫本(正教藏) ㉒ 寫本(正教藏) ㉓ 寫本(正教藏) ㉔ 寫本(正教藏) ㉕ 寫本(正教藏) ㉖ 寫本(正教藏) ㉗ 寫本(正教藏) ㉘ 寫本(正教藏) ㉙ 寫本(正教藏) ㉚ 寫本(正教藏) ㉛ 寫本(正教藏) ㉜ 寫本(正教藏) ㉝ 寫本(正教藏) ㉞ 寫本(正教藏) ㉟ 寫本(正教藏) ㊱ 寫本(正教藏) ㊲ 寫本(正教藏) ㊳ 寫本(正教藏) ㊴ 寫本(正教藏) ㊵ 寫本(正教藏) ㊶ 寫本(正教藏) ㊷ 寫本(正教藏) ㊸ 寫本(正教藏) ㊹ 寫本(正教藏) ㊺ 寫本(正教藏) ㊻ 寫本(正教藏) ㊼ 寫本(正教藏) ㊽ 寫本(正教藏) ㊾ 寫本(正教藏) ㊿ 寫本(正教藏)

十王本遺誦修善抄

① 存 ② 遺書 ③ 寫本(正教藏) ④ 寫本(正教藏) ⑤ 寫本(正教藏) ⑥ 寫本(正教藏) ⑦ 寫本(正教藏) ⑧ 寫本(正教藏) ⑨ 寫本(正教藏) ⑩ 寫本(正教藏) ⑪ 寫本(正教藏) ⑫ 寫本(正教藏) ⑬ 寫本(正教藏) ⑭ 寫本(正教藏) ⑮ 寫本(正教藏) ⑯ 寫本(正教藏) ⑰ 寫本(正教藏) ⑱ 寫本(正教藏) ⑲ 寫本(正教藏) ⑳ 寫本(正教藏) ㉑ 寫本(正教藏) ㉒ 寫本(正教藏) ㉓ 寫本(正教藏) ㉔ 寫本(正教藏) ㉕ 寫本(正教藏) ㉖ 寫本(正教藏) ㉗ 寫本(正教藏) ㉘ 寫本(正教藏) ㉙ 寫本(正教藏) ㉚ 寫本(正教藏) ㉛ 寫本(正教藏) ㉜ 寫本(正教藏) ㉝ 寫本(正教藏) ㉞ 寫本(正教藏) ㉟ 寫本(正教藏) ㊱ 寫本(正教藏) ㊲ 寫本(正教藏) ㊳ 寫本(正教藏) ㊴ 寫本(正教藏) ㊵ 寫本(正教藏) ㊶ 寫本(正教藏) ㊷ 寫本(正教藏) ㊸ 寫本(正教藏) ㊹ 寫本(正教藏) ㊺ 寫本(正教藏) ㊻ 寫本(正教藏) ㊼ 寫本(正教藏) ㊽ 寫本(正教藏) ㊾ 寫本(正教藏) ㊿ 寫本(正教藏)

十往生阿彌陀佛國經

① 存 ② 遺書 ③ 寫本(正教藏) ④ 寫本(正教藏) ⑤ 寫本(正教藏) ⑥ 寫本(正教藏) ⑦ 寫本(正教藏) ⑧ 寫本(正教藏) ⑨ 寫本(正教藏) ⑩ 寫本(正教藏) ⑪ 寫本(正教藏) ⑫ 寫本(正教藏) ⑬ 寫本(正教藏) ⑭ 寫本(正教藏) ⑮ 寫本(正教藏) ⑯ 寫本(正教藏) ⑰ 寫本(正教藏) ⑱ 寫本(正教藏) ⑲ 寫本(正教藏) ⑳ 寫本(正教藏) ㉑ 寫本(正教藏) ㉒ 寫本(正教藏) ㉓ 寫本(正教藏) ㉔ 寫本(正教藏) ㉕ 寫本(正教藏) ㉖ 寫本(正教藏) ㉗ 寫本(正教藏) ㉘ 寫本(正教藏) ㉙ 寫本(正教藏) ㉚ 寫本(正教藏) ㉛ 寫本(正教藏) ㉜ 寫本(正教藏) ㉝ 寫本(正教藏) ㉞ 寫本(正教藏) ㉟ 寫本(正教藏) ㊱ 寫本(正教藏) ㊲ 寫本(正教藏) ㊳ 寫本(正教藏) ㊴ 寫本(正教藏) ㊵ 寫本(正教藏) ㊶ 寫本(正教藏) ㊷ 寫本(正教藏) ㊸ 寫本(正教藏) ㊹ 寫本(正教藏) ㊺ 寫本(正教藏) ㊻ 寫本(正教藏) ㊼ 寫本(正教藏) ㊽ 寫本(正教藏) ㊾ 寫本(正教藏) ㊿ 寫本(正教藏)

既にいへる如く、本經は觀身の法とは何ぞやとの阿彌問佛の答辯に、夫れ觀身の法とは外の事ではない。東西をも觀ぜず、南北をも觀ぜず、四維上下をも觀ぜず、虚空をも觀ぜず、外縁をも觀ぜず、内縁をも觀ぜず、身をも觀ぜず、唯無縁のみを觀ず。是れを正眞觀身の法と爲すのであるとして、大いに佛觀身法を主張してゐる。即ち是の觀身法を除けば十方諸法在々處處に更に別法として解説を得られないことをいつてゐる。更には觀身正念にして常に歡喜を懷き、飲食衣服を以て佛及び僧に施して阿彌陀佛國に往生すること。二には正念に甘妙良藥を以て、一病比丘及び一切に施して阿彌陀佛國に往生すること。三には正念に一生命を將せず、一切に應患して阿彌陀佛國に往生すること。四には正念に師所に従ひ、受戒淨慧もて修行を修し、常に歡喜を懷きて阿彌陀佛國に往生すること。五には正念に父母に孝順し、師長を敬奉し、憍慢心不起して阿彌陀佛國に往生すること。六には正念に僧坊に往して塔寺を恭敬して法を聞き、一義を解して阿彌陀佛國に往生すること。七には正念に一日一夜の中に八齋戒

を受持し、一をも破らずして阿彌陀佛國に往生すること。八には正念に若し能く齋月晝日中に房舍を遠離して常に善所に詣りて阿彌陀佛國に往生すること。九には正念に常に能く淨戒を持し、禪定を勵修して法を護り惡口せず、若し能く是の如く行じて阿彌陀佛國に往生すること。十には正念に若くは無上道に於て諍訟心を起さず、精進に淨戒を持し、復た無智者に教へ、是の經法を流布して無量の衆生を教化し、是の如く諸人等悉く皆阿彌陀佛國に往生することを得るといつて、正念の意義は自ら觀身して善力を自然に生ぜしめることを、主張してゐる所より、善導以前の諸師の淨土教を彷彿せしめるものがある。後の善導法然の主張する正念の意義と大なる隔りがあるを推測することが出来る。

次に本經は、他方佛國の一切の諸菩薩が來集して、一心に聽法せしを説き、會座中の一菩薩山海慧が、佛に請ふて極樂の阿彌陀佛の生身を觀見せんことを説き、極樂の莊嚴相を見届け、一切衆生の極樂往生を送ぐことを要請し、本經の受持を記してゐる。又珍らしいことには二十五菩薩の讚持と其の菩薩名が出てゐる。本經は從つて、觀阿彌陀佛色身正念解脫三昧經、度諸有流生死八難有緣衆生觀身正念解脫三昧經、淨土宗全書第七、不必、淨土十論論異註の下を見よ。① 刊本(實、六、右、一、五) (正大、一、五三三、二二四) (龍大、二六八、一一一)

一帯 ① 存 ② 遺書 ③ 寫本(正教藏) ④ 寫本(正教藏) ⑤ 寫本(正教藏) ⑥ 寫本(正教藏) ⑦ 寫本(正教藏) ⑧ 寫本(正教藏) ⑨ 寫本(正教藏) ⑩ 寫本(正教藏) ⑪ 寫本(正教藏) ⑫ 寫本(正教藏) ⑬ 寫本(正教藏) ⑭ 寫本(正教藏) ⑮ 寫本(正教藏) ⑯ 寫本(正教藏) ⑰ 寫本(正教藏) ⑱ 寫本(正教藏) ⑲ 寫本(正教藏) ⑳ 寫本(正教藏) ㉑ 寫本(正教藏) ㉒ 寫本(正教藏) ㉓ 寫本(正教藏) ㉔ 寫本(正教藏) ㉕ 寫本(正教藏) ㉖ 寫本(正教藏) ㉗ 寫本(正教藏) ㉘ 寫本(正教藏) ㉙ 寫本(正教藏) ㉚ 寫本(正教藏) ㉛ 寫本(正教藏) ㉜ 寫本(正教藏) ㉝ 寫本(正教藏) ㉞ 寫本(正教藏) ㉟ 寫本(正教藏) ㊱ 寫本(正教藏) ㊲ 寫本(正教藏) ㊳ 寫本(正教藏) ㊴ 寫本(正教藏) ㊵ 寫本(正教藏) ㊶ 寫本(正教藏) ㊷ 寫本(正教藏) ㊸ 寫本(正教藏) ㊹ 寫本(正教藏) ㊺ 寫本(正教藏) ㊻ 寫本(正教藏) ㊼ 寫本(正教藏) ㊽ 寫本(正教藏) ㊾ 寫本(正教藏) ㊿ 寫本(正教藏)

十戒車下心集

① 存 ② 遺書 ③ 寫本(正教藏) ④ 寫本(正教藏) ⑤ 寫本(正教藏) ⑥ 寫本(正教藏) ⑦ 寫本(正教藏) ⑧ 寫本(正教藏) ⑨ 寫本(正教藏) ⑩ 寫本(正教藏) ⑪ 寫本(正教藏) ⑫ 寫本(正教藏) ⑬ 寫本(正教藏) ⑭ 寫本(正教藏) ⑮ 寫本(正教藏) ⑯ 寫本(正教藏) ⑰ 寫本(正教藏) ⑱ 寫本(正教藏) ⑲ 寫本(正教藏) ⑳ 寫本(正教藏) ㉑ 寫本(正教藏) ㉒ 寫本(正教藏) ㉓ 寫本(正教藏) ㉔ 寫本(正教藏) ㉕ 寫本(正教藏) ㉖ 寫本(正教藏) ㉗ 寫本(正教藏) ㉘ 寫本(正教藏) ㉙ 寫本(正教藏) ㉚ 寫本(正教藏) ㉛ 寫本(正教藏) ㉜ 寫本(正教藏) ㉝ 寫本(正教藏) ㉞ 寫本(正教藏) ㉟ 寫本(正教藏) ㊱ 寫本(正教藏) ㊲ 寫本(正教藏) ㊳ 寫本(正教藏) ㊴ 寫本(正教藏) ㊵ 寫本(正教藏) ㊶ 寫本(正教藏) ㊷ 寫本(正教藏) ㊸ 寫本(正教藏) ㊹ 寫本(正教藏) ㊺ 寫本(正教藏) ㊻ 寫本(正教藏) ㊼ 寫本(正教藏) ㊽ 寫本(正教藏) ㊾ 寫本(正教藏) ㊿ 寫本(正教藏)

① 存 ② 遺書 ③ 寫本(正教藏) ④ 寫本(正教藏) ⑤ 寫本(正教藏) ⑥ 寫本(正教藏) ⑦ 寫本(正教藏) ⑧ 寫本(正教藏) ⑨ 寫本(正教藏) ⑩ 寫本(正教藏) ⑪ 寫本(正教藏) ⑫ 寫本(正教藏) ⑬ 寫本(正教藏) ⑭ 寫本(正教藏) ⑮ 寫本(正教藏) ⑯ 寫本(正教藏) ⑰ 寫本(正教藏) ⑱ 寫本(正教藏) ⑲ 寫本(正教藏) ⑳ 寫本(正教藏) ㉑ 寫本(正教藏) ㉒ 寫本(正教藏) ㉓ 寫本(正教藏) ㉔ 寫本(正教藏) ㉕ 寫本(正教藏) ㉖ 寫本(正教藏) ㉗ 寫本(正教藏) ㉘ 寫本(正教藏) ㉙ 寫本(正教藏) ㉚ 寫本(正教藏) ㉛ 寫本(正教藏) ㉜ 寫本(正教藏) ㉝ 寫本(正教藏) ㉞ 寫本(正教藏) ㉟ 寫本(正教藏) ㊱ 寫本(正教藏) ㊲ 寫本(正教藏) ㊳ 寫本(正教藏) ㊴ 寫本(正教藏) ㊵ 寫本(正教藏) ㊶ 寫本(正教藏) ㊷ 寫本(正教藏) ㊸ 寫本(正教藏) ㊹ 寫本(正教藏) ㊺ 寫本(正教藏) ㊻ 寫本(正教藏) ㊼ 寫本(正教藏) ㊽ 寫本(正教藏) ㊾ 寫本(正教藏) ㊿ 寫本(正教藏)

① 存 ② 遺書 ③ 寫本(正教藏) ④ 寫本(正教藏) ⑤ 寫本(正教藏) ⑥ 寫本(正教藏) ⑦ 寫本(正教藏) ⑧ 寫本(正教藏) ⑨ 寫本(正教藏) ⑩ 寫本(正教藏) ⑪ 寫本(正教藏) ⑫ 寫本(正教藏) ⑬ 寫本(正教藏) ⑭ 寫本(正教藏) ⑮ 寫本(正教藏) ⑯ 寫本(正教藏) ⑰ 寫本(正教藏) ⑱ 寫本(正教藏) ⑲ 寫本(正教藏) ⑳ 寫本(正教藏) ㉑ 寫本(正教藏) ㉒ 寫本(正教藏) ㉓ 寫本(正教藏) ㉔ 寫本(正教藏) ㉕ 寫本(正教藏) ㉖ 寫本(正教藏) ㉗ 寫本(正教藏) ㉘ 寫本(正教藏) ㉙ 寫本(正教藏) ㉚ 寫本(正教藏) ㉛ 寫本(正教藏) ㉜ 寫本(正教藏) ㉝ 寫本(正教藏) ㉞ 寫本(正教藏) ㉟ 寫本(正教藏) ㊱ 寫本(正教藏) ㊲ 寫本(正教藏) ㊳ 寫本(正教藏) ㊴ 寫本(正教藏) ㊵ 寫本(正教藏) ㊶ 寫本(正教藏) ㊷ 寫本(正教藏) ㊸ 寫本(正教藏) ㊹ 寫本(正教藏) ㊺ 寫本(正教藏) ㊻ 寫本(正教藏) ㊼ 寫本(正教藏) ㊽ 寫本(正教藏) ㊾ 寫本(正教藏) ㊿ 寫本(正教藏)

① 存 ② 遺書 ③ 寫本(正教藏) ④ 寫本(正教藏) ⑤ 寫本(正教藏) ⑥ 寫本(正教藏) ⑦ 寫本(正教藏) ⑧ 寫本(正教藏) ⑨ 寫本(正教藏) ⑩ 寫本(正教藏) ⑪ 寫本(正教藏) ⑫ 寫本(正教藏) ⑬ 寫本(正教藏) ⑭ 寫本(正教藏) ⑮ 寫本(正教藏) ⑯ 寫本(正教藏) ⑰ 寫本(正教藏) ⑱ 寫本(正教藏) ⑲ 寫本(正教藏) ⑳ 寫本(正教藏) ㉑ 寫本(正教藏) ㉒ 寫本(正教藏) ㉓ 寫本(正教藏) ㉔ 寫本(正教藏) ㉕ 寫本(正教藏) ㉖ 寫本(正教藏) ㉗ 寫本(正教藏) ㉘ 寫本(正教藏) ㉙ 寫本(正教藏) ㉚ 寫本(正教藏) ㉛ 寫本(正教藏) ㉜ 寫本(正教藏) ㉝ 寫本(正教藏) ㉞ 寫本(正教藏) ㉟ 寫本(正教藏) ㊱ 寫本(正教藏) ㊲ 寫本(正教藏) ㊳ 寫本(正教藏) ㊴ 寫本(正教藏) ㊵ 寫本(正教藏) ㊶ 寫本(正教藏) ㊷ 寫本(正教藏) ㊸ 寫本(正教藏) ㊹ 寫本(正教藏) ㊺ 寫本(正教藏) ㊻ 寫本(正教藏) ㊼ 寫本(正教藏) ㊽ 寫本(正教藏) ㊾ 寫本(正教藏) ㊿ 寫本(正教藏)

【シ】

一卷 ①存 ②寫本(龍大、一七五・四二)
十句觀音經靈驗記 ①(日) Jik-ku-rei-ken-ki. 十句觀音經靈驗記、延命十句經靈驗記 ②二卷 ③存 ④足利惠倫撰 ⑤明治二八刊 ⑥(京大、一・二五・五)
十句觀音經假名抄 ①(日) Jik-ku-kwan-on-gyo-ka-na-sha. ②一卷 ③存 ④果詳述 ⑤(參考) 禪語目錄
十句觀音經集註 ①(日) Jik-ku-kwan-on-gyo-shu-shu. ②一卷 ③存 ④果詳述 ⑤(參考) 禪語目錄
十句觀音經靈驗記 ①(日) Jik-ku-kwan-on-gyo-rei-ken-ki. 延命十句觀音經靈驗記 ②存 ③八重祿之内 ④白隱慧鶴撰 ⑤(真享二) 明治五 A. D. 1685-1768) 述 ⑥寶曆九(A. D. 1759)
 延命十句觀音經靈驗記は、白隱慧鶴師が、寶曆九年(A. D. 1759)十月二十五日江戸湯島(下谷區池之端七軒町)の滑龍山東國寺の寓居中に記したもので、「九州阿某侯の殿下近侍の左右に贈りし法語とある假名法語」である。某侯の數代家系するは、積善果徳の結果であるから陰徳行を精修し、節儉を守り、萬民を憐愍し、賦税を軽くし、國家を安撫し、博學文才を打捨て、一文不知の尼入道之心となり、朝夕に神佛を信仰する事が、千萬世衰滅なき武運長久子孫繁榮の道であると示し、金尾藤秋葉の寶鏡二幅を書送り、更に延命十句觀音經十枚を添へて進呈せしめ、此の經の靈驗の數々を記したもので、この經の縁起は、寛文三年(A. D. 1663)頃、靈元天皇の命により、
 觀山の靈空律師が書して進獻したものと記し、此の法語を認めた寶曆九年各までの例語を引用して其の靈驗を力説して居るが、白隱和尚の本意は、十如上述一枚舉する所の限もなき十句經の靈驗、正眼に見れば唯是世間住相有爲夢幻空華の談論取るに足らず、故に一段、真正最妙最玄最第一なる底の大靈驗あり。」と喝破して、默照枯坐の禪、二乘小乘の禪、無事禪等に非ざる佛祖的傳授の一大事義たる正信正修の坐禪を提唱し、此の正修の坐禪を實修する時、始めて、真正の一大靈驗を得ると言ふのである。また邪法の徒も此の延命十句觀音經に依て救ひ得ると力説し、此の經を掲げて結んである。經とは「觀世音。南無佛。與佛有因。與佛有緣。佛法僧緣。常樂我淨。朝念觀世音。暮念觀世音。念念從心起。念念不離心と言ふのである。(大久保堅瑞)
十卷釋義書等 ①(日) Jik-kwan-jō-shaku-shū-shū. ②一冊 ③存 ④明和五寫 ⑤(高、大、寄、一・三四)
十卷書 ①(日) Jik-kwan-jō. 十卷書 ②存 ③(首、二、一・中、二八)
十卷書開書 ①(日) Jik-kwan-jō-ki. ②一卷 ③存 ④寫本(正大、一四三・一・五六)
十卷書愚草 ①(日) Jik-kwan-jō-gu. ②十卷草愚草 ③二十七冊 ④存 ⑤(高、大、寄、二・一五五)
十卷書玄談 ①(日) Jik-kwan-jō-gendān. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、研
 佛)
十卷書撰義 ①(日) Jik-kwan-jō-sanshū. 十卷書撰義抄、十卷書撰義抄 ②十卷 ③存 ④(覺眼(寛永三〇) 寫本一〇 A. D. 1643-1725) 述 ⑤(參考) 請宗章疏錄第三
十卷書撰義抄 ①(日) Jik-kwan-jō-sanshū-shō. 十卷書撰義抄、十卷書撰義抄 ②十卷 ③存 ④(覺眼(寛永三〇) 寫本一〇 A. D. 1643-1725) 述 ⑤(首、け、一・中、一六)
十卷疏讀曲 ①(日) Jik-kwan-jō-yonji-kuse. 十卷疏讀曲、十卷疏讀曲 ②一冊 ③存 ④寫本(首、あ、八、左、一九)
十卷疏讀曲 ①(日) Jik-kwan-jō-yonji-kuse. 十卷疏讀曲、十卷疏讀曲 ②一冊 ③存 ④寫本(龍大、研佛)
十卷抄 ①(日) Jik-kwan-jō-shō. 十卷抄、十卷抄 ②存 ③(保延元 A. D. 1155) 撰 ④(惠什(一) 保延元 A. D. 1155) 撰 ⑤(請法法に關する書、東密の相傳により、諸尊の梵號・密號・種子・三形・印明等を説き及ばずと茶室を同示してある。然して本書の特色は主として尊像・曼荼羅の圖繪にある。東密には古來國像集の主要なるものとして珍重し、別體記・覺神抄・白寶口抄等の如き名著にも本書を引用してある。その内容目次を大正藏經本によつて列記すれば次の如くである。卷第一に金剛界五佛(圓像五葉)・胎藏界五佛(圓像五葉)。卷第二に一字金輪・大佛頂・佛眼・尊勝佛頂(以上各曼荼羅一葉)・藥師・善名釋吉祥王如來・定光・釋迦(以上各圓像一葉)・阿闍・阿闍陀
 (曼荼羅一葉) 光明眞言。卷第三に仁王經法(曼荼羅一葉) 壽命經法(曼荼羅一葉) 孔雀經法(曼荼羅一葉) 法華經法(曼荼羅一葉) 孔雀經法(曼荼羅一葉) 壽兩經法(曼荼羅二葉) 寶積經法(曼荼羅一葉) 菩提場陀羅尼經法(曼荼羅一葉)。卷第四に五大虛空像(圓像一葉) 金剛薩埵五結密法(曼荼羅一葉) 普賢延命(圓像二葉) 八字文殊(曼荼羅二葉) 曼殊王(圓像一葉) 卷第五に彌勒(圓像二葉) 普賢・五字文殊・一臂文殊・六字文殊・持世・延命・虛空藏・般若・藥王(以上各圓像一葉) 地藏(圓像二葉) 龍樹(圓像一葉) 馬鳴(曼荼羅一葉)。卷第六に觀音・千手(以上各圓像一葉) 馬頭・十一面(以上圓像各二葉) 七俱胝佛母(圓像一葉) 如意輪(圓像五葉) 曼荼羅(圓像一葉) 空索(圓像二葉)。卷第七に業衣・白衣・多羅・千臂・大勢至・香王・青頸・阿摩羅(以上各圓像一葉)。卷第八に不動(圓像五葉) 降三世・軍荼利・大威徳・金剛夜叉・無明勝・大輪・步迦(以上各圓像一葉) 烏瑟波(圓像四葉) 金剛童子・大元(各圓像二葉)。卷第九に歡喜天(圓像二葉) 金色迦那鉢底法・歡喜喜身法(各圓像一葉) 多聞天・吉祥天・大自在天・伎藝天・那羅延天・鳩摩羅天(吉祥天以下各圓像一葉) 四天王(圓像四葉) 十二天(圓像十二葉)。卷第十二に辨財天(圓像一葉) 摩利支(圓像二葉) 十五童子(曼荼羅一葉) 阿利底母水鏡(各圓像二葉) 水天供・妙具(圓像三葉) 北斗(曼荼羅一葉) 娑羅天・裏度利童子・寶藏天女・深沙神・僧伽梨(以上各圓像一葉) 金翅鳥王(圓像二葉) 大黑天神法(圓像

名所行録◎(名庫書)高麗所現◎ 月年の刊載◎ (書考)書目録◎ 書目◎ 説解存内◎ 代年作書◎ 著書◎ 録存◎ 數巻◎ (名書)名題◎ 號字數

【シ】

一葉) 以上九十五章法一百四十一圖。
 普通十卷抄と名くる書には本書以外に永隆撰の圓像抄、覺成の淨抄、期澄の請法私記(以上眞言宗)、靜然の十卷抄(天台宗)等がある。然るに此の中の永隆撰書は惠什撰との間に古來妙な傳説がある。且つて惠什が仁和寺に在つた時永隆が惠什に命じて十卷の圓像抄を作らした。然るに後日法流上の争より不和を生じ、惠什が醍醐に去つたが、永隆が前記の書を自著として公表せるによつて、怒つて更に尊尊抄十巻を著した。隨つて兩者に少々出沒があると云ふのである。現存のものに相違せる、兩種の十卷抄が現存してゐることは明であり、古目錄にも兩者を出してゐるから、或は事實かも知れぬ。但し現存寫本には何れも署名が缺ぐが故に判定に苦しむのである。しかし大正藏經本並に佛書刊行會本(常樂院本)は私は信濃阿闍梨淨定房惠什の作で、平等房永隆の作ではあるまいと思ふ。別錄雜記等に引用せる淨定房の説と大正藏經本とはほぼ一致する様と思ふ。たゞ遺憾ながら多忙の身にて原稿轉抄までに全部の對校を爲し得なかつたため斷言することが出来ぬ。
 大業美術第一巻第二號にも二楞學人の論文が出てゐるが、大體に於ては惠什と定めながら一部分の疑點を存して居られる。更に後考を俟たねば判定し得られない。大正藏經は高野山圓通寺藏經二年仁和寺印字法印所寫本を収載したのである。
十卷抄 ①(日) Jik-kwan-shō. ②十卷抄 ③(小田盛舟) 大正大藏經圖像第三卷
 ①自在金剛集第八に云く「靜然抄出息心中請法七卷稱法曼七卷抄、合自抄、爲十卷」云々。
十卷抄 ①(日) Jik-kwan-shō. 淨抄 ②十卷 ③存 ④(京大、寄、一・五七)
十卷抄 ①(日) Jik-kwan-shō. 請法私記 ②十帖 ③存 ④(京大、寄、一・五七) 責任の所傳を撰集せよ。
十卷抄 ①(日) Jik-kwan-shō. 十卷書 ②十卷 ③存
十卷抄 ①(日) Jik-kwan-shō. 淨抄 ②十卷 ③存 ④(京大、寄、一・五七) 弘法大師即身成佛義、摩訶寶相義、昨字義各一巻、辨顯密二教論二巻、秘藏寶鏡三巻、般若心經略義一巻、龍猛菩薩造發菩提心論一巻の七種十巻のことにして、眞言宗の教義を示せる重要典籍である。
十卷抄 ①(日) Jik-kwan-shō. 淨抄 ②十卷 ③存 ④(京大、寄、一・五七) 四三・一・五五(高、大、寄、一・五七)
十卷抄 ①(日) Jik-kwan-shō. 合刻抄 ②十卷 ③存 ④(大、研佛) 立大、A. D. 1341-1355(正、大、一四三・一・五二) 帝國、一三三・一〇八(高、大、一・五七) 東京森江書店
十卷書愚草 ①(日) Jik-kwan-jō-gu. ②十卷書愚草 ③二十五冊 ④存 ⑤(高、大、寄、二・一五五) 述 ⑥(真享二) 明治二 A. D. 1226-1304) 述
十卷書撰義抄 ①(日) Jik-kwan-jō-sanshū-shō. 十卷書撰義抄、十卷書撰義抄 ②十卷 ③存 ④(覺眼(寛永三〇) 寫本一〇 A. D. 1643-1725) 述 ⑤(元、一〇) 刊
 ①(龍大、二六六・一・二) 研佛)
十卷抄 ①(日) Jik-kwan-jō-shō. ②二十四卷 ③存 ④(高、大、寄、二・一五五) 述 ⑤(元、一〇) 刊本(龍大、二六六・一・二) 研佛)
十卷抄 ①(日) Jik-kwan-jō-shō. ②百三十三卷 ③存 ④(貞和元) 應永二(三、A. D. 1345-1416) 刊本(龍大、研佛)
十卷抄 ①(日) Jik-kwan-jō-shō. ②十卷抄 ③存 ④(延喜一八) 水鏡元 A. D. 918-983) 撰 ⑤(和、二) (A. D. 962) (參考) 山家祖徳撰述篇目集卷下
十願發心記 ①(日) Jō-gwan-hō-shū-ki. ②一卷 ③存 ④(天曆七) 寛弘四 A. D. 983-1007) 撰 ⑤(參考) 山家祖徳撰述篇目集卷下
十件要類 ①(日) Jik-kwan-jō-yūei. ②十件要類 ③存、禪學寶典之内 ④(元、正應三) 貞治六 A. D. 1290-1267) 撰 ⑤(明、四) 刊
十支談 ①(日) Jū-gen-dan. ②一卷 ③存 ④(宗、胡) (參考) 禪語目錄
十支談 ①(日) Jū-gen-dan. ②一卷 ③存 ④(高、大、寄、一・六) 佛敎通俗講義之内 ⑤(高、大、寄、一・六) 佛敎通俗講義之内 ⑥(明、三) 刊
 (帝國、六二・二六二)
十支談假名註 ①(日) Jū-gen-dan-ka-na-shū. ②一卷 ③存 ④(指月) 聖印(一、明和元 A. D. 1764) 述、梅友編 ⑤(明治、年) 刊
十支談註 ①(日) Jū-gen-dan-cha. ②一卷 ③存 ④(朝鮮) 雪峯述 ⑤(參考) 禪語目錄
十支談註釋 ①(日) Jū-gen-dan-cha-shaku. ②三卷 ③存 ④(實、大、寄、一・六) 千丈屋和尚語錄上蛇足編の下を見よ。
十五首和讃 ①(日) Jū-go-shū-wa-san. ②一卷 ③存、眞宗遺文要之内 ④(親覺聖人の作として傳へられてゐるけれども、その眞偽は決し難い。先啓の「淨土眞宗聖教目録」並びに「淨土眞宗聖教目録」には、この十五首和讃を親覺聖人のとして記す。
 (參考) 淨土眞宗聖教目録、淨土眞宗聖教目録第一 ⑤(刊本) 龍大、一〇三・一・〇(各、大、宗、大、四八四七) (藤枝昌造)
十五受具戒記 ①(日) Jū-go-shū-kaiki. ②一卷 ③存 ④(寫本) 京大、日大未・二二九)
十五童子繪圖 ①(日) Jū-go-shū-e-zu. ②一帖 ③存 ④(德川) 時代寫
十五童子法 ①(日) Jū-go-shū-hō. ②一帖 ③存 ④(建久二寫) (金剛三昧院) 寫本(高、大、寄、一・六

名所行録◎(名庫書)高麗所現◎ 月年の刊載◎ (書考)書目録◎ 書目◎ 説解存内◎ 代年作書◎ 著書◎ 録存◎ 數巻◎ (名書)名題◎ 號字數

木又戒本、十誦比丘尼戒、比丘尼大戒、比丘尼波羅提木又戒本 ①一卷 ②存、大正二・四七九、一四三、縮製七、正一九・八、北九〇外、南九一八外、元九一四外、明北一五三外、清一五三外、天九〇六外、指867、法894、至1213、明南1392外、Nj. 1161 ③劉宋法顯(一陸安三一義熙二二 A. D. 399—416)集出

十誦律毘尼序 ①(日) Fa-hsi-t'ien-Bh-ni-p'o. (支) Shih-sung-hi-p'i-ni-shih. ②三卷 ③存、正一九・七 ④早摩羅又譯 ⑤五百結集、七百結集等の事を叙し、次ぎに律品、因縁品に分ち、總て三卷四品に分ち、略ぼ十誦律の補遺の如きものであらう。高僧傳には、毘尼律を傳して、其の中に「羅什所譯十誦本五十八卷、最後一誦謂明受戒法、及諸成善法事、述其義要、名爲『善誦』」とある。但し、一、五十八卷、最後の十誦となることを指すので、これは五十九卷で終つて居る。早摩羅又(Vinaya-pitaka)は之れを不完全とし、之れに續いて二卷を譯し、足して六十一卷としたので、之れを善誦と言つて居るのである。即ち第六十卷五百結集と善誦毘尼序卷上とし第六十一卷七百結集と親品とを善誦毘尼序卷中とし、最後の因縁品を毘尼序卷下として居る。毘尼序とあるので、卷初の序の如く思はれるが、實は最後の補遺である。早摩羅又は羅賓人、羅什の十誦を學んだ師であつて、羅什より後れて支那に來た人である。(境野實洋)

十宗故實 ①(日) Jōshō-ko-jishū. ②一卷 ③存 ④寫本(各六、餘六・二九三〇)

十宗旨 ①(日) Jōshū-shi. ②一卷 ③存 ④(參考) 釋經目錄

十宗要記 ①(日) Jōshū-yō-ki. ②一卷 ③存 ④(參考) 釋經目錄

十宗略記 ①(日) Jōshū-rakki. ②一卷 ③存、大日本佛教全集第三、國文東方佛教叢書第一 ④真道(一萬治二 A. D. 1692)撰 ⑤(參考) 水應元(A. D. 1632)

本書は真道(山門東塔學頭正覺院に轉住して名を宗實と改む)が檀越某氏の願望により十宗(三論、法相、華嚴、俱舍、成實、律、天台、眞言、禪、淨土)の宗義大綱及び三國傳本の略史を集録して與へたもの。真道は本書に追加を加へ、天台宗の修行には五派(合、密、禪、戒、念佛)ある事。法華の修行には有相安樂行と無相安樂行の二種の行がある事。有相行の中には但讀誦と義讀誦とがある事。慧心流の念佛と華嚴流の念佛とは異なる事。日蓮宗は諸法無人の事の五條を附記し、跋語には未だ修文が整つてゐないから後賢の補綴を俟つといつてゐる。この檀越は「新たに台門に歸す」といふから日蓮宗信者であつたものが真道の教化で改宗したものであらう。真道師は元は日蓮宗徒であり天台學を習はんと欲して觀山に登り遂に天台宗に歸入した人である。故にこの檀越は從來から真道師の教化を受けてゐた人であり、師が轉宗したから

檀越も師に従つて改宗したのであらう。この故に本書でも天台宗の説明が最も詳細であり他の宗は簡略に述べてある。本書の説は「集録」したと述べてある通り極めて確確で新説はない。天台宗の概要を知るために他の九宗の歴史及び教義を述べたものと見ればよと思ふ。

①水應元版(龍大、二五四・六) (正六、一〇七・六八) (京大、日大未・七九六) 寫本(哲、又・四・右一四) (田島徳書)

十宗略説 ①(日) Jōshū-rakki-shō. (支) Shih-sung-hi-p'o-shō. ②一卷 ③存、揚仁山居士遺書第四冊之内 ④清揚文會

十宗略談 ①(日) Jōshū-rakki-dan. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一五四・七)

十住經 ①(日) Jū-kyō. (支) Shū-kyō. (梵) Dasabhumika-sūtra. ②四卷或六卷 ③存、大正一〇・四九七 No. 396、縮天一〇、正八・三、北100、南100、元55、明北101、原8、或、明南99、卷、Nj. 105 ④鳩摩羅什(建元二—義熙九 A. D. 344—413) 一説弘始一一或義熙中(中)佛陀耶合共譯 ⑤弘始一〇(A. D. 408)

華嚴經十地品(六十華嚴第二十二品、八十華嚴第二十六品)に相當するものにして、菩薩十地の修行を詳説したもの。十地品の別行經と云はるゝも、本經は獨立の經典にして、是れが中心となり増廣發達して更に大なる華嚴經を生じたものならんか。本經の翻譯は諸經録の示す如く羅什、佛陀耶合と共に出す處なるも、華嚴傳等の傳

ふる如くその功は寧ろ耶合に驗すべきもの如し。即ち羅什は龍樹法孫なるに拘らず、華嚴教義に通せざる處ありしか、弘始十年本經の譯出に取掛るや、耶合傳(高僧傳第一)に「羅什出十住經、一月餘日展轉猶豫、尙未操筆、耶合既至、其相徵決、辭理方定、遣俗三千餘人皆歎其當要」と云へる如く、疑難諸論漸く耶合の來朝して是れを助くるに依つて完成したのである。

本經はその説く所に依れば佛一時(異譯經には成道第二七日)諸大菩薩と俱に他化自在天宮摩尼寶殿に在せる時、金剛藏菩薩佛の加持力の下に他方世界より來集せる三十七菩薩の中、解脱月菩薩を對告衆として説かれたものである。其結構を見るに、一經の序説として菩薩の徳を歎じ其名を列舉し、入定加持を明し、解脱月の三請に依りて十地を廣説する所以を述べ、次に正宗としては十地各別其の行相、地果を細説し更に略に寄せて十地の徳を叙し、終りに十億佛國微塵數諸菩薩の讚歎證誠を明してある。最後に流通分として諸天諸菩薩の歡喜奉行を説いて一經を終る。十地の行相、地果に就ては最も組織ある説明をなし然も細微に亘つて居る。初歡喜地は菩提心を發し、決定的に大智大悲を成就し得ることを確め、心に大歡喜を得る境地として、此中に十大願十心を起し、主として布施波羅蜜を修行すると説き、二離垢地は發心より進んで修行に移り先づ十善道を行ひ三業の淨化せらるゝ境地にして、十種直心を起し、十善道を修して自利利他を満足する。戒波

羅蜜を主とすると説き、三明地は吾々の執着を離れた世界の眞實相を觀察して眞の同情を起し、苦海に沈淪する生類を救はんと求法に努むる境地にして、十種の深心を起し四禪、四空定を修して忍辱波羅蜜を主とすると説き、四禪地は一切諸法の實徳を明きらめ直智の輝き熾然たる境地にして、十法明門を修し三十七道品を行じ知恩教化に努力し精進波羅蜜を主とすると説き、五難勝地は一切諸法の本質を究め事象の平等觀に徹底する境地にして、十平等心を起し四勝觀に依つて世界の如實相を究め、衆生教化の爲めに世間一切の學處を修め波羅蜜を中心とすると説き、六現前地は一切の束縛を脱した眞の自由地にして、十平等法によりて此の境地に入り、十二因縁を順逆十種に觀察して三解脱門を現はす、般若波羅蜜が修行の中心であると説き、七遠行地は方便慧を成就した自然の法露として一切の行爲が慈悲行と現はれ完成せらるゝ境地、十種の妙行を擧げて一切の佛行を該攝し、方便波羅蜜を主とすると説き、八不動地は一切の行爲が自然に行はれ、通常の認識の域を脱して無心の如く一切の動亂より免れ、一行一即一切行、一切行即一行にして、萬有即佛身の眞理は徹底する無生法忍を得、願波羅蜜を主とすると説き、九妙善地は萬有一切が互に溶融無礙なる事實を知る完全なる智慧の活動する境地にして、一行即一切行の事實は佛の轉法輪に見らるゝとして四無礙智を擧げ、力波羅蜜が配してある。十法雲地は學道究竟して離れ難き一切

の迷妄を脱却し、萬徳萬靈の津々として宇宙に漲るを覺ゆる境地にして、佛法の第一顯顯者として授けらるゝ資格と法界の風光等を明にし智波羅蜜が配してある。

本經の異譯即ち華嚴經十地品の異譯と云はるゝもの諸經録に多數載せらるゝを見ても、印度に於て本經の流通年久しく龍樹、世親、堅婆、金剛軍等の註釋書ありて其の傳弘の盛なりしより延て支那流傳譯も從て各種異本が著されたが如く其の盛況を思はしむるものがある。然し經條の杜撰、中には薄弱なる根據に依りて眞偽を問はず蓋載せるもの相當あれば、それ等を吟味し本經の異譯として妥當と認めらるゝものは左の如きものならん。一、漸備一切智徳經五卷、西晉竺法護譯。二、十住經十二卷、西晉竺法護譯(缺)。三、六十華嚴中第二十二地品五卷、東晉佛跋致跋致譯。四、十地經論中の經、後魏菩提流支、勒那摩提共譯。五、八十華嚴第二十六地品六卷、唐實又難陀譯。六、佛說十地經九卷、唐尸羅達摩譯。各異譯を比較するに其の内容略ど増減なく、同一梵本より譯出せられたるが如くである。各本別人の手になり、然も年月を隔つこと前後五百年に亘れば全く異なるにあらざるも、其差異僅少にして、添加増廣の特に云ふべきものがない。是れ他經と比して著しく異なる處である。

(原田實道)

十住經 ①(日) Jū-kyō. (支) Shū-kyō. (梵) Dasabhumika-sūtra. ②十二卷 ③缺 ④西晉竺法護(一太康元—永嘉六 A. D. 280—312)譯

⑤第二譯 ⑥(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

十住經疏 ①(日) Jū-kyō-shū. (支) Shū-kyō-shū. ②二卷 ③(參考) 東城傳燈目錄卷上

十住遮難抄 ①(日) Jū-kyō-shū-an. ②一卷 ③存、大正七・七・六八五 No. 344

觀山の五大院安然がその著教時間答に於て、弘法大師の十住心建立の義趣について失を擧げて批難してゐるに對して、その難を述して、却つて安然の説を破釋した書である。教時間答は卷二に五失を擧げ、卷一に別に數失を出してゐるので、本書には最初に五失を破し、次に卷一所説の失を救つてゐる。撰者は未詳。

十住心義林 ①(日) Jū-kyō-shū-ji. ②十住心論義林 ③二卷 ④存、大正七・七・八三七 No. 343 ⑤有快(貞和元—應永二 A. D. 1345—1416)撰

眞言宗の重要教義の一たる十住心について、その建立の所依、名義、行相、義趣等を釋説した書で、弘法大師の十住心論十卷、秘藏寶論三卷の要旨を約説したものである。殊に建立の義趣については、相説、旨陳、相説旨陳合論、機根契當、心續生、唯密、顯密合論、唯顯の八種の十住心建立の法相あることを示し、唯密の中に於て更に約漸次眞言行者十住心、約直往行者淺略十住心、約深略十住心の三を開きて都合十種の建立相を説き、更にこれを要約して、

顯密合論に約する十住心、能寄齊の眞言行者に約する十住心、秘密曼荼羅の功徳に約する十住心の三種を明してゐる。此の三種の建立は同じく有快の撰にかゝる秘藏寶論抄に説く所の、顯密合論の十住心、眞言行者淨心次第轉昇に約する十住心、五種三昧道に約する十住心、普門大日の萬徳を開示せる十住心の四義と並べ稱せられ、古來此の兩者を合稱して二門四義と説き、秘密の徒の指針としてゐる。

〔注釋〕 略解二卷(快辨、寬延三、十一月撰)。科註三卷(窪田(改姓重松)寬勝撰、明治二二) ⑥延寶七刊、明治一九刊 ⑦(正六、一四三・一四四、一五八) (高六、寄一・四〇) (立六、A. 二〇・二八) 明治二七刊 (帝國、一六・二四四) (各六、餘六・六八七) (京專) 明治三五刊(帝國、二二・二四五)

十住心義林總書 ①(日) Jū-kyō-shū-ji-sōsho. ②一卷 ③存 ④瀬川大憲述 ⑤(京專)

十住心義林教誡律義兩支譯 ①(日) Jū-kyō-shū-ji-kyō-ri-kyō-kai-ritsuang-ji. ②一卷 ③存 ④安念靈海述 ⑤明治三〇刊 ⑥龍大、二六六一・三五(帝國、一〇八・八三)

【シ】

十住心義林分科 ①(日)Ja-jā-shin-
-ri-rin-bun-kwa. ②1巻 ③存 ④寫本
(京大)(高木・寄・一四〇)

十住心義林略解 ①(日)Ja-jā-shin-
-gi-rin-ryaku-ge. ②2冊 ③存 ④天明
二寫 ⑤(高木・寄・一四〇)

十住心廣名目 ①(日)Ja-jā-shin-
-ko-myō-moku. 十住心論廣名目 ②6巻
③存 ④印刷(永享七—永正一六 A. D.
1435—1519) ⑤十住心論廣名目(下)を
見よ。⑥(正大・一四三一・一六四)(立六・A
二〇・七四)

十住心廣名目 ①(日)Ja-jā-shin-
-ko-myō-moku. 冠註十住心廣名目 ②6巻
③存 ④印刷(永享七—永正一六 A. D.
1435—1519) ⑤秀翁(寛永三—元禄二
A. D. 1626—1699) ⑥永正七刊(高木
寄・一四〇)(哲・ま・八・中・一七・a・e・三・中・
二)寛文六刊(正大・一四三一・一四六—一四七・
一六三)(京大)(高木・餘大・五五)

十住心講話 ①(日)Ja-jā-shin-
-wa. ②1巻 ③存 ④小林正盛著 ⑤明治
四四刊 ⑥(高木・寄・一四〇)(正大・一四
三・一三四)

十住心所依經疏文事 ①(日)Ja-
-jā-shin-sho-e-kyō-sho-mon-no-kozo.
①1巻 ②存 ③(京大)

十住心續生抄 ①(日)Ja-jā-shin-
-soku-shō-shō. ②13巻 ③存 ④賢實
(正慶二—應永五 A. D. 1333—1398) ⑤
〔参考〕眞言宗全書刊行決定目録

十住心第九私鈔 ①(日)Ja-jā-shin-
-dai-ku-shi-shō. ②(参考) 章疏錄
①(日)Ja-jā-shin-shin-dai-ku-zuk-kam-mon. ②(参考)
章疏錄
①(日)Ja-jā-shin-dai-go-kam-mon. ②2巻 ③(頼瑠(嘉
祿二—嘉元二)A. D. 1226—1304) ④(參
考) 章疏錄

十住心第四勸文 ①(日)Ja-jā-shin-
-dai-shi-kam-mon. ②1巻 ③(参考)
章疏錄

十住心第八開書 ①(日)Ja-jā-shin-
-dai-hachi-ki-ki-gaki. ②2巻 ③(参考)
章疏錄

十住心得名略文事 ①(日)Ja-jā-
-shin-toku-myō-ryaku-mon-no-kozo. ②
1冊 ③存 ④文明一〇寫 ⑤(寶壽院)
⑥(徳大・研傳)(高木・一四〇)

十住心之一枝 ①(日)Ja-jā-shin-no-
-itae-shi. ②5巻 ③存 ④哲學雜誌 ⑤
(京大)

十住心能攝之事 ①(日)Ja-jā-shin-
-no-shō-no-koto. ②1紙 ③存 ④仔細
(享徳三—永正一三 A. D. 1451—1516) ⑤
天文一八寫 ⑥(寶壽院)

十住心記 ①(日)Ja-jā-mon-ki. ②
7巻 ③存 ④(寶壽院) ⑤(眞言宗
全書刊行決定目録)

十住心略記 ①(日)Ja-jā-shin-ryak-
-ki. ②1帖 ③存 ④文明六寫 ⑤(寶
壽院)

十住心論 ①(日)Ja-jā-shin-ron. ②
密曼茶羅十住心論 ③10巻 ④存 ⑤大正七
七・三〇三No. 2425. 弘法大師全集第二
⑥空海(寶龜五—承和二 A. D. 774—835)
⑦(密曼茶羅十住心論)の下を見よ。
⑧(建長七刊(高木・寄・一四〇)寛文七刊(立
大・A. D. 二〇・二五)(高木・二六六・一・三六—三
七)(京大)(哲・け・一・左・一九)

十住心論 ①(日)Ja-jā-shin-ron. ②
密曼茶羅十住心論冠註・十住心論冠註・冠
註十住心論 ③10巻 ④存 ⑤(亮海如實
(元禄一一—寶曆五 A. D. 1698—1755) ⑥
寶曆三刊 ⑦(高木・二六六・一・三八・研
傳)(谷大・餘大・一四八〇)(京大)(高木・寄
一・四〇)(立六・A. D. 二〇・二六)(哲・ま・八・
左・二〇)(正大・一四三一・四二)

十住心論 ①(日)Ja-jā-shin-ron. ②
撰冠註十住心論 ③10巻 ④存 ⑤(刊本
(高木・二六六・一・三九)(高木・寄・一四〇)

十住心論 ①(日)Ja-jā-shin-ron. ②
撰十住心論 ③10巻 ④存 ⑤(國譯密教論譯
撰十住心論) ⑥10巻 ⑦存 ⑧(眞言宗
第一) ⑨(保本實論譯) ⑩(高木・研傳)

十住心論一卷論義 ①(日)Ja-jā-
-shin-ron-ik-kwan-ron-gi. ②1冊 ③存
④(南北朝—足利初寫) ⑤(寶壽院)

十住心論問題 ①(日)Ja-jā-shin-
-ron-ka-ri-dai. ②1巻 ③存 ④智海述
(参考) 眞言宗全書刊行決定目録

十住心論各目大意 ①(日)Ja-jā-
-shin-ron-kaku-moku-tai-i. ②1帖 ③存
④(徳川時代寫) ⑤(寶壽院)

十住心論各目拔書 ①(日)Ja-jā-
-shin-ron-kaku-moku-naki-gaki. ②1帖
③存 ④(徳川時代寫) ⑤(寶壽院)

十住心論覺心鈔 ①(日)Ja-jā-shin-
-ron-kaku-shin-shō. ②3巻 ③(道鏡元
暦元—建長四 A. D. 1184—1251) ④(建長四
年七五版) ⑤(参考) 章疏錄

十住心論肝要鈔 ①(日)Ja-jā-shin-
-ron-kann-yō-shō. 十住心論鈔・十住心論
略鈔 ③3巻 ④存 ⑤(大正七七・六四八No.
2442) ⑥(重刊) ⑦(保延五(A. D. 1139)
(京大))

十住心論勸文 ①(日)Ja-jā-shin-
-ron-kam-mon. ②5巻 ③(道鏡(元暦元
—建長四 A. D. 1184—1251) ④(建長四・年
七五版) ⑤(参考) 章疏錄

十住心論勸文 ①(日)Ja-jā-shin-
-ron-kam-mon. ③三十八巻 ④存 ⑤(頼
瑠(嘉祿二—嘉元二)A. D. 1226—1304) ⑥
〔参考〕 眞言宗全書刊行決定目録 ⑦(正平
一〇寫) ⑧(寶壽院)

十住心論義批 ①(日)Ja-jā-shin-
-ron-gi-hi. ③三十六巻或三十七巻 ④存
⑤(義然(仁治元—元亨元 A. D. 1240—1321)
述) ⑥(正和二(A. D. 1313)
弘法大師撰十住心論の第四・五・六・九の
四巻の註書である。論四に九巻、論五に七
巻、論六に十三巻、論九に七巻の義批があ
る。正和二年東大寺戒壇院に於て、實圓禪
明房のために述したる旨、奥書に記してあ
る。義然は曾て弘長の末年から文永の頃
にかけて、木精題心上人眞空について眞言
を學び、特に十住心論を研究したと稱せら
れる。義然は華嚴の學匠で又八宗の宗義歴
史等にも造詣深き人であるから、その釋す

名所行目◎(名庫書)高麗所現◎ 月年の刊寫◎(書考)書影註◎書末◎ 説解存内◎ 代年作書◎ 書寫◎ 紙存◎ 數巻◎(名書)名題◎ 號巻字數

【シ】

る所發せらるゝ點が少くない。惜いこと
には十住心論全巻の註書を存してゐない。
最初から現存の三十六巻だけであつたか、
或は他の巻についても執筆せられたものか
明了でない。諸宗章疏錄二に論卷六新支鈔
二巻を別出してゐるが、義批とは別本なる
か否か明でない。又論九の鈔は現存せぬも
の、如くP. 20。

⑥(参考) 章疏錄 ⑦(應永一二)文安元等
寫十五巻(高木・寄・一四〇)寶曆一〇寫(谷
大・長保・一八五)論四・五・六義批二十九巻
寫(寶壽)(正大)

十住心論義林 ①(日)Ja-jā-shin-
-ron-gi-rin. 十住心義林 ②2巻 ③存
④大正七七・八三七No. 2454 ⑤(岩快(貞和元
—應永二)A. D. 1345—1416) ⑥(參
考) 章疏錄 ⑦(明治一九刊) ⑧(京大・日
大末・三八一)

十住心論義林題談 ①(日)Ja-jā-
-shin-ron-gi-rin-ken-dan. 十住心論之講義
②1冊 ③存 ④寫本(高木・一四〇)

十住心論義林鈔 ①(日)Ja-jā-shin-
-ron-gi-rin-shō. ②1巻 ③(快辨(寛
政四 A. D. 1748—1750) ④(參考)
章疏錄

十住心論開書 ①(日)Ja-jā-shin-
-ron-ki-ki-gaki. ②3冊 ③存 ④(正平一
六寫) ⑤(寶壽院)

十住心論愚草 ①(日)Ja-jā-shin-
-ron-gu-sō. ③三十八巻 ④存 ⑤(頼瑠(嘉
祿二—嘉元二)A. D. 1226—1304) ⑥
⑩十住心論の要文に關する論議決擇の草紙

を撰録した書である。正喜・正元・文永の頃
にその一部を草し、弘安・正應・永仁の頃こ
れを修訂増補したもので、著者三十歳頃よ
り約三十年にわたつた苦心の作である。何
れも佛學會談義など因んで作つたもの
で、論則七百五十三條ある。頼瑠の著に十
住心論衆毛鈔十八巻二十五冊があるが、本
書とは全く別であり、兩者相持つて十住心
論の要旨と疑義を詳細に論述してゐる。

⑥(参考) 諸宗章疏錄第三、章疏錄、續綱
集中 ⑦(寫本(寶壽院)(京大)(小田藤舟)
ron-kwa-shō. ⑧十二巻或二十二巻 ⑨存
⑩秀翁(寛延三—元禄二 A. D. 1696—
1699) ⑪(参考) 章疏錄 ⑫(元禄四刊
⑬(高木・研傳)(高木・一四〇)

十住心論卷一之十問題 ①(日)
Ja-jā-shin-ron-kwan-ichi-no-ju-mon-
-dai. ②1冊 ③存 ④(寶壽院)

十住心論卷六七七示 ①(日)Ja-jā-
-shin-ron-kwan-kwan-roku-shichi-shi-ji. ②11
冊 ③存 ④寫本(寶壽院)

十住心論冠註 ①(日)Ja-jā-shin-
-ron-kwan-chū. 密曼茶羅十住心論冠註・
冠註十住心論 ②10巻 ③存 ④(如實(元
禄一一—寶曆五 A. D. 1698—1755) ⑤
寛延二(A. D. 1749)

⑥(密曼茶羅十住心論冠註・冠註十住心論
とよぶ。玄談に於て、立教大綱、解釋樣
式、造論緣起、所依差別、所被權根、十住
種類を述べ、次に題目を釋し、本文を解し
たもので、先賢の諸書を參考し、最も要領

よく註釋を施したものである。

⑦(参考) 章疏錄 ⑧(明曆三刊(高木・二六
六一・四〇)寫本(正大・一四九八二))

十住心論顯密問答鈔 ①(日)Ja-
-jā-shin-ron-kenn-mitsun-mon-dō-shō. ②
2巻 ③存 ④(頼瑠(嘉祿二—嘉元二)A. D.
1226—1304) ⑤(慶安二寫) ⑥(京大・日
大末・四二九)

十住心論廣名目 ①(日)Ja-jā-shin-
-ron-ko-myō-moku. 十住心廣名目 ②6
巻 ③存 ④印刷(永享七—永正一六 A. D.
1435—1519) ⑤(永正中(A. D. 1510)
⑥十住心論のこゝに主要題目二百五十四條
を抽出し、一々に先徳の釋を引用して解説
し、更に私見を述べてゐる。解説簡明で初
心者に便宜である。永正七年著者七十六歳
の時、高野山に於て仙願房のために作る旨
奥書に記してある。寛文三年以後高野山總
持院秀翁これを重校し、冠註を加つて同六
年開版。

⑦(註釋) 冠註(秀翁) ⑧(参考) 章疏錄
⑨(寛文六刊) ⑩(高木・二六六・一・四二)(京
大)

十住心論講要 ①(日)Ja-jā-shin-
-ron-kyō-yō. ②2冊 ③存 ④寫本(高木・
寄・一四〇)

十住心論私記 ①(日)Ja-jā-shin-
-ron-shi-ki. 十住心論鈔 ②12巻 ③存
④(政説(仁治五—永享一)後 A. D. 1366—
1439) ⑤(水享六(A. D. 1434)
⑥(隨文釋義甚だ詳密を極め、如實の十住心
論冠註、秀翁の科註十住心論と共に、並び

稱せられる名著。

⑦(参考) 章疏錄 ⑧(明暦元刊) ⑨(高木・
研傳)(立六・A. D. 二〇・二七)

十住心論指示 ①(日)Ja-jā-shin-
-ron-shi-shi. ②1冊 ③存 ④(建永元寫
(寶壽院)

十住心論指事 ①(日)Ja-jā-shin-
-ron-shi-ji. ②1巻 ③存 ④(海門主(参考)
章疏錄

十住心論指事卷第九 ①(日)Ja-
-jā-shin-ron-shi-ji-kwan-dai-ku. ②1冊
③存 ④(承文四寫) ⑤(寶壽院)

十住心論首書 ①(日)Ja-jā-shin-
-ron-shū-shō. ②6巻 ③(参考) 章疏錄

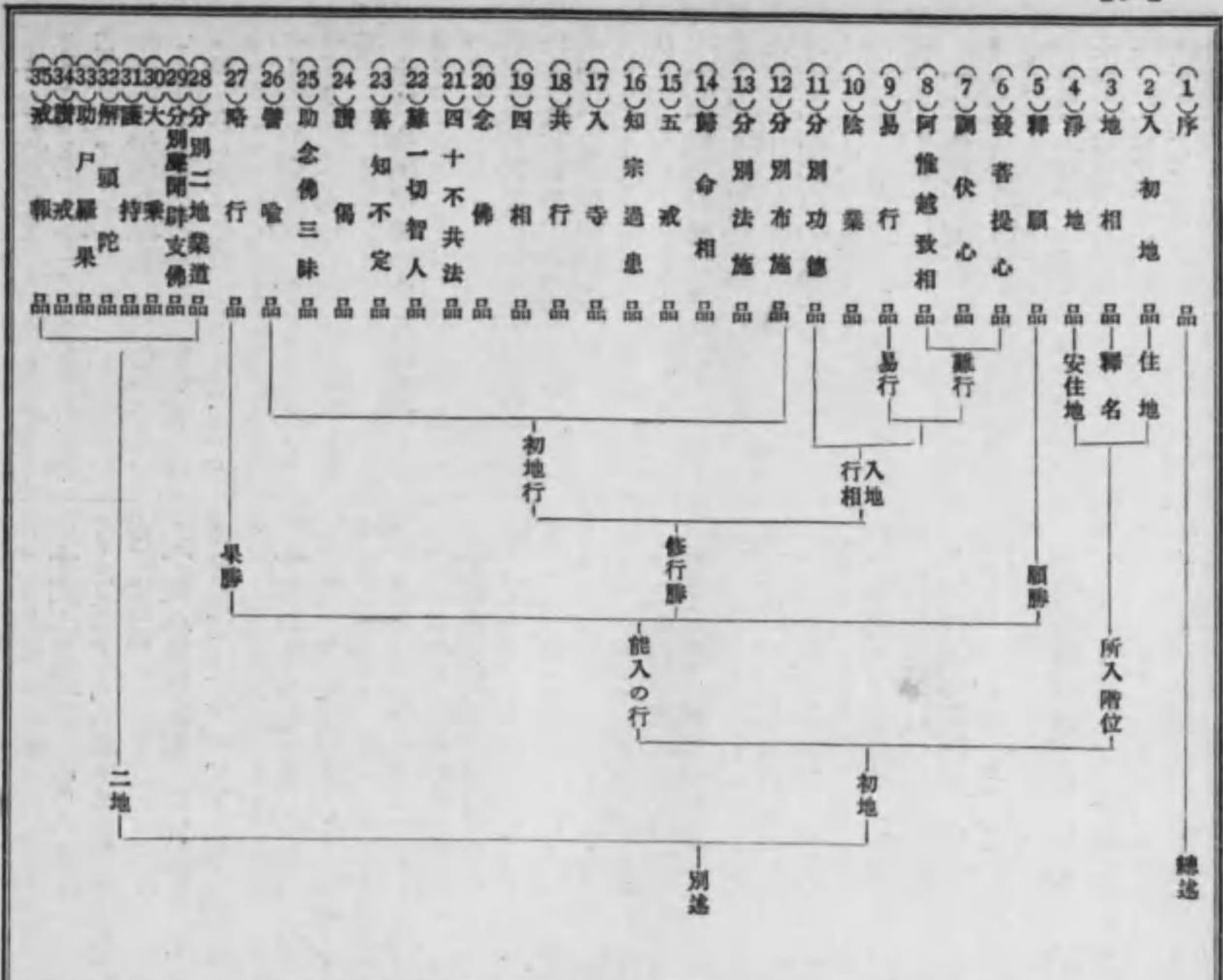
十住心論聚短紙 ①(日)Ja-jā-shin-
-ron-ju-tan-shi. ②1巻 ③存 ④寫本
(高木・寄・一四〇)

十住心論衆毛鈔 ①(日)Ja-jā-shin-
-ron-shū-mō-shō. ②十五巻今分十八巻
二十五冊 ③存 ④(頼瑠(嘉祿二—嘉元二
A. D. 1226—1304) ⑤(弘安五—永仁三
A. D. 1282—1295)

⑥十住心論の要文として問答體で論述し
た書である。佛學會談義に因み弘安五年か
ら永仁三年に亘り、十四年間に根來山又は
隈山にて作つたものである。所收の條目
は六百九十八條あり、同人の著たる十住心
論愚草と相まちて十住心論の文義について
詳密なる解説を與へてゐる。

⑦(参考) 諸宗章疏錄第三 ⑧(鎌倉末期寫
(寶壽院)(高治三刊(智山堂藏)(小田藤舟)
A. D. 1282—1295)

名所行目◎(名庫書)高麗所現◎ 月年の刊寫◎(書考)書影註◎書末◎ 説解存内◎ 代年作書◎ 書寫◎ 紙存◎ 數巻◎(名書)名題◎ 號巻字數



十地の位のことを解釋した典籍と云ふ意である。此の題號の意によつて、此の論の内容は、ほゞ推察される。けれども、上に大體の組織を圖示して、内容と推知する一助に供へることとする。

是れに依つて見ると、第一の序品は總論であるが、第二の入初地品以下、略行品まで二十六品あるが、菩薩の初歡喜地を敘述するものである。その中の(2)(3)(4)の三品は、所入位即ち初歡喜地の内容を説明したものである。第五品以下は、能入の修行即ち歡喜地に入るについての修行の有様を説明したものである。第二十八品以下は十地の中の第二地の相を叙したものである。題號は、十地全般に渡つて論述してあるやうに附してあるけれども、此第二地の相を述べて本論は終つて居る。賢首の華嚴傳にも、三地以後の釋は是れを缺くと云ふてあるから、最初から、本書は、第二地の解釋で終つて居たものであらうと考へるのである。

【参考】 諸宗章疏卷第一、花嚴宗經論章疏目錄 ④寫文六刊(正大、一七六・一一四・一一三・三) ⑤谷大、宗大、三三九(龍大、二二二・一) ⑥寬文一三刊(正大、一三三・一) 刊本(哲、七・中・一六) (高、奇、一・二四) (上杉文秀)

十住毘婆沙論易行品 ①(B) Ja-bi-ba-sha-ron-t-gyō-bon. (支) Shih-chu-pi-p'o-sha-lun-t-hsing-p'in. 易行品 ①卷 ②存、十住毘婆沙論第五(大正二六No. 1531. 9) 眞宗聖典全書之内、七聖聖

敬巻上 ①龍樹造、姚秦鳩摩羅什(建元二一義熙九A. D. 344-413) 說弘始一、或義熙中(譯) ②易行品の下を見よ。 ③【参考】 淨土眞宗教典第一 ④延享五寫(谷大)

十住毘婆沙論易行品 ①(B) Ja-bi-ba-sha-ron-t-gyō-bon. 冠註十住毘婆沙論易行品、冠註易行品 ②二卷 ③存 ④軍門作 ⑤延享三(A. D. 1746) ⑥【参考】 淨土眞宗教典第二 ⑦明和元年刊(谷大、宗大、二〇八、四六〇七、四八二一)(龍大、研眞)

十住毘婆沙論易行品 ①(B) Ja-bi-ba-sha-ron-t-gyō-bon. 國譯十住毘婆沙論易行品 ②存、國譯一切經々論部第五卷 ③島地大等(明治八、昭和二A. D. 1875-1927) 譯

十住毘婆沙論易行品開演日記 ①(B) Ja-bi-ba-sha-ron-t-gyō-bon-kai-en-ki. 易行品開演日記 ②二卷 ③存、眞宗大系第五 ④龍大(安永元一安政五 A. D. 1772-1835) 述 ⑤易行品開演日記の下を見よ。 ⑥自筆本(谷大、宗中、一四)

十住毘婆沙論易行品弘化誌 ①(B) Ja-bi-ba-sha-ron-t-gyō-bon-ka-shi. ①卷 ②存 ③寫本(正大、一三四・五)

十住毘婆沙論易行品科 ①(B) Ja-bi-ba-sha-ron-t-gyō-bon-ka. 分科十住毘婆沙論易行品、易行品分科 ①一巻 ②存 ③圓環(一正徳眞 A. D. 1711

1715-1) 分科、取原校訂 ②【参考】 淨土眞宗教典第二 ③廣曆三刊 ④(谷大、宗大、三三六、五〇〇七) (正大、一一九七・七九)(高、奇、一・二四)(龍大、研眞)

十住毘婆沙論易行品顯證並分科 ①(B) Ja-bi-ba-sha-ron-t-gyō-bon-ken-dan-narabhai-bun-ka-wa. 易行品顯證並分科 ①一卷 ②存 ③信濃(享保四一寶曆二A. D. 1719-1762) 作 ④【参考】 淨土眞宗教典第二

十住毘婆沙論易行品講義 ①(B) Ja-bi-ba-sha-ron-t-gyō-bon-kyō-gi. ①一卷 ②存 ③開鏡述 ④寫本(龍大)

十住毘婆沙論易行品乘船記 ①(B) Ja-bi-ba-sha-ron-t-gyō-bon-jo-sen-ki. ①月夜乘船(享保一四一文化八A. D. 1729-1811) 作 ②【参考】 淨土眞宗教典第二

十住毘婆沙論易行品箋釋 ①(B) Ja-bi-ba-sha-ron-t-gyō-bon-sen-shi. 易行品箋釋 ②三卷或五卷 ③存、眞宗大系第五 ④法海(明和五一天保五A. D. 1798-1834) 述 ⑤文化十(A. D. 1810) ⑥易行品箋釋の下を見よ。 ⑦寫本(谷大、宗大、九五)

十住毘婆沙論易行品讀易行品 ①(B) Ja-bi-ba-sha-ron-t-gyō-bon-doku-t-gyō-bon. ③三卷 ④海西道元作 ⑤【参考】 淨土眞宗教典第二

十住毘婆沙論易行品簡錄 ①(B) Ja-bi-ba-sha-ron-t-gyō-bon-hon-ki. 易行品簡錄 ①十巻 ②存 ③月夜乘船(享保一四一文化八 A. D. 1729-1811) 作 ④明和二(A. D. 1765) ⑤【参考】 淨土眞宗教典第二 ⑥寫本(龍大、一一三三・三三)

十住毘婆沙論易行品要津錄 ①(B) Ja-bi-ba-sha-ron-t-gyō-bon-yō-ju-kyō. 易行品要津錄 ②三巻 ③存 ④設問作 ⑤明和六(A. D. 1769) ⑥【参考】 淨土眞宗教典第二 ⑦明和七刊(龍大、一一三三・三六) (谷大、宗大、六八六)

十住毘婆沙論易行品錄 ①(B) Ja-bi-ba-sha-ron-t-gyō-bon-roku. ①一卷 ②存 ③調書集(文政二一明治三三A. D. 1819-1899) 深海記 ④明治二一寫(正大、一一三四・四)

十住毘婆沙論講記 ①(B) Ja-bi-ba-sha-ron-kyō-ki. ②六巻 ③存 ④龍大(安永元一安政五A. D. 1772-1835) 述 ⑤寫本三(A. D. 1850) ⑥寫本(谷大、宗大、二〇三九、六六・三三)

十住毘婆沙論讀動要文解 ①(B) Ja-bi-ba-sha-ron-san-kwan-gyō-man-gē. 校録十住毘婆沙論讀動要文解 ④四巻 ⑤存 ⑥龍大(一寶曆七 A. D.

1757-1) 述 ②安永九寫 ③(谷大、宗大、一三六)

十住論 ①(B) Ja-ron. (支) Shih-chu-lun. 十住論 ①十巻 ②存、十住論(建元二一義熙九 A. D. 344-413) 說弘始一一或義熙中(譯) ③【参考】 開元錄第一四、貞元錄第二四

十住論易行品義記 ①(B) Ja-ron-t-gyō-bon-gi-ki. 易行品義記 ①一卷 ②存 ③僧叔(寶曆三一文政八 A. D. 1753-1825) 說文政九、年六五(述) ④明治二九刊(龍大)

十住論易行品講義錄 ①(B) Ja-ron-t-gyō-bon-kyō-ki. 易行品講義錄 ①一卷 ②存 ③松島善海(安政二一正二A. D. 1853-1933) 述 ④明治四五刊 ⑤(龍大)

十重血脈鈔 ①(B) Jo-jū-kechi-myūka-shō. ①一卷 ②存 ③重

十重俗詮 ①(B) Jo-jū-zoku-shū. ①一卷 ②存 ③哲、七・八・左・一八)

十重波羅提木又俗詮 ①(B) Jo-jū-hara-tsu-ki. ①一卷 ②存 ③寫本(正大、一三四・五)

④一巻 ⑤存、大日本佛敎全書第一三華嚴小部集、日本大藏經華嚴宗章疏卷下、書錄目錄

十重唯識圖說 ①(B) Jo-jū-yūi-shū. ①一卷 ②存、大日本佛敎全書第一三華嚴小部集、日本大藏經華嚴宗章疏卷下、書錄目錄

十重唯識圖說 ①(B) Jo-jū-yūi-shū. ①一卷 ②存、大日本佛敎全書第一三華嚴小部集、日本大藏經華嚴宗章疏卷下、書錄目錄

十重唯識圖說 ①(B) Jo-jū-yūi-shū. ①一卷 ②存、大日本佛敎全書第一三華嚴小部集、日本大藏經華嚴宗章疏卷下、書錄目錄

十重唯識圖說 ①(B) Jo-jū-yūi-shū. ①一卷 ②存、大日本佛敎全書第一三華嚴小部集、日本大藏經華嚴宗章疏卷下、書錄目錄

① 撰然(明治一元字元 A. D. 1240—1321)
 ② 撰然(十重唯識論記)の下の見よ。
 ③ (参考) 諸宗章疏第11
十重和釋 ① (日) Jo-jo-wa-shaku. 十重波羅提木叉和釋 ② 1巻 ③ 存、國文東方佛教叢書第一輯第21 ④ 慈山妙立(寛永一四一元祿三 A. D. 1637—1690) ⑤ (晋) 〇・八・右(二七)
十章鈔 ① (日) Jo-sho-sho. ② 1巻 ③ 存、高麗遺文録第一、日蓮聖人御遺文(六七四—六七八)、録内三十一 ④ 日蓮(貞應元—弘安五 A. D. 1222—1282) ⑤ 文永八(A. D. 1271)或は文永七(A. D. 1270) 建治三(A. D. 1276)撰成
 ⑥ 弟子三位房日行の比叡山留學中、天台の摩訶止觀の講學に於て得意を書き遺したるもの、十章鈔の名は止觀成しと雖も十章には出でずの意より呼ばれたのである。止觀の觀法は一念三千である。その實義は法華本門の心であつて迷門にさへその意はなからざる。然るに今の學者、皆爾前之圖と法華の圖と、二圖同等の義をなすより、凡ての誤りは生ずると論じて、當時の天台、眞言、念佛者を破し、三位房の不得意を述べたのである。
 ⑦ 録内各章第三三、内書鈔第三三、録内拾遺第六、録内扶老二二、⑧ 日蓮聖人眞蹟(下巻、中山法華經寺藏書)、六紙始めの三紙を缺くものゝ如し。
 (夏月歌厚)

十勝十劣辨記 ① (日) Jo-sho-ju-ten-bei-ki. (日) D. 34 Dasutara S. ① 1巻 ② 存
十善戒法論 ① (日) Jo-zen-kai-ho-ron. ② 1巻 ③ 存、淨慧述、良隱註 ④ 明治二九刊 ⑤ (正大)一八四・一〇七
十善戒略解 ① (日) Jo-zen-kai-ryaku. ② 1巻 ③ 存、智海述 ④ (京本)
十善戒略解總論 ① (日) Jo-zen-kai-ryaku-gyaku-ron. ② 1巻 ③ 存、靈照(文政一〇—明治四) A. D. 1827—1909)撰 ④ 明治一九刊 ⑤ (帝國)二五・三(五)
十善講話 ① (日) Jo-zen-kai-wa. ② 1巻 ③ 存、中島觀海述 ④ 明治四〇刊 ⑤ (正大)一八四・一一〇 (帝國)三二五・一九)
十善業道經 ① (日) Jo-zen-gō-dō-kyō. (支) Shih-shan-yeh-tao-ching. ② 1巻 ③ 存、大正一五・一五七No. 600、館列一、凡一十・一、北3532作、南5555作、元5559作、明北1095初、清1095初、題5555令、天558正、指507令、法514令、至1205佛、明南1249令、No. 1100 ④ 實又雜記 ⑤ 福一、二—長安四(A. D. 695—704)
 ⑥ 『經』中に「十善業」と云ひ、又「十善道」と云ふ。『十善道經』の題名はこれによるのである。龍宮に於て沙彌羅龍王のために十善業の功徳に關する佛の説法である。一切は心に由りて善不善を造る。その心は虚妄、諸法の集れるものであつて主なく我我所なく、業に隨ひて現るものである。佛身の莊嚴なるも皆善業を修習せるに由るものとす。

十善業道經 ① (日) Jo-zen-gō-dō-kyō. (支) Shih-shan-yeh-tao-ching. ② 1巻 ③ 存、大正一五・一五七No. 600、館列一、凡一十・一、北3532作、南5555作、元5559作、明北1095初、清1095初、題5555令、天558正、指507令、法514令、至1205佛、明南1249令、No. 1100 ④ 實又雜記 ⑤ 福一、二—長安四(A. D. 695—704)
十善業道經講義 ① (日) Jo-zen-gō-dō-kyō-kyōgi. ② 1巻 ③ 存、佛敎通俗講義之内 ④ 靈照(文政一〇—明治四) A. D. 1827—1909)撰 ⑤ (龍大)二四一・一・(六)
十善業道經節要 ① (日) Jo-zen-gō-dō-kyō-jyōyō. (支) Shih-shan-yeh-tao-ching-chieh-yō. ② 1巻 ③ 存、記續

十善問答 ① (日) Jo-zen-mon-dō. ② 1巻 ③ 存、知空(寛永一—享保三 A. D. 1634—1718)撰 ④ 正徳五刊 ⑤ (龍大)一五〇二・一九六(各六、宗大・二六一八)
十善願 ① (日) Jo-zen-gan. ② 1巻 ③ 存、覺悟(参考) ④ 淨土依憑經論章疏目錄 ⑤ 十利世代記 ① (日) Jo-zen-setsu-seidai-ki. ② 1巻 ③ 存、(参考) ④ 譯釋目錄
十善 ① (日) Jo-zen. ② 1巻 ③ 存、寫本(正大)一八四・一〇一)
十善戒義 ① (日) Jo-zen-kai-gi. ② 1巻 ③ 敬光(元文五—寛政七 A. D. 1740—1795)撰 ④ (参考) 山家祖徳撰述高日集
十善戒勸誘辨釋 ① (日) Jo-zen-kai-kan-yū-hen-shaku. ② 存、的門上人全集第二巻之内
十善戒御法語 ① (日) Jo-zen-kai-go-ho-go. ② 1巻 ③ 存、慈雲尊者全集第一三輯之内 ④ 慈雲飲光(享保三—文化元 A. D. 1718—1804)撰 ⑤ 安永初年撰
十善戒作法 ① (日) Jo-zen-kai-sa-hō. ② 1巻 ③ 存、慈雲尊者全集第六輯 ④ 慈雲飲光(享保三—文化元 A. D. 1718—1804)撰 ⑤ 安永初年撰
十善戒自受法 ① (日) Jo-zen-kai-jizō-hō. ② 1巻 ③ 存、寫本(京都長福寺) (高見寛應)

十善戒法論 ① (日) Jo-zen-kai-ho-ron. ② 1巻 ③ 存、淨慧述、良隱註 ④ 明治二九刊 ⑤ (正大)一八四・一〇七
十善戒略解 ① (日) Jo-zen-kai-ryaku. ② 1巻 ③ 存、智海述 ④ (京本)
十善戒略解總論 ① (日) Jo-zen-kai-ryaku-gyaku-ron. ② 1巻 ③ 存、靈照(文政一〇—明治四) A. D. 1827—1909)撰 ④ 明治一九刊 ⑤ (帝國)二五・三(五)
十善講話 ① (日) Jo-zen-kai-wa. ② 1巻 ③ 存、中島觀海述 ④ 明治四〇刊 ⑤ (正大)一八四・一一〇 (帝國)三二五・一九)
十善業道經 ① (日) Jo-zen-gō-dō-kyō. (支) Shih-shan-yeh-tao-ching. ② 1巻 ③ 存、大正一五・一五七No. 600、館列一、凡一十・一、北3532作、南5555作、元5559作、明北1095初、清1095初、題5555令、天558正、指507令、法514令、至1205佛、明南1249令、No. 1100 ④ 實又雜記 ⑤ 福一、二—長安四(A. D. 695—704)
 ⑥ 『經』中に「十善業」と云ひ、又「十善道」と云ふ。『十善道經』の題名はこれによるのである。龍宮に於て沙彌羅龍王のために十善業の功徳に關する佛の説法である。一切は心に由りて善不善を造る。その心は虚妄、諸法の集れるものであつて主なく我我所なく、業に隨ひて現るものである。佛身の莊嚴なるも皆善業を修習せるに由るものとす。

十善業道經 ① (日) Jo-zen-gō-dō-kyō. (支) Shih-shan-yeh-tao-ching. ② 1巻 ③ 存、大正一五・一五七No. 600、館列一、凡一十・一、北3532作、南5555作、元5559作、明北1095初、清1095初、題5555令、天558正、指507令、法514令、至1205佛、明南1249令、No. 1100 ④ 實又雜記 ⑤ 福一、二—長安四(A. D. 695—704)
十善業道經講義 ① (日) Jo-zen-gō-dō-kyō-kyōgi. ② 1巻 ③ 存、佛敎通俗講義之内 ④ 靈照(文政一〇—明治四) A. D. 1827—1909)撰 ⑤ (龍大)二四一・一・(六)
十善業道經節要 ① (日) Jo-zen-gō-dō-kyō-jyōyō. (支) Shih-shan-yeh-tao-ching-chieh-yō. ② 1巻 ③ 存、記續

十善問答 ① (日) Jo-zen-mon-dō. ② 1巻 ③ 存、知空(寛永一—享保三 A. D. 1634—1718)撰 ④ 正徳五刊 ⑤ (龍大)一五〇二・一九六(各六、宗大・二六一八)
十善願 ① (日) Jo-zen-gan. ② 1巻 ③ 存、覺悟(参考) ④ 淨土依憑經論章疏目錄 ⑤ 十利世代記 ① (日) Jo-zen-setsu-seidai-ki. ② 1巻 ③ 存、(参考) ④ 譯釋目錄
十善 ① (日) Jo-zen. ② 1巻 ③ 存、寫本(正大)一八四・一〇一)
十善戒義 ① (日) Jo-zen-kai-gi. ② 1巻 ③ 敬光(元文五—寛政七 A. D. 1740—1795)撰 ④ (参考) 山家祖徳撰述高日集
十善戒勸誘辨釋 ① (日) Jo-zen-kai-kan-yū-hen-shaku. ② 存、的門上人全集第二巻之内
十善戒御法語 ① (日) Jo-zen-kai-go-ho-go. ② 1巻 ③ 存、慈雲尊者全集第一三輯之内 ④ 慈雲飲光(享保三—文化元 A. D. 1718—1804)撰 ⑤ 安永初年撰
十善戒作法 ① (日) Jo-zen-kai-sa-hō. ② 1巻 ③ 存、慈雲尊者全集第六輯 ④ 慈雲飲光(享保三—文化元 A. D. 1718—1804)撰 ⑤ 安永初年撰
十善戒自受法 ① (日) Jo-zen-kai-jizō-hō. ② 1巻 ③ 存、寫本(京都長福寺) (高見寛應)

十善沙彌戒論 ① (日) Jo-zen-sha-hi-kai-ron. ② 1巻 ③ 存、圓戒十要第六 ④ 高碩(寶曆一〇—寛政四 A. D. 1781—1792)撰 ⑤ 寛政一〇寫(各六、龍大・七九七)寫本(正大)一八四・一五・一・一)
十善集 ① (日) Jo-zen-shū. ② 十戒卑下心集、十善鈔 ③ 存、惠心信都全集第五(参考) ④ 本朝台祖撰述密書目
十善十惡經 ① (日) Jo-zen-ju-aku-kyō. (支) Shih-shan-shih-e-ching. ② 1巻 ③ 存、西晋支法度(水寧元 A. D. 301—)撰 ④ (参考) 出三藏記第三、開元錄第一五、貞元錄第二四
十善十惡經 ① (日) Jo-zen-ju-aku-kyō. (支) Shih-shan-shih-e-ching. ② 1巻 ③ 存、東晋竺佛無蘭(大元六一—開元二〇 A. D. 381—395)撰 ④ (参考) 出三藏記第三、開元錄第一五、貞元錄第二四
十善鈔 ① (日) Jo-zen-shō. ② 十戒卑下心集、十善集 ③ 存、惠心信都全集第五(参考) ④ 天慶五—寛仁元 A. D. 942—1017)
十善大意 ① (日) Jo-zen-tai-i. ② 1巻 ③ 存、澤柳政太郎(昭和二 A. D. 1927)撰 ④ 明治二八刊 ⑤ (各六、輪洋・一)(正大)一八四・一五・一・(京大)一・二六(三・八)
十善之系統 ① (日) Jo-zen-no-kei-ri. ② 1巻 ③ 存、慈雲尊者全集第六輯之内 ④ 慈雲飲光(享保三—文化元 A. D. 1718—1804)撰 ⑤ 安永三(A. D. 1774)

【シ】

shi-dai. ⑤存、修驗部第五編
十二天廣等 ①(日)Ja-ni-ten-to-
 5. ⑥凡三十五帖 ⑦存 ⑧足利時代寫
 ⑨(東書院)
十二天呪字 ①(日)Ja-ni-ten-shu
 5. ⑥一袋 ⑦存 ⑧徳川時代寫 ⑨(東
 書院)
十二天集 ①(日)Ja-ni-ten-shu.
 ①安然(承和八—延喜年間A. D. 841—901—)
 ②(參考) 請宗東院錄第二、山家祖傳撰述
 篇目集卷上、本朝古撰撰述部書目
十二天諸尊遺蹟觀拔書 ①(日)
 Ja-ni-ten-sho-son-do-ji-kan-nuki-ga-
 ki. ⑥一帖 ⑦存 ⑧徳川時代寫 ⑨(東
 書院)
十二天圖說 ①(日)Ja-ni-ten-zu-
 setsu. ⑥一冊 ⑦存 ⑧寫本(首、あ・1・
 左・7)
十二天屏風事 ①(日)Ja-ni-ten-
 byō-bu-no-koto. ⑥一紙 ⑦存 ⑧足利
 時代寫 ⑨(東書院)
十二天報恩儀 ①(日)Ja-ni-ten-ho-
 on-gi. ①定深(一天仁元A. D. 1108—)
 ②(參考) 本朝古撰撰述部書目、請宗東
 院錄第三
十二天略念誦次第 ①(日)Ja-ni-
 ten-ryaku-nen-jū-shi-dai. ⑥一冊 ⑦存
 ⑧刊本(高六・一・六七)
十二部經名 ①(日)Ja-ni-bu-kyō-
 myō. (支)Shih-erh-pa-ching-ming. 十二
 部經名 ①一冊 ②缺 ③失譯 ④(參
 考) 出三藏記第四、武周錄第二、開元

錄第五、第一五、貞元錄第八、第三五
十二部雜纂 ①(日)Ja-ni-bu-zassan.
 ⑥一冊 ⑦存 ⑧怡榮等編
 ①觀經顯記。二種深信記。二卷抄記。聖
 人一洗章記。卷頭讚記。領解文記(三部)。
 證讀雜記。大原問答演唱記。正信勸勵考。
 淨土和讃勸信錄。大經和讃勸考を収む。
 ②寫本(高六・一〇三・八)
十二部大業開發 ①(日)Ja-ni-bu-
 dai-jū-kai-hotsu. 十二部大業開發 ①一冊
 ②最澄(神護景雲元—弘仁三A. D. 767—
 822) ③(參考) 本朝古撰撰述部書目
**十二佛名神呪校量功德除障滅
 罪經** ①(日)Ja-ni-hutsu-myō-jin-
 sha-kyō-gyō-ku-doku-ji-shō-metsu-zai-
 kyō. (支)Shih-erh-fo-ming-shen-chou-
 ching-huang-kung-tē-h-u-chang-mieh-
 tsai-ching. (支)Pradasabuddhaka. (藏傳)
 (總)Hphags-pa sabs-rgyas beu-glis-pa
 shes-bya-ba theg-pa chen-pohi mdo. 十
 二佛名神呪經 十二佛名神呪除障滅罪
 經 ①一冊 ②大正二二・八六〇 No. 1348 ③編成
 七・二二・一・一 ④北302號、南114號、元315
 號、明北331號、清311號、麗303號、天319
 號、指357號、法395號、至356號、明南306
 號、多・Nj. 335 ⑤開那多譯 ⑥隋天嘉二—
 開皇二〇(A. D. 561—600)
 ⑦雜密經、除障滅罪法を説く。即ち佛が彌
 勒菩薩に對して、東方二佛及び四方四維上
 下方十二佛の名號とその功德並に一首
 の陀羅尼を説く。當經の十二佛名
 と「五千五百佛名神呪除障滅罪經」(大正一

四・三一八)の初めの部分は全然同一である
 が、西藏・細甘陸兩部第九百三十九番目
 (N. sh. or p. 100) 又は藏部第五百十一
 番目(P. Na.) 第四百七十八番目(P. hu)
 に出る「聖十二佛大業經」の十二佛名とも
 左の如く大體一致するを見る。
 1. 東方 虛空功德淨微塵等日輪正功德
 相光明華波頭摩琉璃光寶體香最上香供養
 乾種々莊嚴頂髻無邊日月光明願力莊嚴變
 化莊嚴法界出生無障礙王如來……
 de-ya-ni-gē-gs-pa……namkhaq-dbal-dr
 si-med-rdal-sel-rab-mpes-yon-tau-gy
 i-pod-me-dog-da-dan-baidu-yahi pod
 -yer-rin-po-chehi- gyug-ia-buhaku-
 dan-ldan-pa-spos-mchog-dan-pas-mo-
 hos-pa-sku-rnam-par-spras-sin-legs-
 par-brgyan-pa-gisug-tor-gy-gisug-ni-
 bi-mahi-pod-zer-dpas-med-sia-pod-
 smon-lam-gyis-brgyan-pa-rab-sprul-
 bkod-pa-chen-po-chos-kyi-dbyis-las-
 mnon-ihphas-chags-med-rin-chen-rgy
 ya-l-po.
 2 東方 毫相日月光明寶蓮華聖如金剛身
 毘盧遮那無障礙圓滿十方放光顯一切佛
 利相王如來
 sabs-rgyas boom-lan-hda schu-lha-gy
 son-nudi-mahi-egron-ma-sia-bahi-me-
 tog-rin-chen-padma-gser-sdug-namk-
 ha-las-buhi-sku-ldan-rnam-par-srab-
 mdsad-pod-yer-rab-brgyan-hogs-mes-
 d-ahkor-to-dk-yi-lahor-phyogs-bur-
 hod-yer-rab-ldyia-hjig-rien-khams-
 ya-l-po.

kun-tu-sal-byed-tog-gi-rgyal-mhian-
 -rgyal-po.
 3 東方 一切莊嚴無垢光如來
 byed-pa-thams-cad-dri-med-pod.
 4 南方 辯才聖塔思念如來
 spobs-pahi-rgyan-la-dgoms-pa.
 5 西方 無垢月相王名稱如來
 dri-med-zin-bah-tog-gi-rgyal-po-gra-
 gs-ldan.
 6 北方 華莊嚴作光明如來
 me-tog-gi-lhod-pa-snat-bar-mdsad-pa
 7 東南方 作燈明如來
 doq-mdsad.
 8 西南方 寶上相名稱如來
 rin-chen-mchog-gi-grags-ldan.
 9 西北方 無畏觀如來
 hjig-med-rnam-par-gyigs.
 10 東北方 無畏無怯毛孔不墜名稱如來
 hjig-bral-bag-tsha-ba-mi-mah-pu-
 zin-mi-byed.
 11 下方 獅子奮迅根如來
 seb-ge-dgyis-pahi-med-p.
 12 上方 金光明王相似如來
 se-rod-gy-bri-d-rgyal-po.
 尙異譯「佛說稱讚如來功德神呪經」の十二
 佛名はその方向を當經の順序の如くすれば
 大同小異なり。
 此等の十二佛名を至心に唱受すれば、生
 々世々の中に於て除障滅罪し、他人の愛敬
 を得、光明威力廣大に生れながらにして人
 尊となり後世に佛陀を成ずと云ひ尙注意す
 るべき

名所行目◎(名庫書)或所撰◎ 月年の刊寫◎(書考)或撰◎ 撰者◎ 代年作書◎ 書名◎ 缺存◎ 數卷◎ (名書)名◎ 號◎ 字◎

【シ】

若有諸女人 受持此經者 捨離女人形
 轉生男身 得男子身已 身成於菩提
 と云ひて女人は男身に變成して而して後
 成佛するの功德を明せることである。
十二分大業開發 ①(日)Ja-ni-bu-
 dai-jū-kai-hotsu. 十二部大業開發 ①一
 冊 ②最澄(神護景雲元—弘仁三A. D. 767—
 822) ③(參考) 山家祖傳撰述篇目
 集卷上
十二反音九弄十紐 ①(日)Ja-ni-
 hen-on-ku-to-jiu-cha. ⑥一冊 ⑦存 ⑧
 草書 ⑨(參考) 大日本佛教全書刊定
 書目
十二品生死經 ①(日)Ja-ni-hon-
 sho-ji-kyō. (支)Shih-erh-pi-shiheng-sai-
 ching. ⑥一冊 ⑦存、大正一七・五七五
 No. 753 ⑧縮寫六・二二・五・一、北350號、
 南863號、元357號、明北736號、清366號、
 麗847號、天350號、指809號、法837號、至
 1083號、明南733號、Nj. 740 ⑨求那跋陀
 羅譯 ⑩元嘉二—二〇(A. D. 435—443)
 ⑪佛、諸比丘の爲めに因果の人より三層に
 至るまの善惡生死の十二品あるを説く。そ
 の十二品とは、無餘死羅漢果、度於死阿那
 含果、有餘死阿含果、學度死須陀洹果、
 無餘死八等人、歡喜死一心、數々死惡戒
 人、悔死者凡夫、橫死者孤獨苦、縛者死畜
 生、燒爛死地獄、飢渴死餓鬼である。比丘
 はよく是を曉知せねばならなかつ、放
 逸、淫色、賭博を誠め四處に在りて一心に
 禪を學ぶべしと説く。(引好庵撰)

十二品生死經 ①(日)Ja-ni-hon-
 sho-ji-kyō. (支)Shih-erh-pi-shiheng-sai-
 ching. ⑥一冊 ⑦失譯 ⑧(參考) 出三
 藏記第四、法華錄第三、武周錄第一
十二萬神王護比丘尼經
 ①(日)Ja-ni-man-jian-ō-go-bi-ku-ni-
 kyō. (支)Shih-erh-wan-shen-wang-ku-
 pi-chi-ta-ni-ching. ⑥一冊 ⑦存、清頂經第二(大
 正二二・四九九No. 1331)
十二萬神王護比丘尼經
 ①(日)Ja-ni-man-jian-ō-go-bi-ku-ni-
 kyō. (支)Shih-erh-wan-shen-wang-ku-
 pi-chi-ta-ni-ching. ⑥一冊 ⑦失譯
 ⑧(參考) 三寶記第七、內典錄第三
十二門宗致義記玄談 ①(日)Ja-
 ni-mon-shō-chi-ki-ki-gen-dan. ⑥一冊
 ⑦存 ⑧宜然述 ⑨文化七寫 ⑩(高六・
 寄・1・1四)
十二門禪經 ①(日)Ja-ni-mon-zen-
 kyō. (支)Shih-erh-men-cha-n-ching. ⑥
 一冊 ⑦(參考) 法華錄第四、仁壽
 錄第三、佛華錄第三、第四、武周錄第二
十二門陀羅經疏 ①(日)Ja-ni-mon-
 da-ra-kyō-shū. (支)Shih-erh-men-to-ra-
 ching-shū. ⑥一冊 ⑦新羅現撰(一開羅
 元A. D. 681—) ⑧(參考) 東城傳燈目
 錄卷上、請宗東院錄第一
十二門大方等經 ①(日)Ja-ni-mon-
 dai-hō-dō-gyō. (支)Shih-erh-mah-ta-
 fang-tang-ching. ⑥一冊 ⑦缺 ⑧吳支
 謙(一黃武二—建興二A. D. 223—253—)譯
 ⑨(參考) 武周錄第二、開元錄第一、四

貞元錄第二四
十二品目 ①(日)Ja-ni-mon-hom-
 moku. (支)Shih-erh-men-pin-mu. ⑥一
 冊 ⑦(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄
 2728
十二略疏 ①(日)Ja-ni-mon-rya-
 ku-shō. (支)Shih-erh-meh-liao-shū. ⑥一
 冊 ⑦隋吉藏(大隋三—武德六A. D. 549—
 623)述 ⑧(參考) 東城傳燈目錄卷上
十二論 ①(日)Ja-ni-mon-ron.
 (支)Shih-erh-men-lun. 十二門論 十二
 品目 ①一冊 ②存、大正三〇・一五九No.
 1568 縮來一〇・二二・七、北354號、南
 598號、元911號、明北1179號、清1179號、
 麗364號、天355號、指550號、法573号、
 至1306號、明南1337號、多・Nj. 1186 ③
 龍樹造、姚秦鳩摩羅什譯 ④弘始一一(A.
 D. 409)
 ⑤(一)内容目次 觀因緣門第一、觀有果無
 果門第二、觀緣門第三、觀相門第四、觀有
 相無相門第五、觀一異門第六、觀有無門第
 七、觀性門第八、觀因果門第九、觀作者門
 第十、觀三時門第十一、觀生門第十二。
 (二)解説 十二門論は其の名の示す如
 く、又右の内容目次にも明なる如く、因緣
 等の十二の部門に於て世界人生を觀じて、
 結局一切空の深義に達せしめんとするもの
 にて、その意味に於ても、又その組織内容
 より見るも、同じく龍樹の著なる中論の綱
 要書或は入門書の性質を有するものなり。
 此の論は本論の部と釋の部とより成る。本
 論の部とは偈のみにて、しかもそは一部門

につき一偈なり。各門に於ける本論偈は國
 譯大藏經(國民文庫刊行會發行)三論の解題
 に於て宇井伯壽博士の擧出されし如し。し
 かもこの本論十二偈中にも中論の偈より取
 りしもの四偈あり、即ち、第三、第五、第
 八、第十の各門の偈なり。〔嘉祥大師はその
 十二門論疏(大正四二・頁一七七)に、猶
 第二門の偈は、中論別破四緣初偈に同じ
 く、又第十二門の偈は中論三相品三時門破
 に同じとせるが、これは意味は合するも文
 句は異なるを以てこれに入れず。〕又第七門の
 偈は空七十論より取れるものなるが、その
 他の七門の偈と雖も、中論中に相類するも
 のを見出し得。釋にも散文のみならず必要
 に應じて偈を引用せるが、これは第一門釋中
 の一偈が空七十論のものなるを除き、他の
 十三偈は全部中論中のものなり。これによ
 りても中論との關係如何に密接なるかは明
 なり。空七十論は漢譯には存せざるも西藏
 譯には現存し、勿論龍樹の作なるが、十二
 門論はこれをも豫想せるは既述によりて明
 なり。釋の部分も龍樹自身の眞作なるべき
 は、古く既に嘉祥大師吉藏の十二門論疏
 卷上(大正四二・頁一七八)に證明せる如
 し。猶本論の現存出版本には、初に釋僧敏
 撰の十二門論品目並に序を附するを通過と
 す。
 ⑥〔注釋〕疏六卷(隋、吉藏撰)、疏宗致義
 記二卷(唐、法藏撰)、疏開元本表題(日本、
 藏海撰)、疏抄(日本大藏經刊本表題)、十二
 門論抄出(一巻(日本、尊慧撰)) ⑦寛文四
 刊(谷大、偉大・三八五)(龍大、二三三・五、研

名所行目◎(名庫書)或所撰◎ 月年の刊寫◎(書考)或撰◎ 撰者◎ 代年作書◎ 書名◎ 缺存◎ 數卷◎ (名書)名◎ 號◎ 字◎

【シ】

佛(高六、寄・一・一四)(正大、一一九一・三
一)正徳元刊(各六、六〇)光緒二二刊
(京大、藏・一・一〇) (干湯龍祥)
十二門論 ①(B)Ja-ni-mon-ron.
國譯十二門論 ②存、國譯大藏經論部第五
③字井伯壽譯
十二門論 ①(B)Ja-ni-mon-ron.
國譯十二門論 ②存、國譯一切經中觀部第
一 ③羽溪了詩譯
十二門論義疏 ①(B)Ja-ni-mon-
ron-gi-sho. (支)Shih-eh-meh-tan-su.
①一撰 ②(參考)奈良親現在一切經疏目
録3463
十二門論玄義 ①(B)Ja-ni-mon-
ron-gen-gi. ①一巻 ②(參考)諸宗章疏
録第11
十二門論宗致義記 ①(B)Ja-ni-
mon-ron-shu-chi-gi-ki. (支)Shih-eh-
meh-tan-suung-chih-i-chi. ①二巻 ②存、
大正四二・二二No. 1836 ③一撰 ④三・
五 ⑤唐法藏(貞觀一七一先天元A. D. 643
—712)述 ⑥俱風元一先天元(A. D. 676—
712)
⑦本書は唐代華嚴宗の大成者賢首大師法藏
が龍樹の十二門論を釋せるもの、比較的簡
なるも良釋なり。根本趣旨に於ては造論主
龍樹の趣旨に反せず。世に之を新三論の書
とするも、それは日照三藏(地婆訶羅 Diva-
kara 唐儀鳳初、西曆六七六印度より來り六
八七年迄譯經に従事す)所傳の説を法藏が
親しく就いて傳へしによるものとし、日照
三藏を以て印度中觀派の一派なる清辨論師

系統の説を奉ぜるものとすによるも、日
照三藏は必ずしも殊に清辨系統の思想のみ
の祖述者なりともいへざるべく、況んや本
書の内容を検するに、特に清辨系統の思想
を發揮せりと思へず。たゞ時代は既に印
度那爛陀の最盛期の教學が來りて支那唯識
法相學を起せる後のものであり、且、法藏
がその圓融無碍の華嚴の立場に立ちて解釋
せるものなれば、自ら羅什系統の古義の著
に比してそれだけの特色はあり、その意味
に於ては新なるも、本書に於て別に新三論
宗を起すといふが如き意味はあらず。
⑧正徳元刊(京大、藏・六・五)(高六、寄・
一・一四)(各六、六二)龍大、二四三
三・一(正大、一一九一・三五)光緒二二刊
(京大、藏・六・四) (干湯龍祥)
十二門論宗致義記玄談 ①(B)
Ja-ni-mon-ron-shu-chi-gi-ki-gen-dan.
②存、底耳記之内 ③寫本(龍
大・二〇三・四七)
十二門論疏 ①(B)Ja-ni-mon-ron-
sho. (支)Shih-eh-meh-tan-su. ③三巻
④存、大正四二・一ノNo. 1835 ⑤一撰 ⑥一・
七三・五 ⑦吉藏(太清三—武徳六A. D. 549
—633)述 ⑧唐大業四(A. D. 608)六A. D. 599
⑨この書はその名の示す如く龍樹の十二門
論の疏にて、中論疏及百論疏と並びて重ん
ぜらるゝものなり。最初の龍樹因縁品第一の
疏の初頭に於て、本論の性質特徴、殊にその
中論等と對比して本論存在の意義價值等につ
いて序し、次に本論の解釋に入りて本論
の順序に従ひ忠實に解釋す。而してそれは全

體に於ても亦部分的字句の解釋に於ても、
よく本論の趣旨に合し、龍樹の大空觀を
闡明せる好著なり。猶現存出版本にはその
初めに十二門論序(これは僧叔撰)疏なるも
のを附す。
⑩(注釋)疏問思記一巻(日本、藏海鏡)、
疏抄(日本大藏經刊本表題、十二門論抄出)、
一巻(日本、尋常撰)。⑪(參考)諸宗章疏録
第一 ⑫寫本(京大、藏・六・二)(高六、寄・
一・一四)刊本(高六、寄・一・一四) (干湯龍祥)
十二門論疏 ①(B)Ja-ni-mon-ron-
sho. (支)Shih-eh-meh-tan-su. ①一巻
②唐法藏(貞觀一七一先天元A. D. 643—
712) ③(參考)新編諸宗章疏録卷第
三、東城傳燈目錄卷下、花嚴宗經論章疏目
録、諸宗章疏録第一
十二門論疏 ①(B)Ja-ni-mon-ron-
sho. (支)Shih-eh-meh-tan-su. ②二巻
③探幽述 ④(參考)東城傳燈目錄卷下、諸
宗章疏録第二
十二門論疏 ①(B)Ja-ni-mon-ron-
sho. (支)Shih-eh-meh-tan-su. ①一巻
②義眉山惠亮述 ③(參考)東城傳燈目錄
卷下、諸宗章疏録第二
十二門論疏 ①(B)Ja-ni-mon-ron-
sho. (支)Shih-eh-meh-tan-su. ②二巻
③元康述 ④(參考)東城傳燈目錄卷下、
諸宗章疏録第一
十二門論疏 ①(B)Ja-ni-mon-ron-
sho. (支)Shih-eh-meh-tan-su. ④十巻
⑤羅什 ⑥東城傳燈目錄に曰く「羅什三藏。

是是誤歟」云々。
十二門論疏 ①(B)Ja-ni-mon-ron-
sho. (支)Shih-eh-meh-tan-su. ①一巻
②曇影述 ③(參考)東城傳燈目錄卷下、
智證大師請來目錄、諸宗章疏録第二
十二門論疏記 ①(B)Ja-ni-mon-
ron-sho-ki. (支)Shih-eh-meh-tan-su-
chi. ①一巻 ②上義眉 ③(參考)東城
傳燈目錄卷下、智證大師請來目錄
十二門論疏玄義 ①(B)Ja-ni-mon-
ron-sho-gen-gi. (支)Shih-eh-meh-tan-
su-han-gi. ①一巻 ②(參考)東城傳燈
目錄卷下、智證大師請來目錄
十二門論疏要 ①(B)Ja-ni-mon-
ron-sho-kyo-yo. ①一巻 ③存 ④義眉
述 ⑤寫本(龍大)
十二門論疏抄 ①(B)Ja-ni-mon-
ron-sho-sho. ①二巻 ②抄出 ③一巻 ④
存、日本大藏經三論章疏卷下 ⑤尋常述
⑥元應二(A. D. 1230)九月二十一日抄出
(寫本奥書)
⑦本書名は日本大藏經出版本によれば十二
門論抄出とあるを以て、それが正しから
ん。本書は表題の制註には元應二年八月二
十四日於法園寺聖然大德講席、聊註師説引
文證。とあり、又その奥書には元應二年九
月二十一日當結日抄出了、義眉尾十九ヶ
日羅衆十一人也、尋常房。とあり。これ
によれば尋常なる者が元應二年八月より九
月にかけて法園寺聖然大德の講義を聽きてそ
れを聞きし、且多少註し又文證を引きて
成りしものと考へらる。然るに聖然大德は

【シ】

律英僧實傳卷十三、及、招提千歲傳記卷中
二等によれば正和元年八月十五日寂にて、
元應二年より八年前に入寂せる人なり。本
書表題の制註にある聖然とこの人と別人
ならざる可からざるが如きも、この頃に於
て聖然といふ人、殊に三論等に推し居りし
聖然といふ人が二人ありとするも疑はし。
同人とすれば右兩記事の年紀の何れかが誤
りと思はるべからず。或は他に會通の仕方
あるや、予は目下何れとも決し難し。
本書の内容は十二門論疏の講義の問書に
て、疏の文句の難解又は重要なを引出し
て、それを法華義疏、中論疏、百論疏等に
従つて解釋し、又時々師云として師の説を
擧げ、又時には一義云、として異説を擧
ぐ、故にその當時の三論家の説を見るに資
する所あり。但本書は十二門論疏の卷上末
(大正藏、四二、頁一九二下)、「今撰一舉以對
二因」の所迄の解釋にて終り、以下につ
ては無し。しかも注意すべきはこの最後の
文には多くの異本を擧げてこれを判定し、
これは「今撰二因以對一果」とすべきものなり
と結ぶ。
十二門論疏問答 ①(B)Ja-ni-mon-
ron-sho-mon-da. ①一巻 ②存 ③寫本
(高六、寄・一・一四)
十二門論疏問思記 ①(B)Ja-ni-
mon-ron-sho-mon-shi-ki. ①一巻 ②存、
大正六五・二五七 No. 2257 日本大藏經三論
章疏卷下 ③藏海鏡 ④正徳三(A. D.
1390)十一月九日
⑤本書は藏海が東山攝院坊に於て師より

十二門論疏の講義を聞きつゝある間に、疏
中の重要な、又は難解なる字句文章につ
いての解釋の問書をなせるものなり。疏卷
頭には十二門論の僧叔の序についての註釋
を附す、この部は古義の序疏の文句を引用
して解釋し、それ以外の説を擧げず。
⑥口元三寫(高六、寄・一・一四)大正三寫(各
六、六二・二四二五) (干湯龍祥)
十二門論疏贊抄序 ①(B)Ja-
ni-mon-ron-sho-yaku-san-sho-jo. (支)
Shih-eh-meh-tan-su-tsan-chi-ao-hsu.
①一巻 ②(参考)東城傳燈目錄
卷下、入唐新求聖教目錄、諸宗章疏録第二
十二門論抄出 ①(B)Ja-ni-mon-
ron-sho-shutsu. ①二巻 ②一撰 ③一撰
④存、日本大藏經三論章疏卷下、尋常(一
元應二A. D. 1230—) ⑤十二門論疏抄の下
を見よ。⑥寫本(各六、六二・一三五〇)
十二門論捕影記 ①(B)Ja-ni-mon-
ron-ho-yo-ki. ①一巻 ②存 ③三井淳
辨述(大正七刊) ④(龍大、二四三三・六)
(谷大、餘洋・四六二)
十二門論略疏 ①(B)Ja-ni-mon-
ron-ryaku-sho. (支)Shih-eh-meh-tan-
su-sho. ①一巻 ②隋吉藏(太清三—武
徳六A. D. 549—633) ③(參考)諸宗章疏
録第一
十二門問題講義 ①(B)Ja-ni-mon-
da-ko-gi. ②二巻 ③存 ④龍温(寫本)
二一明治一八A. D. 1880—1885)述 ⑤寫
本(各六、六二・二三〇)
十二門問答 ①(B)Ja-ni-mon-da. ②

二巻 ③存、法然上人全集、和語燈錄、淨
土宗全書第九巻 ④源空(長承二—建曆二
A. D. 1133—1212) ⑤(參考)淨土真宗教
典志第一
十二問答 ①(B)Ja-ni-mon-da. ②
一巻 ③存 ④北徳逸士 ⑤明治四序 ⑥
(龍大、二〇九九三)
十二遊經 ①(B)Ja-ni-ya-kyo. (支)
Shih-eh-yu-ching. ①一巻 ②存 ③西
晉代羅漢支婁迦(參考)出三藏記第
四、法華經第四、靜泰錄第四、開元錄第一
五、貞元錄第二五
十二遊經 ①(B)Ja-ni-ya-kyo. (支)
Shih-eh-yu-ching. ①一巻 ②存、大正、
四・一四五No. 195 ③龍藏八、三二六、九、北
1012 ④南、1027 ⑤元、1023 ⑥明、北、1367 ⑦清、
1367 ⑧英、1016 ⑨天、1016 ⑩指、572 ⑪至
1462 ⑫明、南、1085 ⑬隋、1374 ⑭通、留、陀、伽
⑮(參考)東晉太元一十(A. D. 392)
⑯(異譯)本經は大正藏經にて二紙に足ら
ざる小經であるが、出三藏記集は十二遊經
(各一巻)を二部擧げて、共に之を失譯とし
てゐる。然るに費長房の歷代三寶記は六、
七、十の各巻に三本の異譯を擧げ、凡て小
異とし、費長房の舊録を參看すべしと
言つてゐる。其の一は晉の武帝太始二年(A.
D. 266)羅漢支婁迦譯、其二は晉の孝武帝太元
十七年(A. D. 392)通、留、陀、伽譯、其三は宋代
求那跋陀羅譯である。此中で第一譯は三寶
紀第三卷年代記中に載せて而かも譯出時
を更に遅らし、晉武帝太始二年辛丑(A. D.
281)羅漢支婁迦朝同時となしてゐる。内典

錄、譯經圖記、大周刊定錄、開元錄等皆之
に從ひ三本の異譯を擧げ、第一譯の譯出時
については、或は太始二年説を取り(開元
錄等)、或は太始二年説を取つてゐる(内典
錄、譯經圖記等)。兎にかく三本の異譯の
存在は事實であつたらうが、今日は通、留、陀、伽
佛本のみ存する。
【内容及特色】佛成道後十二年間の傳道
生活の大意を述べたものであるが、それは量
からいへば全經の四分一にも足らず、他は
傳道以外の事を述べてゐる。従つて本經の
内容を分類すれば
一、釋迦族の祖先より父白淨王に至る系
譜。
二、兜術天より菩薩が托胎すべき王家の
觀察。
三、父系の叔父及従兄弟の名、母系及婦
系の名稱。
四、二十九出家三十五成道後十二年間の
遊化地及對機(十四箇國)
五、當時の諸國土及人民の特徴。其中四
天子の國名は管、天竺、大秦、月氏と
し、五黑人國名は斯家、迦羅、不羅、
閼耶、那頰となし、各々その名産を擧
ぐ。
尙ほ此等の所説の多くが他經と一致せず
本經獨特のものであることは、小經ながら
本經存在の價値を高めるものである。殊に
私阿味經(第五年)、般舟經(第七年)、屯眞陀
羅經(第八年)、弗迦沙王經(法句譬喻經第六
惟念品、第十年)、彌勒經(第十一年)、差摩竭
經(菩薩生地經、第十二年)等諸經典の説法

